
太陽の姫

月峰夕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の姫

【Zコード】

Z2917L

【作者名】

月峰夕

【あらすじ】

鬪いの日々から二年…平穏な学校生活を送るスバル達のクラスに、謎の少年が転校してきて…

この小説は、主人公が女の子になっています。苦手な人はお帰り下さいませ

はじめ（前書き）

はじめまして、月峰夕です。
かなり稚拙な文章で、個人的趣味の入った作品です。
原作などのイメージを大事にしたい、という方はおやめ下さい。
それでも読んで下さる、という方はどうぞ。

はじまつ

地球。そこは命に溢れた場所。

そしてその命を温かく見守るのが太陽と、月。

命は太陽の光が無ければ生きていけず、かといって太陽の光があり続けても生きていけず。適度な光が交互に在るからこそ、生きて生ける。当たり前にそこにあり、どちらかが輝けば、どちらかが陰となり、その姿をくらませる。

当たり前に世界の一部としてそこにあり、当然すぎて見ようともしないそれは、新たなる闘いの合図だった… 平穏な日々から、再び闘争への日々は最後に何をもたらすのだろう…

はじめ（後書き）

流星のロックマンは、ゲーム+アニメの人なので間違いがあったら遠慮なくどうぞ。

第一章 寝坊？（前書き）

初っ端から…

第一章 寝坊？

ジリリリリリリ…

先ほどから目覚ましのアラーム音が、ずっと部屋に響いている。なのに、アラームをセットした人物が起きる気配はない。

だが、代わりのようにアラームのそばに佇んでいるものがいた。腕を組み、真っ赤な瞳を今だベッドに潜つたままの人物に据えている、緑色の身体に青い鎧を纏つた、電波体。

イライラしたように顔をしかめているその電波体は、アラームをセットした人物のウイザードで、AM星人のウォーロック。

そんな彼がイラついているのは、当然のことながら起きる気配を見せない、パートナー。

『…おい』

たつた一言なのだが、えらくドスのきいた低めの、怒りを含んだ声。

『…おい、起きる』

もう一回低めの、だが音量は抑えずにウォーロックは口を開く。だがしかし、…相も変わらずアラーム音にも、ウォーロックの声にも、全く反応を見せないで布団に潜つたままだ。

『…………』

あまりにもうるさいこの状況下で、未だベッドの中に潜つたままの人物に、もともと長くはないウォーロックの堪忍袋の緒が、ぶちん、と音を立てて、切れた。

『…さつさと…いい加減…起きやがれ————！』

家にいる人たちには迷惑がかかるだろうが、近所迷惑にならないくらいでウォーロックは叫んだ。もぞり。

やつとのことで、ベッドに潜っていたパートナー、星河スバルが起

き上がつた。

『やーっと起きたか』

やれやれ、とウォーロックは息をつき、ふとその顔を見た瞬間、違和感を感じた。

真っ白なパジャマ姿で、布団の胸にかかっていた部分だけをどけて、スバルは枕に寄りかかっていた。

無口は相変わらずで、寝起きの眠そうな顔もいつもと同じ。ただ、ぼーっとしている時間が長い。

『…スバル？』

なに、と目だけで、こちらに問いかけてくるスバルはふいに、ケホケホとむせた。

『スバル、具合でも悪いのか？』

ウォーロックが問いかけると、何でもない、とでも言ひつつに首を振つて、ベッドから降りたが、階段を降りようとして、一番下まで落ちた。

『スバル！？』

ウォーロックが近寄ると、スバルはふらふらと危なつかしい足で立ち上がつた。

「何でもない…ちょっとめまいがしただけだよ」

『何でもなくないだろ…おふくろ呼んでくつから、ベッドに戻つてる！…』

ウォーロックは叫ぶやいなや、姿を消した。そんなに間をあけずに、スバルの母・あかねが部屋に入ってきた。

スバルの額に手を当てる。

「熱があるわね。今日は学校、お休みしなさい」

問答無用とばかりに、すぐにスバルをベッドに寝かせて、あかねはちゅうど迎えにきたルナに、病欠を伝えたのだつた。

第一章 寝坊？（後書き）

初っ端から主人公病欠ですが、物語のきっかけの一いつとしてみて下さい。

夢（前書き）

…かなり 感が否めない…

ベッドに横になつた後、体温計で熱を計ると『38・5』と表示された。

「けほつ…」

もぞ、と額に乗せられたタオルが落ちないように、寝返りを打つたスバルはぼんやりと、天井を見上げた。

僅かに首を傾げて、窓枠に腰掛けているウォーロックを見る。

「…ねえ、ウォーロック、暇なら下でテレビとかみていいよ…けほつ…」

『お前の見張りだ。それよか、ちゃんと寝てろばか』

見張り、とは少しつこみたいことのよつた気がしたが、熱のせいか、先ほど飲んだ解熱剤のせいか、頭はつまぐ動かず、瞼を閉じるとすぐに眠気は訪れる。

窓枠に腰掛けていたウォーロックが、やれやれ、と息をついた時は、スバルは夢の中だった。

ところが代わり、「ダマ中学校一年B組。

スバルの通うクラスであり、白金ルナ、ジャックの通うクラスでもあつた。牛島、ゴン太と最小院キザマロは、隣のAクラスに通つている。

そんなB組の一角、廊下側の一番前に座つているジャックのところに、ルナはいた。

「ほー…スバルが休み、ねえ…」

物珍しげにジャックは呟いた。ルナはそんなに珍しいかしら?…と、首を傾げる。

「珍しいだろ。あいつ、あんな見た目で頑丈じゃねーか」

あんな、というのはスバルの見た目である。

一見、女性という性別通りに、華奢で頼りのない少女だが、それで

も内心は芯が通つたしつかりもので、落ち込んで学校に来ない時期があつたものの、一度決めればそれを貫き通す強さも持ち合わせている。

が、言い方、といつものがあるだらう。

「…あのねえ、言つておくれど星河くんは、女の子よ？言ひ方つてものがあるんじやないかしら？」

「いや、事実だろ？」

ルナの言葉をあつさり一刀両断で、切り捨てた。それより、ヒジャックは話を変えた。

「今日、転校生が来るんじやなかつたのか？」

「ええ、そうだけど。珍しいわね。…興味あるの？」
ルナが少し意地悪に問いかければ、ジャックはあつさり頷いた。そりやそудら、と前置きして。

「同じクラスになるわけだろ？仲悪くするよか、楽しくやつた方が得じやないのか？」

そもそもそうね、とルナは頷いて、口を開く。

「じゃ…あなたに教えてあげてもいいわよ。転校生のこと」
ルナはまずは…と記憶をたぐつた。

そして、再びスバルの部屋。ウォーロックは窓の外を眺め、目をすがめた。

『なーんか奇妙な電波が…微量とはいえ流れてるな…少し調べるか』
ちら、とスバルを見るが、相変わらず眠つていいようだ。少しげらい、席を外そ者が大丈夫だろう。

ひゅん、と音を立て、ウォーロックの姿が消えた。

それから程なくして、すやすやと、時折せき込みながら、眠つているスバルの身体が淡い燐光に包み込まれた。

――誰かが、呼んでいる。

名前を呼ばれた気がして、躊躇つよう、けれどぬづくと瞳をあ

けたスバルの目の前に、真っ白な世界が広がっていた。

「うわあつー？」

足場はなく、あるいは上下左右の感覚が麻痺する、真っ白な世界。あたふたと辺りを見回し、焦るスバルの耳朵を、くすぐす、と小さく笑う声が叩いた。

振り返ると、そこにはスバルよりはやや年嵩の少年がいた。鮮やかな銀の髪に、緋色の瞳。肌の色は真っ白だ。

スバルが見ていることに気づいて、笑うのをやめた。

「ああ、ごめんね。気に障ったかな？」

「別に… そんなんじゃないんだけど… じこはどう？」

スバルは再び辺りを見回し、少年はああ、じこ? と呟いて。「じこ」は君の夢の中だよ。まあ、僕の影響を受けてるから、ことになっちゃってるんだけども

こんなこと? とスバルがつぶやくと、少年は真っ白で、殺風景ですよ。といった。そして、ふと。

「…凄く今更なんだけど、君誰?」

「あははは。ほんとに今更だね。… でも答えたげるよ」

スバルの質問に気を悪くした風もなく、楽しそうに笑つてから、答えてくれた。

「僕は『ルーンの代わり身』。ルーンでいいよ」

よろしくね、と差し出された手を、なんだかスバルは握り返す氣になれなかつた。所在なさげに目をそらすスバルに、少年・ルーンは鋭いなあ、と小さく呟いて、辺りを見回した。

「そろそろかな?」

「…？ そろそろって…」

スバルにつっこり笑いかけて、ルーンは頷く。

「そろそろバイバイつてこと。じゃあね、スバル」

そう言って、名乗っていないスバルの名前を呼び、ルーンの姿が薄れていった。

夢（後書き）

ルナの情報と、転校生は次話、ということです…

次の日の騒動①（前書き）

かなり時間が飛んじゃいましたよ…

次の日の騒動①

翌日…といつよりスバルが起きたら、次の日になっていた。

ついでとばかりにいつもの起床時間より、かなり早く起きてしまつた。

スバルにしてみれば、先ほどまで不思議な夢を見ていた氣もあるが、片鱗も覚えていない。

忘れた夢を思い出すのも、なんだか面倒すぎる。

「…………やることないや…………」

が、昨日自分は身体を洗つてない。なら、時間つぶしにもなる」とは一つ。

「シャワー浴びてこようっと」

そう思い立ち、スバルは着替えとタオルを持って、風呂場に向かつた。

…今思い返せば、これがいささか悪かったような気がする。

スバルは『今日は展望台に寄ろつかな』、と考えながら、汗で濡れたパジャマと下着を籠に入れ、から、と風呂場の扉を開けた。瞬間、そこだけ時間が止まつた。…というより、スバルだけ時間が止まつっていた。

「あ。スバルくんおはよー。熱下がつたんだ?」

風呂場の腰掛けに腰をかけ、身体を洗つている先客がいた。しかも、確か昨日まではこの家にいなかつたはずの人物。

「…………えと、ミソラ…ちゃん?」

国民的人気アイドル歌手、響ミソラがそこにいた。呆然と突つ立つままのスバルにじれたのか、急に立ち上るとスバルの腕を引いて、腰掛けに座らせた。

そしてばしゃり、と事態の飲み込めていないスバルの身体に、シャ

ワ一のお湯をかけると。

「身体洗つてあげるから、大人しくしててね」

そう言つて泡立たせたスポンジを、なめらかな肌に滑らせた。

「み、ミソラちゃん、自分で洗えるから……」

「いいからいいから」

混乱しつつ、やんわりと断りうとするスバルの言葉に、返事を返してそのままスバルの身体を洗い終える。

「スバルくんつて肌すべすべだね。胸も柔らかいし」

「……さいですか……」

ぐつたりしつつも、ミソラの言葉にスバルはそう返し、髪の毛を洗われるのにももはや、抵抗する気力は皆無だった。というより、抵抗して体力は使いたくないし、疲れたくない。まだ朝なのに。

「はい終わり」

そんなこんなの中に、風呂から上がり、スバルの部屋に場所を移し、制服を着て、ミソラがスバルの髪を乾かすついでにいじっていたのだが、ようやく終わつたらしい。

はい、と満面の笑みを浮かべた、ミソラに鏡を手渡された。

「……」

それに写るスバルの髪は緩くウェーブがかかり、いつも学校に行くときは使っている、小さな星飾りが揺れる髪留めで結んであった。しばし鏡を無言で眺めるスバルと、楽しそうに笑うミソラのもとに、あかねの朝ご飯の言葉が届いたのだった。

次の日の騒動①（後書き）

更にもう一騒動起きたるので、お楽しみに（笑）

次の日の騒動②（前書き）

喋り方変かもしけない…

次の日の騒動②

朝ご飯がてら、父・大吾に詳しいことを聞き、更に脱力した状態で学校に向かおうとしたスバルを待っていたのは、ルナ達だった。

「おはよう、星河くん。具合はどう?」

「おはよう、委員長。大丈夫だよ」

がちゃ、とスバルの後に続いて、もう一人の、中学生が出てきた。当然、ここでも騒動は起きる。

スバルの後に続き、ミソラが出てきたのだ。

「なつ…何で星河くんの家からミソラちゃんが出てくるのよ———っ!?

がし、ヒルナはスバルの肩を掴み、前後に揺すった。

スバルは無表情に言葉を返した。

「僕も今知ったんだけど…ミソラちゃんも同居するんだって。中学校に通うには遠いから」

無表情さが、かんに障つたようでルナの怒りは更に上がった。

「一緒に…あなたねえ!!」

「ルナちゃん、スバルくん昨日ずっと寝てた訳だし、そこまでにしてあげてよ」

ミソラがスバルに助け舟を出す。それに、と言葉を付け足す。

「学校、遅刻しちゃうよ」

ようやく怒りのボルテージが、下がつたらしいルナは手を離し、後ろにいたひとりを手招いた。

「星河くん、あなた昨日休んだでしょ。一応、紹介しておくわねルナの隣に見覚えのある黄緑色の、髪をした少年。

「久しぶり、スバルくん」

「つ、ツカサくん!?」

スバルが驚いたようにこうとツカサは、にこりと微笑んだ。

スバルは啞然と、ツカサを見ていたが、それを遮るように、ルナの説明が横からはいる。

「昨日、AとBにそれぞれ転校生が来たのよ。Aにミソラちゃん、Bにツカサくんと後一人男の子がね」

あなた休んでいたものね、と付け足された。

「そ、そなんだ…」

『そーゆーことだよ』

頷いたスバルの耳に、また聞き慣れた声が届く。ふわ、とツカサの横に、電波体が現れた。

「お前…！」

『ジヒミーか！？』

スバルとウォーロックがぱつ、と構えると、ジヒミーはかつたるそに口を開いた。

『俺は今ツカサのウイザードだ。お前らと戦うつもりはないね』

『そなん…』

『ホントかよ…』

スバルは納得して頷いたが、ウォーロックは疑わしげな表情だ。

『まあ、君のようなバカにいつても無駄つてものだね』

多分、結構いい笑顔で言ってそうなセリフである。

『んだとコラ！？』

『何だやるのかい』

ぱつ、と戦闘の構えをとったウォーロックとジヒミーを、眺めていた一同の元に届いたものがあった。

キーンゴーンカーンゴーン

『うわあっ！？ 遅刻する…！』

スバルの叫び声に、他の一同も焦つた。

スバルはハンターVGを掲げた。

『トランスクード シューティングスター・ロックマン！』

それに続いて、ミソラ、ゴン太、ジャック、ツカサも、電波変換する。

スバルはシュー・ティングスター・ロックマン。ミソラはハープ・ノート。ゴン太はオックス・ファイア。ジャックはジャック・コヴァス。そしてツカサが、ジエミー・スパーク。

スバルとミソラとジャックはウェーブロードに飛び乗り、ゴン太がキザマロ、ジエミー・スパークBがルナを抱え上げて、ウェーブロードに飛び乗つた。電波変換しているので、数分でつくと分かつていても、一同は気が急いでいるので、無言で急ぐが、ウイザードのFMとAM星人達は賑やかだつた。

以下、その会話。

『もうちょっと急げ!!』

『うるさいわね!! 充分急いでるわよ!!』

『ホントせつかちだな!!』

『というより、喋ってる暇があつたらもう少し急げ!! とか思わないのか?』

『それもそうだらうけど、お前ら相変わらずだな、ウォーロック、ハープ』

『余計な世話だコーヴァス!!』

『これと一緒にしないでちょうどいい!!』

『んだと!!?』

『何よ!! やろうつての!!?』

『はいはいそろそろつくよー』

ウォーロックとハープが喧嘩になりそつたのと、学校に着きそつたので、スバルが止めに入つたのだった。

もう一人の転校生と少年（前書き）

すつげえ より より...

もう一人の転校生と少年

チャイムが鳴る前に校舎に飛び込み、物陰で電波変換をといて教室に飛び込んだ瞬間、チャイムが鳴った。

「…ま、」

「間に合つた…」

ゼはゼはと肩で息を継ぎながら言つたスバルの後に続いて、ほんの少し息を切らせたジャックが盛大にため息をついた。ミソラはゴン太、キザマロと一緒に隣の教室に駆け込んだ。

ツカサヒルナは息一つ乱していない。…どうやらヒカルに無理をさせた模様である。その後すぐ先生が来た。

朝のHRが終わり、ぐつたりしている一同は、息をゆっくり吐いた。

「遅かつたですね、双葉くん、白金くん、ジャックくんと…」

スバルだけ名前を呼ばれず、とりあえず一同が振り返る。

スバルの後ろには銀髪に、鮮やかな赤い瞳の少年が立っていた。

「あ、星河君、うちのクラスに昨日もう一人転校生來た、って言つたでしょ？」

ルナに言われて、ここまで來るまでの会話を少し思い出して、スバルは頷いた。

「彼はケープ・ラントくん。ラントくん、こつちは星河スバルくん。くんなんてよんでもるけど、女の子よ」

「はじめまして、ラントくん」

銀髪の少年…ケープに手を差し出されて、スバルはその手を握り返した。

「ケープでかまいませんよ、こちらもスバルと呼ばせていただきますので」

「そう？」

「はい」

にぱつ、とスバルが笑うと、つられたようにケープも笑った。不意にするり、とケープの指先が、スバルの長い髪を掬い上げ、そこに口付けた。

「え」

ジャックと、スバルの声が重なった。女子のクラスメート、そして、なぜかツカサとルナからも、ぴし、と音がした。

「とても綺麗な髪……それに、いい香り」

まっすぐに瞳を覗き込まれて、スバルは固まる。

ちなみにウイザードたちは、とても楽しそうに見守っている。

「え、えと……」

ぞわつ、と背筋が冷えた。

後ろを振り返らざるとも分かる。ルナの殺氣だ。……だが、それに加え女子の殺氣と、あと、誰だろう?

誰の殺氣かわからないが、ただ、もの凄い怖い。こう、一人分にもう一人分を上乗せしたような。そこまで考えて、ツカサのだと思つた。

とりあえず、救いを求めるようにジャックを見たが、肝心のジャックは少しづつ避難するように後ろに下がつたようで、既に避難圏にまで逃げている。

助けて、と目で訴えるが無理無理無理無理、と首を勢いよく横に振られた。

サテラポリスでも腕のたつ方なのに、この状況は無理だつたようだ。

更にウイザードたちに助けを求めるようとしたが、既に消えていた。

『ウォーロック、覚えてろ……』とばかりにくそつ、と内心でぼやき、

スバルは柔らかく微笑んでいるケープと、殺氣を耐えながら、ビリ
しようとを考えていると、腕をつかまれる。
え、と不思議に思つ暇もなく。

「…………わ……」

ぐい、とスバルは思い切り腕を引き寄せられて、たたらを踏んで立ち上がり振り返ると、眉を吊り上げたツカサ…いや、この雰囲気は。

「…………双葉くん？」

ルナが問いかけると、『切れ長の瞳』のツカサが口を開く。

「ケープ、あんまりふざけた真似するなよ。行くぞスバル」

ぐい、と腕を引っ張られて、スバルはついていかざるを得ない。

「ちょ…いた…痛い…！」

そのままぐいぐい腕を引かれて、そのまま教室を出て、階段のほうまで引きずられてゆく。

「痛いって…！」

廊下にいた一同も、教室にいる一同も、何々、と楽しそうに、けれど女子は腹立たしげに一人を見送る。

さすがに傍に寄るのを、躊躇うくらいの殺氣には気づいたようである。

階段の人気が途絶えたところで、スバルは名前を呼んだ。

「痛いって言つてるだろ、ヒカル…！」

「…………」

「うんとかすんとか、せめてなんか言え…！…とか、痛い…！」

スバルがぎゃんぎゃん文句を重ねていると。

「…………『Jめん…………』」

しゅん、としたような柔らかい声と『少しだけつりがちの瞳』のツカサに、スバルは瞬きを繰り返して。

「あ、ツカサ君に戻つた」

ぱちぱち、ヒツカサは瞬きをした後。

「……ていうか、スバルくんなんで分かるの…」

「雰囲気。ていうか、痛かつたよツカサくん」

「……『めん。』スバルくん、ヒカルのときは遠慮ないんだね」

「ツカサくんに遠慮してるわけじゃないんだけど…」

そこで話がずれていたことに気づいた。とりあえず、スバルは階段に腰掛けながら、気になつたことを訊ねた。

「ツカサくんがヒカルと入れ替わるなんて、どうしたの？」

「…………できれば聞かないでくれる？」

ツカサはもの凄く落ち込んだ雰囲気のまま、『じん、と壁に寄りかかった。

「……なんか怖いからやめとくな?」

「……ありがとう」

スバルはすつゝと立ち上がると、ツカサにいった。

「そろそろ授業だし、もどる?」

「……うん」

スバルの言葉に頷いて、ツカサも少しよろめいて、その後について教室に戻つた。

一つだけ、決意しながら。

もう一人の転校生と少年（後書き）

ものすごいこじつけぶりです。
わかつてます、わかつてますがこうしないと話が進まないんです。

海辺の放課後（前書き）

やつじバトル…

海辺の放課後

「すばるぐーん、帰ろ」

「星河くん、帰るわよ」

ひょい、とミソラとルナが、B組に顔を覗かせた。ルナは先生の用事で職員室に行っていたのだ。

ちょうど戸近くにいたジャックが、残念だつたな、と前置きして。「スバルならツカサと一緒に帰ったぜ？」

しばらく、ミソラとルナは固まつた後。

「……な、なによそれえ つ！？」

揃つて叫び、後に『二人の叫び声が、校舎内によく響いた』と語られた。

学校から少し離れた場所で電波変換し、スバルとツカサはドリームアイランドの公園に向かつていた。

「……つくしゅ！！」

不意にスバルがくしゃみをしたので、隣を併走していたジェミニ・スパークW・ツカサが問いかけた。

「どうしたの、スバルくん？」

「……や、誰かがうわさしてるみたいで……」

「案外ミソラとクルクル女じやないか？」

そしてやや遅れてついてくるジェミニ・スパークB・ヒカルがそういふ。

「……そうかもしない」

ぐすつ、と鼻をすすつたスバルは、帰つたらミソラちゃんに怒られるかなあ、と思い、次の日の朝は委員長に叱られるなあ、と、もはや決定事項に少しだけ意識が遠くなつた。

それを知つてか知らずが、ツカサが肩をたたいた。

「スバルくん、着いたよ。降りよ。」

「うん」

とつ、と電波変換をといて、スバルとツカサは公園の隅に降り立つた。胸元のリボンを揺らし、スバルは辺りを見回した。

「わあ、きれー」

花壇のある場所に階段を下りて向かえば、ふわり、と花の芳香が鼻腔をくすぐる。

それから少し歩いて、ちょっとだけ高くなつた花畠への階段を上れば、すぐに真っ青な海と、空が視界いっぱいに開けた。

そして、鮮やかな白い花が咲き、緑との鮮やかなコントラストを誇つていた。

「今の時期は、ちょうど満開だからね。せつかくだから、スバルくんを誘いたかったんだ」

一人じやちょっとここ、寂しいし、とツカサは付け足す。

「…そうだね」

ツカサの横顔を見て、スバルはそつと頷いた。

今までずっと一人で展望台にいたスバルは、誰にも関わろうとしたがつた。ブラザーバンドを結ぶことを、嫌っていた。

それは同じように、ずっと一人で公園にいたツカサも同様だ。

親しくなることで、その人を失ったときの苦しみも、裏切られたときの悲しさも、感じなくてすむように、誰とも近くなろうとしたがつた。

けれど、人との絆…ブラザーバンドを得てから、一人でいることの寂しさを知った。

だから、ツカサも同じなのだろう。

まっすぐに海に視線を投げたスバルの髪を、柔らかく潮風が撫でてゆく。

「それにね、スバルくんに言いたいことがあつたんだ」
気持ちを落ち着けるように、ツカサはやわらかく微笑んで、スバルにそういった。

「聞いてもらえるかな？」

「いいけど……」

ツカサは身体」とスバルに向き直る。スバルも居心地が悪いので、同じようにツカサに向き直つた。緊張したような空気が、あたりに流れた。

『なんだあ？』

…が、空気の読めないウォーロックがそれをぶち壊してしまつた。
ジエミーがなんともいえない空氣をまつた後。

…ツカサ、折角だ。馬鹿とドリームアイラングのマラソン競争してくる

『うおい、だれが馬鹿だ！？』

『お前だお前。バトルはさすがにまづい。マラソンならじっくり走つても文句は言われないだろ？』

『望むところだ！』

がし、ジエミーはウォーロックを捕まえ、ウエーブロードに消えていった。

消えていくまでの口げんかが、物凄く喧しかつたが。

「……」

スバルはバトルじゃないからいいかな、と見送り、ツカサは、内心で『ありがとう、ジエミー』と両手を合わせて、本題。

再び向き合つて、ツカサは口を開いた。すう、と、気持ちを落ち着かせるかのように、一度深く息を吸い込んでから。

彼女に、星河スバルに、告げたかった言葉を、気持ちを、告げた。

「……ずっと、君のことが好きでした。スバルくん、僕と付き合つてもらえませんか?」

ついに言つた、とばかりにツカサは顔を赤くし、スバルはしばし、その言葉を理解するまで時間がかかつた。

「…………え……?」

ぱちぱち、と瞬きを繰り返し、意味をもう一度頭の中で繰り返して。スバルはかあ、と陶磁器のように真っ白な頬を紅に染めた。きっと多分おそらく絶対、ここにウォーロックがいたら電波変換して、逃亡していたかもしれない、と思つくらいには、スバルの頭の一部は冷静だつたが、それ以外は混乱の極みだつた。

「ええええと、その、あの……」

あたふたとあちらこちらを見るスバルに、ツカサは重ねて告げる。「嫌だつたらいいんだ。僕が勝手に好きになつただけだから」

そういうつて微笑むツカサの表情に、急速に混乱が落ち着いてゆく。スバルはふるふると、首を横にふつた。

きゅ、とツカサの服裾をつかんで、スバルはまた首を横にふつた。

違う……

「違う、んだ。そういう、意味じや……なくて……」

消え入りそうな声で、スバルはかなり小さな声で、言った。

「……同じだつたから、凄く……びっくりしただけ……で……」

それきりスバルは黙つてしまつ。ツカサはスバルを見下ろしながら、言葉を繰り返して。

「……同じ……つて……じゃあ、OK……つて受け取つていいかな？」

こくん、とスバルは俯いたまま、ただ頷く。

ツカサは田を細めて、スバルの手を服裾から離させて、その手を握りしめて海を見た。

スバルも火照つた頬が冷えないかな、と思いながら何とか顔を上げて、ツカサと同じように海を見た。

会話はなく、ただ、海と空を見ているだけの、静かな時間。手のぬくもりを感じながら、快い雰囲気。

しかし、それは数分も持つことなく碎かれた。

「あー！ツカサおにいちゃん！！」

ん？と、ツカサとスバルが振り返ると、そこには小柄な、茶髪の男の子が立っていた。

「トウマくん」

少年：トウマの声に気づいたらしいほかの小さい子供たちも、集まつてきた。

「ツカサおにいちゃん！！」

「ツカにいだ！！」

すぐさまツカサの傍に子供たちが集う。スバルがびっくりして固まつていると、さつきトウマが傍によってきてきた。

「」、「こんにちは」

とりあえず挨拶をしたスバルの傍にも、子供たちが集まってきた。

「お姉ちゃん誰？」

「わー、綺麗なブローチ」

「ツカサおにいちゃんのおともだち？」

一度に話すので、頭の中が混乱する。そんなスバルの内心を察したツカサが。

「皆落ち着いて、そんな一度に喋るから、スバルくんが混乱して よ」

ツカサの言葉に、とりあえず、喋るのだけはやめてくれた。

「この人は、クラスメイトの星河スバルなんだよ」

「ツカサ兄ちゃんの彼女？」

「おててつないでるもんね〜」

…何故子供はそっちの方向に持つてゆくのだろう。

…手？

スバルは不思議に思いながら、いまだ繋いだままの手を思い出した。離そうかと思って焦つたが、ツカサはにっこり笑つて頷くので、振りほどけなかつた。

…しかし、確かに先ほど、ツカサの彼女になつたばかりではあるが、慣れないうちに言われると混乱する。

「ラブラブ〜」

「でもさつとき告白したばかりだからね〜」

「あ、皆こんなところにいたの？」

たたた、とスバルとツカサと同い年ぐらいの少女が、階段を駆け上がりてきて、上がりきつたところでとまつた。腰よりも長い藍色の髪に、他校の制服。

「ツカサくん、いたんだ……」

「ユイちゃん、ただいま」

知り合いかな、と思いつつ、スバルは小さい子に手を引かれ、ツカサの手を離して視線を合わせた。

「どうしたの？」

「スバルおねえちゃん、一緒にあそぼーー！」

「うん、いいよ」

スバルは立ち上がり、ツカサを向いて口を開く。

「ツカサくん、ちょっと下に行つて……！」

ぱつ、とスバルは海のほうを振り返る。ツカサも同時に、海を振り返った。

「ツカサ君、どうしたの？」

ゴイの聞い変えには答えず、自然とスバルとツカサは、身構える。

「……」

ザバアツと、水しぶきを上げて、目の前に降り立つたものがあった。子供たちが悲鳴を上げ、後ろに隠れる。

『見つけた……』

青い体に田はぎょりり、としていて、口は田元まで裂けて鋭い牙が覗き、腕はとても長く、手のひらも大きく地をするすっとしている。

べちゃり、と音を立てて近寄つてくるその怪物は、形容しがたい異臭を放っていた。大量の魚が腐つて、磯のにおいと混じったような、腐敗臭とも言うべきか。

そして、その怪物が立っていた場所の草花は残らず枯れていた。

『一緒に来てもらおう……姫よ……』

そういって腕を、スバルに伸ばした。

ざり、とスバルとツカサは一步だけ後ろに下がった。

「なんだろう、こいつ……」

「わからない。あいつがしゃべってる言葉は理解できるけど

ツカサはちらり、と子供たちを見て、化け物に視線を戻し、口を開いた。

「ねえ、君。何が狙いなの？」

『知れたことよ……その、姫を頂きに来た……』

ツカサはとぼけたように笑いながら、口を開く。

「姫って誰のことかな？ここにお姫様なんていないけど」

『とぼけるな！…そこにいるだろう！…』

そういうて再び、スバルを指した。少し離れた場所に立つていて、後ろには、誰もいないスバルを。

『姫をつれて帰る。それが役目だ』

そういうて、ベチャリ、ともう一步こちらに近寄つてくる。スバルとツカサは構えたまま、緊張をほぐすように軽口を叩き合つた。

『正体は分からぬけど…』

『スバルくんを狙つてるみたいだね』

ツカサは『スバルくんつてほんと、いろんな人に慕われるね』とからかうと、スバルはこれでもかと言つくらい、顔をしかめた。

『…やだなあ。あんなのに狙われる覚え…』

そのまま何かに気づいて、スバルは閉口する。ツカサは苦笑しつつ、口を開いた。

「あるんだね」

『……スター・フォースとか、オーパーツとか、ムーメタルとか？』

それは確かに、狙われる要因ではある。手にすれば、凄まじい力を使用者に与えるのだから。

「でも、姫、って呼ばれる理由になるようなもの、持つてないよね？」

『……そりいえばそりかも』

そう言いつつ、スバルは子供たちを背後にかばうように少し歩き、左を横に伸ばした。途端、スバルのハンターバージョンを、天から降つて

きた光が貫いた。

それと同時に、ツカサのハンターバージョンにも同じ現象が起きた。

「トランスコード シューティングスター・ロックマン……」

スバルの声が響くと、スバルの体を光が取り巻いた。

パン、と限界まで膨らんで破裂した光の中から出てきたのは、青のボディに青いヘルメットをかぶつた、胸に流星のマークをつけた少女。

「トランスコード ジュミニ・スパーク……」

ツカサも同じように叫び光の中に消え、その光が晴れたときには、白のボディと、黒のボディの、それぞれ巨大な腕を持つた少年が一人現れた。

「遅いよロック！！

『うつせえ！！』

スバルが文句を言つと、怒鳴り返された。しかしめげずに、スバルは文句を言つた。

「もうちょっと早く来てよ……」

『マラソンに熱中しすぎで、ゴミ集積場の一番奥まで行つてたんだよ……そつから妙な気配感じて、ウィルス倒しながら、ダッシュで戻ってきただけでもありがたいと思え！！』

……なるほど、一番奥まで行つてたのか。それは結構遠い上にウィルスは仕方ない。

「スバルくん、喧嘩してた場合じゃないよ。今は田の前の敵に集中しなきゃ」

「…じめん」

別にいいよ、とツカサが言つと、ヒカルは顔をしかめて誰にも聞こ

えない程度に、咳いた。

「ま、いつものこつた」

それを知らないから口を開いたスバルは、ツカサとヒカルに一つ頬んだ。

「ツカサくん、ヒカル。子供たちと、えつとコイさん？を安全な場所までお願い

「分かった」

「すぐ戻つてくつから」

快く一人は了解し、子供たちとコイをそれぞれ抱えあげて、ウェーブロードに飛び乗つた。

さて、とスバルが怪物に向き直ると、怪物はにたり、と裂けた口を吊り上げた。

『……姫だけが残るとは、愚かだな』

「だから、姫つて何のこと？訳わからんないんだけど」

そういうながら、スバルはバトルカードを使った。

「バトルカード、ヘビー キャノン！！」

銃口を怪物の心臓あたりにすえて、エネルギー弾を放つた。

それはまっすぐに、怪物の心臓を打ち抜いた。なのに。

『……それで攻撃か？』

「……っ！？」

スバルが目を見張ると、怪物はただにたり、と笑つて、スバルが打ち抜いた場所を撫でた。

そこには大きな穴が開いているのにも関わらず、元から心臓なんてものはない、とでもいう風に、怪物は動いていた。

そして、驚愕して動きが鈍つた一瞬で、怪物は間合いをつめていた。

「はや…っ！？」

『スバル！！』

ウォーロックが叫ぶと同時に、ぎょろり、とした目でスバルを見ながら、スバルの懷に入った怪物は腹部を無造作に捕らえると、海のほうへ投げた。スバルはとっさに周波数を変え、物体には触れられないようにする。

とても高い崖の上から投げられたのだ。水とはいえその水面は硬いだろうし、落ちては多少なりともダメージになりかねない。

ザバン、とスバルは海の中に落ち、姿勢を変える。

こふん、と小さく息を吐き出すと、予想通り、怪物が降ってきた。スバルを抱き寄せて、また、言葉を繰り返した。

『姫』と。

姫姫連呼されても、わけが分からぬスバルは、残留電波でサンダーベルセルクになろうとしたが、激痛が身体を走り抜けて、スバルはそのまま気を失った。

海辺の放課後（後書き）

たぶん、次回まで続くかなあ…

もうひとつの影

「もう大丈夫だからね」

そういうつてツカサは抱えていた子供たちを、そつと降ろした。ヒカルも同じように、子供たちを降ろす。

「行くぞツカサ」

「うん」

ユイが何かいいたげに、目を伏せていたが、ツカサにはそれどころではなく、早くスバルのところに向かわないと、と気が急いでいた。ツカサは頷き返して、すぐさまドリームアイランドの公園に向かった。

途中、ちゃんと暁に連絡を入れて。

スバルたちはまだ知らないが、ツカサもスバルたち同様、サテラボリスのメンバーの一人である。ただ、タイミングがあわないだけなのだ。

「暁さん！――聞こえますか！？」

『どうした、ツカサくん？』

さくっ、と聞こえてきた音のあとに、『いい加減になさい……』ガンと、続いた。

シドウがうまい棒を通じ中食べたので、ちょうどお茶を持ってきたクインティアにお盆で殴られた。

……とは、ツカサたちは分からなかつたが、そんな緊張感のないことを行っている場合ではない。

とりあえず、本題に入る。

「ドリームアイランド、公園に電波ウィルス、電波人間とはまた別のなんか訳わかんない奴が現れた！！」

「今、スバルくんが応戦してるんです！！僕らはちょうど居合せた人たちを避難させ終えたので、今から加勢に向かいます！！」

ヒカル、ツカサの順に口を開き、シドウが息を呑む声が聞こえた。

『何でそんな事態に…』

クインティアの声に、ヒカルが叫ぶようにして返答を返した。

「知るかよ！！急に現れたんだ！！」

「とりあえずの目的は、スバルくんの持つ何かなことは、確かにないです」

『スバルくんの持つもの？』

「それ以上は、分かりませんし、もうすぐつきます」

ヒカルが今のところ分かつてることを的確に告げる。

『分かった。すぐに俺も向かう！！無茶はするなー！』

ガタガタ、と音がして、シドウはそう叫ぶ。

「はい！！」

「おう！！」

ツカサとヒカルは頷いて、速度を上げた。

ロックマンの電波が感じられず、ウォーロックの電波を探すと、先ほど分かれた公園から、すぐ傍の海に戦いの場所を移しただけと分かり、すぐさま海の中に飛び込む。

さばん、と勢いを落とさないまま、海へ飛び込む。

「！！」

そこには、電波変換がとけたスバルと、そのスバルを守るように戦うウォーロック、そして胸の中央に巨大な穴の開いた、怪物だった。

「ツカサ、お前がスバルをつれて上に上がれ。あいつは俺が引き受けた」

ただの人間が何の装備もなくいるには、水の中はつらい。そう判断して、ヒカルは戦闘、ツカサはスバルの救出、という風に分けて。

「…うん！！」

たつ、と二人は同時に海底を蹴った。

「お前の相手は俺だ！！！」

ヒカルはウォーロックと怪物が間合いを取った瞬間に、間にに入った。
『ジエミニ・スパーク、気をつけろ！！そいつは、痛みを感じない
上に死ない！！』

「…なんでそんな奴が相手かねえ… つと…！」

怪我だらけの、ウォーロックの言葉に愚痴るようにしつつ、ヒカル
はバトルカード、ワイドソードを腕に具現化し、ツカサの方に行こ
うとした怪物に、切りかかる。

「お前の相手は俺だつーの！！急げ、ツカサ！！！」

ヒカルの叫び声に急かされ、ツカサはスバルを抱き上げようとした。
パリ、と頬を電気がかすめ、スバルの周りの空間が派手に放電を起
こして、手をはじかれた。

「つつ……」

手を押さえると、指先に怪我ができていた。

「……何、これ…？」

スバルの身体のまわり、そこだけに何か薄い膜がある。それに触ら
ないようにして手を伸ばす。しかし、少し触れそうになる距離でも
傷みが走る。

「ツカサ、早く上につれてけ！！」

いつたん怪物から距離をとったヒカルは、いつまでも動かないツカ
サにそう叫ぶ。

『連れて行かせるものか！！』

その声を聞いた怪物が、すぐさまヒカルに飛び掛る。ヒカルはソ一
ドで怪物の腕を受け止めながら、弾き飛ばす。

「駄目だ、スバルくんの身体の周りに何かあつて触れない！！」
「はあ！？」

ヒカルは理解不能、といった表情だ。ツカサだって理解不能なのだ
が。

「触った瞬間、弾かれる……」

「な……」

ヒカルは絶句したように、それでも怪物に反撃だけはする。

「でも、このままじゃスバルくんが……」

生きるための空気を断たれたスバルの顔色は、優れない。ヒカルとウォーロックも、水は妨げにならないとはいえ、スバルがここにいる限り、動きづらいことに変わりはない。

どうすればいいか、など一つしかない。

ツカサが、弾かれる痛みに耐えさえすれば、いいのだ。

覚悟を決めてツカサが、スバルの身体を抱えあげようと再び、放電が頬を掠める。

「…………」

ツカサは躊躇いなくスバルの身体を抱えあげると、スバルを抱えている腕だけでなく、全身に激痛が走る。先ほどのものとは比べ物にならない痛みをこらえ、それでも何とか立ち上がり、海底を蹴つて一息で崖の上に飛び上がった。

着地でバランスを崩して倒れるも、何とか上がれた。

「げほっ、げほっ……」

辛そうに咳き込むスバルの背中を、ツカサは走る痛みをこらえてさする。スバルはひとしきり咳き込んで、うつぶせに倒れた。

「?…………」

とりあえず仰向けにして呼吸を楽にしてやろうと腕をつかんだ瞬間、ぬるり、と手のひらが滑つた。水かと思ったが、感触が違つた。手のひらを見ると、真っ赤に染まっていた。怪我を負つた手のひらから溢れた血とは、また別の血で。

慌ててつかんだ腕、左肩を見ると、スバルの左肩のシャツは赤く染まっていた。

「スバルくん……」

ツカサがスバルの名前を叫んだ瞬間、すぐ傍らに、影が降り立つた。

田の生贊（前書き）

…バトルしてるのかしてないのか、えらい謎

月の生贋

ツカサはすぐさま、スバルをかばうように構える。

降り立つた影は、怪物でもウイルスでもない代わりに、知らない電波人間だった。銀髪の、黄色のボディとヘルメットをつけていた。

「…君は、誰？目的は、何？」

ツカサが訊ねると、海を見ながら少年が口を開いた。

「訊ねるならそっちが先に名乗つたらどうです。そのお姫様とどういう関係？」

少年の言葉に、ツカサは口を開く。

「ジエミー・スパーク。……彼女の恋人だよ」

少年は不機嫌そうに眉をひそめた後、口を開く。

「…それで海の中の君のバトルウィザードと、このお姫様のバトルウィザードの名前は？」

「…僕は名乗った。そっちが名乗つたらどうだ」

少年は瞬きを幾度か繰り返して、それもそうだな、と呟いた。

「僕はルーン・スケープ。『月の皇子』様の命令で『太陽の姫』を探しに来てたんですけど、こんなに早く見つかるとは」「

ルーン・スケープ、と口の中で繰り返し、ツカサは身構える。

「おっと、勘違いしないでほしい。僕はお姫様を守りに來ただけ。皇子の命でね、『太陽の姫』をさらおうとしているサイジュリアを倒しに來たんですよ」

それとね、とルーン・スケープは付け足した。

「お姫様、この地上では考えられないほどに高貴で稀有な存在だから…閉じ込めておくには、輝きが強すぎて、隠せない」

「？」

ツカサはスバルに一度視線を滑らせて、構える。

「君とやりあうつもりはないです。お姫様を守つてるようだし。僕の相手はあいつだから」

海に飛び込む構えを見せたルーン・スケープは、思い出したようにそうそう、といって。

「お姫様に手出しあしたら、うちの皇子切れちゃうから止めとけよー」意味の分からない一言を残し、ルーン・スケープは海の中へ飛び込んだ。

「…一体…？」

ツカサの咳きは、風に消え、誰も聞くことがなかつた。

怪我は負わせられるものの、倒れる気配のない怪物に、ウォーロックとジヒミー・スパークBが舌打ちした瞬間、ザバン、と水しづきを上げて、一つ、何かが降つてきた。

「なんだ！？」

『敵か！？』

二人は背中合わせに構える。ジヒミーは怪物、ウォーロックは降つてきた影に向けて。

「倒れる寸前…でも、とどめのさし方を知らない、って訳か」「お前は誰だ！？」

ウォーロックが叫ぶと、少年は気分を害した風なく、口を開いた。

「『太陽の姫』をさらおうとしている、イジュリアを倒しに来ただけです」

『イジュリア？』

ウォーロックの言葉に、ルーン・スケープはつい、と敵…怪物を指した。

「そいつのことです。どいててください。君たち、急所を知らないでしよう？」

『そういうて簡単にどけるかよ！…』

ルーン・スケープの言葉に、ウォーロックが吼える。

「ま、それが当然ですね」

そう呟いたルーン・スケープの姿が搔き消えた。

『ー?』

ウォーロックが慌てて後ろを振り返ったときには、啞然、とした表情のジエミー・スパークBと、苦しんでいる痛みを感じないはずの怪物と、怪物の後ろに立つて、頭部に剣をつきたてたルーン・スケープだった。

「何だ!?」

『きやあ……は……ル……ン……』

ジエミー・スパークBが驚いた表情で叫び、消え入りそうな声で唐突に現れたルーン・スケープの名を最後に言って、怪物は搔き消えた。

「よくもまあ、こんなにしてじづれるものですね」

「こんななのだと!?」

ジエミー・スパークBが叫ぶと、そう、ヒルーン・スケープは頷いた。

「ま、方法を知らないから当然ではありますけど。よくここまで傷だらけにできたものです」

「侮辱してんのか!?」

「ほめてるに決まっているでしょう。普通はここまで行きませんし。この胸の穴なんか、相当なものです。狙いは悪くない」

君がやつたんですか、と問い合わせられて、ウォーロックが口を開いた。

『それは俺らがやつたんだ』

「…お姫様のバトルセンスは、相当なものですね。これは視野に入れておかねば」

それからぶつぶつと呟きだしたルーン・スケープに、ジエミー・スパークBが叫ぶ。

「だから、誰がこんなのだ！？」

「きみですよ。僕にも用事というものがあります。では、あっさりと返答を返し、用事があるので、といい置いてルーン・スケープは海の底から消えた。

『ジエミー・スパークB。愚痴を後で言こあおひや。いくらでも聞いてやる』

「当然だ！！とりあえず、上がるぞ」

背後に怒りのオーラを漂わせたウォーロックと、ジエミー・スクBは、そう約束してすぐさま上に上がった。

そして、崖の上に上がつて見たものは。

「あ、ジエミー、ウォーロック」

『ツカサ、どうしたんだその手！？』

『スバル、しつかりしろ！！』

電波変換をといたツカサの手は、赤く焼け爛れていた。スバルのほうもいささか血の気が戻つたとはいえ、呼吸が不安定だ。

「スバルくん、ツカサく…」

「どうしたの、二人とも！？」

呆然として、それから慌てて駆け寄ってきたアシッド・エースとクイーン・ヴァルゴと合流し、すぐさまWAXAに向かつた。

理由

WAXAにつくなり、検査のためにすぐさま診察室にスバルは運ばれていった。

ツカサの両手も、二の腕から火傷を負っていたので、慌てて治療を施された。

そして、スバルはすぐさま手術室に運ばれた。

鎖骨あたり、左手の中ほど、手首付近に、怪物の… イジュリアの牙のかけらが残つていたそうで、取り出すためにだそうだ。

すぐに手術は済み、病室へと運ばれたスバルには、首から左腕の手の甲まで包帯が巻きつけてあつた。傷口は浅いので、傷が塞がらなくとも普段動く分には問題ないそうだ。

ツカサはベッドに横たわるスバルの横で、椅子に腰掛けて壁に寄りかかっていた。

傍には、シドウ、クインティア、ジャックがいた。

「大丈夫かよ、ツカサ？」

ジャックに問い合わせられて、ツカサは何とかね、と頷いた。

「でも、スバルくん、大丈夫かな。… 大丈夫じゃないからここにいるんだけどさ」

『まあ、大丈夫だろ』

ツカサの言葉に、ジエミーは落ち着かせる意味をこめてそういう。

「それにしても、電波体だけ弾くとはなあ…」

やれやれ、といった風にシドウが呟く。

先ほどアシッドたちが触ったとき、遠くまで跳ね飛ばされたが、シドウたちが触つても、何事も起きなかつたのである。ちなみに、どちらも怪我はしていない。

電波人間状態だと、跳ね返される電波体と、跳ね返されない人間が混じった状態だったので、怪我を負うらしい……といつよりは、負う。

『スバルの周りを覆うこのノイズ、命を守りうとしているわね』

『ああ。おかげで電波変換状態から、弾かれたんだけどな』

ヴァルゴの言葉に続けて、しみじみとウォーロックが呟いた。

「…弾かれた？」

『弾かれたから電波変換が解けたんだよ』

拒絶反応みたいなモンだった、とウォーロックが呟いた。

『恐らく…これをとかない限り、命に別状はない代わりに、起きないでしようね』

「じゃあ、どうやってとくんでしょうか？」

アシッドの言葉に、クインティアが首を傾げると、シドウは至極つさり。

「そのためにヨイリー博士が調べてるじゃないか」

「それもそーだな。聞きに行つてみるか」

そして、スバルとウォーロックを病室に残し、ヨイリーの研究室。

「ああ、それならね解けるわ」

すぱつとあっさり、ヨイリーは告げた。

「簡単に言うと、スバルちゃん…ロックマンの中にあつたスターフォース、オーパーツの残留電波を使って、ムーメタルが、ノイズを起こして身を守るように、身体を包み込んだ、というわけね」

それと、ヨイリーは言葉を付け足した。

「ウォーロックちゃんに影響が出ないよう、つて強制電波変換解除も、その力がやつたみたいね。スバルちゃんの命に影響が出ないようこ、なおかつウォーロックちゃんには一切影響が出ないようこつて」

「じゃあ何で、そんな特殊なことに…」

『… そういうやあの怪物… 真後ろから、俺らの肩を… 確か、こう… なんか牙みてーなモノで貫いたな… 傷口が焼けるように痛かったが… スバルと電波変換が解けたとき、痛みが消えてた…』

ウォーロックが言うと、ヨイリーは頷いた。

「それがスバルちゃんを包んでる電波の正体… でも、ノイズに近い訳だから…。そうね、仮として『ディフェンドノイズ』とでもつけときましょうか。だつたら、そのノイズに対策をたてればいいのよ」

『対策つて、どうやつてだ?』

コーヴァスが問うと、ヨイリーはうふふ、と微笑み。

「決まつていいわ。ノイズ対策アビリティのレベルをあげればいいのよ」

一同は揃つて顔を見合させた。

場所を移し、スバルの病室。

ヨイリーは力チャ力チャとスバルのハンターVGをいじる。ノイズ対策アビリティである、エースPGMに新たなプログラムをセットし終わり、プログラムを起動させると、ウォーロックが触つても弾かれなかつた。

「ツカラ君、スバルくんが起きたら知らせてもらえないか?」

「はい、分かりました暁さん」

シドウたちが出て行き、ウォーロックたちも念の為検査する、といふことで出て行つた後に残されたのは、ツカラとスバルだつた。ツカラはとりあえず窓を開け放ち、それからそつと手を伸ばし、スバルの頬に触れた。

「… 憂く情けないね、僕」

ゆつくりと滑らかな肌に手を滑らせ、呟く。

「… わつき… スバルくんにね、告白したとき… 僕は… 『スバルくんの心を傷つけさせない』って、誓つたんだ」

スバルが聞いてないからこそ、いえる言葉。

「僕、スバルくんを傷つけたこと、あつたでしょ。謝つても許されはすない、って思つてたのに、スバルくんは許してくれた。……それを除いても、絶対除くべきじゃないんだけど、スバルくんは何度も傷ついてた」

この世界のために。

大切な人が生きる世界のために。

未来があるこの世界のために、自らを犠牲に。

幾度も幾度も、傷ついてでも。

「闘つ」となら、きっと誰もスバルくんにはかなわない
ツカサの言つとおり、現にスバルが、サテラポリス内で最強なのだから。

「だけどね……スバルくんの心を守ること、それはきっと僕にもできると思うんだ。……勝手に僕が誓うだけなんだけどね」

そつ、自身の額の髪の毛を払い、身をかがめて、スバルの硬く閉じられた瞼に唇を寄せた。

それはまるで、眠り姫に目覚めの合図を告げる、王子様のキス。
唇を離し、ツカサが身体を起こすと同時に、ぱち、とスバルの瞳が開く。

「あ、スバルくん。良かつた……どこか痛かつたりしない？」
状況が飲み込めてないのか、ぼんやりした表情で、ふるふる、とスバルは首を横に振る。

「……」

「……はW A X Aだよ。イジュリア……怪物と戦つたこと、覚えてる？」

「ぐん、とスバルは頷き、はつ、とした表情で慌てて身体を起こし

た。傷みが走つたらしく、肩を抑えて俯いた。

「駄目だよスバルくん、寝てなくちゃ……」

ツカサは慌ててスバルの身体を支えて、横たえた。

「……ツカサ、くん……け、が……大丈夫……？」

「え？あ、これ？大丈夫だよ、動かす分に包帯が不便だけど、そんなに痛くないから」

両手をスバルは見て問いかけたのだと気づいて、ツカサは笑つて答える。

「でも……」

「ちょっと待つて。暁さんたちに知らせなきゃ」

ツカサは笑うと、ドアのほうへ身を翻す。

「ま……待つて……！」

スバルはツカサに手を伸ばして、引き止める。

「……スバルくん？」

ツカサは腰に腕が回されたので、振り返り、見下ろす要領でスバルを見た。髪留めを外され、ゆるくウェーブのかかった薔薇色の髪が、風に揺れる。

「……それ以外、怪我して……ない……？」

「うん、してないよ」

「よかつた……」

ツカサは微笑んで、スバルくん、と呼びかける。

「何、ツカサくん？」

「えっと、離してくれない……かな？暁さんたちに、スバルくんが起きたこと知らせないといけないし……」

「……あ、ご、ごめん……！」

スバルはぱつ、とツカサから離れる。平氣だよ、とツカサは微笑んで、シドウ達を呼びに行つた。

恐怖？

「いつてきまーす」

「いつてきます」

「いつてくるぜー」

「いつてらつしゃい、氣をつけてな」

「いつてらつしゃい。スバルくん、あなたは今日もじにに寝つてき

なさいね」

「はい」

今日、二人は様子見もかねてWAXAに泊まったので、そのまま直行で、シドウとクインティアに見送られて、学校に登校することになつた。もちろん、WAXAの職員寮に住んでいるジャックも一緒に登校中である。ちなみに、ツカサはジャックの部屋に泊まった。

スバルもツカサも、家には連絡してある。怪我のことは伝えてあるので、心配させたな、というのが本心である。

「……ツカサ君、本当に痛くないの？それ」

「うん、へーきへーき。ペンとか持つくらいだつたら大丈夫だよ」

ツカサが手を振つて見せると、スバルは痛そうな顔をして、俯いた。しかし、ツカサやジャックにしてみればスバルのほうが痛々しいのだ。三角巾でつられた左腕は、華奢な首から手の甲まで包帯が巻かれていた。

それに、その下の傷も見てしまつているのだ。ツカサのほうもひどいのだが、スバルのほうは痕が残らないか、とハラハラするような傷の深さだった。一部、抉れたような傷跡もあつた。

「おつはよー」

「おはよう

「はよー」

三人が教室に顔を覗かせると、凄まじい凍りつくような殺氣を感じ、スバルは肩を震わせ、ツカサは瞬きを繰り返し、ジャックは頬を引き攣らせた。

「おはよう、星河君、双葉君、ジャック君…」

「昨日は一人で早々と帰られたんですね~」

こちらを見ずに咳くルナとミソラに、スバルは慌ててツカサの後ろに避難した。クラスメイトたちも、ルナたちが恐ろしいようでスバルたちを振り返れない。

ジャックが『俺しらねえぞ』、と口の中で小さく咳いでいるのを聞いて、『昨日も逃げたよねジャック』、とスバルが言つと、『それはウォーロックたちも一緒だろ』、と返された。

「ジャックくん、……に・げ・た・よ・ね？」

ツカサが一言ずつ区切つて言つと、しぶしぶジャックはその場に足をとどめた。

ちなみにウォーロックは『今日逃げたら怒るからね(にっこり)』、とスバルが前もって脅す説得してあるので問題ない。

ジャックの肩を、ウォーロックがポン、と叩いた。

「さて、どうして帰ったのか、教えて……つて、」

「二人ともどうしたのその傷!!」

それにクラスメイトたちが振り返つて、絶句したように固まった。

今は制服なのでどこから包帯が巻かれているか分からぬが、ツカサは両手とも指先まで包帯が巻いてあり、スバルは左手を三角巾でつつており、その上に置かれた左手と、その三角巾がかかっている首は、包帯が巻いてあつた。

なのでジャックがツカサとスバルの鞄を持っていた。けしてパシリ

ではなく、怪我を考慮したためである。

「何があつたのよー！」

ミソラがわたわたとスバルに駆け寄ってきて問い合わせる。

「ちょっといろいろあつて。でも、牙のかけらとか全部取つたし…」

スバル、主語を省略したら、といづジャックの突つ込みが入るより早く。

「はあ！？牙のかけら！？何と戦つたらそうなる訳なの！？」
ルナがスバルの襟首を掴んで揺さぶる前に、ツカサからストップが入つた。

「委員長、待つて。スバルくんの怪我、酷いから…」

ツカサの言葉に、ルナは眉をひそめた。

「ぐ…と、ともかく…昨日なんで双葉君と一人で帰つたか、といふことだけ教えてもらいましょうか？」

スバルは、『ああ、来るぞ、絶対』と直感しながら、ツカサが口を開くのを見た。

「僕が誘つたんだよ。一緒にドリームアイランドの公園に行きたくて」

「うん、ちょうど花が満開で綺麗だつたよ」

「へー、そうなんだ。今度作曲のアイディアのために行つてみようかなー…って、そうじゃなくて…！何で一人だけでそこに行つたの、つて話…！」

ミソラが和んだように会話していたが、鋭いツツコミを入れた。

「それは…」

「すみませんが、どいていただけませんでしょうか？」

スバルが口を開くより早く、声のほうが早かった。振り返ると、銀髪の少年…ケープ・ラントがそこにいた。

「あ、ごめん」

一同がそれぞれ間を空けると、ようやくスバルたちの怪我にケープは気がついた。

「どうされたんですか、双葉君、星河君、その怪我は…」

「いろいろとあつたんだ」

ツカサが口を開く。ケープは、スバルの頬に手を伸ばす。「顔に怪我がなくてよかつた、といいたいところですが…そのように深い傷では痕が残ります…」

「そ、そう?」

「ええ…でも、僕は…」

それ以上先は言わせない、とばかりに、ぱし、とツカサがケープの手を掴んで、スバルの頬から離させた。

ぎり、と細身のツカサから想像がつかないほど、その握った手に、力が籠っていた。ツカサの唇が、僅かに笑みの形に歪み、言葉を発した。

「ごめんね、ケープくん。…悪いけど、そんなにべたべたスバルくんに触らないでくれる?」

最初のほうはいつもどおりの声だったが、後半になるにつれて酷く冷めて低い声になり、ツカサの目が、ヒカル並みに据わっていることにスバルは気づいていたが、ツカサの後ろに隠れた。

「悪いんだけど…僕、独占欲、強いほうなんだ」

「…けれど、彼女にはまだいないと思いますけれど」

更にツカサは、ぎりり、と、握り締めたケープの手に力をこめた。ケープは、唇に浮かべたままの笑みを消さない。

「ここにいるよ。だから、あんまりふざけた真似、しないでくれるかな?」

「いつの間に?」

ケープの言葉に、ツカサはあくまで柔らかく微笑んだまま、手は据わったままで、答えた。

「昨日だよ。だから、やめて、つて言つてるんだ。君は一番、危ないし？」

「なるほど、では、やめておこうとしたましか」

その言葉を聞いて、ツカサはようやくケープの手を離した。

「……では、適度にちよつかいを止めてもうひとつしまじゅつそつこい置いて、ケープは席に着いた。

「…どうこう意味なの？」

「わーな」

ルナが首をかしげ、ジャックは肩をすくめた。

「ツカサくん、どうこう意味なの？」『昨日』つて？

ミソラが問い合わせると、ツカサはそれはね、と前置きして。

「昨日は、僕がスバルくんに告白して、OKをもらつたんだよ」

そうこにきつたツカサの笑顔は、この上なく、素敵なものだった。

…チャイムが鳴るまでミソラ、先生が来るまで、ずっとルナとクラスマイト（女子）の殺気にさらされたスバルだった。

ଓৰোফাৰ (ପ୍ରକାଶ)

ଏହାମ ...

おひるね休み

相変わらず殺氣に晒されつつも、お弁当時間である昼休み。
「や、食べましょ」

ルナの台詞で、一回は揃つて『いただきます』、と言つた。
ちなみに席は一番後ろのスバルの席に、スバルを筆頭に、ルナ、ゴン太、キザマロ、ツカサ、ミソラ、そしてケープがいた。

「…ねえ、ミソラちゃん」

「なに、スバルくん？」

ミソラからお弁当を受け取り、スバルは当たり前のように自分の隣に座つて、お弁当を食べてくるミソラを見ながら、一言。

「……母さん、怒つてる？」

「うん。『いくじそうとは言えども、女の子でしょーーー！それにウオーロックくんも無茶してーーー』ってお父さんに怒つてた」
お弁当箱の中身を見て、母・星河あかねが相当怒っているな、とスバルは直感した。

「……五百円玉と、メモつて…」

ぴら、とメモをひっくり返すと『これで何か買いなさい あかね』と、書かれていた。

「……ロック、後で母さんにメール、おくわつか…」
『……そーだな』

スバルは立ち上がり、購買部に向かつた。

「…すごいなー」
『…すげえなー』

スバルとウォーロック、二人の台詞は綺麗にシンクロした。

男女関係なく、多くの生徒が詰め掛けていた。

「…あるといいんだけど」

そういうて人ごみに入った。押し合い圧し合いでいる、人の間をするするとすり抜けて、スバルはレジの前に立った。

この学校の購買いわく『早い者勝ち、順番は考えるな』ということで、後から來ても人を抜かしてかまわないらしい。お昼は学生にとって必須なのだ。ありえないルールだが、現実にあるのだから仕方ない。

「んーと…」

スバルはショーケースに並べられているパンに、いったん端から端に視線を滑らせる。

『決まつたか?』

「うん、流星パンにする」

ウォーロックに問い合わせられて、スバルは頷く。流星パン、とは流星の形をしたパンで、ぎつしりつまつた中身は最高級のクリームらしい。ジャックが一回食べていたので聞いてみたら、なかなか手に入らない、とのことだった。

『流星パンください』

ぱちぱち、とスバルは隣にいた少女と同じタイミングでそういうてから、瞬きした。

黒い髪を肩で切りそろえ、前髪をピンで止めた少女だった。ネクタイはスバルと同じ赤、つまり、一年生だ。

「あ、ごめんなさい。流星パン、一個しかないの」

「じゃあ、流星メロンパンつてあります?」

スバルが訊ねる。

「ああ、それだつたらあるわ」

流星メロンパンとは、メロンパンの上に流星のマークがしるされ、何気に結構おいしいらしい。ジャックから聞いて、流星パンの次に気になっていた。なぜかこの学校は、流星、と名のつくパンが多い。

スバルは知らなかつたが、現在スバルの質問に対応してくれている、綺麗なお姉さんがパンを作つていて、ロックマンのファンなのだつた。

「じゃあそれください」

スバルは代金を払い、すいすいと人ごみを抜けた。

「ま、まつて……」

「ん？」

スバルが振り返ると、先ほどのヘアピンの少女が人ごみを抜けたところだつた。

「あ、あの……私、一年A組の水倉あいりと言います。それで、あの……ありがとうございました」

「えーと、お礼言われるほどのことじゃないと思うんだけど……」

「いえ、あの……いつもは、人に譲っちゃうので……食べられなくて……」

ああ、それはさぞ食べたかったんだろうな、とスバルは思つた。

「別にいいよ。ちょっと今日はお弁当忘れちゃつただけだし」

「でも、譲つてもらつたのに……」

スバルはそういうながら、すぐ近くにあつた自販機で紙パックのジュースを購入して、そこで気づいたことがひとつ。あいりは気まずそうに、俯いている。

「……あの、凄く申し訳ないんだけど

「はい、何でしようか？」

「……これ、開けてください……左手、使えないから……」

「それくらい、お安い御用ですよ」

流星パンを抱えた少女は、頷いてジュースを開けてくれた。

「ごめんね、ありがとう」

「いいえ、これくらいは……」

近くに腰掛ける場所があつたので、スバルはあいりを誘つた。

「あの……」

「ん？」

「パンの袋、開けましょつか？」

「……すみません、お願いします」

ベンチに着くなり、あいりに確信をつかれてスバルはおとなしく渡した。

「ほんと、『ごめんね。何から何まで…』

「いえ、食べたかったパンを譲つてもらえて、凄くうれしかったです」

二人はそのまま談笑する。

途中不意に好きなものの話で、スバルは飲んでいたジュースを吹きかけた。

「え！？ 水倉さん、ロックマンのファンなんだ？」

「はい。実は偶然、ロックマンに助けてもらつたことがあつたんです。…ロックマンにしてみれば、命がかかっていたたくさんの人の一人ですけどね」

それでも、それからファンになつたんですよ、とあいりは続けた。

「響ミソラ、とか興味ないんだ？」

「響さんですか？ 深くかわいくて、非の打ち所がない素敵な人、っては思うんですけど…私はあくまでロックマンのファンなんです」

『よかつたなー、スバルくん？』

「うるさい、ロック黙つてて」

からかうように出てきたウォーロックをにらんで黙らせる。

「スバルくん」

不意に名前を呼ばれて、スバルとあいりは階段のあるほうを見る。そこにはツカサがいて、こちらに歩いてきた。

「ツカサくん」

「あ、ごめん。邪魔しちゃつたかな？」

スバルとあいりを見比べて、ツカサは申し訳なさそうに言った。

「いえ、大丈夫ですよ。星河さん、それでは」

「うん、じゃあね水倉さん

互いにぺこり、と頭を下げて、手を振った。

「」飯、食べ終わつた？

「うん。食べ終わつたよ

じゃあわ、ヒツカサが口を開いた。

「屋上、行つてみようよ

「…うん

スバルは頷き、ツカサの後について屋上に向かつた。

おひるねすみ〇二

ツカサとともに屋上に向かつたスバルは、屋上の扉が開くなり、ゆっくりと息を吸い込んだ。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

スバルはツカサの言葉に頷く。

「空が近いね」

「うん」

スバルはフェンスの張られた、一段高くなつた場所に腰を下ろし、ツカサもその隣に座つた。

二人揃つて空を見上げる。展望台の空も、ドリームアイランドの公園の空も、一人では寂しそぎるくらいに広かつた。

それでも、空は何があつても、変わらずにそこにあつた。

『なーにたそがれてやがるんだか』

スバルのウィザード、ウォーロックはあつさりと、雰囲気をぶち壊してくれた。

ジエミーがすう、と実体化して、あきれたようにため息をついた。

『ま、君に風流を理解しろ、といつほづが無理だね』

『んだと! ? ぐえつ』

『はいはい、いいから行くよ』

ジエミーはウォーロックの首辺りを捕まえるや否や、扉の向こうに引っ張り、消えていった。……回田の、拉致実行である。

そんな二体を無視して。

「……ツカサくん」

「……何かな、スバルくん」

「……手、ごめんね」

え、とツカサは、スバルの言つたことを繰り返して、瞬きをして、笑つた。

「何のことかな？」

スバルは右手でツカサの手をそつと掴んだ。力は籠つておらず、痛みはない。

「……この傷、僕のせいでしょう？ 僕の周りにあつた、特殊なノイズのせい……なんだよね？」

「……どうしてそう思うの？」

ツカサが問いかけると、スバルは俯いて、口を開く。

「……うつすらとだけ、覚えてるんだ」

スバルは記憶をたどるように目を伏せ、ゆっくりと瞬きを繰り返した。

「……本当にうつすらで、詳しくは覚えてないんだけど……皆が、そんなことを話していたから……」

「……でも、それはスバルくんが望んだことじゃない。それだけはきっと確かだとと思うよ」

ツカサが『ね？』、と重ねて言つと、スバルは弾かれたように顔を上げて、つらそうな表情をしていた。

「でも……！……っん……」

スバルの唇に、柔らかくて暖かい何かが触れた。

ゆっくりと離れて、微笑むツカサを見ながら、スバルはしばらく固まつていた。

「……スバルくんは望んで人を傷つけるような人じゃないもの、大丈夫だよ」

『ね？』、と再び言葉を重ねられて、スバルは『くん、と躊躇つうにしつつ、頷いた。

「……初めてだつただけど……」

「そりなんだ」

ツカサの言葉に、スバルは更に俯いた。対照的に、ツカサは空を見上げる。

『微妙に会話かみ合つてねえな』

『そうだな』

扉の陰に隠れるようにして、一体の電波体・ウォーロックヒュミニは会話を交わしていた。

それから十分ぐらいそうしていただろうか。俯いていたスバルは気づかなかつたが、空を見上げていたツカサははつ、とした。

「スバルくん！！」

「え？ うわっ！！」

スバルが顔を上げる間もなく、ツカサは抱き上げて、扉のすぐ近くまで走る。

『何』と問いかけるよりも早く、スバルたちが先ほどいた場所に、剣が降つてきた。

「おやおや、避けられましたか」

とつ、とフェンスの上に人影が一つ、降り立つた。

「ルーン・スケープ！！」

「誰？」

スバルは首を傾げて、ツカサに訊ねる。

「昨日、あのイジュリアを倒してくれた奴。……だけど、あいつも同じでスバルくんを狙つてる」

「何のために？」

スバルが訊ねると、ツカサは首を横に振った。

「分からぬ。聞いてみたらどうかな？ スバルくんが聞けば答えてくれるかも」

「…できることがあるなら、実行しろだよね」
スバルは頷き、顔を上げた。

「えと…ルーン・スケープだよね？」

「はい」

スバルはまず一番聞きたいことを、問いかけた。

「何で俺を狙うの？」

「皇子が、あなたをお待ちなのですよ。『太陽の姫』」

また、太陽の姫、ヒツカサは呟く。

「…『太陽の姫』って、何なの？」

「それを今、教えるわけには行きません。けれど、あなたは私どもに来て頂かねば、困るのですよ」

スバルは考え込むそぶりこそ見せたが、拒否の意もこめて口にする。

「やだ、って言つたら？」

「力強く、ということになります」

ルーン・スケープの言葉に、だつたら、ヒスバルが口を開く。スバルはハンターV Gを構える。

それに続くようにして、ヒカサも構えた。

「トランスクード シューティングスター・ロックマン…！」

「トランスクード ジエミニ・スーパーク…！」

スバルとヒカサの身体が光に包まれ、光が解ける。

ふう、と急にルーン・ケープはため息をついた。

「…どうでもいいですが、戦うつもりがおありなら、降ろしたほうがいいのでは？」

「え？…あ」

『…忘れてたな』

…ヒカサがスバルを抱えていたことを、ルーン・スケープに言われるまで、忘れていた一同だった。

光の射撃

ドオン、と何かが爆発する音がして、校舎が揺れ、生徒は悲鳴を上げた。

「何！？」

ミソラとジャックはすぐさま窓際に走り、校舎の外を見た。

「ロックマンにジユミー・スパーク…」

ジャックは三人が攻撃を仕掛けている相手を見る。黄色のボディに銀髪、と言った電波人間だ。特徴的なのは、その手に持つ武器…二丁の拳銃だった。

「あれと戦ってるみてーだな。行くぞ、コーヴァス！！」「分かつてる！！」

ジャックはすぐさま身を翻し、教室から出てゆく。

「私たちも行くわよ、ハープ！！」

『行きましょう、ミソラ！！』

ミソラもジャックに連れつつ、その後に続いた。

二人はすぐさま近くのトイレの男女に駆け込み、ハンターバージョンを掲げた。

「トランスコード ジャック・コーヴァス！！」

「トランスコード ハープ・ノート！！」

スバルたちと同じように光に包まれ、それが解けたときには一人の姿はそれぞれその場から消え、少し上のウエーブボードにあった。

「行くぞミソラ！！」

「ええ！！」

二人は頷き、すぐさま戦闘の場へ向かった。

「ロケットナックル！！」

ヒカルがその技を放つと同時に、ツカサが間合いをつめ、『エレキソード』で切りかかる。

「甘いですよ」

涼やかな声とともに、キーン、と澄んだ音を立てて、エレキソードが弾かれる。

「どうかな？」

ツカサはそういうなり、高く跳躍する。そしてその後ろに、ヒカルに支えられて立っているスバルの姿があつた。左腕はだらり、と力なく降ろされていた。

「バトルカード ヘビー キヤノン！！」

そう叫び、高密度のエネルギー弾が放たれた。

スバルの左腕は、現在うまく動かない。そんな状態により、右腕一本で撃つたので、その反動で後ろに一步下がる。それを防ぐ意味でヒカルに支えられていたのだ。

予想していなかつたようで、ルーン・スケープにヘビー キヤノンが直撃した。

…かに見えた。

「危ない危ない」

「！？」

爆発の煙が消えたときには、薄い膜に守られたルーン・スケープがそこにいた。

「…それは、ノイズ…かな？」

ツカサは淡く笑いながら、問いかけると以外にも返答は帰ってきた。「ええ。これは『ディノイズ』。あらゆる攻撃から使用者を守るノイズですよ」

ツカサは厄介だな、と内心で呟く。不意にとんとん、と後ろから肩

を叩かれて振り返ると、スバルがそこにいた。

「スバルくん？」

「…ツカサくん、僕があいつをひきつける。…その隙に一気に叩いて。そろそろ皆が来るだろうし。あ、ヒカルには話してあるから」スバルの言葉に、ツカサはこくり、と頷いた。

「じゃあ行くよ、ロック！…」

『いつでも！…』

「トライブオン、グリーンシノビ！…」

スバルの身体が木の葉に包まれる。それが消えたときには、スバルの姿は忍者に変化していた。

左手を使えないというハンデを感じさせない軽やかさで、走る。恐らく、それを打ち消すためのグリーンシノビだらう。すばやさで相手を困惑させるための。

スバルはたーん、と高く跳躍する。

「シノビシユリケン！…」

三枚の手裏剣がルーン・スケープに向け、放たれる。それはティノイズで弾かれることなく、代わりにルーン・スケープの銃撃で撃ち落された。

「くつ…」

スバルが舌打ちすると同時に

「ジエミニサンダー！…」

「グレイブクロー！…」

「ショックノート！…」

強くきらめく雷が、勢いのある紫の炎が、鮮やかな音色を伴った音符が、ルーン・ケープに向けて放たれた。

凄まじい爆発を生みれた瞬間、後ろから腕がまわされて、脇の下か

ら抱えあげられた。

「大丈夫か、スバル」

そう問われて声の主を見上げると、四枚の翼を持つた電波人間の少年がそこにいた。

「ジャックくん」

ジャックは少し上のウェーブロードに一息で羽ばたいた。

「よつと」

ウェーブロードに降りかかるなり、電波人間の少女が駆け寄ってきた。

「スバルくん、やっぱり左手使えないんだね」

「うん、ちょっと不便かな…」

青色のギターをウェーブロードに立て、ミソラはスバルの左手を持ち上げて確認のように問い合わせる。

「…あつちは、大して怪我は負つてないようだね」

ツカサはウェーブロードを見降ろした。ツカサの言葉に、スバルたちも揃って下を見降ろす。

「お姫様は囮とはねえ…」

ジジッ…とルーン・スケープの姿が…いや、周りがかずれる。

「あれ…ディフェンスノイズ！？」

「なんなんだ、ディフェンスノイズつて？」

ヒカルの叫びに、ジャックが問い合わせる。…昨日は怪我の酷かつたツカサと、このノイズのせいで目覚めないスバルのために、ジャックたちに説明は成されていなかつた。

「昨日、スバルくんの周りに出てたんだ。とにかく、電波だつたら完全に弾くんだ」

「…つまりブライの電波障壁みたいなものね」

ミソラの答えにそつかも、と他の一同は呟く。

「…まあ、コンビネーションは悪くないか」

ルーン・スケープはそういうて僅かに傷を追つた身体を見下ろす。

「んー、じゃ、本氣でやつてあげましょかねえ…」

そう言って、ルーン・スケープは銃をスバルに向ける。

「エンシント・ワルツ…！」

そういうと同時に、銃口から光があふれた。

溢れた光は銃弾の代わりのようで、いくつもの光がスバルに向けて放たれた。

『スバル、避けるぞ…！』

「うん…！」

ウォーロックの言葉に頷いたスバルは、高く跳躍する。

ルーン・スケープはあくまで柔らかく微笑み、呟いた。

「それは、追尾の光ですから…逃れるのは困難」

「だったら、正面からぶつかる…！」

スバルが叫ぶないなや、光に包まれる。

「トライブオン、ベルセルク…！」

パン、と光が散り、サンダー・ベルセルクへと変化したスバルが、光の大剣を高く掲げて、叫んだ。

「サンダー・ボルト・ブレイク…！」

真正面から向かってくる光の帯に、たけき光をぶつけて相殺する。

「…つて…わ…うわっ…！」

「スバルくん…！」マシンガンストリング…！」

爆発の余韻に身体が弾き飛ばされる。とっさにミソラが技を繰り出す。スバルの腕に絡みつかせて、引っ張りあげる。勿論、傷はつけないように、威力は抑えてある。

「ありがとう、ミソラちゃん」

「どういたしまして」

ミソラは嬉しそうにそういった。

ルーン・スケープのほうは楽しそうに笑っている。

「何がおかしい…！」

ジャックの問いかけに、ルーン・スケープは『それはですね』と前置きをして。

「さすがにお姫様に、傷を負わせるわけには行かないのですよ。でも、あなた方だつたら！…」

ズドオン、ヒスバルに向けられたときよりも強く、多くの光が大量に溢れた。

「皆散つて！…」

「皆散れ！…」

スバルとジャックの声が響くよりも早く、それぞれ別々の方向へ駆け出した。

光も当然のように分かれた。

一つはツカサに向けて。

一つはヒカルに向けて。

一つはジャックに向けて。

一つはミンラに向けて。

…けれど、スバルだけは狙われなかつた。

一同を追尾する光は、先ほどより速度が上がつていた。

『おい、スバルあれじやあ、あいつらに…！…』

『直撃する…みんつ…！…』

ウォーロックの声に、スバルは一同のところへ駆け出そつと、身を翻した瞬間。

「おつと、お姫様はここで大人しくしていてくださいませ」
スバルの進路をさえぎるように、ルーン・スケープが目の前に降り立つ。

「どけ、ルーン・スケープ！…」

「それは聞けません。皇子の命は『太陽の姫を我が前に。他のもの

たちが邪魔をするなら、その者たちを消してもかまわない』と

「……」

ぎり、とスバルは奥歯をかみ締める。

『なら、俺も消すのか?』

「……お姫様の電波体ですし… 今度聞いてきましょうか?」

「ロック、そんなこと言つてる場合じや… ! ! !」

スバルは、ルーン・スケープの肩越しに一同を見る。

殆ど、光との差はないように見えた。

「皆、ツカサく… ! ! !」

ルーン・スケープが手を伸ばすより早く、スバルはウェーブロードを蹴つて飛び出す。

ピピッ、と音がして、スバルのビジライズバイザーに、ロックオンサイトとはまた別の、模様が浮かび上がり、声が聞こえた。

『ディフェンドノイズ ノイズチエンジ キドウシマス』

ツカサ、ヒカル、ジャック、ミソラに攻撃の光が届き、派手なまでに爆発の光が当たりに散つて、あたりは煙に包まれた。

光のノイズ

「いたた…」

ミソラは、むくつと起き上がる。そして自分の身体を見下ろして、驚く。

「ハ、ハープ…、私…」

『怪我一つ、なし……?』

慌てて、ツカラサ、ヒカル、ジャックを見る。揃って同様に驚愕している。

それは、敵であるはずのルーン・スケープも同様だった。

「なんで…怪我一つ…ないの?」

あのサンダーベルセルクの技をぶつけようやく相殺できた技なんだ。なのに、何故。

ミソラの質問に答えよう、そうこうしようと風が頬を撫でた。

ミソラは慌ててその風の発生源を探すように、視線をめぐらせて一つの答えを見つけた。

一同のいるウエーブロード、それを円の外側としたら、その円の中に浮かぶ黒い炎があつた。

黒い炎が、あたりに散った。

その炎の中にいたものが、あらわになる。

仰向けになり、手と足をだらりとたらしたその人物の特徴は、黒のボディに、藍色の額あてのようなヘルメット、それに長い漆黒のつややかな髪。首にマフラーのように巻かれて、背中に流れる長い漆黒の布、腰あたりから覗くのは、大きく広がった、黒の羽根。腰か

ら下ははためく長い布に隠されていた。いうなれば、ドレスのような形。そして足は、踵の高い靴をのような形。

例えるのならば、まるで墮天使のような、そんな色をしていた。

ゆっくりと下降しながら仰向けから、身体を起こす。くるり、と身体ごとこっちを向いた、その瞳は深い闇色。

そのままとつ、と地面に降り立つて、胸に手を当てるど一瞬でその手に杖が握られた。

「ロックマン……ディノイズモード……」

呴くようにそういうたスバルの視線が、ゆっくりとルーン・スケープに向けられた。その瞳に、光はない。

「……古代の電波に触発されてたとはい、こんなに早いとはねえ……」

やれやれ、と言った風に、ルーン・スケープがため息をつくと同時にスバルは手に持つた杖をルーン・スケープに向かた。

「……ソルエッジ……」

ルーン・スケープが、とっさに張り巡らせたディフェンスノイズを切り裂き、攻撃を加えた光の刃があつた。

バシイン。

ジャックの頬の横を何かが掠め、ビツ、と鈍い音が聞こえた。

「…え？」

ジャックが後ろを振り返ると、先ほどまで見下ろしていたルーン・

スケープが、煙を上げながら横たわっていた。

しかも、右肩に深い傷を負っていた。

同じく、スバルの掲げる杖からもシュウウ…と、煙が上がっていた。

「…それでも、仕方ないですか…」

右肩を抑えながら、むくりとルーン・スケープは身を起こす。取り

落とした拳銃を拾い上げ、銃口をスバルにすえた。すぐに動いたのは、ジャックだった。

「させるか、フェザーシックル！！」

四枚の羽のうち、一枚を変化させてルーン・スケープに向けて放つ。ずばつ、とその手の甲を羽根が切り裂き、拳銃を弾き飛ばした。

ルーン・スケープは手の甲を押さえ顔をしかめ、ジャックをにらむ。「痛いです…ね！！」

そう叫ぶなり、手の甲から伸縮する帯を放つた。

「うおっ！？」

ぐい、ヒルーン・スケープはジャックの片翼を絡め取つてから、奪つて地面へと投げる。

「ジャックくん！！」

ミソラが悲鳴に近い声を上げる。

「うおおわああっ！？」

とつさに体勢を立て直すことができず、落ちていくジャックの一番傍にいたのは。

「この…届けーっ！！」

体勢を立て直せずに、落ちてゆくジャックの腕に必死で腕を伸ばしながら、ヒカルがウェーブロードから飛び出す。

「ヒカル！！」

ツカサが慌てたような声を上げる。

スバルは杖の先で円を描き、そこに一瞬で複雑な文字を浮かび上がらせると、その技を起動させるためのように呟いた。

「……エンジニアリング」

光の輪が、落ちる一人のかなり下に浮かび上がる。かつ、と強くそ

の輪が発光すると、爆風が起じた。

「つおおおおおおおおつー?」

「うわああああああああつー?」

今度は反対に空へと飛ばされるジヤックとヒカル。

『ミソラー!』

「うん!ー!」

ハープの呼びかけに頷き、田の前を上へと過ぎた一人に向か、ミソラはギターを構える。

「マシンガンストリングー!ー!」

ミソラは音を奏で、五本のギターの弦を放った。ぎりぎりジヤックの足と、ヒカルの腕に弦が届き、絡みつくのを確認し、傍に急いで降り立つたツカサと共に。

「せえのつー!ー!

「えいつ!ー!」

ミソラは力いっぱい、引っ張り寄せた。二人は弧を描きつつ、ベチヤツ、と音を立てて一つ下のウエーブロードに、落ちる。

ヒュルンッ、と音を立てて絡まっていた弦がミソラのギター……フィーチャリングハープギターに戻った。

「…空飛べるから分からなかつたけどよ……落ちるのは勘弁してえ
わ」

「ど、同感だな……」

ジャックがウエーブロードにばたん、と倒れてから言つた言葉に、ヒカルは両膝と両手をウエーブロードに当てて、息を継ぎながら同意を示した。

「……」

スバルは一人が無事だったことに、顔色一つ変えずに、とどん、と杖の先で地面を叩く。ヴン、と何かのスイッチが入るような音がして、スバルの足元に何かの陣が広がる。

つい、とスバルは両手で、杖を捧げるよう持ち替えて掲げた。

「…ます…」

ルーン・スケープが頬を引き攣らせた。

「永久の光に塵と消えろ…」

「……シャイニングエンペラー」

咳くよくな声の後、光の隕石がルーン・スケープへ降り注ぐ。

とつせにルーン・スケープは、ディフェンスノイズを張り巡らせた。しかしそれは、ディフェンスノイズを切り裂いて、その身へ当たった。

「うわああああつ…！」

ルーン・スケープの悲鳴が響く。

「…私たちの攻撃、当たらなかつたのに…」

「あの状態のスバルくんの攻撃、全部当たつて…」

ミソラが顔をしかめて咳き、その先をツカサが引き受けた。

「なんでだ？」

ジャックが首を傾げる横で、ヒカルはぼそり。

「まあ、そりゃあいつもの」とく分かんねえんじゃねえの？本人らにも

「……そうかもな」

まあ、だいぶ経つてから分かつたりするし、何にもヒントがない状態で考えるのも面倒だし、それでいいか、とジャックは思考を投げた。

スバルの攻撃がやみ、ふらり、とルーン・スケープはよろめく。

「……今は、戻るしかないのですね……」

そう呟き、ルーン・スケープは姿を消した。それと同時に、ぱたん、
とロックマンの姿に戻り、スバルはその場に倒れた。

田 覚め（前書き）

…テ、テストが終わつた…オワツタ…

目覚め

ぱち、と前触れなくスバルは目覚めた。瞬間。

「スバル君が、起きたーーー！」

「ぐはーーー！」

どすん、と腹部に何かが乗ってきた。何もわかつてない状態で飛び乗られ、スバルの混乱は最高潮である。

「ミソラ、離してやれよ

ひょい、とすぐさまジャックに引き剥がされた。げほげほ、とむせたスバルはシドウに抱き起こされた。

「気がついてよかつた、スバル」

辺りを見回すと、昨日スバルが泊まった病室だつた。

傍にはミソラ、ジャック、ツカサ、クインティア、シドウがいた。そして、ウォーロック、ハープ、コーヴァス、ジョンニー、ヴァルゴ、アシッドもいた。

「あの……何時間ぐらい、僕ここ……」

「丸一日 + 五時間寝てたよ」

ツカサの言葉に、スバルは絶句する。

戦い始めたのが、十三時……一時ぐらいだったので、単純計算で今は十八時……六時になる。

「え、嘘！？」

「本当よ。起こせないぐらいぐつすり」

クインティアの言葉に、布団を引つ張りあげてスバルは顔をうずめる。……なんでこつも自分は、一日(二日)連続で気を失っているのだろう。

「お…起こしてください…」

「…というのは冗談で、本当に起こさうとしたんだけど起きなかつたのよ、あなた」

珍しくクインティアが冗談を言った。

いつもならシドウがそういった瞬間、どこから取り出したのか謎なお盆…もしくはお茶を持ってきた際に、持っているお盆で強かに殴り飛ばすのだ（ウチのクインティアさんはこういう扱い（酷））。それでも二人は仲がよく、人前でいちゃつかないものの、恋人同士である。

「…すみません…」

スバルはそういうて、枕に寄りかかった。

「…それでスバルくん」

「何ですか、暁さん」

示したように、一同はしいん、と静まり返る。

「…何があつたか、覚えているか？」

「…えーと、あの戦いですか？…ルーン・スケープの技があたりそうになつたところからは…少しあやふやですけど…一応覚えてます。ロックはどう？」

『俺はさつぱりだな』

すっぱりそういったウォーロックに、だらうね、とスバルはつっこみを入れて、シドウを向いた。

「よかつた、それじゃあ、説明してくれないか？この姿のことつい、とスバルの前に一枚の写真が差し出された。

それは、クインティアとヴァルゴが電波変換した姿、クイーン・バルゴに似てもいた。

それに写っているのは、スバルだった。当本人であるスバルには、

意識はほとんどない状態だが、なんとなくは覚えていた。

黒のボディに、藍色の額あてのようなヘルメット、それに長い漆黒のつややかな髪と深い闇色の瞳。

首にマフラーのよつに巻かれて、背中に流れる長い漆黒の布、腰あたりから覗くのは、大きく広がった、黒の羽根。腰から下ははためく長い布に隠されていた。いうなれば、ドレスのような形。シューズは、踵の

高いヒールのような形に、手に杖を携えていた。

例えるのならば、まるで堕天使のような、そんな色をしていた。

「…仮に…」

「ディノイズモード…護りのノイズが引き起こした力…」

シドウが口を開き、その先を言おうとした瞬間に、スバルが呟いた。呟かれた言葉はかすれて、普段のスバルの声より低く、抑揚がない上に、虚空を見つめるスバルの瞳からは、光が損なわれて、焦点が全くあつていなかつた。

「スバルくん？」

ツカサが両肩を掴んで、軽くゆすつたが反応はない。

「太陽がもたらす命の恵み……けれど……同時に…」

「スバルくん…スバルくん…！」

力任せに、ツカサがスバルの両肩を揺するとびくり、と小さくスバルの身体が震え、ぱちぱち、と瞬きを繰り返して、ツカサの顔を見つめてから、辺りをきょろきょろ見回した。

「…えっと、僕…何か言ってた？」

ツカサはほつとしたようにスバルの肩から手を離す。

「ディノイズモードとか何とか言ってたぞ」

ジヤックが意味不明もここに極まり、とでもいうような表情をしていた。

『そういうや…あの姿に変わる前『ディノイズモード、キドウシマス』とか言つてた気がするぜ』

『気つて…頼りないわね』

ウォーロックの言葉に、ヴァルゴは腕を組み、呟く。ハープもアシッドも同意して、頷いた。

『しかたねーだろ!!意識、力の本流に飲まれてたんだぞ!!』

「うん、僕もほんと意識なかつたもん」

憤慨するウォーロックをなだめるように、スバルは同意する。

しかし、それで止まるはずもなく喧嘩を始めるのが、AM星人のウォーロックと、人工電波生命体のアシッドと、FM星人のハープ、ジェミニ、コーヴァス、ヴァルゴの一団である。

そんな一同を無視して、パートナーたちはスバルを向いた。

「ま、とりあえず検査は終わつたし…どうする?今日は家に帰るか?左手はまだ使えないが、身体のほうは問題なかつたぞ」

「本当ですか?じゃあ帰ります」

「電波変換で帰るといいわ。早いし、歩きだと、あれがあるから遅くなるかもしないわ」

あれ、とクインティアが指差す先には、喧嘩を続いているバトルウィザードの一団。

「そうですね」

「じゃあ、帰ろうスバルくん。鞄は学校なんだけど」

ミソラにぐいぐい腕を引っ張られて、スバルは立ち上がる。

「……後で、取りに行こうかな……って、ああ…学校、先生…」

「大丈夫だ。『サテラポリスの用事で』って教えてある」

シドウの言葉に、ほつ、と息をついたスバルは、それはもう問答無用、とばかりにミソラにさるさると引っ張られて病室を後にしたのだった。

…せめてものあがきで、ツカサにだけは手を振つた。

■印（複数用）

…どんどんグダグダになってしまふ…これがのじとか。

帰宅

ひゅん、と音を立てて、二つの人影が「ダマタウン、星河家の前に
降り立つた。

「ただいまー」

『たでーまー』

「ただいまー」

『ただいまー』

少女二人分とウィザード一人分の声が、星河家玄関に響いた。一人
は茶髪、もう一人は明るいピンク色。一人は緑色の身体、もう一人
は琴の形をした体。

「あら、お帰…スバル！？電話で話は聞いてたけど…こんなに酷い
なんて…」

「た、ただいま、母さん」

帰るなり左腕に絶叫した母・あかねに、とりあえず同じ言葉を繰り
返した。

「おー、聞いてたより酷いなー」

「あ、ただいま父さん」

「ただいま、お父さん」

『たでーま、大吾』

『ただいま、大吾』

「おー、お帰り」

動搖することなく出迎えた父・大吾に、さすがだなあ、と思う娘・
スバルであった。

制服を着替えて、宿題を済ませて、夕食。

席はスバルとミソラ、あかねと大吾が隣同士でテーブルに着いた。

今日のメニューは、シチューとサラダ、それと林檎である。

「……つまりそれでツカサくん共々WAXAに泊まったのね？」

そして、おいしい夕食に舌鼓を打ちながら、あかねの確認のようなく聞いかけに、スバルはこくりと頷いた。

「うん」

怪我をしたのは左手だけだが、スバルはお皿が押さえられないで、大きさ的にちょうどいいハーブに支えてもらっていた。

「…あ、ミソラちゃんがこの前凄く怒つてたから聞いたんだけどー」「…なに、母さん？」

楽しそうに笑っているあかねに、何故か嫌な予感しか感じない。しかし、聞き流すわけにも行かず、スバルはお茶を飲みながら訊ねた。

「スバル、彼氏できたんだって？」

ぶふつ、とちょうど真横で実体化していたウォーロックに、全てのお茶がかかった。

『きたねえな、おい！…』

「い、ごめん…」

げほげほスバルはむせながら、ウォーロックに謝り、あかねを見た。

「ミソラちゃん、そんなに不機嫌だったの！？」

「ええ、それはかなり」

「だあーって、ツカサくんにスバルくん、取られたんだもん！！私だって、スバルくんの事好きなのに！！」

不機嫌そうに言い切ったミソラに、スバルは言いたいことを一矢いぐらか飲み込んで。

「…ミソラちゃん、僕ら女の子同士だよね？それは気にしないんだ？」

スバルはとりあえず、シチューを口に運びながら、自然な振りで一番聞きたいことを聞いかけた。

「海外でオッケーな場所とかあるわよ、問題ないわー！」

「……んぐ

…いいのだろうか、トップアイドル響ミソラがこんな発言をして。差別するわけではないのだが…だが、芸能界はドロドロしたイメージがあるので、じついうのが蹴り落とされる要因になりそうな気がする。そんなことをつらつら考えていたら、「飯をのびにつまらせた。

「ふ、ロック、お水とつて…」

「大丈夫か、スバル？」

ちょうど台所の水差しの傍にいたロックにお水を取つてもらい、スバルはふは、と息をついた。大吾の言葉にこくん、と頷いて最後の一囗を食べた。

「（）馳走様でした」

「お粗末さまでした」

スバルは両手を合わせて、ちゃんとそういうて席を立つ。

「あ、そーだスバルくん。一緒にお風呂入ろうよ」

「え？ なんですか」

ミソラが急にそう言い出したので、スバルは首を傾げるが、あかねと大吾は揃つて。

「そうしなさい、スバル。今左手、使えないでしょ」

「それがいいぞ、スバル。今左手、使えないだろ」

言葉遣いゆえにいたかかのずれは出るが、それでもぴたりとそろつあたり、さすが夫婦である。

「…そーだつた」

「じゃ、一緒に入ろうね」

スバルはこれから来る、いたさかぐつたりくる後を思い、部屋によろけつつ戻ったのだった。

「かー」「くー」

非常に幸せそうな寝息が、スバルの部屋から聞こえていた。

『おーきーるーーー!!』

『あなたも大変え』

大声で叫ぶウォーロックと、隣で見守るハープの横に置かれた時計には『七時三十分』、と記されていた。

『こんの…起きあつてんだーー!!』

「うわあはいーーー!!

ついで、とばかりにベッドのふちを叩くと、スバルは起き上がる。…が、起きあがろうとして、ぱたん、と後に倒れた。

怪我を負っている左手はともかくとも、自由のきくはずの右手が、動かないのだ。

「……」

『ミソラも良くこれで起きないわね…』

隣で丸まつて眠るミソラを見下ろして、スバルは肩を揺さぶひとつして、はつとした。

「…腕、使えないんだつた…でもなあ」

このままじや、起きれないことは確実である。

『ミソラちゃん、おき…』

スバルは、ミソラの肩を揺さぶつと左手を伸ばした。包帯がゆるくなっていたようで、左手から包帯が滑り落ちた。

『ーーー!!』

『スバル、その腕ーー?』

『え? ……ーー!』

ハープが息を呑み、ウォーロックに言われて、スバルが見下ろした

左手には、傷一つなかつた。

「な、な…」

『と、とうあえず、放課後에서도コイリー博士のところに行つてみてはどうかしら?』

『そ、それもそだな。とりあえず、今は包帯巻きなおしてやれ、ハープ』

『巻きなおしておけ』と、いつもなら言ひませのウォーロックが、途中で言葉を変えた。

『何で私……そうね、私が巻きなおすわね』

『あんたが巻きなさいよ』と、いつもなり直はずのハープも、途中で言葉を変えた。

それはひとえに、スバルの腕に抱きついていまだやすやす眠る、ソラが理由であった。

朝日が頬をくすぐるよつこ、ソラの頬に降り注いだ。

「ん~…」

「あ、起きた?』ソラちゃん。おはよう』

スバルはハープに手伝つてもらいながら、制服に着替え終わつた。そもそもと起き上がつたソラに挨拶をして、スバルは微笑んだ。

「…おはよう、スバルくん……着替えなきゃ…」

もぞもぞ、ソラは起き上がつて階段を下りてくる。

「じゃあ、先行つてるね」

そういうつてドアノブに手をかけたスバルの首で揺れる、星の首飾りが、淡く光つたことに、誰も気づかなかつた。

スバルが階下に降りてゆくと、既に机の上に朝食が準備されていた。白いご飯、目玉焼き、お味噌汁、そしてお皿のお弁当のおかずのあまり。

既にあかねと大吾は席に着き、大吾は朝食を食べ終えて新聞を読ん

でいた。

「おはよー、母さん、父さん」

『おはよーさん、大吾、おふぐる』

『おはよー、大吾、あかねさん』

「おはよー、スバル、ウォーロック、ハープ。やつぱりウォーロックに起こされたか」

「おはよーうスバル、ロックくん、ハープちゃん。…あり~。//ミンラちゃんは…」

「今着替え中。すぐ降りてくる…」

スバルの途中でばたん、トリビングの扉を開いたのは、ミンラだ。

「おはよー『やれこま』、お母さん、お父さん」

「はい、おはよー」

「おはよー、ミンラちゃん。ハープ、お願ひ」

『任せて』

ハープは席に着いた、スバルの膝に落ち着くと、スバルのお茶碗を支える。

「ごめんな、ミンラちゃんのウイザードなのに…」

「いいよ。スバルくんの責任じゃないんだから、その腕早く治るといいね」

ぎくり、とハープとウォーロック、そしてスバルは内心で固まっていた。

「時間があまりたっていいのに、完治してることない。」

「昨日、シドウにも『左手は使用不可』と言われたのに。」

「?スバルくん、どうしたの」

首をかしげたミンラに、ウォーロックが声を出した。

『なんでもねーよ。ほら、わざと喰え。委員長たちが迎えにくる

んじやないのか?』

「ロックくんの言うとおりだね。じゃあ、いただきまーす」
ミンラを『まかせたので、ほつ、と三人は内心で息をつき、朝食に箸を進めた。

「星河くーん、ミンラちゃん、迎えにきたわよーーー!」
朝食を大体食べ終わつたあたりで、ルナの声が聞こえた。

冷氣（複数形）

… もう少し、 ちょっと出でなか出でないか…

冷氣

「…あれ？」

「あら？」

スバルは瞬きを繰り返し、ミソラはきょとんとした。

「…委員長、ケープくん、つてこっちからの登校だったっけ？」

「私たちと一緒に登校したいんですって。それともなあに？星河くんには、ケープくんと登校することに、不都合もあるわけ？」

「や…そういうわけじゃないんだけど……」

そういうわけでもあるんだけど、とスバルは内心で突っ込んだ。ケープと一緒にだと、スバルがそこしか見ていないだけなのかもしれないが、ツカサの機嫌が、すこぶる悪くなるのだ。

とりあえず、ゴン太とケープとキザマロヒルナに挨拶をして、ツカサを向いた。

「…おはよう、ツカサくん」

「うん、おはようスバルくん。あ、鞄持つてあげるよ」

右手で鞄を持ったスバルは内心でぎくり、としたことをおぐびにも出さずに、驚いた表情を作った。

「え！？ い、いいよ！ ツカサくんも怪我酷いんだし…」

「スバルくんのほうが酷いよ」

『ゴメンなさい、もう治ります』とは、スバルの心の声。

そんなスバルの心情の理由を知っているだけある、ウォーロックとハープはすぐさま手助けに入った。

『だーいじょうぶだつて。本人がこう言つてんだし、かまやしねえだろ』

『そー よ。どつかの馬鹿のパートナーなんだし、きっと無茶は大丈夫なんでしょう。でも、つらくなつたら言いなさいね』

『ちょっと待てハープ、誰が馬鹿だ?』

『それはウォーロックだな』

『ええ、ウォーロックよ』

『ああ、ウォーロックだな』

『ブルル… ウォーロック以外ないな』

『てめえら… まとめてぶつ瀆す ！』

上からジエミニ、ハープ、コーヴァス、オックス。

喧嘩しつつウォーロック以外、楽しそうに去つてゆく（パートナーと電波変換することができる） ウィザード一同だつた。他の一同はするする、と逃げていたが、オックスだけはすぐさま捕まり、頭を殴られていた。

「ほり、ここでしゃべついたら遅刻するわ。行きましょう」ルナに促され、一同は歩き出す。

先を行くウィザードたち（モードとペティアは除外）の後を、ルナを筆頭にゴン太とキザマロ、スバルとツカサ、ミソラとケープ。

ツカサの横に並んで歩くスバルは、ツカサに聞いかけた。

「ツカサ君、怪我：どれくらい治つた？」

「んー… 動かしても痛くはないくらいには治つたかな。まあ、一応最先端技術の手助けも借りてるんだけどね」

最先端技術を使つた、傷の治癒方法でも、早いほうだ。… 完璧に治るなんて、ありえないことだから。せめて、痕が残るなり何なり、あるであろう。なのに、その痕すらない。

「先生やユイちゃんたちに絶句されたけど」

当然だけどね、と付け足し、苦笑するツカサの表情が、今は胸に痛かつた。

「……ところで、コイちゃんってこの前の子…だよね？」

スバルの脳裏に浮かんだのは、お淑やかな、腰よりも長い藍色の髪に、他校の制服を着た少女だった。

「そうだよ。同じ孤児院の子」

「…ふーん」

酷くそつけない返事。聞いておいてこれはないだろう、と自分に内心で突っ込んだ。

「もしかしてスバルくん、気にしてる?」

「え? そ、そんなことないよ?」

ツカサの淡い微笑みに、スバルは少しどキリ、とじつじつ返した途端。

「二人でいい雰囲気作らないでくれる…?」

「僕たちは置いてけぼりですかね…?」

ミソラとケープの背後から、何故か冷気が漂つてくる。

「悪いかな? 僕としては望むところなんだけど」

にこにこ、と微笑むツカサの笑みが、空恐ろしい。それと比べて遙色なしに、背後に冷気を漂わせたミソラとケープも恐ろしい。

「そっちとしては、てことで、僕としては最高なんだけど」

「そうですか」

「そうだよ」

にこにこにこ。

スバルはちょうど前を歩いていたゴン太とキザマロの元に、急いで駆け出した。あの場にいたら恐らく、きっと、というより絶対、凍り付いて歩けなくなる。それだけはごめんこつむりたいのだ。

しかししなぜ、何が理由でああるのだろう、そう首を傾げながら、スバルはゴン太たちに追いついた。

嵐到来（前書き）

..... ଏହାରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

『ピンポンパンポン。一年B組星河スバルさん、双葉ツカサくん、至急職員室に来てください。繰り返します、一年B組星河スバルさん、双葉ツカサくん、至急職員室に来てください』

学校についたか、つかないかが良く分からぬ辺りで、この放送が聞こえてきた。

「……」

「……」

二人は黙つて顔を見合せた。ルナたちも訝しげに顔を見合せる二人を振り返つた。

「あなたたち、何かやらかしたの？」

「やつたといえば、電波変換して戦つたことぐらいだし……」

ねえ、とミソラは隣にふよふよ浮かぶハープに問いかけた。

『ええ、でも……』

「それもばれてねえし……」

ハープの言葉を、ジャックが引き取つた。

『じゃあ、何なんだ？』

『行つてみれば分かるだろ。行こうぜ、ツカサ、スバル』

ジエミーの言葉に、一人は職員室に向けて歩き出した。

朝礼のチャイムが鳴つたころ、スバルとツカサは職員室の前にいた。学校の教室移動距離の中、靴箱から、職員室まではけつこう遠い方にはいる。

とんとん、と念のため軽く扉を叩いてから、スバルは扉を開いた。

『失礼します』

二人がそういうて職員室に入ると、ギクシャクしつつこちらを振り返る、先生たち。

と、その少し奥で手を振つてゐる男性と、落ち着いて座つてゐる少女。

そして、サテラポリスのマークが胸に入つた電波体と、短い杖を手に持つた電波体。

「暁さん、クインティアさん」

『アシッドにヴァルゴ！…どうしてここにいるんだ…？』

スバルとジェミニは畠然として、一人を見つけてるだけで、ツカサとウォーロックが口を開いた。

「二人の様子、見てこいつてヨイリー博士に言われたんだ。あと、事件現場の見返し」

先生たちはサテラポリスがいるので、いささかはらはらしてゐる。恐らく、何かしでかしたのだろうか、という心配だろう。

スバルとツカサは、一人の前に腰を下ろした。

「昨日、現場検証は終わらせたんじゃなかつたんですか？」

ツカサが訊ねると、クインティアが肯定の意を示す。

「ええ、そうなのよ。ただ…」

クインティアの声が、僅かに低くなる。

「…あなた達が戦つた相手、あれはあなた達や、私たちのような電波体との電波変換…というより、ノイズの電波体との電波変換だったのよ」

『ノイズの電波体…？そんなの聞いたことがないぞ』

訝しげにウォーロックは顔をしかめて、ジェミニとヴァルゴを見た。

『俺も知らないな』

『私も右に同じよ』

「だから、もう一度調べて来いとお達しが来たんだ」

「そう言いつつ、シドウは朗らかに笑う。

「まあぶっちゃけ、フィールドワークみたいなもので……端的に言え
ば、仕事サボりみたいなもがふ

「仕事をそんな風に言わない」

がん、と傍にあつたお盆でクインティアが暁の頭を叩いた。「ほん、
とクインティアは咳払いをして、口を開いた。

「ほら、あなたたちも含めてミソラちゃんとジャックも、あの特殊
なノイズに触れたでしょ？」「う

触れた、って言うよりは傍に近寄っていたら、ヒシドウが付け足
す。

そして、その先をシドウが引き取つた。

「その相手とは別に、あの怪物からツカサは怪我、スバルは牙を取
り出したわけだろ。そこの様子見もかねて、授業参観といふこと
で行つて来なさい、ヒヨイリー博士に頼まれたんだ」

「なるほど」

「……授業参観、かあ……」

ふと、スバルは一つ疑問に思つたことが。

「あのー……クインティア先生

「なにかしら、スバルくん」

首を傾げるクインティアに、一番聞きたいことを、訊ねた。

「……ジャック、このこと知つてるんですか？」

「知らないわ。だつて、あの子が行つた後に頼まれたのだから。前
もつて先生から知らされるでしょ？けど」

……それを知つた後のジャックの驚愕ぶりが、うかがい知れ
る気がしたスバルとジョンニーであった。

同時刻、一年B組教室。

「……というわけで、今日はサテラポリスの暁シドウさんと、クイン

ティアさんが…」

頬杖を着いて教室の外を見ていたジャックの耳に、そんな言葉が飛び込んだ。

「……は？」

謎に思いつつ、口を開くより早く、ルナが手を挙げた。

「先生、今サテラポリスって…」

「ああ、なんでも、暁シドウさんとクインティアさん、つて人が授業参観…」

参観、でジャックは絶句し、その先は聞いていなかつた。

対戦とこの名のバトル（前書き）

いつもお話を進み方が違います。

対戦とこのおのバトル

ここにちは、ぼくは星河スバル。

今は学校の授業、五時間目の体育だよ。

…え？ 始まり方が違う？

それはほつといてよ。

だって、こうやって気を紛らわせてないと、心臓に悪いんだ。

…死にたくないから。

↙ ↘ ↙ ↘ ↘ ↗

「やつち行つたぞ、ツカサーーー！」

「おう！ーーーりこやがれーーー！」

「あやあーーー！」

「やるなあ…俺も負けてられないなーーー！」

何故か怪我人のはずのツカサくんも参加してゐるんだよね。いや、あれはヒカルか。まあ、それはどうでもいいや。

そしてぼくは腕を怪我しちゃつてゐるから、見学、といつてクイントティア先生と座つて、男子のドッジボールを見るんだ。女子のほうは男子の応援がしたいってことで、周りに散らばつて男子の応援中。

ちなみに、A組vs・B組の対決だよ。C組vs・D組も他コートでやつてたんだけど、危ないからつて中止になつたんだ。

え？ 何で中止かつて？

それはね、さつきの『死にたくないから』に繋がるんだ。

A組にはジャックとツカサくんが、B組にはゴン太と特別参加の暁さんが出でいるんだけど…

じゃあ、まずはツカサくん…いや、ヒカルとジャックと暁さんが、人にボールを当てたときの話を…とりあえずあれば、当てた、とうより流れ弾なんだけど…ああ、その前にきっかけを話さないといけないよね。

↙ ↘ ↙ ↘ ↘ ↗

ぼくはそのとき、先生の傍の体育館の壁に寄りかかって座つてたんだ。

「スバルくん」

上から声が降ってきて、見上げるとそこにいたのはクインティア先生。

「クインティア先生。もういいんですか？」

「ええ。皆、意外と覚えてすぐびっくりされたわ」

そういうつてクインティア先生は、ぼくの隣に座つた。さつきまでも、コダマ小学校メンバーに囲まれてたんだ。

皆が覚えてたことは…ある意味当然かなあ。

だって、教育実習生、つてことでコダマ小学校に来たとき、弟のジャックも一緒に学校に来たんだから。そのジャックがいまだに一緒に学校に通つてるわけだし、覚えてるかな。

そうして、話している隣で、きっかけとなつた先生の一言が聞こえたんだ。

「…力配分があ…」

A組とB組のメンバー…というより、男子生徒を見てぼそり、と咳いた先生の手元を、暁さんが覗き込んだんだ。

「どうしたんですか？」

「いや… A組とB組で差があるんですよ。牛島は力はあるんですけどすぐ終わつて…その点、この前転校してきたばかりの双葉とジャックは強い上に切り替えも早いんで…大抵はB組圧勝なんですよー…たまには」う、白熱した試合にさせてみたいんですよ

拳を握つて熱く語る先生。

確かに、ツカサくんとジャックは運動が得意だ。一瞬の判断ミスが、命取りになる場所で戦つてるからかな。

ツカサくんについては、先生は生徒資料を見たのかな。そんな先生に、暁さんが朗らかに言つたんだ。

「じゃ、俺がA組に参加しましようか？」

つて。そうしたら、先生が許可を出しちやつたんだ。
先生のジャージ（なかなかサイズが合つのが、なかつたみたい）を着て、暁さんがA組コートに入つたのを確認して。

「それじゃあ、A組対B組、はじめ…！」

キヤーキヤー騒ぐ女子（委員長とミンラちゃんと水倉さんは騒いでなかつたけど）、の声をBGMにして、ピー…、と先生のホイッスルが高らかに鳴つた。

先攻はB組、ジャック。

「いくぜーーー！」

ジャックは全力で、外野にボールを投げた。そのボールの先には、ツカサくん…今考えたら、ツカサくんはそれを取つたあと、ヒカルと変わつてた。

「とれるモノなら、とつてみるーー！」

そういうつて、そのまま勢い良くボールを投げた。そこで暁さんがそのボールをとつて、投げたんだ。

…きつと、ていうか…これが絶対、C組ＶＳ・D組試合中止のきっかけだった気がする。

そのボールが急にそれちゃって。

隣コートで試合をしていた（ここ）では男子Aにしておくね）、男子Aに、そのボールが直撃したんだ。

…それは凄かつたんだ。音と威力が。直撃した男子は氣絶。その上で保健室直行。

先生がA組とB組優先、つてことで、C組D組の試合は中止になつたんだ。

＜＞ ＜＞ ＜＞

それで話を戻すんだけど…

A組B組、それぞれ氣絶…つていうより、ボールが当たつたところが凄く痛いって人たちが、保健室に行つてて。大抵の人はコートの外について。

結果、コートに残つてるのがツカサくん、ジャック、暁さん、凄く奇跡的にキザマロ。

え？キザマロの扱いが酷い？だつて本人の目が、奇跡、つて語つてるんだもん。酷くはないよ。ぼくのせいじゃないから。

それには、この話をしている間に、ツカサく…違つた、ヒカルにボールを当てられたもの。

でも、暁さんがすぐさまジャックにボールを当てちゃつて。

…それを考えたら、現在コートには、ヒカルＶＳ・暁さん、つて状況。ボールはヒカルの手。

「やるね、ツカサくん」

「てめえ！」そ

暁さんは楽しそうに微笑み、ヒカルはにやり、と口端を吊り上げて笑う。

ツカサくんの中身が、ヒカルに変わったことに、暁さんも気づいてるけど、何も言わない辺り、大人だな。

「俺はサテラポリスのエースを自負してるんだ。だから…」

ちら、とこちらを暁さんが見た。すぐさまヒカルに戻しちゃつたけど。ヒカルもこちらを見て、すぐさま暁さんに戻した。

「あの子に頼りっぱなし、頼みます、って訳には行かないだろ？世界中が認めてるヒーローだけだ」

暁さんの、本来なら普通の女の子なんだから、と聞こえない声が聞こえたような気がした。

「それもそうだな。…ま、俺らも一緒に感じだよ。世界を救ったヒーローとはいえ」

もうあいつにばっか、任せて傷つかせたくねえ、とやはり、聞こえない声が聞こえたような気がする。

「…さて、じゃあ、行くぜっ！！」

そういうつてヒカルがボールを構えた瞬間、とてもいいタイミングでチャイムが鳴った。…すべつ、とヒカルと暁さんが転んだ。顔面から行つたけど、大丈夫かな？

とりあえずその後、授業があるから、と先生の合図で、試合は終わつた。

中途半端すぎるって？

仕方ないよ。試合を始めた時間が、暁さんの着替えで思いのほか手間取っちゃって、遅かつたんだから。

選択（前書き）

…パソコンの絶不調もいとこ…

そんな騒動があつたけれど、今日一日は何とか無事に済んだ。
他愛ない話をしながら、途中でそれぞれの岐路に分かれて、最終的にスバルはミソラと共に、家に向かつていた。

「やつぱり、体育大変だつたね…」

「だよね。でも、暁さんも大人気なかつたなー」

てくてく、と歩くスバルたちにやや遅れて、ウォーロックたちがついてくる。しかし、何故か喧嘩をしているような聲音。

『なんですつてーー? ジヤあ、どっちが早くコダマタウン五周できるか、競争しようじやない! ! !』

『望むところだ! ! 負けて吠え面かくなよ! ! 行くぜ! ! !』
え、とスバルとミソラが揃つて振り返ったときには、そこには何もおらず、鞄から急いで取り出したビジライザー越しに空を見上げると、凄まじい勢いで遠ざかつてゆく電波体二つを見た。

「…スバルくん?」

いささかたそがれる様な眼差しになつたスバルに、ミソラが首を傾げて問い合わせた。

「競争しに行つたみたい。理由はわかんないけど…五周しなきや帰つてこないよね…」

「そうだね。先に帰つてようか」

「それがいいね」

頷きあつて、再び二人は歩き出した。

…あまりにも早いウォーロックとハープは、しばらく本人たちの知らない間に、デンパくんたちの間で、『近づいたらテリートされる、ユウレイのような電波体がいる』と、囁かれこととなつた。

「ただいまー」

「ただいまー」

「お帰りなさい、スバル、ミソラちゃん。あら? ロックくんとハープちゃんは?」

ドアの開く音と声を聞きつけて、ぱたぱた、とあかねが出迎えてくれた。

「何でかしらないけどコダマタウン五周していくって」

「あらあら… それはともかく二人とも着替えてらっしゃい」
アカネにそう言われてスニーカーを脱いだ一人は、返事をしてそれぞの部屋にあがつた。

(ミソラがスバルの部屋で起床しているだけであつて、ミソラの部屋はちゃんとあるのだ)

スバルは薄い赤の飾り気なしの七分袖シャツに、膝丈の黒のズボン、ミソラは薄桃色の愛らしいレースの七分袖シャツに、濃い目のピンクのショートパンツで、リビングに戻つた。ちなみにスバルの胸にはいつもどおりのペンダント、頭にはビジライザーがあつた。

「スバルー、お風呂入れて頂戴」

「はーい」

ぱたぱた、とスバルは風呂場へ向かう。

「あの、お母さん私は…」

「じゃあ、夕飯のしたく、手伝つてもらえるかしら? スバルは…ね」

「はい」

本来だつたらスバルに頼むところだつたのだろうが、肝心のスバルは左腕を怪我している。とんとん、と軽やかな包丁の音を聞きながら、スバルは宿題を全て終えた。

しばらくすると大吾も帰ってきて、夕飯が始まった。… まだ、ウオーロックとハープは帰つてこない。
夕飯も大体済みそうになつたときだつた。

「スバル、ミソラちゃん。聞いてほしい話があるんだ。ああ、食べながらで構わないよ」

大吾はそう切り出し、それを聞いて箸を止めそうになつた一人に、言葉を重ねた。とても真剣な眼差しで、食べながらでいいとは言われたものの、箸を止めざるをえない。自然と、全員の食事の手が止まつていた。

しばらく黙つていた大吾は、口を開くなり、話の本題をすぱり、と告げた。

「……近々…ロックマンの正体をばらす」と思つてるんだ」

「…ロックマンの正体を、ばらす？」

スバルは、瞬きを繰り返して、いわれた言葉を復唱した。

「詳しく述べ…ロックマンたちの正体を、世界に向けて発表しようと思つてるんだ」

「どうしてですか？」

ミソラがすぐさま問い合わせ返す。

「…正直、これ以上隠せない」

眉間に皺を寄せた大吾は、言葉を継ぐ。

「ほら、この前学校で騒ぎがあつただろう。あれは、スバルを狙つてきたわけだが…極端に言えばロックマンを狙つてきた、ともいえるわけだ。それでな……」

大吾は立ち上がり、リビングのテレビをつける。

いつもの時間だつたらご長寿バラエティー番組の流れている時間にもかかわらず、今日は特別番組が報道されていた。右端に小さく浮かぶ言葉が、どんな番組なのかを、示していた。

そして、そこに表示されていたのは。

「……『ロックマンは人間の敵か、味方か』…か」

そして、どちらかということを示すグラフには、僅かながら『敵』という答えが上回っていた。

『だつてそうでしょう。ロックマンが現れてから、頻繁に事件が起ころるよくなつたんですよ』

『それに、この前の事件だつてロックマンを狙つてきたみたいだし』

…』

とても自由に並べ立てられる言葉は、胸に重く突き刺さつた。

「…この通り、ロックマンに良い感情を持たない人間だつている」あまり見せたくないようになつてチャンネルを大吾が変えようとした瞬間、怒りの声が響いた。

『それでも、ロックマンに助けられた人だつているんです…！…サテラポリスじゃどうしようもない事件を解決してきたのも、ロックマンなんですよ…！…』

穏やかそうな見た目とは裏腹に、髪を結い上げて綺麗な髪飾りで止めた、女の子が声を荒げていたのだ。

『電波ウイルスはロックマンが現れる前からいました…！…電波ウイルスのせいに起きた現実の事故でも、助けようとしてくれてるんですけど…？…うしなきやいけない、という理由はないとは思わないんですか…！…』

「アイちゃん…」

ミンラは誰かの名前を呟く。スバルが誰なのだろうと思つていると、ミンラは答えをくれた。

『最近芸能界に入ったタレントで、峰倉アイちゃん。最近話したんだけど…芸能界じゃちょっと潔白すぎるかな、って思つちやつたりするくらい、やさしい子だよ』

『…僕とロックが助けに行つた現場に、いたのかな？』

「かもしれないな」

大吾はとりあえずテレビの電源を切る。

「とにかく、これ以上隠していてもビックに必ずぼろが出る再び夕食の席につきながら、大吾の話に耳を傾ける。

「それに、何も知らない人たちがメディアの誤った情報だけでロツクマン…スバルを悪い方向に捉えて、心を傷つけかねない」ミソラは隣にいるスバルの顔をそつと覗き見た。スバルの顔に、表情らしい表情はない。

「人は、顔が見えない相手には、どれだけ傷つこうが無頓着だ。相手が傷ついていることにすら気づかない。ならいつそ正体を明かして、きちんとそうなつた理由を話しさえすればこの問題は多少なりとも、緩和するはずだ。…けれど」

大吾はまっすぐに、スバルに視線を据えた。

「これを世間に告げるかどうかは、スバル、お前が選ぶといい

スバルの顔に、ようやく表情が戻ってくる。驚きの表情だ。

「…え？ ぼ、僕？ ……父さん、ミソラちゃんたちは…」

「お前とミソラちゃん以外には教えてある。全員、承諾を得ている。それに、ミソラちゃんも構わないだろう？」

大吾の目線がスバルから、隣にいたミソラに移った。

「はい。…スバルくんはそんな風に考えてないのに、勝手なこと言われて、私、怒ってるんです」

ミソラの声、というか雰囲気がいつもより冷たい。

「スバルくんを守る方法があるんだったら、私はそっちを選びます」

「ありがとう、ミソラちゃん」

大吾はそういうつて、スバルに視線を戻した。

「判断を急ぐ訳じやないが…早いほうがいいだろ。下手に知られて、全てを壊されるよりは…まだ、こちらから知らせたほうが対処の仕様がある」

大吾の言葉に、スバルは躊躇わざに答えを口にした。

「……僕が正体を話せば、他の皆も傷つかなくてすむんだよね?」

「ああ」

「ロックマンの正体を、世間に話す。皆が傷つかずにすむんだったら、話すよ」

ミソラは内心、やっぱり自分より皆を優先させるんだね、と呟いた。

スバルは出会った当初、大吾が行方不明、という状況に陥つており深く傷ついていた。傷つきたくなくて人とのかかわりを、絆そのものを拒否していた。

けれどスバルは、その傷を乗り越えた。それからは、いつも自分より他人を優先させて、傷ついて。傷ついている人がいたら、まっすぐに向き合つて。

『だから、皆はあなたを守りたいと願うんだよ』と、ミソラは小さく呟いた。

とりあえず夕飯を済ませて、いささかぐつたりと疲労しているウォーロックたちが帰ってきたので、スバルは話を切り出した。

「……あの、父さん、母さん。今からヨイリー博士のところ行って来たいんだけど…駄目かな」

「どうして?」

「えっと……」

あかねの問いかけにスバルが言いよどむ。代わりに、ウォーロックが口を開く。

『俺が頼んだんだよ。スバルのハンター→G、特殊なPGMを組み

込んでるからな。ちょっと前から少し調子が悪いんだ

「なら仕方ないな。ともかく、早く帰つてこいよ」

「うん」

大吾の言葉に頷き、スバルは頷いて部屋に向かつた。棚にしまってあつたもう一組の靴を引っ張り出し、それを履いてハンターV Gを構える。

「じゃあこくよ、ロック！！」

『おう！…』

「トランスクード シューティングスター・ロックマン！！」

スバルの部屋は一瞬光に満たされ、その光が薄れたときにはスバルの姿は部屋になかった。

ウェーブロードを一路、NAXAに向かう途中、スバルはウォーロックとハープがコダマタウン五周をするに至った理由、そして五周にしても帰りが遅かつた理由を訊ねた。

『あー…それはな『電波変換してもあんただち重いのね』って言われたんだよ。ほら、ミソラは電波変換後は音を主体に戦うもんだから体重ねえだろ。電波変換前は重いのに』

「うんうん。…それ、ミソラちゃんのいる前で言つちや駄目だよ。女の子は体重を気にするらしいから」

事実ではあるが、本人がいたら烈火の『ごとく怒り出しそうな気がしたので、スバルはウォーロックに釘を刺した。

そしてそのスバルの言葉に、ウォーロックはすぐさま疑問に思ったことを訊ねた。

『らしいって…お前も女だろ』

「んー…僕は別に言われても平気だから。とりあえず、それで?」

スバルは思つたことを返し、ウォーロックを促した。

『『戦うのに体重は関係ないし、俺らの速さで動きが決まるだろ』って言つたら、あんままで喧嘩からコダマタウン五周をするに至つたつてワケだ』

「…ロック達らしいね、とは言つておくれど…それで、何で遅かつたの?」

『途中でアシッド、コーヴァス、ヴァルゴに会つてな、そのまま全員で競争するに至つたわけだ』

大方説明したら全員参加、といつことになつたのだろうか、とスバルはあながちはずれではないことを考える。

… 実際は『説明をしたらアシッドたちもウォーロックやハープに対

抗心が沸き起つたので、半場無理矢理参加した』だ。

「…ナルホド…それで、結果何周したの?」

スバルが不意に、気になったことを問うと、ウォーロックはしばし考え込み、答えを口にした。

『二十~三十くれえか…?』

「そんなに!~?このコダマタウンを!~?』

『おう。ちなみに俺が勝つたけどな』

嬉しそうに言うウォーロックに良かつたね、とスバルは返答を返す。

『次はジョミニーやオックスも誘つかな~』

気軽なウォーロックの言葉に、スバルは目を瞬かせて、もしかして、と前置きをしてから。

「またやるつもりなの?』

『おう、アシッドたちもなんか燃えてたしよ』

『……』

負けたままで済ませられるメンバーではなかつたことを、スバルは今更ながらに確認したのだった。

＜＞　＜＞　＜＞

自室で今起きている事件のノイズを検査しつつ、何も得られないことに苛立ちながら、ヨイリーは、ふうと息をついて椅子の背もたれに寄りかかった。

何か飲みたくなり、椅子から立ち上がったときだった。

こんこん、と部屋の入り口の扉から音がして、そちらを見た。

『誰かしら?』

『……あのヨイリー博士…スバルです』

躊躇つのような控えめの声が聞こえて、ヨイリーは入ってらっしゃい、

と言った。しゅん、と音を立てて部屋の入り口が開き、予想通りの人物と電波体がいた。

自室の入り口に立っていたのは髪を解いている星河スバルと、そのパートナーであるウイザード、ウォーロックである。

スバルは相変わらず、左腕をつっていた。

「こんばんは、ヨイリー博士」

『 よお』

「こんばんは、スバルちゃん、ウォーロックちゃん。ビジしたの、こんな時間に?』

スバルをとりあえず接客用のソファードに落ち着かせて、ヨイリーは問いかけた。

「あの……他の人たちには黙つてもらえますか?……心配、かけたくないんです」

必死なスバルの瞳から、何かを悟つたらしくヨイリーは頷き、口を開く。

『 ?構わないけれど……その事を知っているのはウォーロックちゃんだけかしら?』

『 ハープが知ってるだけだ。もちろん、あいつには口止めしてある』

ウォーロックの言葉にそう、とヨイリーが返すのを待つて、スバルは袖を捲り上げて包帯を解いた。流石に服を着ているので、首まで解けなかつたが、とりあえず腕に巻かれていた包帯は、全て解いた。ヨイリーは言葉もなく、固まつた。

当然である。その包帯の下にあるべき傷は、一日や二日で癒えるような、しかも痕が残らないような生易しい類の傷ではないのだから。

「今朝起きたときに……包帯が解けて……そうしたら、傷がなくなつてたんです。ヨイリー博士には話しておこうと思つて……」

『ヨイリー、何でか分かるか?』

スバルの状況説明の言葉を、頭の中で整理しながら、ウォーロックの言葉に否定を示す。

「……とりあえず、念のために検査を受けたまいるのかしら? ウォーロックちゃんもついてらっしゃい」

「はい」

『おう』

スバルとウォーロックは頷いて、ヨイリーの後に続いてヨイリーの自室を後にした。

騒動（前書き）

... マイリー博士ってこんなキャラでしたつけ
...
...

スバルは病院で着る検査服に着替え、体内や血液を調べてもらい、結果が出るまでにしばらくかかるとの事だった。

ヨイリーに包帯を巻き直してもらい、私服に袖を通しながら、スバルは息をつく。ウォーロックはなんだかんだで部屋の外に出ている。『…というより最近は、スバルが着替えるときには必ず部屋の外にいる辺り、スバルがいくら無頓着であっても、流石に居心地が悪いのか。

スバルは髪を結い上げて、部屋の外に出る。
腕を組み、壁に寄りかかっていたウォーロックは、スバルが出てくると、ヨイリーから頼まれた伝言を伝えた。

『『着替え終わったら帰つていいい』だとよ』
「うん、ありがとう、ロック。…でも、挨拶はしたいんだけど…一緒に来てくれないかなロック?』

スバルはしばらく考えた後に、ウォーロックに確認、といつよりは同意を求めた。

『…それもそうだな。よし、ヨイリーの研究室に行こうぜ』
「うん」

二人は頷きあつて、ヨイリーの研究室に向かった。

< > < > < >

ヨイリーの研究室は田と鼻の先、といつところに来て。

『…！スバル、どこかに隠れろ…』

ウォーロックは何かに驚いた表情をし、急にそつ言つた。

「へ.どうしたの、ロッ…」

『いいから、どこか…あの部屋の中に隠れる』

黙つてゐる、と田で合図をされて、小さく潜められた声でウオーロックはスバルに一つの部屋…ヨイリーの研究室の隣室を指で示した。

「う、うん…」

有無を言わさない聲音に、スバルはただ頷いて、ヨイリーの部屋の隣にある部屋に入った。扉を閉めて、壁に寄りかかる。

すぐに聞こえてきたのは、ヨイリーの怒声。

「…ヨイリー博士…？」

あのヨイリーが声を荒げるとは、誰が相手なのだろう。

「お帰りください！－！すぐに！－！」

「だから、我々はロックマンが人類の敵であることを証明するために…」

スバルの胸に、その言葉は深々と突き刺さつた。ウォーロックの表情も、とても硬い。

「…」

『…』

スバルは俯いたまま、声も出さずに壁に寄りかかつて、ウォーロックは拳を固めてそれを戦慄かせていた。

そしてヨイリーは言葉を重ねた。

「帰つてくださいといつてゐるでしょう！－！早く帰つて！－！それ以上ふざけたことを言わないで！－！」

「…分かりました」

「…出口はそこです。お帰りくださいませ」

よつやくヨイリーの声から僅かながら怒りのボルテージが下がつた。

スバルはヨイリーの自室から出て、それぞれ思い思ひのことを言つ

人たちの足音が遠ざかるのを待ち、隣室の中へ滑り込もうとした瞬間。

ヒュ、バーン！！

スバルの頬を掠めて、分厚い書類が後ろの壁に当たった。

「…つ！？」

スバルはびっくりしてその場にペタリ、と座り込む。

恐々後ろを振り返ると、後ろの壁に巨大なへこみができていた。

「…あ…じ、ごめんなさいスバルちゃん…怪我はない！？」

物を投げた体勢のヨイリーは、入ってきた人物がスバルだと知るや否や、こちらに駆け寄ってきた。

『大丈夫か、スバル！？』

「だ、大丈夫、け…怪我はないんだけど…ちょっとびっくりしただけ…」

ヨイリーの手に掴まり、スバルは立ち上がる。

「「めんなさい、本当に怪我はない？」

「はい、大丈夫です。…あの…」

スバルがヨイリーの手を離し、言いよどむとヨイリーは首を傾げた。

『さつきの奴らと勘違いしたのか？』

ウォーロックが確信をついたことを言つので、スバルはウォーロック、と焦った表情を見せる。

「…さつき……ああ、テレビ局の人ね？」

そういった瞬間、スバルは左手のひじ上辺りに手を添えて、俯く。

ヨイリーは苦笑しながら、俯いたスバルの顔を覗きこんだ。

「…ごめんなさい、さつきの話、聞いてたんです…」

申し訳なさそうに俯いたスバルの頭を撫でて、ヨイリーは口を開く。

「私は大丈夫よ。…スバルちゃんとウォーロックちゃんは…平気な

の?』

スバルは『へり、とじぐせで、ウォーロックは『おひ』と言葉で、返事を返した。

『…無理だけはしないで、一人とも。あなたたちを大事に思つ人は、確かにいるの。辛いときには、頼りなさい』

「……はい』

『……ああ』

ね、と田で訴えられて、一人は頷く。

ヨイリーは淡く微笑み、スバルの背中を軽く叩いた。

「や、早くお帰りなさい。スバルちゃんは、明日は学校?』

ヨイリーの言葉に、スバルははつ、とした表情になる。

「あ…明日は…学校の社会見学です」

『まあ、遠足、とかとも言ひついがな』

「あらあら。どこに?』

ウォーロックのちやかしにつるせ!』、とこつて、ヨイリーの質問に答えた。

「アマケンです」

『ま、結構行つてつけどなー』

スバルは楽しそうに、ウォーロックはつまらなもそつに答えた。

「ふふ、それじゃあスバルちゃんは明日一日、宇宙関係に漫りつばなしね?』

「はい!…この前擬似宇宙に酸素発生装置が、ちゃんとついたって、天地さんが言つてたので凄く楽しみなんですよ!…』

とても生き生きした表情を見せるスバルに、ヨイリーは微笑んで先ほど言った言葉を繰り返した。

「さあ、早くお帰りなさい。スバルちゃんはねぼすけさんだから、遅刻しちゃうわよ~?』

「あ~ヨイリー博士ひどいー』

『どこがだ。お前俺が大声出さないと起きないだろ』

じまくねうやつて話した後、スバルとウォーロックはNAXAを
後にした。

気持ち（前書き）

今回は、ハーフマラソンを田舗して… 撃沈しちやつた感が満載です。

気持ち

「ロック。展望台によつてくれー！」

帰り道、スバルは突然、ウォーロックに告げた。

しかし、そんなことを急に言われて、納得するウォーロックではない。

『んな…お前、ヨイリーに『帰る』とか『明日はアマケンに行く』とかいつただろ！？それに俺は疲れてんだ！！』

「それはロックがつまんない喧嘩して走り回った結果じゃないか。展望台についたら僕のハンターVGで休んでれば良いよ。最近はずっと星を見れなかつたから、見たくなつちやつて」

ウォーロックはスバルの横に実体化して叫ぶが、スバルはウォーロックの言葉をはねつけて、家への方向ではなく、展望台への方向へ、進路を向けた。

▽▽▽▽▽

電波変換をとくと、スバルの身体が電波世界から弾かれ、とん、と展望台の地面を踏んだ。

髪を風に揺らせて、スバルは空を見上げる。

少しづつ変わり行く星々が、そこにある。

スバルはただ、穏やかな表情で星空を眺めていた。

十分ほどは、流石のウォーロックも邪魔できない空気を感じたらしく、黙っていた。…が、きつかり十分経つと。

『かーつ、良く飽きねえなあ…』

ウォーロックは、頭を搔きながら、本当に面倒そうと言つた。

『お前、良く星空眺めて飽きねえな。星つて動きやしねえだらう

に』

「だつて、飽きるわけないよ。それに星だつて動いてないわけじゃないよ。田々…『うん、誰も気づかないくらい少しずつ動いてく星は、ちょっとずつでも前に進んでるみたいで…勇気をもらえるんだ。ちょっとずつでも良いから、前に進め、って教えてるみたいで…』

ウォーロックの言葉に反論して、スバルは淡い微笑を口の端に乗せる。

「それに……」

『それに?』

スバルはウォーロックを見ながら、言葉を切った。

「……」

けれど、それきりスバルは黙り込んで空を見上げたままだった。

『……けつ、あーあ、つつまんねー…』

ウォーロックは苛立ちつつ、文句を囁く。しかしそれでも、ウォーロックは展望台の手すりに腰掛けて、スバルの天体観測に付き合つのだつた。

R R R R ! ! R R R R R ! !

不意に、スバルのハンターバージンが鳴つた。流石にスバルも、ハンターバージンの通話機能の立てる音に気づく。

「オート電話だ」

『ツカサだぞー。早く出たほうが良いんじゃねえ?』ちゃんとウィザードの仕事をこなし、ウォーロックは電話相手の名前を告げた。

「はい、もしもし」

『あ、こんばんは、スバルくん』

『こんばんは、ツカサくん』

しかし挨拶をして、ツカサは黙り込む。

「ツカサくん、どうしたの？」

スバルが問いかけると、ジヒミーに『はつきりして言えよ』と追い討ちのように言われて、ツカサは小さく深呼吸をすると言葉を切り出した。

『……スバルくん……あの、いきなりで悪いんだけど……展望台にいるつてこと前提で電話して大丈夫……？』

「……うん、展望台にいるから……大丈夫だけど……」

あっさりとスバルの現在地を当てたツカサに、すじこなあ、とスバルは内心で思つた。

『……えっと、テレビ見たかな……？その……』

「……ああ、うん。ロックマンが味方が敵か、でしょ？」

スバルのあくまで朗らかさを保つた声に、ツカサは内心で、感情を抑えてるんだろうな、と思つた。

「……僕なら平気、だよ。ロックは平氣かどうか知らないけど……」

そういうつてスバルは、ウォーロックを見る。

『俺はあんな奴らになんていわれよーが、関係ねえよ。関係あるのは、……お前や大吾たち、俺らのことを認知してるやつら位だ』

ウォーロックは肩をすくめ、鮮やかなまでに、ウォーロックは関係ない、と言い切つた。

しかし途中で喋るのを一瞬だけやめて、何かに気づいたような瞳でウェーブロードに視線を走らせたことに、スバルは気づかなかつた。

「……ロックも大丈夫みたいだよ」

スバルは一応聞こえているとは分かつていても、そう言つた。

『じゃあもう一回聞いて良い?』

ツカサの質問の意味が分からなかつたが、とりあえずスバルはうん、と頷く。

『……スバルくんは、大丈夫?』

「……え?」

スバルは目を瞬かせて、反応がやや遅れる。

「……あ……ツカサくん、僕は大丈夫だよ」

スバルは力説するかのように、展望台の手すりに置いた手に、力をこめた。

「本当に?」

すずやかな声が聞こえた。

スバルが振り返るより早く、スバルの手の上に肩越しに、手が重ねられていた。

冷たいような、あつたかいような不思議なぬくもり。

ひんやりとしているけれど、それは突き放すような冷たさではなく、あつたかいけれど、傷つけられるような熱さではない。

「……ツカサ、くん……?」

「こんばんは、スバルくん。……って、これさつきも言つたね」

苦笑するツカサは手をそのままに、スバルの隣に立つた。

「……どうして、ここに……?」

「……なんとなく、かな?スバルくんが、泣いてる気がして……」

スバルは『泣いている?』と鸚鵡返しにそう言つて、ぱちぱち、と目を瞬かせた。

途端。

ツウ……と、類を伝つて、ぱたり、と手の甲に落ちたそれは冷たい雪。けれど、空は満点の星で雨雲なんてものは、一つも見当たらない。

だとしたら。

「……やつぱり、泣いてたんだね」

「…………え……あ…………泣いて……な…………」

……そういつてくれるツカサに、安心したのかもしね。だから、自覚もなしに涙が溢れたのかもしね。

「ないて……な……」

ふわり、と柔らかい匂いに包まれる。ついでとくら、と安心できる音が、耳に聞こえた。

抱きしめられたのだと、不意に気づいた。

……熱いものが、田の奥からこみ上げてくる。

「…………つぐ…………ふえ…………」

スバルは、ツカサの胸に顔を埋めて、涙を流した。

ツカサは、労わるように腕の中にいるスバルを抱きしめる。

「ホントウは…………そんな風に…………思われてたって…………思わなかつた…………」

そんな思いは関係ない、ただただ、大事な人を守りたいと、願つて戦っていた。けれど、そんな風に思われていたとは、思つていなかつた。

……皆にとって、人を傷つける『敵』、と思われていたことなんて。

頼りない肩を抱きしめたツカサは、ただ、抱きしめていた。今のスバルには、言葉ではなく、安心できる何かが必要だと思ったツカサは、ただ、抱きしめて、『大丈夫だよ』、と伝えるようにその額に、口づけた。

ふわり、と風が、二人の髪を、揺らして去つていった。

気が済むまで泣いたスバルは、ぐいっ、と涙を拭つて、ツカサから離れた。

「……も、平氣……」

目元が泣いていたせいで結構酷い状態だ。
ありがとひ、ヒツカサに言つと、す、ヒツカサはスバルに手を差し出す。

「？」

その意味が分からず、スバルはツカサを見上げた。

「……順番、ぐちやぐちやになっちゃったけど……」

そういうて、穏やかに微笑むツカサは、スバルに告げた。

「……僕と…ブラザーになつてくれませんか?」

そういうて、いつたん区切り、言葉を継げた。

「…離れてても、心は一緒だつて、目に見える証を、君に」

「……いい、の？」

スバルが躊躇いがちに問いかけると、ツカサはこくり、と頷いた。

「…僕は君を信じてるよ。…君が繋いだ絆を切るはずがないって。
それには、僕の秘密を最初に知つたの、スバルくんなんだから。…
責任とつて、ブラザーになつてね?」

スバルの気が少しでも明るくなれば、という意味をこめての明るい
口調に、スバルは満面の笑みで、頷いた。

「……うん」

そうして二人は手を繋いで、空を見上げた。

…しかし、そんな時間は長くは続かず。

「…そういえば、ロックは?」

ふいに芽生えたらしい、スバルの素朴な疑問に、ああそれはね、と
ツカサは口を開き。

▽▽▽▽▽

『だーつ……離せ、ジユミー……』

『KYのお前を放したら、いい雰囲気がめちゃくちゃになる。却下
だつての』

展望台からやや離れたウーブロードを、一いつの電波体は歩いてい
た。

『誰がKYだ！？』

ウォーロックの怒りを流しながら、ジユミーはささり、と返答する。

『お前以外ない。つたぐ、スバルは苦労するな……』

……以前はウォーロックの敵……ひいては世界の敵だつたというのに、
現在はなにやら周りの妨害を阻止して、スバルとツカサ、一人の恋
愛を取り持つことに必死なジユミーであつた。

それからしばらくして騒がしく展望台に戻つたウォーロックとジユ
ミーは、スバルとツカサと電波変換して、それぞれの家路の帰途に
ついた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙

とん、とスバルのつま先は、家のベランダを踏んだ。
靴を脱ぎ、窓を開けて部屋に入ると既に、ミソラがスバルのベッド
で寝ていた。

「……待つてくれたのかな？」

『じゃねえの？』

ロックと顔を見合させて、遅めの入浴を済ませるべく、階下に降り
ていった。

邂逅（前書き）

今回はあのキャラたちの登場です

人の身では立てない、不可視の道に、一つの人影があつた。二人が見下ろすのは、いまだ月に見下ろされた町だった。

眠りについた場所もあれば、いまだ騒がしい場所もある。

「……またこの世界か」

面倒そうに、少年は眉間に皺を寄せて剣を肩に担ぐ。

「そんな事いわないっ！－ほら、行こうよ！－」

楽しそうに笑う、銃を腰に下げた…いや、いささか胸の辺りに柔らかい曲線があるあたり、少女だ。見た目が少年のようで、少年だと誤解されやすい。

とにかく、その少女に腕を引かれて、少年は黒いコートを翻して歩き出した。

「それに、今度は僕らから会いに行こうよ、サバター！」

楽しそうな声が、夢で聞こえた気がして、ぱちり、と目を開けたスバルはやはり右腕に重みを感じた。

『あら、起きた』

『起こしそうかと思つてたのによ』

上から覗き込むのは、ウォーロックと、ハープ。

「…おはよう、ロック、ハープ…」

そもそもぞ動いてから、スバルは身体を起しそうとして、昨日同様後ろに倒れこんだ。

ふわり、と遅れて自身の髪が、肩にかかると、スバルは口を開いた。

「…ねえ、ハープ」

『何かしら、スバル?』

天井を見つめながら、ベッドの端にウォーロックと一緒に浮かんでいるであろう、こと座のFM星人の名前を呼んで、スバルは言つたことを、言つた。

「...ミソラちゃん、自分の部屋あるのに...なんで、僕のところ」

『スバルの傍が居心地いいんじやないかしら?』

「そうなの?」

首をめぐらせて、ハープを視界に捕らえる。ハープは淡く微笑んで、言葉を繋げた。

『一人、つてモノは寂しいものなの。あなたも知つているんじやないのかしら?』

「.....そうだね」

父さんがいなくなつたとき、母さんがいたから、一人ではなかつた。けれど、心は酷く寂しかつた。

大事な人を失うことほど、心が寂しくなるものはそうそうないだろう。

「.....ってじやあ...何で僕は腕を抱きしめられてるの?」

『ミソラ、一人暮らしのときは抱き枕を抱いて寝てたから...多分、その癖ね』

そして、スバルが動けない理由を訊ねると、癖の一言で済まされたのだった。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

そして。

「天地研究所へ、ようこそ!...」

天地研究所...通称、アマケン。

そこ所長である天地守の声に迎えられて、「ダマ中学一年一同は、

社会見学と遠足を兼ね、天地研究所の玄関脇に「クラス」とに集まつて、座つていた。

「今から入場券を配ります。一人一枚ずつ… つと、スバルくんとルナくん、ゴン太くんとキザマロくんは以前に渡したバスは持つてきてるかい？」

それぞれバスを上に持ち上げて天地に見せる。

「なら… スバルくんたちは入場券を取らなくても大丈夫だよ」
スバルやルナは、天地に特別にバスをもらつてゐるので、他の皆のように入場券は配られなかつた。後ろに並ぶ女子は、入場券を受け取るさいに、こういつた。

「何度もここには来てるんだね、スバルちゃんたちって」「うん」

頷いて、スバルは前を向く。実際何度もここに来たのは事実だ。中の中の展示物を見に来たのが、理由でないときもあつたが。

「では、中にどうぞ」

天地の声で、一同は建物の中に入った。

そのとき上のほうで、会話が交わされていた。

「ねえねえ、サバタ。スバルくんたち、ここにいるかな？」
楽しそうに不可視の道を歩く少年は、後ろを歩く少年… サバタを振り返る。

「知らん。そもそもなんでここに来ようと思つたんだお前は」
サバタの問いに、前を歩く少年は立ち止まり首を傾げて、一言。

「……勘…？」

「何故そこでハテナがつく!？」

パタパタ赤い翼を羽ばたかせていた猫に、少年は手で頬を叩かれる。

ふに、とずいぶん愛らしい音がした。

「まあ…ジャンゴの勘を信じよう」

なだめるかのように、ひまわりに似たしゃべる生き物は、そういうまとめたのだった。あながち少年…ジャンゴの勘は全く外れていなかつたと、後々分かる一同であつた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

それぞれ思い思に説明文を読みながら、展示物を眺めてゆく。

あるものは真面目に文をまとめる。

あるものは友達と談笑しつつ。

あるものはブラックホールに見入る。

あるものは隕石に見入る。

スバルはツカサと一緒に、展示物を見ていた。ちなみに後ろから、ミソラとケープがついてくる。

しかし、二人ともそれには気づかない。…いや、ツカサは気づいているが、何も言わないの間違いだった。

「スバルくん楽しそうだね」

まっすぐに星の展示を眺めていたスバルに、ツカサは声をかけた。こちらを振りかえったスバルの頬は、やや紅潮していた。とても楽しいのだろう。目も生き生きしている。

「うん…! ブラックホールとか…久々に見たんだけど凄いなーって思つて」

最近までウイルス相手で済んでたんだけど、と呴いて。

「そんな暇がちょっと、あんまり取れなかつたから…」

そういうつてスバルは苦笑する。

ツカサもふふ、と楽しそうに微笑む。

「そうだね。じゃあ、ゆっくり見て回ろう?」

スバルはこくり、ヒツカサの言葉に頷いて、再び歩き出した。

ちなみにその際、後ろにいた一人はツカサに目で『ついてこないでね』と、告げられてそこに立ちすくむ羽田になつた。理由は至極簡単。

……表情はとてもにこにこしていたが、穢やかそうに見える『目』だけが、『ついてこないでね』と告げている『目』だけが、笑つておらず、氷点下を下回る冷たさであった。

そして、その視線を送られた二人はといつと。

「…ねえ、ケープくん」

「はい、何でしょうか?」

ミソラは隣に立っている少年に、名前を呼びかける。

「……置いてかれたらし…一緒に回りうか」

「……それもそうですね」

二人は頷きあつて、スバルヒツカサが消えた方向ではなく、別の方に向へ歩き出した。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

「うつわあー、す」「!…!…」

「こりゃ、落ち着けジャンゴ」

ハイテンションでスバルたちが眺めている展示物を、見下ろすジャンゴを、ひまわりのような生き物がなだめる。鼻の辺りといふか、口の辺りといふか、とにかく、そこら辺がタツノオトシゴのようである。

後ろでサバタと、羽根の生えた猫があきれるように見守っていた。

「だつて、オテンゴ!! スバルくんたちの世界つてこんなにすごい

ものがいつぱいあるんだね……とにかく、スバルくんはビートルのかな？」

ひまわりにオテンゴ、と呼んだジャンゴはぴょんぴょん飛び跳ねる。スバルはジャンゴたちのすぐ下にいるのだが、普段のスバルの姿など知る由ないので、気が付いていない。

あきれたようにサバタはため息をついて、ブラックホールが生み出されている装置の方へ顔を背ける。

「めんどくせそうだな、サバタ」

にやにやと楽しそうに、翼のある黒猫はサバタを覗き込む。

「……お前は楽しそうだな、ネロ」

「まあね。俺らはこの前、ついでこれなかつたし。しかし、本当にすごい技術だな……」

そういうつてサバタの肩にトン、とのつた翼のある黒猫、ネロは辺りを見回した。

「それに俺らみたいにパートナーがいるみたいだな」

ネロの言つとおりである。ここにいる一同の後ろや隣に、ふわふわといろいろなものが浮かんでいた。動物の形をしたものが多い。

そして、会話を途切れさせたサバタたちは、ジャンゴたちの会話を聞くともなしに聞いていた。

「それについては同意だが……そんなにはしゃいだら落ち……」

そんな声を背中に聞いていたサバタの耳に、ずる、といやな音が聞こえた。

「うわあ……」

「ジャンゴ……」

オテンゴの声に、ぱつ、とサバタとネロが振り返ると、ジャンゴが眼下の少女に向けて落ちていってくれた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

つまらなさそうに後ろをふわふわ浮かんでいたウォーロックは、急にぱつ、と顔を上げた。

『……スバルあぶねえ……』

「え？ うわあつ……」

ウォーロックの叫び声はやや遅く、星のことメモにまとめていたスバルは顔を上げると同時に、背中に衝撃を感じて前に倒れた。

「スバルくん……」

ツカサが驚いてスバルを見下ろす。

「あいつてて……」

「いたたた……いつたい何が落ちて……」

来た、とまではスバルは言い切れなかつた。上に乗つている人影を見て、しばらく言葉を失つたからである。

つんつんした髪にワーグル。腰に布を巻いて、それをベルトで絞めて、だぼつ、としたズボンをはいていた。顔立ちはかわいい、といわれる感じで、頬にはそれぞれ白の絆創膏を張つていた。上に一枚だけ着ているノースリーブの胸の辺りが、ふつくらと柔らかい曲線を微妙に描いてるので女の子に違ひないだろう。そして、首にはかなり目立つ赤のマフラー。

「……ジャンゴ……くん？」

ちや、と音がしてスバルが少女に声をかけると、強かに打つたらしい鼻を押されて、スバルを見た。

「え？ 君誰？」

スバルをじー、と見るも、ジャンゴは首をひねるのみ。

「あ、そつか、こっちの姿は知らないんだつけ……ロックだったらわか、る……」

ウォーロックを見上げようとあたりに視線を滑らせて、辺りに目線が行つた。

辺りを見回してようやく氣がつく。

全員がこちらを凝視したまま固まっている。ツカサも畠然、とこちらを見下ろしている。

さらに追い討ちのようだ。

「大丈夫か、ジャンゴ！？」

わつ、とひまわりのような生き物と、羽根の生えた猫と共に、巨大な剣を携えた、長いコートを翻し、黒に赤のラインが走った服を着た、左目に眼帯をつけた薄紫色の髪の少年が、とん、と軽やかに降り立つた。

「つたぐじだなー」

「むー」

頬を膨らませて、ジャンゴはすねたような表情をする。

スバルは『うわああああああああ』と、それはもう内心で、声にならない叫びを上げていた。

悪化した、サバタとオテンゴとネロが来て、確実に悪化した、と。この世界で『ボクらの太陽』というアニメを知らない人は、ヤシブデパートに巨大なポスターがどん、と張つてあるくらいなのだから、まずいないだろう。

とりあえず、誰かが騒ぎ出す前に、と。

「ジャンゴ、サバタ、こっちー！」

そういうて出口に駆け出し、ジャンゴとサバタの間をすり抜けるついで、天地に叫ぶ。

「天地さん、研究室借りますー！」

「はい！！」

スバルの勢いに押され、天地が返事を返すよりも早く、スバルはジヤンゴたちと共に姿を消していた。

番外編01（前書き）

今回は本編をお休みします。

『Thanks 10000Hit!!!』

星河スバル（以下・ス）「ここにちはーーー！今回は本編をお休みして、10000Hit、つてことで話を進めるのは『流星のロックマン』主人公こと、星河スバルとーーー！」

ロックマンエグゼ（以下・E）「はじめましてーーー。『ロックマンエグゼ』主人公のパートナー、ロックマンエグゼです」

ス「…何でロックマンエグゼが出てきてるの？」

E「『太陽の姫』作者・月峰タこと作者がね、なにやら『DSジャンゴ達出したんだし、ロックマンエグゼ達だそつかなあ…？』

とか、軽くふざけたようなこと抜かしてて。本人としてはほんとこ出す氣らしいんだ」

ス「何その軽いノリー！」

E「とりあえず、多分二章になつてかららしいんだ。…それぐらいになるか、つてのが不明なんだけど。でも、10000行ったからとりあえずゲスト、つてことだらじいよ」

ス「え？じゃあ、もし出番きたら今戦つてる相手と一緒に戦つてくれるの？」

E「じうだい！…。そこまで行くにしたって、作者の気分&

作者の現状況&パソコンの状況で決まるみたいだし

E「あー…パソコンがかなりやばいんだつけ。一分も立たないうちにネットが繋がなくなったりとか…書いてる途中で画面がやばくなったりだと…確かに、画面左半分が白くなったり黒くなったり…」

E「文章は別のパソコンで書いてるから、文章に関しては、被害はないんだけど…」

S「…けど?」

E「…使つてゐるCBメモリも相当接続が悪くて…かといって他のメモリでやろうとしたら…そのメモリの方が危ないっていう…」

S「…何それ!…?ていうか、素直に新しいの買おうよーーー!」

E「…買いに行きたいのはやまやまらしいんだけど…でもね、作者が住んでるの…富崎県の…かなり口蹄疫被害が酷い地区なんだ」

S「…やうだね…確かに買いにいけないや…」

E「富崎市方面は学校以外では全く…隣町の電気ショッピとか行けないんだって。しかも近所の方々全てが畜産業だから余計に。あと、近くに住んでる親戚が」

S「…やびしいとか呟いてたの、そういう理由だったんだ…」

E「うん、行きがけに親戚の繁殖牛農家さん(せりに出すため、子牛が生まれてからしばらく、子牛を育てる農家さん)の、小屋の前通るんだけど、何もいなくなっちゃったからね……ショックで泣

いたみたい

ス「……そなんだ…」

E「うん。幼稚園行く前から、そこにいるのが当たり前だったから…つて。しかも今回…産まってきた子牛の名前…女の子ね。…とりあえずどっちの性別が産まれても大丈夫なように『ヒカリ』、つて頼まれて付けたんだけど…その後すぐ…その牛小屋で出ちゃって…辛いから…結局一回も見なかつたつて」

ス「天国で元氣にしてるといいね、ヒカリちゃん。お母さんと一緒に」

E「そうだね。それはともかくも…いや、そうしちゃいけないだけどさ、絶対スルーしちゃいけない問題なんだけど…きりがなくなりそうだし…話を戻そっよ」

ス「…………とりあえず、パソコンも、ネットも、メモリの調子も絶不調なのは分かった。……となると…最終手段で…時代錯誤かもしないフロッピー…出できそうな勢いがするのは氣のせい?」

E「何で分かつたの!?」

ス「嘘、本当にそれしかないの!?」

E「…………うん、ほんとにそれしかないと…まあ、本当にダメだつたら携帯でちまちまやつてくつて」

ス「…良くやつてこれたよね、これで…」

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

ス「…とまあ、暗い話はこれくらいにして…」ていうか、する…て
いうが、させて…お願いだから…せめてこのお話の中では忘れ
させて…！」

E「さうだよね、せつかくの10000円。投稿はじめてそ
んなに時間経つてないのに…暗い話だけだと、この小説を見てくれ
てる人に失礼だよ…！」

ス「…よし、じゃあ、本題を言おうよ、ロックマン」

E「うん…！」

ス・E「せーの…！」

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

ス「公式じゃ男の子、って僕を女の子にして、ツカサくんと両思い
になる、という設定上…見られなくてもいいから書きたい、って思
つたらしいんだけど…これだけのヒートは、ひとえに皆さんのおか
げです」

E「僕ら『一百年前組』」と、『ロックマンエグゼ』一同の出番は、
まだまだ先になるみたいだけど、それでもできれば呆れずお付き合
いください」

ス「あ、言い忘れるところだった。…えーと、僕が主人公を勤める
『流星のロックマン』、『ラザーバンドでかかわりのあつた『ボク
らの太陽DS』みたいに、『ロックマンエグゼ』の主人公を女の子

にはしません」

E「流石にあの口調でやれ、って言われも無理だそうです。一人称が『俺』だから」

ス「DSジャンゴは攻略本で、『ジャンゴは可愛いから』本当は女の子』説がささやかれていて、『かいないとか」と書かれていたことと、一人称が『僕』だったから何とかやれただけです」「

E「そんなこんなで、拙い文章、幼稚な表現でありながらも、始めたこの小説ですが……」

ス「完結まで、お付き合いよろしくお願ひします！！」

『Thanks you 10000 Hit!!』

月峰 タ

再会理由と緊急事態（前書き）

…話が今回、かなりわかりにくいくらいかもです。

再会理由と緊急事態

ジャン「」とサバタの手を器用に右手で掴み走つてゆく、スバルの背中を、啞然と見送つていた一同だつたが。

「……今のつて…」

ルナがぼそり、と呟いた。

「……」

「……」

きつかり、三拍黙つた後、盛大に。

「きやあああああああああああああつ！…」

「つおおおおおおおおおおおおおおおつ！…」

楽しそうな悲鳴を上げて、男女関係なしにその背中を追いかけた。

そして、追つかけてくる一同が追いつくよりも早く、スバルは職員用通路に滑り込み、社員章をエレベーターのボタンの少し下の位置の、カードリーダーに通し、エレベーターが開くのを待ち飛び乗つて。

「待つてスバルくん！！」

そう叫ぶツカサが扉が閉まる寸前に、エレベーターの中に滑り込み、完全に扉が閉まると同時に、バシン、と何かがぶつかる音がした。ツカサは床に倒れて、息をついていた。

動き出すエレベーターの中で、しばらく無言で黙つていた一同だが。

「…はあ～」

するすると、スバルは床にへたり込んだ。

「大丈夫、スバルくん？」

「た、多分……ロックマンになつて戦うときよりも、疲れた感じは

あるけど……

立ち上がったツカサの手を借りて、スバルはふらふら立ち上がる。

「…それで、お前たちは誰だ？」

腕を組んだサバタは、不機嫌そうにこちらを睨み言った。

「本来のこの姿は一人とも知らないから仕方ないけど… もうひとつ
の姿のとき、ライマーって言う敵相手に、一緒に戦ったよね」
スバルはそういうて柔らかく微笑み、ニュースメールに添付されて
きたロックマンの姿を、ハンターVGに映してジャンゴに見せた。

「…え？ ジャあ、今のもスバルくんで、これもスバルくん？」
… いやさかジャンゴの言葉は、要領を得なかつたが、何が言いたい
かだけは分かつた。

「うん。この姿のときは星河スバル。こっちの姿は、シユーティン
グスター・ロックマンだよ。あつ、それでね、こっちは双葉ツカサ
くん。僕と同じ力を持つてるんだ」

ツカサは話をふられて、柔らかい笑みを浮かべたまま、
「はじめまして、僕は双葉ツカサ。スバルくんと同じでもう一つの
姿を持つてるんだ。そのときはジヒミニ・スペークって名前だよ」

「はじめまして、ツカサくん！」

ジャンゴも、ツカサと同じように楽しそうに笑う。

「それにしても……一つの名前かあー。なんかかつこいいかも！！」

「しかし、間違えそうではあるな…」

「確かに。面倒くさいと思うぞ」

そういうつたジャンゴの声に返答を返し、ひょいん、とひまわりの生き物と、翼の生えた黒猫が顔を覗かせた。

「うわっ！ びっくりしたー… 一人のウイザード！？」

「う…う…ヤード?」

スバルはようやく、その不思議な生き物がいたことを思い出し、スバルの言つた『ウイザード』の言葉に、ジャンゴは首を傾げて何それ、と訊ねる。

「僕らのパートナーで、電波体のことかな。僕のパートナーは今、隣にいるウォーロックだよ。ツカサくんはジエミー」

『よろしくな、ジャンゴ、サバタ』

『よろしく、ジャンゴ、サバタ』

「よろしくね、ウォーロック、ジエミー」

ジャンゴだけウォーロックヒジエミーの、挨拶に返事を返して、今度は自分達の傍にいるパートナーについて口を開く。

「パートナーはあつてるけど、オテンコたちは星靈獸だよ」

「星靈獸?」

今度はスバルが首を傾げる番だった。

「僕らの住む、星のあらゆる自然の意思が、具現化した精靈の事。オテンコはボクのパートナーで、光の星靈獸。ネロはサバタのパートナーで、闇の星靈獸だよ」

スバルはその話を頭の中で纏めようとしながら、

チン。

「…あ、ついた」

やけに軽やかな音を立てて、エレベーターが開いた。

「二人と…オテンコとネロもついてきて」

スバルとツカサはエレベーターの外を確認し、歩き出す。そして、

ジャンゴとサバタ、オテンコとネロを手招く。

「うん…」

ジャンゴとツカサはスバルの隣に並んで歩きながら頷き、サバタはやや遅れるようにしてついてきた。ウォーロックヒジエミーは、ス

バルのやや後ろ、オテンコはジャンゴの横、ネロはサバタの肩、とそれぞれきちんとついてくる。

入り組んだ廊下を歩いて、途中職員の人とすれ違う、そのたびにぎょつ、とした表情で見られたが、しばらくして目的である、天地の研究室にたどり着いた。

「…うん、ここだ。皆、中に入つて」

ツカサ、ジエミー、ジャンゴ、オテンコ、サバタ、ネロ、スバル、ウォーロックという順番に部屋に入り、自動ドアが閉まる。

天地の研究室には巨大なロケットが置いてあり、やはり巨大なモニターがあつた。

「…うわあ、機械がいっぱい色々あるなあ…」

ジャンゴは物珍しげに、辺りを見回した。

「あ、椅子はともかくもそれ以外には絶対触らないでね。壊されたら責任が持てないから」

椅子を人数分（ウォーロックとジエミーは除外）、ツカサと共に引つ張つてきながら、ロケットに手を伸ばしかけたジャンゴに、そういった。

「だそうだ、あきらめるジャンゴ」

「…どうせすぐ物を壊しちゃうよーだー！」

サバタが釘を刺すように言つと、すねたようにジャンゴはそっぽを向いた。

スバルは苦笑しながら、椅子を一人の目の前に置く。

「二人とも、座つたら？ あ、はいツカサくん」

「ありがとう、スバルくん」

端から一人分の椅子を引っ張つてきて、ツカサに渡し、スバルも椅子に座つて。

スバルとジャンゴが、ツカサとサバタが、向かい合つような形で座っていた。

ちなみにスバルとツカサ、ジャンゴとサバタが隣同士である。

それから少し離れた位置に椅子を引っ張つてある、オテンゴとネロ、ウォーロックとジョンニは、気楽そうにしていた。

しばらくそのまま黙つていたが。

「…それで、どうして一人ともまたこの世界に？」

スバルがとりあえず、話を切り出した。

「あー、それがね……」

困つたように、ジャンゴは苦笑する。かわりに、サバタの眉間に盛大に皺がよつた。

「理由を話すと、」「うなんだ……」

そういつたジャンゴは、苦笑していた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙

確かに、ことの始まりはお皿ご飯を取つていたとき、そのときに持ちかけられた話。

「…『太陽のかけら』?」

もぐもぐとマスターお手製のおいしいサンドイッチを、頬張るジャンゴの横で、サバタが顔をしかめて繰り返した。

その言葉を繰り返された相手の頭には、おつきなみさみみ。

「そや、『太陽のかけら』や」

に、と楽しそうに笑う相手の言葉は関西弁。

「『太陽のかけら』とは、何だ」

サバタが、余計なことを聞いて話を止めないよう、「…」と心がけてでもいるかのように、言葉少なめである。…いつも言葉は少ないが、いつも以上な気がしてならない。

「ウチらひまわり娘の、『宝物、みたいな感じやなあ』

「…」とサンドイッチの一つ田を食べ終え、「…」と手に持つたところで、ジャンゴがサバタの肩越しに、話を持ちかけた相手を、嫌な予感を感じながら、見た。

サバタも、嫌な予感を感じているらしく、口を開けない模様。

傍をふよふよ浮かびつつ、移動していたオテン口も、カウンターに置かれた平皿の中に、注がれたミルクを飲んでいたネ口も、ぴたり、とその動作をとめていた。

けれど、誰かが口を開かねば、話はまったく進まない、というその状況の中で、時間だけが確実に流れていきそうになつたところで。

「…それがどうしたの、アリス？」

「…ジャンゴが、やつと口を開くのだった。

そうして、『アリス』と呼ばれた、頭につきみみをつけた少女は、本当に楽しそうに笑った。

「つまりあんたら、ちょっと異世界に行つてきい、といつこいつちや」「…ものすごく、簡単に言われた。中身はかなりぶつ飛んだ内容だが。それでも、『異世界』を否定しない一人は、一年ほど前に行つたことがある。

「あ、善は急げ、つてことで今から準備するかい、いつてほ
しいんや。あ、お礼はちやんとするんで。それまでちやんと準備し
とこへやー」

「え? え?」

「ちょっと待て、アリス」

「一つ皿のサンディッシュを持ったまま、硬直するジャンゴの横で、ネ
ロが急いで名前を呼ぶが、ひまわり娘こと、アリスは既に姿を消し
ていた。

▽ ▷ ▷ ▷ ▷ ▷

「……ってワケで、夕方ぐらじてひばり送られたんだ。問答無用で

「……」

ツカサとスバル、ウォーロックビジョ!! は同時に思った。

アリスト人…中々話を聞きやあしないんだ、ヒ。しかし、うそみ
みつてなに?

…しかし、そんなことを考へてる時ではなく、ジャンゴの話の続きを
を聞いた。サバタは腕を組んで俯いていた。

「でもこっちじゃ夜中だったから、『太陽のかけら』探しは後回し。
それでね、この世界見覚えあるなーって思つてたら、スバルくんの
いる世界だな、って。だから、とりあえずスバルくんに、会いに行
こうかと思つてここに来たんだ」

「…しかし、ジャンゴの勘、当たりだな…」

なにげにスバルたちの話を聞いていた、オテンゴがぼそり、と呟い
たそれは、誰にも届かなかつたが、サバタとネロも同意見であつた。

そして、さよとん、としているスバルの顔を見て、ジャン『門は言葉を繋いだ。

「あの…迷惑…だつたかな？」

「え？あ、全然！…むしろあえて嬉しいぐらー……嬉しいぐらーなんだけど…なんで上から降ってきたの？」

上から降つてくる、それは、誰もが気になるところ。

「…見たことないものばかりだから、はしゃぎすぎてウーブロードから足を滑らせたんだよ」

横の方から、毛づくろいをしているネロから説明が入った。

「へ、へえ…」

スバルはなんと返していいやら分からずに、いたとか投げやりすぎる返答を返した。

「ところでジャンゴくん、『太陽のかけら』っていうのは、なんなの？」

『あ、俺も気になつてた』

ツカサが逸れていた話題を自然に修正すると、ジョニーもそれに乗つてきた。

「うん、あの後説明を聞いたらね。『太陽のお姫様』に渡さなきゃいけない大事なものだつて」

「…！」

『…？』

スバルとツカサの顔が自然と強張る。

ウォーロックとジョニーもそれを顔に出さないだけで、反応は同じである。

「『ソルライト・ルナ』、って名前の石、って言つてたけど」
グローブに包まれた指先で、頬に指を当てる名前を記憶から手繰つ

たジャンゴは、そう言つた。

けれど、それスバルとツカサ、二人とも聞いてなかつた。

「……それで、お前たちはそれを知つてゐるのか」

腕と足を組んで座つていたサバタは、眼帯に隠された左目からも怖い雰囲気がじみ出る、鋭い眼差しをこちらに向けた。

「え？ スバルくんたち、『ソルライト・ルナ』知つてゐのー？」

「ううん、全然。だけど……」

ジャンゴの期待にこたえられないことに申し訳なく思いつつ、スバルは否」と返した。

その先はツカサが言葉を続けた。

「……ただ…スバルくん、ここしばらく『太陽の姫』つてことで襲撃を受けてるんだ。詳しい訳は知らないんだけど…必要なんだって」ツカサの言葉を聞きながら、携帯を引っ張り出したサバタは、急にどこかへかけた。

「…ああ、アリスか。『太陽の姫』らしき人物を見つけた。何か特徴は？」

何か言葉を交わしていたサバタだが、不意に、スバルへ近寄ると、スバルの胸の赤いリボンが解いて、がば、と白のブラウスが開いた。

白い胸當てに包まれた目に鮮やかな真っ白な肌の胸元が、露出する。しかしそれを気にせずに、目的のものを見つけたようで軽く嘆息し、アリスに報告しようとして

「…アリ…」

「……つ、きやああああああああああああああああ！」

…女の子の悲鳴がアマケンに響き渡つた後、鋭い平手の音が聞こえた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

「……サバタサバタ。僕は宿で一緒に、慣れてるからいいよ。けどね、スバルくんにはいくらなんでも暴挙すぎるよ」
ジャンゴは、頬に平手の痕が残ったサバタに、呆れたようにそう言った。

隣でオテンコが盛大に何度も頷き、ネロは大爆笑していた。

あの後すぐ、サバタへ蹴りをかましてくれた、ツカサ（中はヒカル）にすぐさま抱きついて、ぐずつた。その後にその声を聞きつけてくれた天地とミソラが部屋に飛び込んできて、ことのあらましを話すこととなつた。

「で、何で急にこんなことをしたんだい？」

「胸に痣があるかどうかを確認しろ、といわれたんだ」

頬に平手の痕がありありと残るサバタは、むすつ、とした表情で返答する。

「…痣があるかどうか、確認するように言われただけだ」
不機嫌極まりない声で、サバタはそういうと腕を組んだ。

『痣？』

一同の声は綺麗に揃つた。もちろん、一同といつのはサバタ以外でこの場にいる一同だ。

スバルは左腕のことを隠しているので、右腕でもぞもぞと、服のボタンを外そうとするがうまく行かずに、ミソラに外してもらつた。すると、右胸の肩に近い辺り、そこに奇妙な文字のような、紋章のよつな、そういうものが浮かんでいた。

「…これ、刺青じゃないな…」

一応天地は断りを入れてそれに触れた。

傷跡みたいに腫れて、膨らんでいるわけでもなく。

かと言つて、裂傷のようになぐれて、へこんでいるわけでもなく。一言で言つなら、昔からそこにあつたように平らだった。

「…昨日は、なかつたんだけど…」

「…じゃあ、何ががきつかけで、浮かんだ、つてこと…かな?」

ミソラがスバルのボタンを留めながら訊ねる。

『…じゃあ、何でだ?』

ウォーロックは首を傾げ、ジェミニとハープも、同じように首を傾げている。…ハープに首があるかどうかは、やや不明だが。しかし、気持ち的にはそういう反応だろう。

「…経過を見ていくしかないな…」

「はい」

天地の言葉に、スバルはリボンをきゅ、ヒミツラにしめて貰いながら、頷いた。

「それじゃ、スバルくん、ツカサくん、社会見学に戻る? や

ミソラに腕を引かれて、スバルはそうだけど、と返す。ジャンゴたちを、放つて行くわけにも行かないのだ。

スバルとしては、ジャンゴたちの『ソルライト・ルナ』探しを、手伝いたい。が、学校の行事があるので。

「せういえば、ジャンゴくんとサバタくんはウエーブロードに立てるんだよね?」

天地はふと、何かを思いついたかのように、一人を振り返った。

「はい」

「ああ」

二人揃つてこくり、と頷く。

「だったら、スバルくんたちのハンター→Gに、入っていればいいんじゃないかな？夜の宿代わりになるだろ？」「情報を集めるときも姿を晒さずに調べられるよ」

天地の言葉に、ジャンゴたちはきょとんとする。確かに一理あるのだが……

それを実行するためには、スバルたちの次の言葉にかかるといふ。

「僕はいいよ」

「あ、僕も」

「私もいいわよ」

「やつたーー！」

スバルたちは揃つて、いい、と言つので、ジャンゴは嬉しそうにぴょんぴょんはねる。

「あの……でもさ、流石に個人情報とか入つてるから……サバタにはツカサくんのハンター→Gに入つてほしいんだけど……見られたくないし……それに……」

スバルは途中で言葉を途切れさせるが、一同にはその理由が良く分かつた。

……さつきのがざつめり、トライウマになつたようである。

ツカサはサバタに向き直り、ずい、と腕を突き出す。

「……じゃあ、サバタは僕のハンター→G、つてことだ

スバルもずい、とジャンゴに腕を差し出した。

「はい、じゃあどうぞ」

二人が触れると、一人の姿は搖き消えて、代わりにハンター→Gの中へ消えた。

「じゃあ私は、オテンコとネロ、どうぞ」
オテンコがぺちり、ネロがペタリ、トミソラのハンターV Gに触れる。瞬間、その姿は消え、代わりにその中に現れる。

「居心地はどう?」

『すつごくいいよー。広いし、なんか気持ちいいし、落ち着く~』

『確かに』

『ほんとだ、広い…』

『羽根がのびのび伸ばせるぜー』

ハンターV Gの中はスバルたちが思っていたよりも、良好だったようである。

これでとりあえず一時的には、ジャンゴたちの拠点、に関する心配はしなくていいだろう。

社会見学に戻りたいのは山々だが、問題が。

「…しかし…社会見学を続けるにも、スバルくんは不便があるんじゃないかな?」

「…ですよね」

なにせ、みんなの目の前で、ジャンゴとサバタを引っ張つて逃げたのだから。

どうしようかな、と悩んでいると。

R R R R R ! ! : R R R R R ! !

突然、スバルのハンターV Gがなつた。スバルは、ウィザードであるウォーロックに問いかけた。

「誰からなの、ロック?」

『んあ?…珍しいな、大吾からだぜ』

スバルが訊ねると、いささか間の抜けたような声を出して、電話を

かけてきた人物の名を告げる。

「…父さんから?…とりあえず、出ないと…」

スバルが通話ボタンをオンにする。

『スバルか?』

「父さん、どうしたの急に…」

スバルの電話越しに、何故か張り詰めたような、大吾の雰囲気が伝わってきた。

『…スバル、今何か話してて不都合とかないか?周りに関係者以外で誰かいたりするか?』

「うん、大丈夫だよ。天地さんの研究室にいるから。傍にいるのはツカサくんと、ミソラちゃん、ロックとジェニーにハープ、それに天地さんだよ」

ほつ、と大吾が息を継ぐのが聞こえてきた。

『そつか、なら…今から来てくれないか?』

「…どこに?」

スバルが問い合わせると、大吾はいささか疲労したような声で。

『WAXAの記者会見場』

と、言った。

スバル、ツカサ、ミソラ、天地、ウォーロック、ジェニー、ハープは、無言で固まつた。

『…スバルくん?どうしたの?』

ハンターV Gの画面越しに、首を傾げるジャンゴが見える。ジャンゴになんでもない、と返して。

「…父さん。先に謝つておくね。…何急に言つてんの、まだ学校行事が」

『…本当はもつと先の予定だつたが…昨日、手荒な取材方法で、乗り込んできたテレビ局があつてね…』

スバルの言葉（愚痴）を途中でさえぎり、大吾は電話した理由を告げる。…といふと、昨日のアレか。

「…もしかして昨日ヨイリー博士のところに来たアレ？」

『…ああ、そこがロックマンを散々に言いつていてね。…シドウくんが危ない』

『大吾のその一言に、危ない=怒る、の数式が、遠い目になつたスバルたちの中で、何故か自動に出来上がつた。ともかく、と大吾が言葉を継いで。

『シドウくんに、暴れられても困る。それを防ぐ意味でも、来てほしいんだ。緊急事態だ、学校は長官に頼めばどうとでもしてもら…シドウくん落ち着け！－クインティアさん、止めてくれ！－』

大吾の言葉に被るようにして、破壊音が聞こえた。すぐにザバッと音が聞こえた。

『…と、とにかくすぐ来てくれ！－』

慌てた大吾はそう締めくくつて、ぶつつ、と通話が途絶えた。

「…」

スバルとツカサとミソラは無言で顔を見合わせて、ミソラは。

「…ジャック君、呼んでくるわ。先に行つてて、一人とも」「うん、お願ひ。…先に行つてるね。…暁さんの暴走が凄いみたいだし…」

一同は頷き合い、天地に見守られてアマケンから、WAXAに急いだ。

ON AIR 直前

ウエーブロードをかけながら、スバルとツカサは内心で焦っていたりする。

シドウを抑えきれるかどうかは、クインティアの腕にかかっているが、そこは多分問題ではない。

「問題なのは、シドウが記者会見の場で怒り出すことだ。」

『あいつが敵だと、ふざけたこというな……』

と、かなり盛大に怒つていそうな気がする。

「…暁さん、いくらなんでも記者会見場で暴れてないよね？」

『行つてみないとわからねえぞ、それは』

スバルの心配そうな声に、ウォーロックは真剣みを帯びた声で呟いた。

「とにかく、急がないとね！！」

「急ぐに越したことはねえだろ。そういうや、お前らもついてくるのか？」

ツカサの言葉にその通りだと返しながら、ヒカルはスバルの右手を掴んだジャンゴと、ヒカルに遅れずにかけてくる、サバタを振り返った。

そして、それぞれのパートナーの肩にしがみついた、オテンゴヒネ口。

「スバルくんが困ってるから、助けたいなって思つて」

「…」の馬鹿は言い出したら聞かないから、しかたないだろうむ、と、ジャンゴはサバタを睨むが、効果は皆無のようである。

「まあ、やつこいつことだ」

「モーセー。いつものこつた。気にしなくていいぜ」

オテンコとネロが必死に肩にしがみついているが、口調は軽い。
オテンコの花びらの向きが全て後ろ向きなのと、ネロの翼が伸びき
つているところからすると、風圧は凄いようである。
が、自力で駆けるサバタはともかくも、スバルの右手に掘まつたジ
ヤンコは平氣そうである。

「本当にいいのかなあ……」

「その場に着いたら、眞実を告げる姿を見せてもらうが」

スバルはサバタとジャンコを交互に見て、頷いたジャンコを見て、
前を睨むように手を細くさせた。

「……分かつた。ジャンコ君、しつかり掘まつてて。ツカサ君、ヒ
カル、サバタ、オテンコ、ネロ…飛ばすよーー！」

「ああ……」

「おうーーー！」

「ふん……」

スバルの声に応じて、ウーブロードをかける速さが、上がった。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

所かわり、WAXA会議室。

「はーなーせーーー！」

「離すわけないでしょーーー！」

アシッド・エース状態のシドウを、同じくクイーン・ヴァルゴ状態
のクインティアが杖を、シドウの体の前に回し、必死にシドウが記
者会見場に乗り込まないよう、押えていた。

『……アシッド、アレは止められないわけ?』

傍で見ていたヴァルゴは、アシッドにそう訊ねるが。

『無理だ。それに、電波変換を強制解除すると、負担がかかる』

『……それは仕方ないわねえ……ティア、いつも方法をとりましちアシッドの返事はあまり色よくはないので、そういうたヴァルゴの言葉に、クインティアはそれもそうね、と呟いて。

ガン!!

杖でシドウを抑えつつ、思い切り、クインティアはどこからか出したお盆で、後頭部を叩いたのだった。

「……あや……」

『ティア!!』

ぐらり、ヒシドウの身体が前に傾いで、それに引きずられて、倒れたシドウの上に、重なるようにしてクインティアも倒れた。

途端、傍に降り立つ人影が。

「すみません!!……遅く……」

「……わあ、クインティアさん大胆

「……何やつてんだ、お前ら」

『スバル、大丈夫かお前』

『無茶言うな、固まってるぞ』

「わあ、何なのオテンコ?」

「見るな!!ジャンゴは見るべきものではない!!」

「ひゅー」

「……ふざけている暇があるのか、お前ら

上から誰がしゃべったかといふと。

まず、ついたことを言おうとしたスバルは顔を赤くして固まり、

ツカサは少し楽しげに、ヒカルはあきれたように咳き、

ウォーロックはスバルの固まりつぶりを心配し、

ジョニーはウォーロックに突っ込みをいれ、

田をオテンコの身体で覆い隠されたジャンゴは首を捻り、

オテンコは情操教育によくないとばかりにがんばって、

ネロは楽しげに口笛を吹き、

サバタが一番的確な場所につっこんだ。

「あ…こ、これはっ…！」

「あいたた…あれ？何をしてるんだ、クインティア」

顔を赤くしながら、慌てて説明しようとしたクインティアを遮るよう^{うに}、シドウが起き上がり。

「…つ、元はといえばあなたのせいでしょう…！」

がいん、と手に持った杖でしたたかに、シドウの頭を殴り飛ばした
クインティアだった。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙

そして、WAXA記者会見場前。

「…よし、揃つたね」

シドウの頭にできているたんごぶを気にせずに、大吾はその後遅れてきたミソラとジャックを含めた一同を眺める。

「相当、覚悟を要しただろうに…みんな、良く決断してくれた」
WAXA長官の言葉に、一同の瞳は、ただまっすぐだ。
で、ジャンゴとサバタはウェーブロードにいた。

「しかし、皆の背中を押したのは…『世界を救つた英雄を守るために』かな？」

スバル以外の一団が、揃つて頷いた。

「私の心を助けてくれたスバルくん。今度は私が守る番だ、って思つたから」

そういうミソラは、スバルの左肩に手を置いた。

「私たちに光を教えてくれた。こんなにも綺麗な世界に気づかせて

くれたから」

そういうつてクインティアは、スバルの右肩に手を置いた。

「俺のあこがれるヒーロー。それを傷つけられたのだから、守りつ
と思った」

そういうつてシドウは、スバルの両肩に手を置いた。

「犯罪者である俺に、『罪を償つたら一緒に遊ぼう』と告げてくれ
た。だから、その光を消させたくない」

そういうつてジャックは、ぐしゃぐしゃとスバルの頭を撫でた。

「スバルくんの心を傷つけた僕を許してくれた。ヒカルのことも、
認めてくれた。それに…大事な人だから守り抜きたい」

そういうつてツカサは、スバルの右手を取つた。

「……決意は固いようね」

ヨイリーの言葉に、ミソラ、クインティア、シドウ、ジャック、ツカサが頷き、スバルも、じくり、と強い眼差しで頷いた。楽しそうに、ヨイリーは歯を吊り上げる。

「……ああ、璧。…………表舞台へ、立つておいで――！」

「「「はーーー！」！」

卷之三

「ああ！！」

一同は、大きく頷いて、記者会見場へと開く扉を見つめた。

ON AIR!! (前書き)

かよひとわかじ(ひみこ)とひの上なー...

ON AIR!!

きつかけは、アマケンロビーにおいてある、テレビに映し出された緊急記者会見と、それを見つけた、生徒の一言。

「ん？あれ、ミソラちゃんじやないか！？」

そういうた少年は、スバルと同じB組で、クラスメイト。その声に惹かれて寄つて来たのは、ロビーにいた生徒たちだった。もちろん、見張りのためにいた先生もそこに集まつた。

「え？あ、何で響は、あそこにいるんだ！？」

「…先生が、一番パニックを起こしていたりする。

「だつてさつきまで…ここにいたよ？」

先生をなだめながら、女子生徒は首を捻る。

その騒ぎに、アマケンの職員たちも、テレビのところに集まつてくれる。

そして、そこからやや離れた場所に、天地は佇む。そして。

「…スバルくん…」

天地は小さく、先輩である大吾の娘であり、世界を託された小さき英雄の名を呟いた。

▽▽▽▽▽

記者会見場はとてもざわついていた。

ロックマンが現れて三年経つた。なのに、誰もその真実の姿を知る手がかりを、掘めていない。

訳とすれば、徹底的にWAXAがそれを阻み、そして、ロックマン自身がその姿を隠し続けていたからだ。

そのロックマンの正体を、ようやく知ることができる。

だからこそ、各国の記者たちはここに集まつた。

記者会見場の扉が開き、世界でも有名な宇宙飛行士の一人、星河大吾が出てきた。

こちらに一礼して、マイクのスイッチを入れた。

『では、ロックマンの正体をお知らせする前に、ロックマンと共に戦ってきた人物を紹介します』

一同の顔は不満に彩られるが、大吾は気にしないように言葉を繋いだ。

『音を主体として戦う、ハープ・ノート』

青色のギターを携えた、愛らしい少女が扉の向こうから現れる。大吾の方を見て、大吾が頷くのを確認すると、電波変換をといった。そして、そこに現れた少女に、すぐに記者会見場は騒然となる。

『ハープ・ノートの正体は、響ミソラさんです』

まず現れたのは二ホンの国民的アイドル、響ミソラ。

とん、と軽く踵をあわせ、記者会見場に設けられたステージの一一番奥に立つた。それに合わせて、ハープ・ノートについて簡単な説明がなされた。

『電気を主体として戦う、ジェミニ・スパーク』

そして、それぞれ巨大な腕を持つた、白と黒の二人の少年が、扉に向こうから現れた。

ミソラの隣に立つて、電波変換をとき、そこに現れたのは、穏やかそうな黄緑色の髪の少年。

『ジェミニ・スパークの正体は、双葉ツカサくんです』

ついで現れたのは、おとなしそうな風貌の少年、双葉ツカサ。

『ジャック・コーヴァス』

四枚の羽根を背中に持つた、黒い姿の少年。

ツカサの横に並んで、電波変換をとくと、そこに現れたのは、逆立つた髪をした黒髪の少年。

『ジャック・コーヴァスの正体は、ジャックくんです』

そして、特長的な髪をした少年、ジャック。

『クイーン・ヴァルゴ』

杖を携えた、いかにもクイーンと言つた格好をした女性。ジャックの横に並び、電波変換をとくと、そこに現れたのは、髪を二つに結んだ女性。

『クイーン・ヴァルゴの正体は、クインティアさん』髪を二つに結び、カチューシャのようなものをつけた女性、クインティア。

『アシッド・エース』

肩に盾のような装甲を付けた、サテラポリスのマークが胸元を飾る青年。

クインティアの横に並んで、電波変換をとくと、そこに現れたのは、胸に赤いビジライザーをかけた男性。

『アシッド・エースの正体は、暁シドウくん』

サテラポリスの刑事の一人である青年、暁シドウ。

一通り、ロックマン以外で戦っている人々が、紹介され記者たちは次に、英雄かと思いきや。

『そして、次はシユーティングスター・ロックマン…と、行きたいのですが…その前にお話があります』

「あれ？名前が呼ばれないんだけど… ロック、なんでだろ？」

スバルは何で、とウォーロックを振り返る。

『俺も知らん。が、訳があるみたいだな。見てみろよ』
ほら、とスバルがウォーロックに示された先には、険しい表情をした大吾。

そして、上方で会見を見ていたジャンゴも首を捻る。

「どうしたのかな、大吾さん」

「何か考へているんだろう。この後に起ることのために」
ジャンゴはふらふら足を揺らしながらそこに座り、サバタは足を組んですわっていた。

「どういうことなの？」

「見ていれば分かる。だから、大人しくしている」

そうサバタに釘を刺されたので、ジャンゴは大人しく首を縦に振るのだった。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

『話をする前に、シユーティングスター・ロックマンを敵だ、と報道した局がいます。そのことについて話があります。その局の人は、立つてください』

大吾の声がいつもより低く抑えられて、感情が見えない。

そして、その言葉に応じて記者が一人、立ち上がる。

『いきなりで、なんてことは思いませんので言います。謝つてください』

大吾のその言葉に、記者は顔をしかめた。

「何故ですか」

記者はあくまで強気にしゃべった。

『理由は、ここにいるミソラちゃん…と、ツカサくんに話してもいいます』

ミソラちゃん、と大吾は促してマイクを渡した。

『私は、ロックマンである子と出会った時、歌うことが苦しくて仕方なかつた。ママが亡くなつて、誰のために歌えばいいのかが、分からなくなつてた』

今だから語られる、ミソラの心の闇。

『「ダーマタウンの展望台での子に出会つたときは、あの子は私が人気の歌手だ、なんて全然知らなくて、当たり前のように普通に接してくれた。それがとても嬉しかつた。私の素性を知つた後も、歌うことなどが辛くて逃げ出した私を守つてくれた。…でも、私は歌うことを強要されて……』

ミソラはゆっくりと瞼を閉じる。

『何も知らない人たちに、ママとの歌を汚されそうになつた。だから、それをこの地球を滅ぼそうとしてきた宇宙人に利用され、たくさんの人を傷つけた。あの子は人をたくさん傷つけた、この私を止めようしてくれたけど…私は、それを嫌がつた。『邪魔しないで、ママとの歌を汚す奴らを全員消してやる』って』

ミソラは、瞼の裏にうつむき景色を言葉にしていく。

『あのときの私は、皆が邪魔で邪魔で、しじうがなかつた。結局あの子に止められたけど、あの子が止めてくれなかつたら…私の歌を待つしてくれる人に気づけなかつたし、気づけないままだつたらそのまま…この星を滅ぼしていたわ。確實にね』

睨むような眼差しで、ミソラは記者を見下ろした。

『…だからね、ただ、世界を守るために、自らの命すら省みないで、戦つたあの子が敵だなんていわれるくらいなら、私は裏切り者よ』

言いたいことを言い終わったミソラは、ツカサにマイクを渡す。

ツカサはこくり、と頷いて、口を開いた。

『…僕は両親に置いていかれて、ひとりぼっちでした。そして世界を憎んだ。だから、心の怪我が、ようやく癒えようとしていたロツクマンである、あの子のパートナーが守っていた、地球を滅ぼすための武器、それを起動するための、鍵を奪うために…あの子に近づいた』

ツカサはきゅ、とマイクを握り締める。

『けれど、そのために言葉を交わすうちに、親しくなるうちに、僕はあの子に、惹かれていました。僕の境遇を知つても、普通に接してくれたあの子を、僕は好きになつた。…だけど、復讐心を消すことはできず…あの子を、利用する道を選びました』

瞳には、冷たい光だけが宿る。

『…そうして、ようやく心に負つていた傷が、癒えかけていたあの子の心を傷つけた。僕は何度も何度も躊躇つた。けれど、どれだけ搖らぎとも、復讐心は消せなかつた。人並みの幸せを得られず、人並みに生きしていくことが難しかつたから…そのために利用して、心を傷つけた僕を、あの子は許してくれた』

握り締めた手のひらは、力をこめすぎて感覚がない。

『僕を否定しないでくれた。まっすぐに笑つてくれた。…あの子が敵になることだけは、何があつても絶対にありえない』

ヒカルが、中で『…そうだ』と叫ぶ。ヒカルも、二重人格、という自分が、否定しないでいてくれるスバルの存在に、救われた一人だから。

ミソラとツカサは、大吾を振り返る。

「…ミソラちゃん、ツカサくん、あの子をここへ」

大吾はそういうて、僅かに微笑む。

大吾のその声に頷き、背中を押され、ツカサとミソラは扉の方へ手を伸ばす。

↙ ↘ ↙ ↘ ↘ ↗

スバルは一人が差し出した手に、淡く微笑む。たつ、と軽やかに踏み出す。

「行こう、ロック！」

『ああ……』

そうして、スバルの姿は光に解けてゆく。

↙ ↘ ↙ ↘ ↘ ↗

テレビを通じて話された過去に、『ダマ中学校一年一同は、『いくつ、と息を飲み込んだ。

そうして『』、ミソラとツカサは、扉の方へ手を伸ばす。とん、ヒシュー・ティングスター・ロックマンが姿を現す。

ふわり、とその身体から淡い色合の電波がぼどけてゆく。完全にその電波が解けたときには、星飾りの揺れるゴムで髪を結んだ、茶髪の長い髪の少女が、そこにいた。

同じ色の瞳は、柔らかな光を宿している。

「……あれ、は……」

「星河さん！？」

一同は絶句して、現れた少女をまじまじと見つめた。

そして、今をもって、ヒシュー・ティングスター・ロックマンの真実の姿が、世界へとオンエアされた。

真実とかけら

たん、と中央に踏み出したスバルは、伸ばされた二人の手をとる。ふわり、と柔らかく茶色の髪が後ろにたなびいた。

スバルはミソラとツカサの間に立ち、踵をそろえて立つ。

『これでお分かりになつたかしら？』

いつの間にか、マイクはヨイリーの手に渡っていた。
大吾が苦笑しているあたり、マイクはツカサの手から大吾に渡つた
後、ヨイリーに奪取された模様である。スバルは『父さん…』、と、
無言で大吾を眺めるのだった。

が、いつまでも気を抜いている場合でも、場所でもない。
ヨイリーは眉をひそめて、口を開く。

『あなたたちが敵だと根も葉もない噂で、敵だ、と言つたたシュー
ティングスター・ロックマン、あなた方はその正体である少女の心
を傷つけた。本来なら名誉毀損で訴えてもいいところよ
』

『…すい、とスバルの目の前に、マイクが突きつけられる。

『…どう、スバルちゃん。訴える？』

ふるふる、とスバルは首を横に振つた。ヨイリーの手からマイクを取り、スバルは口を開く。

『僕は、…皆さんがロックマン、と呼ぶ本来の姿…星川スバルです』

スバルは少し俯きがちに、口を開く。

『確かに僕のせいで、戦いが起きたようになりました。…僕と僕のパートナー・ウォーロック…ロックの持つ力を狙つてくる敵もありました。それだけ地球が狙われる理由をもつ力を持って、力を手放

さない僕は、…ある意味で人類の敵です。…だけど』

スバルはゆっくりと顔を上げて、前を見据える。

『二人で一つとなつて、ロックマンとなつて戦う鍵である、ロックは僕の初めての友達なんです。そのとき僕は、父さんが『きずな』の事故で行方不明となり、大事なものを失う苦しみを自分が味わいたくないが為に、人との絆を否定していました。失う傷が深くなるくらいなら、最初からかわらなければいい、って』

だけど、とスバルは言葉を繋ぐ。

『僕が人との絆を否定せず、友達を作れたのはロックのおかげでした。だから、ロックと離れたくない。大事な親友と、離れたくない。それが、僕が人類の敵であり続ける理由の一つ』

そして、とスバルは言葉を区切り。

『後一つは、この力が僕にとつての、大事な人たちを守るための力になるからです。電波の犯罪、それに対抗するための力でもあるから。…大切な人と離れたくない、大切な人たちを守りたい。それが、僕がロックマンであり続ける理由です。そのせいで、誰かを傷つけてしまっているのなら、そのせいでの僕の大事な人たちが傷つくのなら…僕はそれと向き合いたい。逃げたくない。だから、ここにいるんです』

どこまでもみはるかすような、真っ直ぐで、純粋な瞳。それはまるで、真っ直ぐに宇宙を駆ける流星のよう。

<> <> <>

アマケンのテレビを通じ、それを見ていたクラスメイト達だけでなく、先生達、職員達…眞実を知らなかつた人々は、ただただ、言葉を失つた。

地球と人々の命。

二年前から、ずっとずっと、今よりも幼く頼りない肩に全て乗っていたのだと、今更ながらに知ってしまったこと。自らの命すら、危険に晒して大事な人々を守るために、戦い続けていたのだと、知ってしまったこと。

真実の姿を今まで誰も知らずにいた、蒼き英雄。それが、あんなにも儂く華奢な少女だったと、知ってしまったこと。

ルナ、ゴン太、キザマロ、天地は祈るような気持ちで、ホールを見ていた。

水倉あいりは憧れていたヒーローが、少しだけ言葉を交わした少女であることに絶句し、ケープ・ラントは何かをこじらえるような瞳で、画面を見つめていた。

＜＞ ＜＞ ＜＞

勝手なことを報道してしまった、テレビ局の記者はその真っ直ぐな瞳に気圧されて、たじたじだ。

スバルの手からマイクを取つたヨイリーは、記者をにらみつけた。
『確かにこの子は地球を滅ぼせるだけの、力を持つてる。けれど、それに見合うだけの覚悟を持っているわ。なのに、どうして敵だと言い切れるのかしら?』

「しかし、ロックマンが現れ始めてから、いろいろな事件が…」記者はいらだつたように反論する。

『確かにそうね。でも、この子がロックマンとして戦い始める前から、ウィルスに関する事件は起きていたわ。それはこの責任ではないんじゃないのかしらね?』

ぐ、と記者は言葉につまる。

『……この子がこゝでなければ、この星は滅んでいたわ。二年前、とつくる昔ね。もし、この世界が滅んだ後、それでも、敵だと言い切れるのかしら？』

「……」

記者は俯いて黙る。

『認められるのなら、素直に謝つて頂戴。もちろん、あなただけじやなくテレビ局にも謝罪を要求するつもりよ』

「よ、ヨイリー博士、そこまでしなくていいです……」

『スバルちゃん。……私たちが許せないのよ』

……ヨイリーの目が怖く、止めようとしたスバルはおとなしく引き下がつた。『たち』という言葉に引っ掛かりを覚えたが、それを訊ねる勇気は（命知らずな真似はし）ない。

ちなみに『私達』、とは…ツカサ、ヒカル、ミソラ、ジャック、クインティア、シドウの電波変換組一同と、ルナ、キザマロ、大吾、あかね、天地、ヨイリーの無電波変換組である。

「……すみませ……」

記者がおとなしく頭を下げようとした、その瞬間。一瞬だけ何かが小さく光り、

眩い光が、辺りに満ちた。

漆黒の渦（前書き）

とつあえず、一章終わりです。

漆黒の渦

とつたにスバルたちは、目をかばう。

記者達の間から悲鳴が聞こえ、つづすらと瞳を開く。

騒ぎの中心である光の中心には、命を宿さない人形のように、指も手も、無理矢理引っ張られたように伸びていて、だらり、と力なく垂らし、身体に何か靄のような黒いものが骨のような身体に纏わりついた、記者の変わり果てた姿がそこにあった。

その異様な姿に、スバルが小さく息を呑むと同時に、上のウヨーブロードから、人が飛び降りてきた。

言わずもがな、ジャンゴとサバタ、オテンゴとネロである。

「スバルくん！…」

幸いにも、ジャンゴたちが飛び降りてきた位置が、スバルからすれば目に痛いほど光を遮る位置だった。

ジャンゴは頭にかけていたゴーグルを下げ、光から瞳を守っていた。

「どうしたんだろう、あの人…」

ジャンゴが、小さく咳ぐ。ああなつた理由は、誰にも分からないけれど、スバルには何故か直感的に分かつていた。

「ジャンゴくん、あの胸のブローチ……もしかしたら、『サンライト・ソル』かも…」

え、と咳くジャンゴは、青年を振り返る。

青年の身体は強く発光しているが、中でも胸のブローチが強く発光している。

『確かに。…凄まじく嫌な電波を放つてやがる…』

とても鮮やかなオレンジ色の石から、それには不釣合いなほど悪意と、唯一つの思いが宿つた電波が放たれていた。

『邪魔をするな。私は姫の手にだけふさわしい』

それだけを、繰り返し発している。

「先ほどアリスに電話をした。…あのかけらはどんな手段を使つても、本来の持ち主にたどり着こうとするらしい。…だからこそ手荒な、こんな手段をとつたようだな」

サバタは巨大な剣・ヨルムンガントを、構えてそういった。

「しかし、本来の持ち主の手になければ、ああいう風に暴走する」

「…つまり、あの石を壊すかなんかしないとあのまま、つてこと?でも、アレをとつてスバルくんに渡せばいいんじゃ…」

太陽銃『ナイト』を二丁腰から引き抜きながら、ジャンゴはサバタに問いかけた。

『無理だな。あれ、人間はもとから、電波人間であつても、電波体であつても、傍に近づいたら精神が狂う類のものだ。下手に近づけば、精神があかしくなつてはい終わり、だ』

『ならどうすればいいの!!』

苛立つて声を荒げる、スバルの問いかけに。

「壊す」

『それしかねえ』

即答な二人に、スバルとジャンゴは、眉を潜めて半眼になった。もう少し壊すことになると、躊躇を持つて欲しいものである。

「ともかくだ、お前は戦えるのか?」

サバタの問いかけに、スバルの後ろにいたウォーロックをスバルはちら、と見て。

「……僕は大丈夫。ロックは？」
に、と楽しげに口端を吊り上げて、ウォーロックは口を開く。
『平氣に決まつてんだろ！！誰に聞いてると思つてるんだ？』
スバルは凜とした表情で、そうだね、と呟く。

「……ああ、行こう……」

『ああ、行くぞ！！』

ウォーロックの姿が、ハンターバンGに消える。スバルはハンターバンGを構える。

「トランスクードー！ シューティングスター・ロックマン！」

スバルの身体が光の中に消えて、代わりにそこには、蒼い流星の英雄が佇んでいた。

サバタは変わり果てた姿の記者へと、剣を向けた。

「待つてサバタ。ツカサくん、ミソラちゃん、ジャック、クインティア先生、暁さん。みんなを避難させてもらえませんか？」

スバルが言つた言葉に当然だ、と領きを返した一同は、ハンターバンGを構える。

「トランスクードー！ ジュリー・スパーク！！」

「トランスクードー！ ハープ・ノート！！」

「トランスクードー！ ジャック・コーヴァス！！」

「トランスクードー！ クイーン・ヴァルゴ！！」

「トランスクードー！ アシッド・エース！！」

ツカサの身体が光の中へ消えて、一人の白と黒の電波人間がそこに現れた。

ミソラの身体が光の中へ消えて、軽やかな音楽を纏つた電波人間がそこに現れた。

ジャックの身体が光の中へ消えて、巨大な四枚の羽根を持つ電波人間がそこに現れた。

クインティアの身体が光の中へ消えて、捌きを執行するかのような電波人間がそこに現れた。

シドウの身体が光の中へ消えて、誰もが知る白い英雄である電波人間がそこに現れた。

一同はすぐさま記者達の身体をそれぞれ抱えられるだけ抱えて、扉の向こうへ消えてゆく。大吾たちも、避難者を誘導している。ジャンゴは両手に持つナイトを、スバルはロックスターを、それぞれ向けた。

「…よし…やるぞ…！」

「うん…！」

とは言うものの、ウォーロックの言葉は確かにようで、先ほどから頭痛がする。ともすれば、意識が狂いそうな、強い痛み。

「どうやって近づこう?」

『遠距離系のカードで叩きやあいいんじゃねえのか?』

「遠距離系つて…」

「じゃあ、僕が撃つてみる」

ちや、とナイトを構えて、ジャンゴは引き金を引いた。

ドオン、と銃弾は躊躇いなく光の中に当たり、爆発した。

しかし、当たったはいいが、爆発した銃弾が跳ね返ってきた。

慌ててその銃弾の跳ね返ってきた場所にいたスバルは、身を横に引いた。

そして、やや後ろでその銃弾は爆発した。

しかも、光のほうは無傷。

「じー、ごめんスバルくん！！」

「大丈夫だよ。怪我しないし…」

ジャンゴはスバルに頭を下げる、慌てふためく。スバルは「…遠距離系も攻撃は無理か」

サバタは剣を構えると、そのまま一步深く踏み込んだ。

「はああああああっ！！！」

そのまま光に剣を振り下ろすと、キーンと音を立てて、僅かながらにひびが入った。だが。すぐさまスバルたちの傍にまで一瞬で戻つてくると、がくり、と膝を突いた。

「サバタ、どうしたの！？」

ジャンゴが傍に駆け寄ると、左目を抑えて、うめくような声で呟いた。

「…頭の中をかき回されるみたいだ……くつ…」

『だから言つただろーが…なんであれ、傍に近づいたら精神が狂う類だつて！…』

ウォーロックに怒られ、サバタは眉を吊り上げ、す、と光の塊を指差した。

一同は自然と光の塊を見る。

ちなみにスバルは、相変わらずジャンゴの後ろにいる。

「でも、あれには近接系しか効かないぞ」

『…まあ、そうだが…』

ウォーロックもサバタの指した、ひびを顔をしかめて見る。

「……そうだ、ねえロック。…ウォーロックアタックで、どうにか

なるかな？」

ふと、スバルはウォーロックアタックを思い出す。ウォーロックアタックとは、ロックオンした敵に一瞬で近寄り、その間はどんな攻撃をも受け付けない、ある意味ではロックマンの特殊能力である。

『…やつてみる価値はあるが…どうせならギャラクシーアドバンスを叩き込んでやれ。けど、お前左手…』

ちら、とスバルは扉の方へ視線を向ける。

避難は流石、といつべきか、この部屋に関しては完全に完了していた。

「…みんなにばれるけど、やるしかないかな…？」
スバルは左腕を押さえる。しばし俯いていたが、きつ、と顔を上げて。

「バトルカード！ワイドソード、ロングソード！！
ピピ、と音がして、スバルのビジライズバイザーに、ロックオンサ

イトが表示された。

『ギャラクシーアドバンス
G A、ジャイアントアックス！！』

一瞬で間合いを詰め、勢い良く、ギャラクシーアドバンスが、光の塊に振り下ろされた。

耳障りな音を立てて、ぴしり、と光にクモの巣のように細かいひびが走った。

頭の中がぐちゃぐちゃにかき回されるような激痛が走るが、一瞬で元の場所に戻り、その場に座り込んで、頭を抑えた。

スバルが亀裂はどうなったかと顔を上げると、サバタが先ほどと同じように、光に走っていた。

「はああああああつ！…」

スバルが生み出した、クモの巣のようなひびに、剣を叩き落せば、
パン、と拳銃が発砲されるよつた音と似た音が響き、光に亀裂が
生まれた。

サバタもスバルの隣に崩れるよつにして、一瞬で下がつてきた。

「「ジャンゴ！」」

スバルとサバタが、同時にジャンゴの名前を呼ぶ。

ジャンゴはナイトの銃口を、光の亀裂の向こいつ、『サンライト・ル
ナ』に向けていた。

「いつけええええええええええええ

つ…！」

サバタとスバル二人がかりで生み出した、光の亀裂をくぐり、パア
ン、ヒジャンゴの放つたナイトの弾が、『サンライト・ルナ』の石
を打ち碎いた。

「「やつた！…」」

スバルとジャンゴが声をそろえてそう言った。

光は搔き消えて、どさり、と元の姿に戻つた記者が床に落ちた。

そしてその名残の「」とく、きらきら、と光の粉が漂つたかと思うと、
ぐつたりとした表情で床に横たわる記者の胸の辺りに、黒い渦のよ
うなものが現れる。

それは、凄まじい力で、漆黒の渦を巻き始めた。

「なにあれ！？うわっ…」

危うく引きずり込まれそうになつたジャンゴは、サバタにマフラー
を掴んで引きずり戻された。

剣を床に突き立てて、かばうようにしているサバタは、スバルに向

けて叫ぶ。

「呑まれるな！！剣か何かを床に突き立てて耐えろ！！」

「バトルカード！ソード！！」

慌ててバトルカード、ソードを右腕に出して、床に突き立てた。下に横たわる記者が、飲み込まれずにすんでいるのが、唯一の救いか。

「まるで、ブラックホール……！」

厳しい顔をしてスバルが呟くと、ウォーロックが出てきて。

『ブラックホールつつたら、アマケンにあつた入つたら出でこれなくなるアレか！！』

「そうそう、それって、そんなこと言つてる場合じゃないから！」

いさきかのんきなことを言つたウォーロックに突つ込みつつも、必死にソードを床に突き立てて、スバルは踏ん張る。

『スバル！！踏ん張れ！！』

そこに、ちょうどここから近いところにいた、記者達や職員を外に連れ出してきたツカサたちが扉のところから顔を覗かせた。

「そ、んなこと…言つて、もつ…ロッ…ク…！…うわあ…！」

踏ん張りきれずにふわり、とスバルの身体が浮かび上がった。

「スバルくん！…うわっ…」

「ツカサ！…く…！」

「きやあ…！」

とつさに駆け込んで、手を伸ばしてスバルの手を捕まえたツカサ、ツカサの手を掴み引つぱろうとしたヒカル、そしてそれを支えていたミソラは、黒い渦に飲まれた。

「スバルくん！…ツカサくん！…!!」
「やめやん！」

後には、叫ぶように黒い渦に飲まれた一回の名を呼ぶジャンパーの声だけが、響いた。

第一章 過去く（流星組の場合）（前書き）

……一章までだいぶかかるつて言つてたくせに……

第一章 過去へ（流星組の場合）

黒い渦の中を落ちて行きながら、スバルはかすかに聞こえる声を聞こつとしたが、混濁してゆく意識の中で、うつろな瞳で目を閉じ、意識を手放した。

その後すぐに、ぱあ、とスバルのペンドントが電波変換したシューティングスター・エンブレムが光り、スバルの周りに三体の艶な、サテライト管理者の姿が現れる。

過去 我等が 力 スター フォー ス を
艶な姿は光の塊となり、その光はポウ…と、スバルの周りを回って、身体の中に溶け込んだ。黒い渦が薄れゆく中、どさり、とスバルはデータの床に落ちた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ねーっとー！」

青いバンダナをつけた少年・光熱斗は、そのバンダナを外しながら名前を呼んだ幼馴染を振り返った。

「メイルちゃん。一応中にいたウイルス全部テリートしたから、動くとは思うぜ。ロツク、頼むな」

『うん、任せて』

ぴぴっ、と青いナビは映し出されるコントロールパネルを操作して、オープソードを起動させた。

チン、と軽い音がして、きれいに焼けたスポンジケーキが出てきた。

ミトンを手にはめたピンク色の髪の少女・メイルは、それを持って嬉しそうに笑った。

「やつたあー！焦げてなかつたよ、ロール」

『焦げなくてよかつたね、メイルちゃん』

メイルの肩に乗つた、半透明のホログラムであるピンク色のナビ…

ロールがそういうて微笑む。

「よし、プラグアウトだロック」

『うん』

青色のナビ…ロックマンHグゼが頷くと、熱斗の肩に、ロックマンの姿が同じく半透明のホログラム姿で現れた。

現在、秋原中学校一年A組女子は、ケーキ作りの調理実習の真っ最中だった。そんな中、調理実習室全てのオープンの調子が悪い、といつ状況になつた。

そんな訳で、コンピューター実習室でプログラム作成中であつた、メイルの幼馴染で、ネットセイバーで、世界を救つた英雄でもある事で有名な、熱斗とロックマンが、女子とそのナビ一同に呼び出しきをくらつたわけである。

…『早く直せ、と田がマジだつた』、とは熱斗談。

ふいに、一人はばつ、と外を見た。

「熱斗？」

『ロック？』

二人が首を傾げて訊ねると、熱斗は何、と聞き返した。

「…どうしたの？急に外なんか見ちゃつて」

「…………何か…悪い予感じやないんだけど…なんだろ…」

『うん。…とても優しい力…だけど、何か…』

その先は熱斗とロック、どちらも言い淀んでしまつたので、メイルたちは聞かない事にしたのだった。

▽▽▽▽▽

しばらくして、スバルの意識は回復した。

「……ん」

『気がついたみてえだな、スバル』

スバルはぱちぱち、と瞬きを繰り返して、目の前に浮かぶウォーロックを見る。

「……ロック……」

スバルは身体を起こし、きょろきょろ辺りを見回す。
どこかの電腦のよつにも見えた。

「そうだロック!! ツカサ、くん…ヒカル…ミソラちゃん…は…！」

『分からねえ。はぐれたな』

首を振るウォーロックに、スバルはきゅ、と手を握りしめる。

「探さなきや…!!」

立ち上がったまでは良かつたが、ふらり、とスバルの身体がよろめいた。

すぐさまウォーロックの叱責がとんだ。

『馬鹿!! あの電波の影響を、多少受けてんだ。とにかく、今は外に出て休むぞ。情報探しはそれからだ』

「…うん」

スバルは、ウォーロックの言葉に頷いて、一旦電腦世界の外に出た。

が。

「あいたつ…！」

ウエーブロードに飛び乗ろうとしたスバルは、ビショツ、と背中から、地面に落ちた。

周りを行く人々は、スバルに気がついてないので、いまだに電波

変換状態を保てていいことだけは、はつきりしている。

「いつたた……なんなの？」

『……おいスバル、上を見ろ……』

「上？」

焦ったウォーロックの声に、スバルは後頭部をさすりながら顔を上げる。ビジライズバイザーを通して、見上げた空には何もなかつた。

「……ウェーブロードが……消えてる……」

『……消えた、というより……電波自体ない感じだ……』

「な……いつて……なんでそんな急に……そ……うだ……！」

慌ててスバルはブラザーバンドを確認する。

「嘘！？」

ツカサとミソラ、それ以外のブラザーとの絆が、切れていた。

「どう、して……」

『……しかも、時計も表示されてねえぞ』

困惑したように咳く二人の耳に、ニコースが流れてきた。

『……そして、五年後の20XXXX年X月X日後完成の予定です。では、次のニコース……』

二人は瞬きをして顔を見合わせる。

「……ロック、今の聞いた？」

『……おう。……五年後の20XXXX年とか言つてたな。逆算して、考えると……』

『……これは……一百年前の世界、つてこと?』

スバルは邪魔にならないとわかりつつ、隅のほうに寄つて胡坐をかき、指を唇に当てて考え込む。

「……つてことは、あのブラックホール……時空に開いた穴みたいなもの……？」

『……しかも俺らばらばら、つてとこ考えるといろんな場所に穴が開い

たみたいだな……』

あの黒い穴に吸い込まれたのは、スバルとウォーロックだけではないのだ。

ツカサとヒカル、ミソラ、そして彼らのパートナーである、ジョミニー、そしてハープもいる。

「……とりあえず、今後の目標は……」

『……ジエミニーたちを探す、か?』

「うん。とりあえず、どつかで電波変換をとかなきや……」

スバルは立ち上がり、とりあえず近くにあったショッピングモールの屋上に飛んだ。

物陰で電波変換をといて、ハンターV Gの電源を切つて、人ごみに紛れるとスバルからすぐさま咳き、というか文句が出た。

「動きやすい服に着替えたい……」

一応ビジライザーをかけてるので、隣に浮かぶウォーロックは見える。

『諦める。この時代の金、持つてねーじゃねーか』

しかしながら、ウォーロックからすぐさま諦める、と告げられた。

「…………ん?」

スバルは、『この時代の金』という言葉に引っ掛かりを覚える。

「…………この時代……お金……えーと……あ……」

『なつ、何だ!?』

「天地さんに貰つてたんだ!! いらないからって!!」

幸いにも、天地が以前整理している際に出てきた、大量の過去紙幣を『処分』という名目でスバルは貰っていたのだった。

ショッピングモールから出てきたスバルの格好は、目深に被つた流星マークの入ったキャップと、普通のTシャツに、薄手の灰色のパ

一カ一を着て、七分丈の藍色のズボンに、スニーカーに黒のソック
スを履いて、胸には小型通信機であるペンドント。

一見すれば、女の子とは分からないのでちょうど良い。

制服一式は、ついでに買ったリュックサックに押し込めてある。
たつたつ、と足取りだけは軽やかにスバルは人ごみの中を歩く。

「似合う、ロック?」

『大丈夫なんじゃねえの?』

心配そうに自身を見下ろすスバルに、ウォーロックは呟く。
ビジライザーを通してスバルはウォーロックが見えるものの、傍か
ら見れば、独り言を言っているようでもある。

「どこから調べようかな?」

『お前、学校でこの時代の歴史、習ってるんじゃねえのか? だつたら
どこが最適かぐらい、分かるだる』

スバルは信号で止まりながら、記憶を手繕り寄せせる。

「...調べものは...科学省...かな。この時代では最高レベルの情報が
集まる、つて教科書では習つたけど.....その分、セキュリティがと
てつもなく高いって」

『よし、科学省に行くか』

ウォーロックの目が何故かキラキラしているので、それを突っ込む
気にもなれずに、傍にあつた看板を見た。

「...じゃあ、電波変換していこう

秋原町から考へると、遠いし、とスバルはウォーロックに言つた。

過去へ（音符組の場合）（前書き）

今回は『彼ら』との遭遇です。

過去へ（音符組の場合）

おそらく、スバルに次いで、情報を得たのは彼女達が早かつただろうが、この時代の最強のナビのうちの一人と接触したのも、早かつた。

出てきた場所は、様々な情報が飛び交つており、しばらく混乱していたが、冷静になつて情報を調べてみると、いろいろと分かつた。時間と場所だけは分からなかつたが、きっとWAXAだ。

「ねえ、ハープ」

『ええ、ミソラ』

「……」

『……』

二人は互いのいいたい事が良く分かつてているのでそろつて沈黙した後、セーの、で。

先ほども同じことを言つたが、ミソラとハープにしてみれば、言わなきややつてられない。

「『』にはどこなの（よ） つ――。」「

キーン、と後に尾を引くような大声で盛大に叫び、ミソラは両肩で息を継ぐ。

ぺたん、と誰もいない電腦空間の、その場に腰を下ろして、ミソラはぷう、と頬を膨らませた。

「しかも、ツカサくんどころか、スバルくんもいないし」

『はぐれたか、さつきの渦の中からそれぞれ別々の場所に落ちたとしかいえないわ』

はぐれてから、大した時間は経っていない。…だが、それでもよく知らない場所、よく知らない時間。

それが、不安を搔き立て、收まらない。

「……スバルくん……それにツカサくん……会いたい……」

『……そうね……騒がしいのがいないから……』

怖い、とは思うものの、それでも。

「でも、私にはハープがいるから一人じゃないもんね」「ええ、私にもあなたがいるから一人じゃないわ」

寂しいなんて、思わない。

「……さて、ちょっと休んだらスバルくん達を探しに行かなくちゃ」「ええ、そうね。少しだけどウォーロックたちの電波が分かるわ。それを頼りにして探しましょう』

「うん！」

ミソラは膝を抱えて、隣にふかふか浮かんでいるハープを見て、頷く。

『あ。……そうだわ、ミソラ。あなたの歌を聞きたいの。歌つてもらえるかしら？』

『うん、モチロン！！あ、新曲……『ナガレボシ』って言つんだけど作つたんだ。それを歌うね』

『ポロロン、どんなのかしら。楽しみ』

ハープは隣に腰を下ろし、ぽろろん、とファイーチヤリングハープギターの弦を弾いて、すう、とミソラは息を吸い込む。

その笑顔を 僕はなくして

一人膝を抱え 孤独の暗闇にいた

そんな僕に君は笑つて 手を差し伸べて

大丈夫だよつて 笑顔を向けてくれた

深呼吸して 暗闇の中で前を向いて
一筋の光を 僕は見つけたんだ

シユーティングスター 今輝いて
心に響く 温かな絆の音色
心に輝く 未来つくる導の光
絆を守り 間を駆け
今 絆と絆を繋ぎ 宇宙を翔けるそら

何もない日々 僕は焦つて

誰かを傷つけて 周りを見ずについた
そんな僕を君は怒つて それは違うつて
焦らないでつて そつと言つてくれた

そつと力を抜いて 周りを見渡して
柔らかな笑顔 僕は見つけたんだ

シユーティングスター 今煌いて
光と闇のように 対なす僕ら
抱えきれない痛み 溶かして
レゾンを守り 光を駆け

今 心と心を繋ぎ 宇宙そらへ羽ばたく

宇宙を彩る スバルの強き光の煌き
宇宙を駆ける シューティングスター
消えた光 刹那の光 永遠の光
今僕らに 降り注ぐ

聴き終えたハープは、柔らかく微笑んで、口を開いた。

『ふふ、イメージはシユーティングスター・ロックマン…いえ…スバルとスバルに助けられた二人、ね?』

「せーかい」

ぱちぱち、とミソラは手のひらを叩く。

『宇宙を翔ける、なんてところはスバルならではね』

そういったハープに、ミソラは、少し遠い目で。

「…ちよつヒツカサくんには申し訳ないかも、なんだけど。…私の勝手なイメージで作っちゃったから」

それでも、ミソラはふふ、と微笑み。

「これ、気づく人何人いるか楽しみなんだ。ふふつ、今度スバルくんにも聞いてもらおうと思つ……！」

不意にミソラは辺りを見回して。

『ミソラ…』

「うん……」

と一ん、とミソラは高く跳躍する。先ほどまでは場いた場所に、人影があつた。

「へりんなさい、ショックノート…！」

ミソラの傍らに二つのアンプが出現し、音を衝撃波として放つた。

その人影はソードを一閃させ、衝撃波を叩き切つた。

『…随分と、あつたりやつてくれるじゃない? 気を抜いたらダメよ、ミソラ……』

「ええ、でも、その前に…」

ミソラはきつ、と人影を睨んで。

「あなたは誰!?! 何でいきなり攻撃してくんのよ!…」

ミソラが叫ぶと、叩き切つた際に起きた煙の向こうから、右腕をソ

ードにしている、赤いヘルメットに銀髪をたなびかせた少年、と言つたほうがいい年頃の人影が現れた。

「俺はブルース。…科学省の最重要場所に侵入しておいて、俺のこと知らない上、ずいぶんとのんびりしてるんだな」

ブルースと名乗った少年は、まっすぐにこちらに剣を向けている。

「……科学省？最重要？……なにそれ？」、「WAXAじゃないのか？」

「それに、ナビにしても身体のつくりが違うよつだ。…何が目的だ？」

「ナビ？電波人間じゃなくて？」

ミソラはブルースの口からぽんぽん出でてくる、謎の単語に首を捻る。そして、それを聞いた事がある授業を思い出し。

「……ゴメン、悪いけど今日の時間と日付と、場所を教えて」

「？…20XX年X月X日、場所は科学省中央コンピューターだ

が

首を捻りつつ、ミソラが訊ねると、思ったとおりの日付が帰つてきた。

しばし、ミソラとハープは固まつて。

「……ハープ」

『……ええ』

すう、と先ほどと同じように、同じタイミングで息を吸つて。

「『私達、過去に来ちゃつたの つーつ。』」

そう絶叫するのだった。

ミソラはとりあえず、何だかんだ言いつつも質問に答えてくれた少年に、名乗り返し、状況を説明することにした。

「私はハープ・ノート。電波人間よ。私達は、未来から飛ばされて、

偶然ここに落ちたのよ

「未来？電波人間？」

ブルースも首を傾げたそのときだつた。

『そんな馬鹿な…』

『そんなことが…』

「うわ、びっくりした！！誰なの！？」

二つ、声が聞こえてきて、思わずその場から飛び出すミソラは、声を荒げて辺りを見回した。

『伊集院炎山。ブルースのオペレーターだ』

『驚かせてすまなかつた。私は光祐一郎。科学省の職員だよ』

『オペレーター…って言えば、私達の時代で言えば、ウイザードのパートナーか』

『ウイザード、とは何かな？』

ミソラが自分の時代で思い浮かべると、祐一郎が柔らかな声で問いかけてくる。

「私達の時代のナビみたいなものです。ウイザード、って一口に言つても普通のウイザードとバトルウイザードに分けられるんですけど」

『どう違つんだ』

炎山は感情があまりない声で、問いかけてきた。

「ウイザードは文字通り普通のパートナー。バトルウイザードはウイルス退治とか、戦闘に特化したウイザードなの」

その後、再び沈黙が降りたが、どうしてもミソラは聞きたい事があった。

「とりあえず、外に出たいからウーブアウトしたいんだけど…」

「ウエーブアウト？外に出るなら、プラグアウトじゃないのか？」

その後再び黙つていたが、炎山が沈黙を破つた。

『…ブルース、とりあえず一回そいつをプラグアウト場所まで連れて来い。外に出るならそこでもいいだろ』

「炎山様、よろしいので?』

『光博士からの頼みごとだ。仕方ない。それに、プラグインした形跡が全くないからな…それを信じるしかないのが、正直なところだ』

「…ありがとう、ブルース、炎山君、光さん…!』

たたつ、とハープ・ノートがプラグアウト場所に飛び乗ると、ぱあっ、と炎山と祐一郎の目の前に、モニターに写っていたはずのハープ・ノートが現実世界に現れた。

その後再び光ると、制服姿の、炎山と同い年くらいの少女がそこに立っていた。隣にはふかふか、と何かが浮かんでいた。

「私は響ミソラ。こちちはパートナーのハープ。よろしくね、炎山くん、光さん…!』
『ハアーイ。よろしく』

そういって笑うミソラとハープに、炎山と祐一郎は内心で、『桜井【メイルちゃん】とロールに似ている』と同時に思った。

手伝い

現実世界に出てきたミンラを連れ場所を移し、科学省の喫茶店。

「とりあえず、今話した事で全部です」

ミンラはそう言つてぱくつ、と田の前に置かれた、デラックスクスチョコパフェを頬張つた。

「ん~!~おいしい!~!」

嬉しそうににこにこと、ミンラはパフェを口に運ぶ。

その傍でそれぞれコーヒー片手に、啞然とするのは炎山と祐一郎。

「本当に未来から来たのか…」

「そーだよ。あ、あとね。はぐれちゃったんだけど後一人、一緒に来てるんだ。しかしほんとにおいしい」

啞然とつぶやく炎山に、二二二二と返答を返した後、ミンラはまごまご、とパフェを食べる。

「とりあえず、放つておく訳にもいかない。熱斗たちにも呼びかけて、手伝つてもらおう。海外に落ちてゐる可能性も否めない。ライカくん達にも呼びかけて…炎山くんも、手伝つてもらえないかな?」

「ええ。構いません」

そういうつて炎山が頷き、傍にあつたパソコンからメール画面を祐一郎が開くと。

「(「)馳走様でした」

「はや!~!~」

両手を合わせてスプーンを置いたミンラに、炎山と祐一郎が思わず突つ込んでしまつたのにも、訳がある。

ミンラがすべてを話し終わつて、ようやく来たデラックスクスチョコパフェ。

これは科学省に所属する研究員、その子供用兼甘党向けに作られたパフェ。

量が半端なく、子供はまず食べれない、食べきれるにしても時間がかかる、といわれる代物を、あっさりと短時間で平らげた。

「…炎山くん、お代わりいい?」

「構わないが…まだ食べられるのか?」

ちなみにミソラのパフェ代は炎山持ち。

「すみませーん。テラックスチョコパフェ、後二つください

「そんなに食うのか!?」

「女の子は甘いものは別腹だもん」

そういつてくびくび水を飲むミソラ。

「と、とにかく…写真か何か、ないかな?」

あっさり巨大パフェを後二つ、と清々しく言い切ったミソラに、硬直していた祐一郎は何とか立ち直る。

「写真? それなら確か…」

ポケットにいつも入れているポーチ、その中から写真を引っ張り出す。

「これと…これ! !」

一枚の写真が目の前におかれる。

片方は茶髪の長い髪の少年。

もう片方は、黄緑色の髪の少年。

「…うちの茶髪の髪の子が、星川スバルくん。…うちの黄緑色の髪の子が双葉ツカサくん」

「とりあえず、これを熱斗たちに…」

▽▽▽▽▽

P.iP.iP.i!!

「うわっ…！」

「さやつ…！」

真面目に板書を取っていた熱斗とメイルは、突然のメールに驚いて声を上げてしまった。

一斉にクラスメイトと先生が振り返る。

ロックマンとロールはそんな中、差出人の名前を告げた。

『熱斗くん、パパからメールだよ。急いで、って書いてはあるから開けてみたら?』

『メイルちゃん、熱斗くんのお父さんからメールだよ。急いでって書いてあるけど…』

『光一、桜井ー急ぎかー?』

先生から声が飛んでくる。

三十代前半の男性教諭、三船先生だ。

「みたいでーす。開けてみていいですか?」

「おーう」

先生に許可をもらい、熱斗はロックに頼んでメールを読んでもらつ。

熱斗、メイルちゃん。

授業中とは分かつていて、このメールを送る。
至急、保護して欲しい二人がいる。

一人は星川スバルくんという子で、もう一人は双葉ツカサくん。

どちらも一人と同い年で、顔写真を添付してある。それを手がかりに探して欲しい。

できれば早急に頼む。

一人、彼らの仲間だといつ女の子を保護した。
名前は響ミソラさんといって、彼らとはぐれたらしく。

彼らはこの時代にはないものを多々持っている。

もしかしたらそれらを狙い、騒動が起きるかもしれない。

その前に、彼らを保護したい。今から探しに行つてくれ。

学校は『科学省からの用事』といふことで、できれば早退して欲しい。

できれば構わない。

祐一郎

『熱斗くん、添付画像を開くよ』

ぱっ、と映し出されたのは、奇妙なゴーグルを頭にかけた茶髪の少年と、肩にかかる長さの黄緑色の髪の少年。

『早退はあんまり嫌なんだけど…パパからの頼み』とだし…

『そうだな。早退するか』

熱斗はこくり、と頷き、ロックマンも仕方ないね、とつぶやいた。

『熱斗、私たちも手伝うわ』

『メイルちゃん…ありがと…先生、緊急に科学省からの用事が

があるので、早退します。あ、事件とかじゃないんで」心配なく

「おー。気をつけて帰れよ。光、桜井」

「はーーー！」

一人は鞄を手に、教室を飛び出した。

唐突な来訪者

「…と、言つても何で狙われるか、つてのをまず聞かないと
「そうなのよねー…」

祐一郎から送られてきたメール。それは熱斗たちがああいつても来るであろう事を見越して、書かれたメール。だからこそ、重点がいくつか抜けていた。

科学省へついた熱斗は、いつもどおりに父親、光祐一郎の部屋へ向かう。

そして、扉が開いた先にいたのは。

「あれ、ディンゴ、チャーリー、テスラ、燃次さん、ジャスミン、炎山」

熱斗が不思議そうに見た先には、ヘアバンドをつけた少年、軽装ないでたちの男性、髪をきつちりとまとめた女性、頭に手ぬぐいを被った男性、それに伊集院炎山がいた。

「お、二人も来たのか」

『メイルも来るとは、珍しいな』

ヘアバンドをつけた少年は、カレーシェフ、ディンゴ。そしてそのパートナーである、羽飾りを揺らすナビ、トマホークマン。

「久しぶりね。熱斗、メイル！！」

『ロックとロールも久しぶりね』

髪をお団子にして花の飾りで止めた少女は、薬師、ジャスミン。そしてそのパートナーである、看護師の格好をしたナビ、メディ。

「よお。ビーも」

『相変わらずなかいいねえ、おふた方』腰で上着を結んでいるのは、パイロット、チャーリー・エアスター。そしてそのパートナーである、背中にプロペラをつけたナビ、ジャイロマン。

「クロスフュージョンメンバー、集められたっぽいぜ。つっても何人かだけど」

『まあ、暴れられるんだつたら良いけどよ』

腕を組み豪快に笑う、エプロンをきっちりつけた男性は、花火職人、六尺玉燃次。そしてそのパートナーである、両腕がランチャーになつているナビ、ナパームマン。

そこに、扉が開いて入ってきたのは、熱斗の父親で、有名な科学者でもある、光祐一郎。

「皆、急に集めてすまない」

そういうて、一同の目の前で足を止める。すぐに質問をぶつけたのは、熱斗だった。

「パパ、人探しってどうにつけと?」

熱斗が問い合わせると、祐一郎は扉の向こうに『入ってきてくれ』と、告げる。

扉が開き、そこから現れたのは熱斗とメイルと、さほど歳が変わらないように見える少女。

『はじめまして、響ミソラって言います』

一同の前に出てきた少女…響ミソラは、背中にギターを背負つていた。

「じゃあ、ミソラちゃん」

祐一郎に促されて、二くつと頷き、手を高く掲げた。

「電波変換、響ミソラ、オン・エア！！」

ミソラの身体が光に溶け、光が解けた後には青いギターを携えた少女が、そこに立っていた。

一同が構えると、祐一郎は一同を落ち着いて、となだめ、少女の説明をする。

「ミソラちゃんがこの姿はハープ・ノートだそうだ。そして、未来の世界から来た、電波人間でもある」

再びその身体が光に溶けると、後には先ほどの少女と、琴の形をした。

『お化けーっ！…』

「落ち着けロックー！」

熱斗の頭の後ろに、必死になつてロックマンは隠れる。

ミソラの隣にふかふか浮かぶ、琴の形をしたお化けのようなものは、不機嫌そうに、それでも楽しげに。

『まつ、お化けとは随分なご挨拶じゃなくて？私はＦＭ星人のハープ。覚えときなさい』

「宇宙人？そんなものいるわけないじゃない」

髪をきつちり纏めた女性、テスラ・マグネットツがつさり指添を示すが。

『あら、だつたらどうやって私のことを証明するのかしら？・プログラムであるネットナビならともかく、私は電波よ。電波に命を宿すだなんて、生半可な事じやないわ』

ハープにある意味過去の常識では、もつともな事を言われ、ぐ、とテスラがつまる。

祐一郎は一同が口を閉ざしたときを見計らつて、口を開いた。

「今見てもらつたとおり、ミソラちゃんの持つている力は熱斗たち…いや、ロックマンたちとはまったく異なる類のものだ。彼女のパートナーであるFM星人は、地球人の身体と融合しないとまともに戦えないそうだ」

その言葉に、こくり、ヒミソラとハープは同時に頷く。

「そこで、相性のいい人間と融合して電波人間となる。この融合を彼女達は電波変換と呼んでいる。…まあ、根本的な部分で言えば…クロスフュージョンに近いな」

そういわれて一同はああ、と納得した。

「それで、人探しはどういう関係があるんですか？」
メイルが訊ねると、ミソラが口を開いた。

「私のほかに、後一人、この力を持つた友達がこの時代に飛ばされちゃつて…一応、居場所は周波数で分かるんだけど…」

「周波数？なんだそりや」

ディンゴが首を傾げて呟くと、ハープが答えた。

『生きているものなら、全ての存在が発しているものよ。機械やナビは発していないのだけど』

それはともかく、ヒミソラは言葉を遮る。

『ハープは、スバルくんたちの周波数が、日本にあるつて分かったんだけど…もう一人…ツカサくんの周波数だけ、二ホンにはないつて…』

『どうも外国に飛ばされてるっぽいのよねー。ウォーロックとスバルは隴げだけど、こっちに向かってきてる。情報収集、ってことでも侵入でもするつもりだったのかしら?』

何気に物騒に呟かれた単語に、一同は青ざめた。

しかし、ミソラは気にした風なく。

「ロックくんだったらやるよね。スバルくんが止めそうだけど」

『必要最低限だったら、スバルもやるでしょう』

それ以上物騒な会話を聞きたくないので、祐一郎は言葉をひそめつた。

「とにかく、星河スバルくんの捜索は問題ない、として。問題は双葉ツカサくんだ」

「外国かー…ライカと、プライドだけじゃ少ないしな…」

「だから集まつたんだ」

熱斗の言葉に、炎山からすぐさま一言飛んだ。

『どういづいと?だから集まつたつて?』

「そうだよ炎山。まさか今から外国に行く、なんてこと…」

ロックマンが首を傾げ、熱斗はそれに同意する。

「は言わないが、明日から行くぞ」

炎山が鮮やかに言い切った言葉に、十分無茶だ、と熱斗とメイルとディンゴとミソラは思った。

「私だけなら今からでも行つて帰つてこれるけれど…下手に動くとスバルくんを見失いかけないし…」

ふう、とミソラはため息をついた。

「この時代じゃ、ミソラちゃんたちの力は十分特異だ。下手に動けば、ネットボリス沙汰になるかもしれない、と頼んで抑えてもらつたんだ」

祐一郎の言葉に、ミソラははあ、とため息をついて頷く。

「それに、ツカサくんも十分私以上に特異だけど、一番特異なのが、スバルくんだから」

「スバルってやつも、さつきみたいになるんだろ？さつきのあれ以上に特異、って事はどんな感じに…」

「ディンゴがミソラに問い合わせよつとして、ブツン、と、一斉に科学省のありとあらゆる電源が落ち、熱斗たちの周りに、電波人間が降り立つた。

流星参戦（前書き）

…多分、双子組は2、3話後に出てくるかと思します。

急にスバルの後ろにウォーロックが現れる。

『……スバル！』

「？どうしたの、ロック……」

電波変換をして、かなり足元が危ないウェーブロードを伝つてていたスバルは、危うく落ちそうになつた。

『科学省に何かやばいものが……！一旦電波変換をとけ……この状態だと、やばいものに気が付かれて……ここら辺にも被害が出る……それに、結界みてーなモンがはられてやがる……』

「わ……わかった！！

スバルは素直に頷いて、ウェーブロードから飛び降り、ウェーブアウトした。

たん、とスバルは物陰に降り立つ。

『急げスバル！！』

「分かつてる！！」

そして、体勢を立て直す間もなくスバルは駆け出した。

↖ ↘ ↙ ↘ ↗

スバルとウォーロックが電波変換を解いて、駆け出す少し前。

ミソラたちの前に現れた電波人間は、ジャミングガーだったが、普通のジャミングガーとは装備も色も違う。

「何だこいつら……！」

「ナビじゅなさそつだが……」

熱斗が叫び、炎山が呴く。

ハープは驚愕したように、急に現れた電波人間達を驚愕して見た。

『こいつら、ジャミンガーだけど……この前のノイズの電波人間と同じよ！！ノイズだらけ！！』

「この前、スバルくんを浚いに来たアレと同じって事！？ってことは、あのノイズのジャミンガー…ああもう面倒くさい！！ノイズジャミンガーで良い！？」

『まあ、気持ちは分かるからノイズジャミンガーと呼びましょう。そういうことになるわね。…ミソラ、やるわよー…』

「うん、電波変換、響ミソラ、オン・エア！！」

ミソラの姿が、ハープ・ノートに変わる。

「パパ！！」

「分かつている！！」

祐一郎は頷き、名人へと連絡を入れる。すぐに、ディメンショナルエリアが展開された。

「なに！？」

『あなた達、何をしたの！？』

ミソラとハープが驚愕した表情で、辺りを見回す。

「まあ見てろって。行くぞ、ロック！！」

ミソラににかつ、と笑いかけて熱斗は、肩に乗ったナビに呼びかける。

『うん！！』

ロックマンが頷き、熱斗はPETをその手に持ち、普通のチップとはまるで違うチップをポケットから取り出す。

「シンクロチップ、スロットイン！！」

ピピッ、と画面に結晶のようなものが浮かび上がる。

「クロスフュージョン！！」

熱斗の声に応じ、画面から強い光があふれ出し、身体を包んだ。制服が一部のすきもなく体に纏わりつき、その上からロックマンのデータが重なった。

パン、と光が飛び散った後には、ロックマンの姿をした熱斗が、立っていた。

遅れて、他の一同もクロスフュージョンする。メイルも、この前正式にラッシュのデータを基に作られたシンクロチップを使い、クロスフュージョンした。

クロスフュージョン後の姿は、パートナーナビの姿をしつつも、オペレーターの姿も混じっていた。

『ナルホド、これがあなた達の現実で戦うための姿、ね？』

『そーゆーこと……助太刀するぜ！！』

熱斗が笑うと、ミソラは僅かに頬を緩めて微笑む。

「…アリガト、熱斗くん」

そういうヒミソラは、すう、と息を吸い込んで叫ぶよくな声で言った。

「皆、油断しないで……」

『おう……』

『ああ……』

『ええ……』

『うん……』

ミソラの言葉に、全員が頷く。

「さあ、かかつてきなさい……」

「やれるモンならやつてみろ……」

ミソラがギターを構え、熱斗はロックバスターの照準を合わせた。

「まずは先手必勝！！」

ミソラが天井を飛び越えるほど高いジャンプを見せる。一度すり抜けて、すぐさまその姿が見えたときには、ミソラはギターの先を、まっすぐにノイズジャミングガードに向けていた。

「ぐりいなさい、ショックノート！！」

ミソラの傍らに、二つのアンプが出現し、衝撃を纏った音符がまともにぶつかる。

ドオォン、と派手な音を立てて、ノイズジャミングガードたちの何体かが倒れる。

「続いてパルスソング！！」

ハート型の音波がぶつかり、倒れていたうちの数体が消えた。

「…すつげえ…」

「ぼけつとしている場合か、熱斗！！」

唚然、とミソラの繰り出す技の威力に、熱斗は口を開けていたが炎山から叱責が飛んだ。

「バトルチップ！！バリアブルソード！！」

炎山は使い方次第で技の変わるソードを繰り出す。

「びっくりしただけだ！！行くぞロック！！」

『うん…』

自身と一緒に一体化しているロックマンに叫んで、熱斗は顔を上げる。

「バトルチップ、バルカン！！」

熱斗が手を前に突き出ると、腕がバルカンになっていた。すぐさま火を噴いて、弾が発射される。

「バトルチップ、キャノン！！」

熱斗は攻撃を避けながら、次々と攻撃を叩き込んでいった。

「いつくゼー！！トマホークスイング！！」

「ディング」は高い攻撃力とスピードを生かして、敵を翻弄しつつ攻撃していた。

しかし、横合いから放たれたキャノンを避けきれず、吹っ飛ばされる。

「とりあえず回復！！トーテム様！！」

たんつ、トーテムポールの上に着地を決め、ディングは叫ぶ。すると傷は全て癒える。

「トマホークリング！！」

叫んで、ディングは炎を纏いながら、敵に突っ込んだ。

「ロールアロー！！」

「メディカプセル！！」

メイルが矢を放ち、ジャスミンが同時に何かしら異常を起こす爆薬カプセルを投げた。

ロールアローを避けたノイズジャミングガーは、メディカプセルをくらった。

どうやら今回、効果としては盲目だったようである。

「今ネ、メイル！！」

「うん！！バトルチップバンブーランス！！」

単独では他の一同より、攻撃力も体力も防御力も低いロールとメディ。

唯一防御力は高い方だが、マグネットマンの防御力には遠く及ばない。だからこそ、他の一同の足手まといにならないように」と、コンビを組んでいた。

そのかわり、特殊能力はとてつもなく秀でている。

特殊能力とはロールの体力回復能力と、メディの異常を起させるカプセルを指している。

「私達を、なめないで！！」

「さあ、かかるくるネ！！」

「ある意味、タッグを組んだら恐ろしい一人だつた。」

「マグネットボム！」

敵に向けて一度だけ曲がるマグネットは、躊躇いなくノイズジャミングターたちに当たる。

「くつそ…このおばさんつええぞ…！」

やぶれかぶれなのか、ノイズジャミングターたちは、テスラにそう叫ぶ。

「ぶちん。

隣で戦っていたチャーリーが、あーあーあーあー…と僅かに焦った表情を見せる。

「だ…だあれえがあ…」

それきり黙るかと思いつや。

「誰がオバサンよ

「つ…！」

そう叫んだテスラの後に、轟々と炎が立ち上る。

傍で戦っていたミソラと熱斗が、びっくりした表情で固まる。

それは同じように傍で戦っていた、ノイズジャミングターたちも同様である。

「徹底的に叩き潰すわ！！」

ぎゅうう、と手のひらを握り締めるテスラの瞳には、本気の殺氣だけが宿っている。それはもちろん、オバサン呼ばわりしたノイズジャミングターに向けてである。

「…」くろうなこつて

やる気満開になつたテスラの横で、隣でチャーリーが、苦笑しながら呟く。火に油を注いだ、ノイズジャミングターたちであった。

「<><><>

「…はあ…はあ…」

スバルは肩で息をしながら、顔を上げた先には、逃げるように出でくる人たちと、何か特殊な薄いドーム状のもので覆われた科学省。

『くそ、電波変換した状態でも、あの結界みてーなのは超えられそうにねえな…』

なら、とスバルは一旦深く息を吸い込んで。

「とにかく、行けるとここまで行ってみよう…』

だつ、と駆け出した。しかし、数歩も行かないうちにウォーロックが慌てた声を出す。

『オイスバル…！』の中…ハープとミソラの電波がある…』

「本当…？』

『ああ。それと…大量のノイズと、何人かが一緒に戦ってるな』

「…行かなきや…！…立ち止まれないよ…！』

スバルは人ごみをすいすい避けながら、科学省の入り口へと踏み込む。

すぐさま、警備員の人たちがスバルを止めに入る。

「どいて…！』

「君は一般人だろう、早く避難…』

警備員の人たちが、スバルを止める。それに騒ぎを聞いて急いで加わった、メガネをかけて、手にグローブをつけた男性も止めに入る。「できない…！友達が…この先で戦ってる…！…この先に行かせて…！』

暴れた拍子に、帽子がぱさつ、と床に落ちるが、きつ、とスバルは男性を睨み付ける。

瞬間、男性は驚いた表情になる。

「きみは…星河…スバルくん…？』

男性は手に持った機械と、スバルの顔を交互に見比べる。

「え？あ、はい…』

名前、何で知ってるんだろう、とスバルはメガネをかけて、手にグ

ローブをつけた男性を見る。

「なら、大丈夫だ。この子は僕が引き受ける。星河くん、こっちに
おいで。中に入れるようにしよう」

男性がそう言って警備員が、スバルを解放する。

『付いてつて大丈夫か?』

「…信じるしかないよ。入る手段がないから」

ウォーロックの言葉に、スバルは小さく呟いた。

「こっちへおいで」

男性の後について歩きながら、ウォーロックとスバルは、もしも何
かあつたときの為に、と会話を交わす。勿論、男性には聞こえない。
『…何かあつたら、全力で逃げる』

「分かつてる」

スバルは男性の横に並ぶ。とりあえず、基本的なことを。

「あの、僕はあなたをなんと呼べばいいんですか?」

ああ、と男性は私はね、と前置きをして。

「名人と呼ばれてるから、そう呼ぶといい

「…名人…さん?」

スバルに初対面の人を、呼び捨てにするだけの勢いはない。そんな
スバルの額に男性…名人はびしり、と指を突きつけて、たつた一言。
「さんはいらない

「はあ…」

スバルは顔をしかめて、首を傾げる。

「入りなさい」

スバルが促されて入った部屋には、たくさんの計器類が並び、いろ
んな人がそこにいた。そして、その部屋は特殊な結界のぎりぎりの

淵に位置していた。

「名人、いつたいどこに行つてたんですか！！状況は依然、好転なし！！」

思い切り傍にいたオペレーターの人なのか科学者の人なのか分からない人は、怒声を飛ばしつつ、きちんと状況を説明してくれた。

「すまんすまん。けど、光博士に頼まれてた捜索しなければ行けなかつた子の一人、連れてきたぞ。星河スバルくんだ」
一同の視線がスバルに集中するが、スバルは戦闘中の一同が映し出された一番大きいモニターにスバルは目を見開く。

「ミソラちゃん！！」

スバルはパネルに駆け寄つて、焦つた声を上げる。

「名人、このままじゃメイルちゃんが限界です！！」
女性オペレーターが慌てた声を上げる。スバルは名人に駆け寄り、口を開いた。

「僕が行きます。だから、道を開けてください」

「無茶だ！！」

「あなた、ネットポリスの人間じゃないでしょーう！！」

何も知らされてないようで、他の一同からも制止の声が上がり、まだるっこしい、とばかりにスバルは腕を掲げて、叫んだ。

「電波変換、星河スバル、オン・エア！！」

スバルから、シユーティングスター・ロックマンに姿を変える。

「これで良いですか？」

一同がよく知る、ロックマンエグゼとよく似た色合いの、ナビ…いや、電波人間がそこに立っていた。瞬間一同は固まり、名人だけが

唯一ボソッ、と呟いた。

「驚いたな……光博士の言つ通りとはいえ……」

「？」

ちょいちょい、とスバルは手招きをされて、地図が表示されたパネルで、戦っている場所と現在地を名人は示す。

「いや、こっちの話だ。いいかい、皆が戦っている場所は、ここ。とりあえず、今いるこの部屋の近くで一時的にこのシールド……ディメンションナルエリアの一部を解除するプログラムを起動させ、穴を作つて……ここに階段を上つて……」

スバルは名人の横から、つい、と一つの道を指で示す。

「ここに天井と壁突つ切つっていきます。周波数を変えちゃえば、壁突つ切れます」

ほら、とスバルは壁に手を当てるかと思いきや、その手は壁を抜けた。ガウン……と、手を抜いてパネルの前まで戻つてきて、さつきと同じ道を示す。

「で、さつき言ったみたいに、こういつてこつ行けば良いですね」「いやまあ……そうだな……それじゃ、いいかい？」

「はい」

名人はかなり疲労した表情で、合図を出し、一同はプログラムを起動させた。

ドオオオン！！

「いまだ、行けスバルくん！！」

爆風に飛ばされないようにこらえる名人は、大声で叫ぶ。

「行つてきます、名人さん！！！」

「さんはいらないそ、スバルくん！！！」

スバルは名人の叫び声を背中に聞きながら、ティメンショナルエリアの中に入りして、すぐに「ティメンショナルエリアのシールドは閉じた。

▽ ▽ ▽ ▽ ▽

「くそ、ちつとも数が減らない！…」

熱斗が叫ぶぐらいに、倒しても倒してもどこからか湧き出でてくる。

「こらのまじや…ひく……あや…！」

不意に攻撃を避けきれず、とっさに腕を交差させて攻撃から、頭をかばつたミソラは、そのままだら、と脇中から壁に叩きつけられる。

痛みをこらえて田を開けると、田の前には拳を振りかぶったノイズジャミングガー。

「ミソラちゃん！」

焦った熱斗の声が、やけに遠くに聞こえるな、と思いつつミソラは瞳を閉じる。

「もう…」

「バトルカード、バリアー！ブレイクサー・ベル！！」

一同にとつては聞きなれない声、ミソラにとつては聞きなれた声があたりに響いて、ミソラに向かられた攻撃はミソラには一つも当たらなかつた。

その上、攻撃を加えようとしていたノイズジャミングガーは、消え去つた。

ゆっくりと瞳を開けて、ミソラは硬直した。

こちらに背中を向けて、ブレイクサーベルを構えて立っている影。

「…………スバル、くん」

ミソラの前には、熱斗とよく似た格好の少女、星河スバルが、手を前に突き出して、立っていた。

「ミソラちゃん、大丈夫？」

緩やかに振り返ったスバルは、優しく微笑む。

「そこで休んでて。行くよ、ロック！！」

『おう！！』

スバルの後ろに、おおいぬ座の電波体、ウォーロックが姿を現した。

「ウェーブバトル、ライドオン！！」

たつ、と流星の名を冠する少女は、地を蹴つて駆け出した。

流星の輝くとき

「ミソラちゃん、大丈夫！？」

「大丈夫ネ！？」

メイルもジャスマインもぼろぼろなのに、慌ててミソラに駆け寄つてくる。ミソラは肩を抑えながら大丈夫だよ、と笑つて、スバルを見上げる。

「本当に、スバルくん……」

じわ、とミソラは泣き出しそうになる。本当に、スバルくんは私が危ないときに助けてくれる。

「えつと…ミソラちゃんをお願い」

誰なのか分からなかつたスバルは、ミソラが気を許しているので味方だろう、と判断をつけてそう言つた。

「うん！…」

「任せせるネ！…」

スバルは他の一同に下がつて、と目で頼む。

他の一同は察してすぐさま後ろに下がる。…テスラだけが、相変わらず怒つていて、チャーリーに引きずられて下がつた。

自然体で構えるスバルは、ウォーロックに、ロック、と呼びかける。「籠げだけど覚えてるんだ」

『何をだ？』

「AM三賢者が、スターフォースを託してくれた事」

そう言つたスバルは目を閉じる。ふわり、と胸元が淡く光り出す。

淡い光はとても神秘的で、柔らかにスバルの身体から溢れ出す。ぱちり、と瞳を開けたスバルの目の前に、三枚のカードが浮かび上がる。

「まずはこれ！！」

ぱし、とスバルはカードを手に取る。

「何をするつもりか知らないが、させるか！！」

ノイズジャミンガーたちが一斉にスバルに襲い掛かつてくる。スバルは焦った風なく、口を開いた。

「スター・ブレイク！！」

そう叫んだ声に応じるように、辺りが清涼な蒼あおの光に包まれる。その中から光を碎くように、上へと飛び出したのは、凜とした冷気を身に纏う、天馬のような姿。

「ロックマン、アイスペガサス！！」

翼を広げて、空中でその姿を現したスバルが、名を告げた。

手のひらを地面に向けて広げる。そして。

「マジシャンズフリーズ！！」

その声に応じるかの」とく一瞬で、ノイズジャミンガーの足元に巨大な魔法陣が生まれ、魔方陣は作動した。

キーン、と澄んだ音色を立てて、何人かのノイズジャミンガーが、凍り付いて砕け散った。

「あの技、近距離は無理そうだ！！一斉にかかるぞ！！」

何体かのノイズジャミンガーが、スバルめがけて飛び掛る。にこり、とスバルは微笑んで、手のひらにカードを生み出す。

「スター・ブレイク！！」

その叫んだ声に、再び光が生み出され、今度は柔らかな翠^{みどり}の光に包まれる。

それが辺りに荒々しく解けた後には、過ぎ行く風を身に纏う、龍のよくな姿。

「ロックマン、グリーンドラゴン！！」

翼が消えて、たつ、とスバルは地面に降り立つ。

「エレメンタルサイクロン！！」

その場で腕を広げ、一度だけぐるり、と軽く回り、その後は勢い良く回り始める。

すると、一斉に襲い掛かってきたノイズジャミングガーが、その風竜巻に巻き込まれて消えた。

「ぐああああああああ……！」

それを見た残りのノイズジャミングガーたちが一斉に、スバルに飛び掛る。

「スター・ブレイク！！」

そして、最後は荒々しい紅^{あか}の光に包まる。

そして、その紅い光を散らすようにして姿を現したのは、猛々しい焰を纏う獅子の姿。

「ロックマン、ファイアレオ！！」

スバルはぐ、と腰をかがめて真正面から向かってくるノイズジャミングガードに向け、左手の獅子を突き出し。

「アトミックブレイザー！！」

その声に僅かのぶれなく、炎がノイズジャミングガーたちを飲み込む。

それは破壊の炎であり、その場にいたノイズジャミングガーたちを跡形もなく消し去った。

そしてそこから、巨大ジャミングガーが生み出される。

瞬間、ミソラは身体を抱えて蹲る。

「ミソラちゃん！！」

「どうしたね！？」

『ノイズがさつきまでと違つて圧倒的に増えた……ノイズは電波に
とつては毒なのよ……一応対策として、ノイズ対策アビリティ：P
GMはもらつているのだけれど……それさえあまり効果がない……』

対照的にスバルは顔をしかめて、スバルの後ろにウォーロックが現
れて告げる。

『凄いノイズだ…スバル、あいつが本体だ！！』

「分かつてる！！」

スバルはだつ、と駆け出しながらファイアレオを解除すると、腕を
前に突き出す。

ザザツ、とスバルの身体が凄まじくぶれ始める。

『お前らが引き起こすノイズ…利用させてもらひやー…』

スバルの後ろにいるウォーロックが吼える。

『ノイズ、200%突破だ！！やるぞ、スバル！！』

スバルが頷き、とん、と軽くジャンプしたスバルは空中で叫ぶ。

「ファイナライズ、ブラックエース！！」

スバルの身体が黒い渦に呑まれる。

そして、時々ぶれの生じる赤く発光する薄い膜が揺れる機械的な羽
根を背中につけた、ぎらり、と赤く輝く瞳をした姿にかわったスバ
ルが現れた。

「しまった、ファイナライズだと！？」

『この時代にジャミンガー共はいねーし、未来から来たんなら、帰り方を教えてもらおうかー！スバル、吐かせるぞ！』

「うん！！」

スバルは、頷いて低く、鋭く飛んで一瞬で間合いをつめる。

「バトルカード、ソード！！」

スバルはソードを振りかぶって、切りつける。SSロックマン時は、速度が違う。

巨大ジャミンガーは、何とか避けるものの怪我を負う。

「バトルカード、リュウエンザン！！」

左手を、赤い刀身のソードに変えると更に切りかかった。ずばつ、とスバルが斜めに振り下ろしたリュウエンザンは、ジャミンガーの身体を一刀両断にする。

「く……くそ……『姫』……を……未来に……連れ帰る……までは……！」

切れ切れの声で呟く巨大ジャミンガーは、そのまま周波数を変えて逃げた。

スバルはくつ、と険しい表情をすると、一度だけ床をドン、と踏んで。

「くそつ、逃がした……」

『また追えは良いだろ？。あれだけ深手を負わせたわけだしな』

「うん、そうだね。さ、電波変換を解除しよう」

↖↖↖↖↖

熱斗たちの前で、ぱあ、と光が解けて、そこにはリュックを肩にか

けた、華奢な少年が立っていた。

灰色のパークーに、藍色の七分ズボン。そして、黒のスニーカー、といつどこにでもいそうな少年の格好をしていた。

しかし、胸にかかったペンドント、それに長い茶髪の髪を、頭の後ろの高い位置で一括りにして、肩に髪を乗せている辺りは、特徴的とも言える。

「君が…さつきの……」

「はじめまして、光熱斗さん。一応、未来でロックマン…シユーティングスター・ロックマン、って名乗ります」

そういうて、スバルは笑う。

しかし対照的に熱斗は、背筋を何か冷たいものが駆け上ったような表情をしていた。

「うわ、敬語はやめてくれ！！スバルだっけ？歳幾つ？」

「？十三ですけど…」

熱斗は必死そうに、スバルの肩を掴み、叫ぶ勢いで口を開く。
「ならなおさらやめてくれ…！熱斗でいいし、俺もスバルって呼ぶから…！」

「う…うん、よろしくね、熱斗…くん」

「くんなら別に良いよ。名人さんにも熱斗くん、って呼ばれてるし」

ようやく熱斗は落ち着いたようで、気軽に笑うと、スバルは顎に指先を当てる、でもさ、と前置きをして。

「…名人さん、さん付けで呼ばれるの嫌つてたね」

「なんだけど、呼んじやうんだよなあ…」

「二人とも、さんはいらないぞ」

「うわあ…！」

「『わやあ！』

急に聞こえた声に、スバルと熱斗は横に飛ぶよつこして、逃げた。

「息ぴつたりだな～一人とも
デインゴが横から突っ込む。

「だつてだつて、ホントにビックリしたんだよ！～」
「だつてだつて、ホントにビックリしたんだぜ！～」

「まあまあ。とりあえず今日は家に帰つてゆつくり休めばいい。
あ、スバルくんたちの家を決めないといけないね。じゃあ、スバル
くんは……」

「パパ、俺が引き受けたい！～ロックマン同士色々話したいしゃ～！

！」

『僕も！～』

はいはい、と熱斗は手を上げる。ロックマンも手を上げている。

「スバルくんは熱斗の家…で良いかな？」
「はい」

スバルが頷いたので、次は。

「じゃあ、ミソラちゃんは」

「あ、私、私！～ミソラちゃんを引き受けれるネ！～女の子三人で積
もる話したいネ！～メイルも私の部屋に来るといいネ！～」
ジャスミンがぴょんぴょんと跳ねながら、手をあげた。

「うん。じゃあ、明日デパートにミソラちゃんのお洋服買いに行こ
うよ。海外に行くにしたつて、私達も色々準備が要るだろつじ
「久々にゆつくりお買い物～！～」

楽しそうに笑うハリソンラの表情を見ながら、家に帰ることとなつた一同だつた。

：但し、光祐一郎博士を筆頭として、科学者達は残つて、科学省の復旧に全力を注ぐ事となつたのだった。

過去（双子組の場合）（前書き）

…出番なくして「めでたし、双子組…」

過去（双子組の場合）

スバルたちが熱斗達の家に行く前に、まず、決定的に外国に行く理由となつた双子組の話をしておこう。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

「…多分、未来から過去に来た一同の中でも、真っ先に情報が手に入らなかつた上に、置いてけぼりに近い状況に置かれたのはおそらく彼であろう。

「…」

「知るわけねえだろ」

『さあな』

ツカサの疑問に、中と外から即行で知らない、との返答が帰つてきた。

ツカサは、どこの屋上の淵にぽつん、と座つていた。隣には、電波変換が解けたので、ジエミーが浮かんでいる。

風にネクタイと結んだ髪、シャツの裾がなびく。

「確かに、僕はスバルくんの手を掴んだ筈なんだけど…」

『途中で手を離したんだろう。結構中は力が荒れ狂つてたからな。
…近くにウォーロックとハープの電波反応はねえな…』

そこでふと、ツカサは思い至る。

「…連絡とつてみよう」

そこで初めてハンターV-G、ブラザー画面を覗くと、二人との絆は繋がつていたが、それ以外の一回の絆が切れていた。

「…少なくとも、一人と…ウイザードは無事、つてことか

「だね。とりあえずメールつと…」

メールを打つて、とりあえず一人に送った。しかし、受け取り拒否、
とこう表示が出た。

このとき既にスバルは電池残量と、ウォーロックが勝手に出てくる
事を考えて、ハンターV G電源を切り。

ミソラは炎山達に状況説明をするために、科学省にて、ついでに
スバル同様、電池残量を考えて電源を切っていたので、どちらにも
届く事はなかった。

「…電源切ってるかも」

「まあ、何かあつたんなら…電池考えるとうかつに、つけっぱなし
はできないしなく

ヒカルが腕を組んで呟く。

ツカサはじゃあ僕も切つておこう、と呟き電源を切った。

「…とりあえず、下に降りて…」

開こうとしたドアはがつちり施錠されており、開かなかつた。
…となると、下に降りる方法は、これしかなくなる。

「…電波変換、双葉ツカサ、オンエア」

『えらくやる気のねえ言い方だなオイ』

電源を切つているので、必然的にこうなる。

ジユミーからのシグナルを受けながら、ツカサは電波変換して、か
なり足場のやばいウエーブロードしかなかつたので、建物の屋上を
経由しながら、下に降りた。

物陰で電波変換をとき、路地に出て辺りを見回し。

「…どこに行けばいいのかな？」

『どつか…電気屋のラジオとかで聞けばいいんじゃねえか?』

「…それもそうだね」

▽▽▽▽▽

現在、ツカサの田の前には、パレード真っ最中といつ、楽しそうな国民達がいた。

ふんわりと柔らかい髪をして、ティアラを頭にそっと載せてくる、女王を乗せた車が緩やかに進んでいく。とても綺麗で、雰囲気も柔らかく、国民の人たちに事細やかに手を振り返している。

そして、夕方まで粘りに粘つて、ようやく分かつた、現在地…と、現在時間。

「…！」クリーミーランドなんだね…」

『…しかも一百年前とは、めんどくせえなおい』

ツカサはとすん、と石段に腰を下ろして、ふう、と息を吐き出す。

「ほんとだよね…お金もないし、連絡方法もないし。下手に動くと遭遇できぬだらうし」

『…まだあいつらがいるといひだつたら動きやすかったかもしけないな…』

あいつら、とはスバルとウォーロック、ミンラとハープ達である。

「せめて一人とも、合流していふと良いんだけどね」

『お前は良いのか?』

ジョニーの言葉に、ツカサは少し考へ込むよつた仕草を見せてから。

「んー……ちよつと怖いな、って思うんだけど…」

『けど?』

ジユニーの言葉に、ツカサはジユニーを見上げ、次に自分の胸に手を当てて柔らかく微笑んで。

「傍に、ジユニーとヒカルの二人がいるから、大丈夫

』
『……言いつよつになつたな、お前もく

『ははひ、面白いことを言つたな、ツカサ』

二人はそれぞれ、居をつかれたような表情をして、嬉しそうな表情を浮かべる。

「けどね、」

しかし、不意にツカサは前触れなくそいつ返き。

「……おなかすいたのだけは、傍に誰がいよつとビリijoよつもないね

』
『……

ぐう、となるお腹をわざるツカサに、ジユニーとヒカルから出た一言は。

『……電波変換してろ』

』
『……電波変換してろよく

だつた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

パレードを真横に見ながら歩くツカサは、隣で同じように歩くヒカルを見ながら、口を開く。

「確かに電波状態だつたら、関係ないよね。空腹とか」

「つたく、いきなり何を言ひ出すかと思つたぞ、俺は」

『右に同じだ』

ヒカルとジンの言葉に、ツカサはでもせ、と前置きして。

「お腹食べないし、お腹ご飯の入ったお弁当は、未来なんだから。しかもお金ないし。普通の人間はお腹すぐに決まってるじゃないか」「人間はそこが不便だな。電波なら腹は減らない」

うんうん、とヒカルが頷く。…どうやら、『お腹がすかない』といふそれは、身体の主導権を持たない方の一重人格にも適用されるようである。

「この国、平和だね」

「確かに。そういうやお前、この時代の歴史習つたら」

ヒカルの言葉に、ツカサは頷く。

「うん。光熱斗とロックマンにより、幾度も世界が守られたって。スバルくんもロックマン、って名乗ってるし…この名前って、何があるのかもしれないね。世界を守るための名前とか」「あー… そうかもしんねえな…」

そういうわれると、自分達の知るシュー・ティングスター・ロックマンといい、歴史で知るロックマンといい、確かに世界を救っている。

そんな他愛ない話をしながら、ツカサとヒカルが歩いていると。

「きやああああああああ…！」

「うわああああああ…！」

急に悲鳴が上がり、そちらを見やると、未来のウィルスと似ている、過去のウィルスが実体化していた。何か、棒のようなものが大量に突き出ていて、それに合わせて先ほどまではなかつたシールドが出来上がっていた。

唖然、と見ていたが、ウィルスに襲われている人たちがいて、ツカサはきつ、とした表情で駆け出す。

やや遅れて、ヒカルも駆け出す。

「いくよ、ヒカル！！」

「めんどくせえ！！」

「そんな事いわない！！バトルカード、ミサイルレーダー！！」

ツカサはそういうながら、バトルカード、ミサイルレーダーを使う。無属性のウイルスのうち、大半が消し飛んだ。流石に速さがあつて逃げたのもいたが、無属性はともかく、大半が消えた。

「こんだけへりや、避難も何とかなるだろ…サンダーソード！！ツカサ、お前はちつせえガキとか優先的に避難させやがれ！！」そうやって振り分けられるのは、穏やかであるかどうかといつ、性格の問題だろ？

「分かつた！！無茶はしないで、ヒカル！！」

「分かつてるつての！！やるぞ、ジェミニーーー！」

『おう！！』

ヒカルが相手を引き受け、ツカサは逃げ遅れた人たちを安全な場所へ運ぶ。

怪我をしているお年寄りを背中に背負い、小さい子たちを抱きかかえて、ツカサはシールドの淵、ぎりぎりにまで走った。

「大丈夫。落ち着いて避難して。ね？」

ツカサの言葉に、こくこく、と頷く。

それを何度も繰り返し、ツカサは周波数を感じ、最後の避難者を見つける。

「最後は…あの子だけだ！！」

瓦礫に隠れるようにしていった小さい男の子は、ツカサの姿を見て、悲鳴を上げる。

「大丈夫、お母さんのところに連れて行つてあげるからね」怖くない、と言つた風に右手で、その頭を撫でてやる。すると小さい男の子は、ツカサの左腕にしつかり掴まつてくれた。

「飛ばすよ、しつかり掴まつてね！－！」

言つなり、ツカサは地を蹴つて安全なルートを確保しながらシールドの、淵に急いで駆けた。しかし。

「…ツカサ、逃げろ！－！そこの建物に攻撃があたる！－！」
「え？」

ヒカルの焦つた声に、ツカサが上を見上げると、ドオオン、と音がして、建物の一部が崩れて落ちてきた。子供を抱えて急いで跳ぶが、距離が足りず、瓦礫の下敷きになる、と思わず覚悟したとき。

「キングダムクラッシャー！－！」

ツカサめがけて落ちてきた瓦礫が、突如出現した鉄球に碎かれた。

「な…なに？」

「大丈夫ですか！」

真っ白い、右手に鉄球の鎖が繋がつた、騎士の兜を被つた女性が、後ろに立つていた。

「は、はい。…あ、早くこの子を避難させなきや！－！」

しかし、すぐさまツカサの目の前に、ウイルスたちが立ちはだかる。

「させない！－！ロイヤルレッキングボール！－！」

しかし、白い騎士の女性は、鎖を回転させて、鉄球を振り回し、それを投げる。まっすぐに、道が開く。

「今のうちに……早く……」

「はい……」

ツカサは必死でこちらに向かつてこよつとする女性を見つけて、小さい男の子を、その女性…お母さんに渡して、急いで先ほどの場所へかけ戻る。

白い騎士の女性は、ウィルスを何体かいつぺんに消しているが、それでも、どうしても避けきれない攻撃があった。

「危ない……」

「ロケットナックル！！」

焦るツカサの声に重なるようにして、ヒカルの腕からロケットナックルが放たれた。

「手間かけさせんなよ……」

たつ、と着地したヒカルは、女性にそいつて、ウィルスの群れに突っ込んでゆく。

「無茶はしないでください……」

ツカサが駆け寄りそういうと、白い騎士の女性は、頷いて。

「……でも、私は最後まで戦うわ。…私はこの国の王女。守るために力があるのに、何もしないでいるなんて、できない……」

そういうて、ヒカル同様、ウィルスの群れに突っ込んだ。

王女様だったのか、ヒカルとツカサとヒカルとジェミニは内心で突っ込んで、ツカサもやや遅れてウィルスの群れに突っ込んだ。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙

ウィルスがツカサとヒカル、白い騎士の手により一掃されて、シードが解けると、白い騎士の姿が薄れて、代わりにこの時代の通信

端末P E Tと、先ほど見かけた王女が出てきた。
ツカサもやや遅れて、電波変換をといた。

「…あなた…」

王女は田を見開いて、P E Tとツカサの顔を交互に見て。

「…双葉ツカサ…くん?」

「…そう、ですけど…なんで僕の名前を…」

ツカサが首を傾げると、王女はP E Tを差し出し、一枚の[写真]と、文章を表示させる。

「光博士から、あなたを探して欲しいと連絡が」

映し出された[写真]は、確かにツカサで、ハンターV Gをつけている。

^ …光博士って誰だよ? ^

「IJの時代の有名な博士ですよね?ええと…」

ヒカルの答えに返答もかねて、ツカサは王女に訊ねた。

「私はプライド。気軽にプライドって呼んでくれて構わないわ」

「はい、それで…」

ツカサの質問に答えてなかつた、と書いた顔をして、クリーミュラン
ドの女王…プライドは頷く。

「あ。ええ、ツカサの書つとおりそりそりよ。…でも、二ホンの科学省
に行くにしても遠いし、疲れたでしょ?」

そのプライドの質問にツカサの返答はなく、くわくわ…と何か、お
腹が鳴るよつた音がして。

「…お腹すいた…」

ぐつたり、とツカサはその場に座り込む。

『やついや、お前が電波変換してたのは空腹からだつたな…』

ジユミーの言葉に、ツカサは力なく笑つて、プライドは。

「じゃあ、一緒に来て。…あなたはこの国を守る事を、手伝つてくれたヒーローだもの。誰も文句は言わないと思つわ」
プライドに半ば引きずられるようにして、ツカサがたどり着いた場所は、やはり。

クリームランドの、王城であつた。

「……わー」

『流石王城。FM王の宮殿みたいだ…』

「そういやお前、右腕だつたな…」

『あ、そつ言えばジユミーはFM王の右腕だつたね』

同時にヒカルとツカサは呟く。

とりあえず食事の前に風呂で身体を洗つて、出されたものを好き嫌いなく、食べれるだけ食べて。プライドの案内で、ツカサは小さな部屋の前にいた。

「この部屋を使ってね、ツカサ」

「つわ！…」

『広いなオイ』

ツカサは驚愕してその場に固まり、ジユミーも突っ込みを入れる。
小さな部屋、といつても王城なので、随分と普通の宿屋の部屋に比べると広いのだ。

「一応、一番小さい客室なのだけ……そんなに広いかしら…」
こくん、とツカサは頷く。

でも、と前置きをして。

「なにからなにまで、ありがとうございます…」

「いいえ。あなたのおかげで幸い、重傷者や、死者は出なかつた。

アレだけ大量のウイルス……私一人じゃ、きっと死者どころか重傷者さえ出さずにいる事は、難しかつたもの。… ゆっくり休んでね」
クスツ、とプライドは微笑み、その後、酷く寂しそうな瞳をする。
それは、力のない自ら悲しむ瞳か、そう分かるだけの力しかない自らに苛立つ瞳かは、判断が付かなかつた。

「はい、おやすみなさい」

プライドに頭を下げて扉が閉まったのを確認して、ツカサは、天蓋つきのふわふわベッドにもぐりこんで、目を閉じるや否や、眠りの淵に引きずりこまれた。

今日一日の出来事を、整理する暇もなく引き込まれた辺り、疲労はピークだつたようだ。

…迎え入れられた先が王城という、緊張から来る精神的な疲労が。

< > < > < >

その後、科学省で徹夜復旧を完全に終了させ、その後すぐにプライドから『双葉ツカサを保護した』、とメールで知らせをもらつた祐一郎は、ひとまず『星河スバル、双葉ツカサの保護』と『科学省復旧』という、今現在の心配事の枷が取れたようで、その場に倒れこんで寝てしまった。

しかしその後すぐに、交代で來たばかりだが、事情をきちんと知っている科学者たちにより、担架で仮眠室に運ばれた。

だが、光博士が倒れた事により、スバルや熱斗、一同はツカサが保護された事をしらないままだつた。

翌日の予定（前書き）

昨夜眠い中書いたので、ただでさえ低クオリティなのが、更に低クオリティですよ…支離滅裂すぎる…

そんなこんなで、テストが近いので、更新が遅くなるかもしません。

明日の予定

そんなツカサの状況を全く知らない、二ホンにいる未来組一人。時差があるので、ツカサがクリーミームランドを、絶賛と迷っている時間帯にまで戻して、一旦こっちの話も進めよう。

▽▽▽▽▽▽

まずはスバル。

熱斗の家にたどり着いてまずは説明。

「……と、言うわけなんだけど」

「それは良いけど、熱斗の部屋に泊めるのもねえ……」

そういう熱斗の母、光はる香はふう、とため息をついた。

「え？」

熱斗が首を傾げ、ついでにスバルも首を傾げる。

「だつてスバルちゃん、男の子の部屋は気にするんじゃないかしら？」

「『え』」

熱斗とロックマンは、そろって絶句する。

「いえ全く。家の部屋が、男の子みたいになつてます」

はる香の一言を、さっくりスバルは否定する。

が、はる香はそうはない。

「……でもねえ……あ、私と一緒に寝る? タブルベットだから、スバルくんもゆつたり寝れるわ」

「……じゃあ、お言葉に甘えます」

スバルは躊躇つた後、そつ返事をする。

はる香はぱん、と手のひらを合わせて微笑む。

「はい、決まりね。……あ、でも服はどうしようか……」

「今日の分の下着は、ちょっとド派手に見る用事があつたので、買いました。……パジャマはないんですけど……」

スバルは斜めがけのリュックサックを一度軽くゆすった。

スバルの言葉に、はる香は大丈夫よ、と肩に手を置く。

「熱斗の小セレブリティがあるから、出しておくわ。だから、お風呂に行つてらっしゃい。ゆっくりね」

「はい。ウォーロックはここにいてよ」

スバルにしか、ビジラライザー越しに見える相棒にそういうて、スバルは風呂場に消えて行つた。

「……ママ、いつからスバルが女の子だつて気づいてたの……？」

『……僕も気が付かなかつた……』

全然気が付かなかつた一同の中で、一番最初にスバルが『女』だと知つた熱斗とロックマンは、ぎぎぎ、と音を立てる首を、なんとかかんとか、はる香のほうへ向けて、問いかけると。

「最初からに決まつてゐるわよ。だって、髪長いし、身体のラインがとっても柔らかいじゃない」との返答をいただく事となつた。

▽▽▽▽▽

続いて、ミソラ。

ジャスミンが住んでいる動物園の、ジャスミンの部屋に来て、全員

お風呂に入つて、パジャマに着替えた。

ミソラの着ているパジャマは、ジャスミンのチャイナパジャマである。メイルは泊まりに来た事があるので、ハートがあしらわれたパジャマを着ていた。

今は夕飯も食べて、女の子のトークタイム突入である。

「へー……ジャスミンって動物園に住んでるんだね」

「修行でこっちにきて、それ以来ずっとね。いい修行になるね」
ジャスミンは机の椅子に、ミソラはベッド、メイルはソファーにそれぞれ座っている。

『…そう言えばミソラちゃんとハープって、すつじく強いよね』

『そうそう！一人で戦えるって凄いわ！！』

ミソラは互いにフォローしあわねば、厳しいところのあるロールやメディと違い、一人で戦えるのだ。

「私なんかまだまだよ。スバルくんの方が戦闘歴長くて、強いもん」

ミソラがジャスミンのパソコンに写る、ハープにそう告げると、随分と謙遜しちゃつて、と笑われた。

「あー……確かにすごく強いよね。…圧倒的だつたし…」

「確かに、凄く強かつたネ」

メイルとジャスミンの脳裏に、様々な姿に変わるスバルの姿が浮かぶ。

「あの力…ペガサス、ドラゴン、レオ…あれはスターフォースつていつて、スバルくんと、ロックくんの力だから。スバルくん曰くhapeと私じゃ、あの力に全然、波長が合わないんだって」

『へー……』

『波長が合わない……まるでクロスフュージョンみたいね……』

『まあ、そういうえるかも』

ロール、メティ、ハープもその会話に興味を示す。

「……ところで、スター・フォースがスバルくんにしか使えないのって……なんで、ハープ？」

不意に、前々から持っていたらしい疑問を、唐突にミソラは訊ねた。
『あの力はAM三賢者……つまり、AM星人の力なの。そしてウォーロックも、AM星人。だから、FM星人である私じゃなくて、AM星人のウォーロックに波長が合つるのは当然つてわけね』

えーえむせいじん？とメイルが呟き。

えふえむせいじん？と、ジャスマシンが呟いた。
ミソラが傍にあつたペンと紙を引き寄せる。

『人』プラス『電波体』と書いて、最後に、と『電波人間』と書いた。

「私達がさつきみたいな姿……電波変換するには、パートナーとなる電波体……つまり、私達からしてみれば、宇宙人が必要になるの。言うなら、クロスフュージョンみたいなものかな？」
ねえハープ、とスバルが問いかけると、ハープは頷き。

『スバルの場合は、そのパートナーがAM星人だった、って訳なの。……なにもあんながさつをパートナーにしなくても良いんじゃないかな』

ハープは、本音からそう呟いた。

「お父さんの手がかり、ロックくんしか持つてなかつたんだって」ミソラがそういうと、ハープはそうだったわね、という表情をする。ええと、と話についていけず、田線を向ける一同に、ミソラとハープが言った言葉は。

「スバルくんのお父さん、宇宙で行方不明だつた時期があつたんだ。そんなときには、ロックくんに会つたんだって」

『そういうえば、自殺しようとした事もあつたつていつてたわね』

ちょっととハープ、それは言つちや…と、ミソラが言つ前に。

「『自殺！？』」

ハープの言葉に、メイルとジャスミン、ロールとメティの声が綺麗にハモつた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

「くしゅん！」

盛大に、スバルはくしゃみをした。

「どうしたんだ、スバル？」

「どうしたの、スバルちゃん？」

現在光家は夕飯の真っ最中だつた。ちなみに夕食はハンバーグカレーとサラダである。

唐突にくしゃみをしたスバルに首を傾げて、熱斗とはる香が顔を覗き込んでくる。

「い、いや…なんか、噂されてる気がして…でも、はる香さんの料理凄くおいしいですね」

「あり、ありがと。そう言って貰えてありがたいわ」

恥ずかしそうに微笑むはる香は、不意に二人を交互に見て。

「… そういうえば、明後日から一人とも外国に行くんじゃないの？」

「うん、うだよ。でも、旅行鞄とか引っ張り出したり、スバルの服、どうじょうか…」

熱斗がはる香を見ると、はる香はあつさりと言い切った。

「お金はママが出すわ」

「あ、あの。この時代のお金僕持つてます！…だから、お金は大丈夫…」

流石にそこまでは、こうスバルを押しとどめて、はる香と熱斗は笑い。

「いいのいいの。という訳で、一人ともリストを渡すから、明日買^ル出^しに行つてらっしゃい」

といふ事で、スバル & a m p ; 热斗の明日の予定は決まった。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

「そういえば明後日から海外だよね」

「まずはクリームランドに寄るらしいネ」

「とりあえず、明日はショッピングだし」

早めに寝ようよ、と言ったメイルの言葉に。

「のんびりお買い物ー！」

『良かったわねえ、ミンク』

両手を挙げて喜ぶミンクと、それにくすぐる、と微笑んで見せるハープ。

とこう訳で、どちらも明日の予定は決まったのだった。

そして、流星&音符組のいる一ホンの、翌日。

く　く　く　く　く

「それじゃ、いってきまーす」

「いってきます、はる香さん」

肩にいつも通りのリュックを背負った熱斗と、斜めがけのリュックサックの中についた、制服をハンガーにかけてはる香のクローゼットにしまって、リュックの中を空にしたスバルは、光家玄関にいた。

「いってらっしゃい。気をつけてね」

穏やかに微笑んで見送るはる香に、一人は手を振つて、秋原駅に向けて歩き出した。

「ところで、熱斗くん。どこに買い物に行くの？」

「んー…まずは…デンサンシティ、かな」

スバルの質問に、熱斗は唇に指を当てながら、

「ほら、スバルの使つてるのは未来の通信端末だろ。いつうじや使えないしさ」

「あ…そうだった…」

熱斗の言葉に、スバルの後ろにいたウォーロックはつとづん、と何度も頷いた。

『ウォーロックくんは、僕らにも電腦世界か何かを介さないと、見えないから。言い方悪いけど…おばけみたいでやだな…』

『そういうやロック、お化け苦手だもんなあ。毎回悲鳴を上げるし。

ナビなのに、珍しいって言われるぞ』

『し、仕方ないじゃないか！！怖いものは怖いんだから…。』
怯えるようにそういったロックマンをからかう様に熱斗は言つて、
ロックは熱斗の肩で抗議する。

「…怖いものは仕方ないよ」

ね、となだめるように言つたスバルの類も、若干引き攣つてゐる。
それを見逃すウォーロックではない。

『スバルも怖いのは苦手だもんなあ』

「怖いものは怖いのっ！！克服したいなとは思うけど」

ウォーロックの言葉に、思いっきり叫び、小さい声で努力はしてい
るような言葉を呴く。ちなみに、その努力が、実る事はないのが実
状である。

「…スバルもお化け苦手なんだな。…ロックマンで、お化けが苦手
な性格なのか…？」

「さあ……でも、僕はお化け大っ嫌いだからね」

…語尾に音符をつけて、満面の笑みを浮かべるスバルの瞳は、全然
笑つていやしなかつた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

「ジャスミン、やつぱり最初は…」

動物園のある町の駅で、行き先をメイルが示すと、ジャスミンはこ
つくり、と肯定を示す。

「最初はやつぱり、デンサンシティに行くのがいいね
「デンサンシティ？」

「色々な電化製品がそろつている街なの。ミンカラちゃん、PET持

つてないでしょ？」

「あ……」

そうだった。現在ミソラの腕についているのは、PEトではなく、ハンターV Gなのだ。

「で、でも…高いんじゃ…」

ミソラがあらおろしながら一人に訊ねると、一人はにこり笑い。

「安心して、ミソラちゃん。私、それなりに稼いでるのよ?」「私もそれなりに稼いでるね。メイルと合わせれば大丈夫ネ」「クロスフュージョンできる人が貴重だから、と毎回戦う」と報酬が出でているのだ。

「といつ訳で向かうはテンサンシティネ!」

ジャスマシンの言葉で、一同はテンサンシティに向かつた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

現在、朝食を食べ終えたツカサは、ブライトに小さな箱を渡された。

「開けてみて。ツカサ」

がさがさ、と箱を開けてその中に入ったものを取り出したツカサは、目を瞬かせた。

「…」れは…PEト…

プライドからジョミーのマークの入った白と黒のPEトを渡され、ツカサは首を傾げた。

「あなたが使っているのは、未来の端末だと先ほど一ホンの科学省職員から、連絡が入ったので…そのままでは不便でしょう?」

「… そういうえはそうですね。ありがとうございます、プライド」
ふふつ、とプライドは微笑み、ツカサはありがたく貰った。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

PET売り場でPETの色で悩むスバルの横で、付属品売り場を見ていた熱斗は、スバルを振り返る。

「スバル、どの色にするんだ？」

「…これ、かな」

青をメインにした、薄い黄色のPET。それは、夜空を駆ける光の
ような色合いだった。

それを持って行くと、やはり当然ながら店員に訊ねられた。

「マークはどうある?」

「UJのペンダントの形にして欲しいんですけど…」

スバルは胸元で揺れるペンダントの紐を僅かに持ち上げて、それを示す。分かった、と頷いて、すぐさまできた平らな流星の形のプレートを、力ちり、とはめ込まれてPETを渡され、それを自分で買ったホルダーにはめた。

熱斗はメモ用紙を引っ張り出し、えーと、と唸り。

「じゃあ、次は服と鞄と、旅行用生活必需品でー…」

「あ、このお店だけ?」

スバルが小さく書かれた地図と住所を示すと、熱斗はそうだな、といつて二人は頷き合い。

「じゃあ、行こうぜ」

「うん」

熱斗の先導で、スバルたちは店を後にした。…ちなみに気づいていなかったが、入れ替わりにミンラたちが、PETコーナーに来てい

たことを知らなかつた。

ミフヲは黄色とピンクの鮮やかな色合いの、音符のマークが入った
PETにした。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

特に騒ぎに巻き込まれる事もなく、何度も確認しながら覗いてべきものを選んで、二人は安全に家に帰宅したが。

「…つ、つつかれたー…」

鞄に買つたもの全てを入れて、それを引いて一人はぐつたりと倒れこむように、玄関の入り口に座り込んだ。

「お帰りなさい、熱斗、スバルちゃん、ロック、ウォーロックくん」
二人ははる香に迎えられて、顔を上げる。

「ただいま、ママ」

『ただいま、ママ』

「ただいま、はる香さん」

『ただいま、おふくろさん』

ウォーロックの言葉に、いち早くスバルが突っ込んだ。

「ロック、僕んじゃないんだから、そういう呼び方は…」

「いいわよ、スバルちゃん。結構新鮮で珍しい呼び方だもの」

ふふ、と微笑むはる香の笑顔に負けて、それ以上スバルはウォーロックを追及しなかつた。

「お疲れ、ご飯まで準備してたらどうかしら？ 明日の出発は早いみたいだし」

二人ははる香の言葉に、一も二もなく従つた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

こちらもそれぞれ一通り買い揃えて、メイルだけは家に一度帰らねばならないので、分かることとなつた。

「じゃあね、メイルちゃん、ロール」

「また明日ね、メイル、ロール！！」

「じゃあね、ミンラちゃん、ジャスミン」

女性陣はそれに分かれて家路に着いた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

明日は、星のお姫様と、光の王子様の再会。
それは、どんなやさしさをもたらすのだろうか。

P.E.T.入手（後書き）

：最後、童話風な言い方にしたのは、今のところぜんぜんラブラブに見えないから、フラグを立てようかと。

番外編02（前書き）

：投稿する時間がなかなか取れないので、誤魔化しもかねて（コラ）あと、キャラ崩壊もあるので、苦手な人はスルーの方向で。

光熱斗（以下・ね）「こんちわ！！またまた来ました番外編！！つてことで話を進めるのは『ロックマンエグゼ』主人公こと、この俺、光熱斗と…！」

ウォーロック（以下・ウォ）「よお…『流星のロックマン』主人公のウイザード、ウォーロックだぜ」

ね「前回はロックとスバルだったから、この前出てなかつた俺とウォーロックで話を進めて…『ていうかだべれ。つーか、だべつてきやがれ』、だつて」

ウォ「…なんか作者、精神状態やばくねえ？」

ね「なんだか今日は簡単なテストですんだらしいんだけどさ、…次週が苦手科目の連打なんだつて」

ウォ「地球人は大変だな…てすとつてのがあつて」

ね「まあ、そんなやばい時期に投稿するほうが大変だと思つけどな。…点数とか」

ウォ「まあそれはいい。で、何をだべれと？」

ね「あ、うん。えーと『自分のパートナーについてだつて

ウォ「…自分のパートナーに対する愚痴ならあるぜ？』」

ね「え？なんか以外だぜ。スバルってそんなのから縁遠いかと…」

ウオ「…と、に、か、く寝起きが悪い。毎朝毎朝、俺だつて苦労してんだ…あと、星を見に行つたら無言で一時間も三時間も付き合わされて、いついちは暇なんだーーー！」

ね「…なんか、ロック（エグゼ）の愚痴聞いてる気分だ…」

ウオ「…んで、後は風呂と着替えか」

ね「なんでまた、風呂と着替え？」

ウオ「あいつ女つて事忘れてるときと忘れてないときの差が激しいんだよ！…忘れてなかつたら自然に外に出てけるが…忘れてたりしたらいきなり目の前だぞ！？しかもその後問答無用で、ハープたちこぼこられるしょ！…俺が何したってんだーーー！」

ね「…スバルの着替え見たからじゃないのか？」

ウオ「俺のせいか！？」

ね「…まあ、それについては触れない方向でいくか」

ウオ「俺の切実な叫びは無視か！？」

(無視) ね「…えーと…とにかく口づめをいし、説教好きだし…」

ウオ「あ、それはスバルも一緒だな」

ね「あ、やっぱり？でもさあーーー」

ス
「
口

つ
ク

う
・
？
」

E
-
ね

כ ה ג

۶۰

ハ井へ井戸井（せんじての場）

ね&ウオーレンは「いつからセリフ?」というか、「めかこね?」

番外編02（後書き）

熱斗のキャラがうまく掴めてない……スバル&ロックのキャラ壊れた……短い……短い……

テストがよつやく終わつたああああああああ…きつところ死ねる。点数で。

過去での再会（あとがきに、番外編の詳細）

そして、出発の日。

はる香と、この時代のチップショップの店主、日暮闇太郎と、そこ
の従業員、城戸舟子、そして熱斗の同級生氷川透に見送られて、一
同は飛行機の中にいた。ちなみに、祐一郎、名人はいまだに科学省
復旧に関わっていて、見送りにこれなかつた。

この飛行機に乗ったメンバーは、

星河スバル
響ミソラ

光熱斗

桜井メイル
伊集院炎山
メイル
ジャスミン
ディング
六尺玉燃次

そして先ほどスバルとミソラが初めて会つた、熱斗達の同級生、

大山デカオ

この飛行機の所有者、

綾小路やいと

がいた。

チャーリーとテスラはチャーリーのベリで行くそうだ。

とりあえず、乗って最初に絶句したのが、内装だったりするスバルとミソラであった。

「…ふかふかなソファーがある…！」

「…ふわふわなベッドがあるわ…！」

金持ちや豪華、と言つたものから縁遠い一人は、そう叫んで絶句する。

家の居間、みたいにも見えた。

委員長も社長令嬢だが、さすがに自家用の飛行機は見たことない。

「ソファーは好きなところに座つて。ベルトはしっかりね」
そういうてやいとは四人がけのソファーに腰を下ろす。その隣に、早くも順応したミソラと、ジャスミンと、メイルが腰を下ろす。

「だつてさ、行こうぜスバル」

熱斗とティンゴにポン、と背中を叩かれて、スバルは肩に乗つてい るウォーロックのホログラムを見る。

「……」

『行きやーいいだろ』

熱斗とティンゴとテカオは、四人がけのソファーに座つている。

そして、そのソファーに向かい合つようにしておかれのソファーに、炎山、燃次が座つている。

スバルもそこに座ろうかと思ったが、傍にあつた本棚に何気に目が行つて、そこに星の本を見つけて。

すぐさまその傍にあつた一人がけのソファーに座つて、スバルの手のひらほどの幅がある本を引っ張り出した。

『はええなおい…』

ウォーロックの突つ込みも何のその、星に関する本を読むスバルは、止めようがなかつた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↘ ↗

同時刻、クリームランド。

プライドは執務室に籠つて仕事をしているので、ツカサはクリームランドの図書館に来ていた。

「広いなー…」

『ホントだな。で、何を読もうと思つてるんだ』

ツカサの肩に乗つた、ジョニーのホログラムは、ツカサに問いかける。

「IJの時代のPETとか、そういうのが詳しく書かれた本かな？」
♪司書に聞いた方がはええぞく

やれやれ、と言つた口調で、呟くよつて言つヒカル。

「分かつてりつて、ヒカル」

ツカサはヒカルの言葉に返事を返し、足を踏み出した。

↙ ↘ ↙ ↘ ↘ ↗

「わあー」

いつもと違つた景色に、ミソワは感嘆する。

「スバルくん、スバルくん、下見て、凄いよー！」

窓際にいたミソラが、本に集中しているスバルを手招きする。

しかし、スバルは反応せずに黙々と本を読んでいた。目が右から左へと移つてゆくことの繰り返しだ。

ちなみに、五分の一ほど読み終えていた。

「……」

むづ、ヒリヒリな声を半眼にする。しかし、めざすに呼ぶ。

「……」

「わあー、雲が真下にあるよ……ほらほら、スバルくん見て……」

「……」

ぱうつ、と本をめくった程度で、反応皆無。

「……ミソラちゃん、どんまい」

そうこつたメイルが代わりに窓を覗き込む。

「…メイルちゃん…」

いかりを見むヒリヒリの瞳が、ありがとう、と語りついでいる。

「せういえば、やつぱつヒリヒリの好きな人って…スバルくん

？」

ふと、メイルはミソラにせうい聞こかけるが、どんよりした雰囲気で、ミソラは首を横にふった。

「……私だとスバルくんと付き合つのは、無理なんだよね…」

「何でよ? チャレンジもしないで諦めるワケ?」

やいとも、ミソラを覗き込んで聞いかける。

しかし、ミソラはでも、と齒ぐ。

「…チャレンジ以前の問題で…って、あれ? 言つてなかつたつけ?」

「何をネ?」

きょとん、とメイル、やいと、ジャスミンは首を傾げ。

「スバルくん、女の子だよ」

しつつ、ミソラが告げた言葉を理解するのに、少々の時間が空き。

「なんですってええええええええ
！」

女性陣の絶叫が、飛行機に響き渡った。
そして、女性陣の後ろにいた男性陣は、何事かとただ絶句して女性
陣を見る。
唯一、スバルだけが自分の世界に閉じこもって、黙々と本を読んで
いた。

「え、ちょっと待って？…スバルくん、男の子じゃないの？」

「うん、女の子」
メールの言葉に、ミソラは肯定を返す。

「……女の子？」

よつやく騒ぎの理由が分かつた、ディング、デカオ、燃次は揃つて、
絶句してくる。

「あ、そっかあ。皆は知らなかつたね」

熱斗はそうだった、と返し。

「気づいていると思つていた」

炎山は気づいてなかつたのか、とため息をついた。

「熱斗は知つてたのか？」

デカオに訊ねられて、うん、と熱斗は頷いた。

「俺も気づいてなかつたんだけど、ママが気づいたんだ。まー驚い
た驚いた」

『うつかり同じ部屋になつたら、大惨事になつてたかもだよ
確かに、色々と大惨事になつたかもしれない。』

『最初はそのつもりだつたしね。ママと同じ部屋になつたけど』

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

『ツカサ、通信だぞ』

図書館で数冊の本を傍らに積み上げて、黙々と読んでいたツカサはジエミーの声で、それを中断した。

「誰から…って、決まってるね」

『そのと一りで、プライドだけだ』

ツカサはいつもの癖で訊ねて、今自分の持っているP.E.Tにアクセスできる一人を思い出す。

ジエミーは頷いて、通信を繋いだ。

「はい、ツカサです。どうしたんですか？」

小さな画面に映るプライドは、頬を僅かながら紅潮させて、楽しそうに笑っていた。

『ツカサ、貴方の仲間と一緒に私の友達が来るの…！一緒に行きましょう…！』

「…仲間って…スバルくんと、ミソラちゃん？…というか、ビニ…ツカサが首を傾げていると、プライドは優しく微笑んで、答える口にした。

『空港よ。図書館の前に出ていて。迎えに行くから』

「はい、分かりました」

かたん、と椅子を引いてツカサは本を返しに向かった。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

「おもしろかつた」

『へいへい。そりや良かつたな』

分厚い本を閉じるなり嬉しそうに、スバルはそう言った。
ウォーロックは正反対にぐつたりと、相槌を打った。

『お前、全然反応しねえんだもんよ…人が散々…』

「え？ ロック、何か言ってたの？」

ウォーロックが嫌味をこめて言おうとするが、スバルはきょとん、
とそう返す。

『……ったく、俺は寝てるぞ…』

「ちょ…ロック？ どうしたの？」

拗ねてスリープモードになつたウォーロックに首を傾げながら、ス
バルは本を本棚に直した。

「スバルくん、下見て、凄いよ…！」

再び窓際にいたミソラが、スバルを手招いてる。

「そうなの？」

スバルは窓際に歩み寄つて、窓の下を覗き込む。

「わあ、本当だ凄い…！」

「でしょ？」

スバルとミソラは、顔を見合させて笑う。

「…〃ソラちゃん、強い…」

「本当だわ…」

「ファイトネ…」

メイル、やいと、ジャスミンは揃つて、ミソラの打たれ強さに感心
し。

「…本当に本を読んでるときつて、スバル、何言つても聞こえない
んだな」

『熱斗くんも見習つたら？ 勉強に關して』

読書時あまりの外部拒絶っぷりに、感心した熱斗にロックマンから正論が飛び、隣で炎山とブルースに揃って頷かれた。

「すげえな……俺らのカレーの仕込みぐらい、集中してたぞ……」
「ホントだな……」

「花火も纖細だから、あれぐらいやらねえとまずいか……」
細やかな作業が求められる『ティンゴ』、『カオ』、燃次は「つむ、と悩んだ。

『まもなく、クリーミランデ空港です。座席に着き、シートベルトを着用ください』

そんな一同の元に、ナビのその口説詞が届く。

「え？ そんなに時間経つてたんだ……」

『……時間の流れさえシャットダウンしてるんだ……』

スバルがきょとんとし咳くと、ロックマンは本当に凄いなあ、と咳いて、感心すると同時に、呆れたのだった。

↙ ↘ ↙ ↘ ↘ ↘

「……あ、あれですか？」

ツカサが指した先には、ピンク色の飛行機。

「ええ。熱斗のクラスメイトで綾小路やことさん、と呼ぶのだけど、彼女の飛行機だそうよ」
プライドがそぞろうと、ツカサは絶句した後。

「……飛行機持つてるつて……」

よつやくそれだけ呟いた。

委員長も資産家令嬢だが、自家用ジェット機を持っている、なんて聞いたことない。

どこまでがお金持ちか、という感覚が全く理解できない、ツカサであつた。

↖ ↖ ↖ ↖ ↖

荷物を受け取つた一同は、出迎えロビーに来ているはずの人物、プライドに会うために、辺りをきょろきょろ見ていた。

熱斗曰く『かなりの美人でふわふわ金髪で、俺見たら一直線に抱きついてくる友人』だそうだ。

「…大雑把だな」

それを聞くなり炎山がそいつたが、熱斗は。
「…ういわないと、プライドが誰か、なんてスバルたちが分かんな
いじやん」

両手を腰に当てて、きつぱり言い切る。
炎山はしかしだな、と前置きをして。

「もう少し説明と言ひ…「…ねつとーーー！」

炎山の説明を遮り、ぎゅう、と金髪のふわふわな女性が、熱斗に抱きついた。

スバルとミソラはビックリして、固まる。

「プライド、久しぶりーーー！」

「久しぶりね、熱斗。元気だつたかしら？」

熱斗の言つとおり、確かに

かなりの美人

ふわふわ金髪

熱斗を見たら一直線に抱きついてくるに、当てはまつた。

しばらく一人とも抱擁していたが、プライドがほけつ、と突っ立つスバルとミソラに気づいた。

「…あらっ！ たちの人たちは見慣れないけれど…」

「あ、今回この国に来る理由になつた、星河スバルと、響ミソラちゃん」

熱斗はプライドに離してもらいながら、スバルを指してから、ミソラを指した。

じい、とプライドはこう見ていたが。

「かわいい！」

「うあつ！？」

スバルも熱斗同様、ぎゅう、と抱きしめられた。いきなりすぎて硬直したスバルは、あちらこちらに視線を彷徨わせた。

「あ、自己紹介がまだだつたわね」

そして、プライドはそういうよつやく開放した。

「私はプライド。よろしくね、スバル、ミソラ」

そういうて差し出された手を、二人が握り返した途端。

「ちなみにプライド、クリーモランドの王女様だよ」

と言つ熱斗の声で、無言で固まつたのは言つまでもない。

しかし、それは一人の声で壊された。

「スバルくん……ミソラちゃん……」

後ろから聞こえてきた声に、びくつ、とスバルとミソラの肩が跳ねた。

二人が振り返った先にいたのは、黄緑色の髪の少年。しかも、その少年は、スバルたちによく知る…

「……ツカサ、くん？」

ミソラがこわいわ問い合わせると、こくり、と頷いたのは。

「無事でよかつた、スバルくん、ミソラちゃん」

穏やかな眼差しで微笑む、軽装な少年は、双葉ツカサであった。

ツカサの傷一つない無事な姿を見たスバルは、とん、と身を翻し、ツカサの差し出した腕の中に飛び込んだ。

「……ツカサくん……つ……無事で……よかつ……た……」

「……スバルくんも、無事でよかつた」

安堵して言葉につまるスバルを、ツカサはしつかりと、抱きしめた。

過去での再会（あとがきに、番外編の詳細）（後書き）

甘く書けないよ…苦手なもの多かったから…（愚痴）
…はい。

てな訳で、お久しぶりです、月峰夕です。

テスト準備期間 & テスト期間

だつたのでだいぶ間が空いた上に、番外編がぐだぐだすぎて…ぐだ
ぐだはいつものことですね、うん。

今度はきちんとした番外編を乗せようかと思つてます。明日か、明
後日ぐらいに。

本編とは離れた時間枠で書こうか書くまいが、悩んでるんですけど
ね。

いつそ、座談会とか。

それと、おそらく夏休みは…あんまり…といつより、完全完璧に、
こちちは投稿できないと思います。

こちらに投稿せず、本編時間枠総無視の

番外編

…本編が季節の時間枠総無視なので、時間枠にあつた行事を書こう
と思っています。

それでなのですが…もしよろしければ、キャラクターを作つていた
だけないでしょうか。

私の作るキャラはワンパターンなので…募集しようかと思つていま

す。

以下に、決まりを乗せておきます。

- ・投稿は一度きりで、投稿するキャラは一人だけ。
- ・性格は詳しく、容姿も詳しく書いてください。ナビか、ウイザード、どちらかがいるのなら、マークと、ナビ&map・ウィザードの性格も詳しく。

そして、完全にこちらの都合になりますが…

- ・年齢は大体12～19ぐらいの間で。
- ・性格や設定の、多少変更あり。
- ・一回きりの出番。

以上でも構わないといつ心の広い方がいらっしゃいましたら、よろしくお願いします。

P・S『20000アクセスありがとうございました！』

番外編03（前書き）

… 番外編でのスバルのキャラ崩壊が、当たり前になつてきたような

ス「今日は番外編。つてことで、星河スバルと、光熱斗でお送りしまーす」

ね「作者曰く、主人公、Sに座談会進行役任せのロック&・ウォーロックはセット側で見学中だぜ」

E「やつほー」

ウオ「よお」

ス「それはいいけど、熱斗くん。前もつて言つとくけど…余計なこと言つたら即退場。だからね（につけ）」

ね「お、おうよ…（スバルの笑顔の後ろに黒いのが見える…）」

ス「とりあえず、なにをすればいいのかな？…あ、メモがあった。…BGMは、最近小説書くときに聞いてる、某家庭教師のアニメのキャラソンで、虹の大空のお孫さんの曲つて…この場所の雰囲気と曲があつてない…！…というか、作者の趣味全開だよこれ…！」

ね「あ、俺もメモ見つけ。なにに…最近はこれと僕達の漫画を出している、発行所の某会社のカードゲーム漫画、そのアニメの『クロス』のときのOPつて…うつわあ、すごい両極端だな…！…あんまり知られてないって分かつて聞いてるつて

ス「確かに…！…キャラソンがすごく穏やかな曲なのに、OPかなり賑やかな曲だもんね…」

ね「あ、続きがある。えーと…『キャラソンは普段、〇〇はバトルとか考へてる時に聞いてる』って」

ス「確かに穢やかな曲じゃ、バトルは難しいね」

ね「まーな。元々バトル描写が凄い苦手だそうじ。この小説にしてみても、普段のマンガイラストでも、慣れなきやつて結構苦労してるみたいだしなー。さて、作者はほつといて、スバル、番外編の座談会、今回のお題は？」

ス「…えーと『尊敬してる人と、パートナーについてどう思つていますか？』だつて。パートナーについてはこの前やつたよね…まあいいか。熱斗くんの尊敬してる人は？」

ね「尊敬してる人は…やっぱりパパだよ…時々パパってば無茶もするけど、とっても頼りになるし、やっぱり男たるもの父親が目標だし…！」

ス「あ、僕も。父さんの影響で、宇宙が大好きで、宇宙飛行士になりたいって思つたし、父さんの言葉にいっぱい、助けられたから」

ね「ロックについては…説教されたりして喧嘩もするけどや、やっぱり一番のパートナーだぜ！！でも、パートナーつても…俺らの場合、特殊だしなー。ロックが彩斗兄さんなんだから」

ス「あ、そつか。まだ『タイヒメ』本編では触れてないけど…熱斗くんとロックマンで双子なんだよね」
ロックマン、熱斗に光彩斗、光熱斗兄弟（五歳）の写真を渡す。

ス「あ、写真ありがと、ロックマン。うわあ、ほんとやつへりー！」

ね「一卵性双生児だし、似てて当然だろ」

ス「普段の性格、違うナドね」

ね「それは言わない。自覚あるし。そういうスバルは？」

ス「僕は……愚痴つてからで良い？」の前ロックが愚痴つてから、
僕も愚痴りたい」「

ね「別に良いぜ？ ビギ」

ス「……まず第一に、星を見てるときに邪魔しないんで欲しいよっ！
！」

ね「あ、そういうや星見たらー、二時間は見てるんだっけ？でも、何
言つても反応しないって言つてるけど……」

ス「無視はするけど、ロックてば結構つるそこだよ。あと、人の望
遠鏡壊さないで欲しいなー。確か、この前一台田中壊したし。……
性能が良いのは、とてつもなく高いんだって……」

ね「……どんまい」

ス「でも、ロックに出会えたから今の僕がここにいる。……昔は人と
の絆を考えるだけでも凄くいやで、関わるなんてことは論外だっただ
し。ましてや、誰かの為に動くなんて事はね。……ロックは、絆の力
を教えてくれた、大事なパートナーだよ」

ね「スバル？」

ス「でも、だからと言つて人の望遠鏡壊した罪は消えないよ？…一台田の、ちょっと奮発して買ったのに…高性能倍率装置も付いたのに…！」

ね「…スバル？」

ス「…それに、その傍にあつた、折角人ががんばつて作った…星の模型も壊して…」

ね「…す、スバルさん？聞こえますかー？」

ス「しかもしかも、その余波で父さんと一緒に作つてできたばかりのロケットの模型も壊して…思い出したら腹立つってきた…！」

ブチン。

ね「ぎやあー！スバルが切れたー！ウォーロック逃げるー！」

ウオ「あうよつー！」

ス「逃げるなー！」

ウオ「逃げるに決まってるだろー！死にたくねえー！」

ス「なら…マテリアライズー！電波銃ー！えいっー！」

ドン。ウォーロックは避けたので、熱斗の斜め辺りすぐ上のセット、破壊。

ね「うわああああああつーー？」

E「熱斗くんーー！」

下敷きになる前に、慌ててロックマンに抱えあげられて、熱斗無事
救出。

E「大丈夫、熱斗くんーー！」

ね「俺は無事ーー！俺は無事だけ、ビーー！」

二人揃って、スバル&ウオーロックを見る。

ウオ「おまーーそれ反則だろーー！」

ス「問答無用ーー！」

ぱつ、と身を翻して逃亡してゆくウオーロックを、おもひやのよう
な電波銃を抱え、スバルは追いかけて退場。

ね「す、スバルがこええーー！」

E「鬱憤が相当たまつてたんだねーー！」

ね&E「これ以上は危ないので、今回はこれで終了ーーバ
イバイーー！」

双りの紹介

しばらく周りの雰囲気をシャットダウンして、互いだけの世界に浸つていたが。

『何やつてんだ、お前ら?』

ところへ、非常に空氣を読まないウォーロックの一言で、それがぶち壊されて。

『……ウォーロック、ちょっとといっちはらい』

『せつせとしなさい……』

何か、後ろに黒いものが漂つている、ジンギスカンハーブに引っ張られて、消えていった。

抱き合つていた二人は、スバルのほうがぱつ、と離れて、顔を真つ赤にしている。

「ん、んめん……」

「別に謝らなくても良いよ?僕としては嬉しかったもの」
くすくす、と楽しそうに微笑む、髪を後ろで結び、ラフな格好をしたツカラサに、スバルは顔を真つ赤にして更に黙ってしまった。

「じゃあ、改めてになつちゃうけど……スバルくん、ミソリちゃん、

無事?」

「スバルくんが助けてくれたから、無事だよ~」

ミソラはすぐさまそう返し、ツカラサも田立つ場所に傷のないスバルを見て、ほつ、とため息をついた。

「…良かつた、怪我、ないみた…」

言葉を途切れさせて、ぱつ、とツカサはスバルの腕を取る。

「…スバルくん、怪我はどうしたの」

酷くさめたようにも聞こえる、抑えられたツカサの声。

「え？…あ、えっとね、過去に来る途中で治っちゃったみたいなんだ。す”じよね、あはは…」

まさかたつた数日で完治したとは言えず、そうやつてごまかす。

「よかつたあ、スバルくんも同じだつたんだ」

「え？」

「ほら」

包帯が解かれると、まっさらには傷のない手のひらがあらわになる。

「僕もここに来てお風呂に入つたら、怪我が消えてたんだ」

「そ、そなんだ…」

スバルは硬い笑みを浮かべ頷きながら、パートナーが引きずられていつたほうをちらりと見て、いいたいことができてしまったな、と思つた。

「でも、無事でよかつた、スバルくん」

スバルの手をとつて笑うツカサと、穏やかに微笑むスバル。

「…ツカサくん、私は無視？」

むう、としたようにミソラが二人の間に割つてはいる。ついでに、ツカサにとられていなし、スバルの手をとる。

「さつ もう ちやん、自分で言つたじゃない。『無事』つて、
につけり、と笑うツカサと、む、と顔をしかめたミソラの間で、
ばちつ、と火花が散つた。

間に挟まれているスバルは、手を握られていて、避難は不可能である。

咄嗟に熱斗達を振り返るスバルだが、助けて、と田で言つ前に『無理！・絶対無理！・』とばかりにプライド以外の一回に、首を横に振られるのだった。ついでにナビたちにも、である。

唯一首を横に振らなかつたプライドは。

「ふふ、仲いいのね」

…穏やかにニコニコ笑つて、仲が良い、と弦くだけで、相変わらずの天然さを發揮して、空氣を読んでいなかつた。

空港にいるほかの客達も、その空氣を読んでいたのだ。
…お陰で、スバル&ツカサ&ミソラの半径2mには誰もいない。

そんな中、その空氣を壊したのは。

「お、随分とお早いおつきで～」

ひらひら手を振る男性と、その横に立つてゐるビジネススーツ姿の女性。

「チャーリーさん、テスラさん～！」

「チャーリー、テスラ～！」

『『ありがとうございます！』』と言わんばかりの勢いで、スバルはチャーリーとテスラの元へ駆け寄つた。

同時に熱斗も『この空氣から開放してくれてありがとう…』とばかりに、駆け寄つた。

何なんだ、と首を傾げつつ、写真で見ただけの少年がそこ立つることに、気づいて。

「んで、そつちの彼を紹介してくれるかい？スバル

「あ、はい。彼は……あれ？」

スバルは頷いて、ツカサを紹介しようとして。

ぱちぱち、と目を瞬かせて、スバルはじい、とツカサの瞳を覗き込む。

「どうしたの、スバルくん？」

穏やかに微笑んでいるだけのツカサが、ちょっとだけ首を傾げて、スバルの瞳を覗き込む。

ミソラも、首を傾げてスバルを見た。

「…ツカサくんじゃなくて、…君、ヒカルだよね？」

ツカサの微笑みが、少しだけ硬直する。

「何で出てるのさ。しかもいつの間に」

スバルはどうして、と僅かに瞳を半眼にしてみせる。

「…くくっ…あつはつはつはつはつ！」

ツカサは、急に楽しそうに大声で笑い出した。

プライドだけがきょとん、としていて、熱斗達は穏やかそうな見た目に反して、結構元気のよい性格なんだな、と思つた。

「…いやー、からかつてみようかと思つただけだつての。暇だつたし。もう戻…」「出てきたなら出て來たで、ちゃんと自己紹介して！」

もう、とスバルに睨まれて、先ほどまでのツカサとは、まるで別人のツカサは深く嘆息する。

「わーったよ！…」

「…えーと、俺は双葉ヒカル。よろしくな。ツカサとはまた別だから、間違えんなよ。…つつても、無理だけどな」

「ヒカル…？ツカサではないのですか？」

プライドが首を傾げると、ツカサ…いや、ヒカルはけどな、と前置

きをして。

「俺もあいつなんだけどさ、別物と考えてくれ。スバル、ツカサに代わるぞ。……なんでヒカル出てきたんだろ…」

ふう、と穏やかそうな表情で、スバルに苦笑して見せるツカサに、一同は首を傾げる。

「……なあ、ロック。……なんか、さつきまでと性格ちがくね？」

『うん。……まるで、身体の中に一つの人格があるような…』

「じゃこそ、と熱斗とロックマンは言葉を交わす。

「……ロックマンと彩斗兄さんみたいなもんか？」

『それとは違うと思うよ。僕も彩斗くんも、全く同じで少し違っているだけだし…』といつより、同じものだよ』

熱斗はロックマンの言つている意味が少しばかり理解できた。だが、それでも理解できない事が大半だ。

不意に、スバルはふに、と、ツカサの片頬を引っ張つて、口を開く。
「嘘つかない。ツカサくんに代わって。紹介が終わらないじゃないか」

「……じゃあ、頬にキスしてくれよ」

不意に良い事思いついた、とばかりにツカサの振りをしていたヒカルは笑う。

「……へ？」

スバルはきょとん、と瞬きをする。

「そしたら、大人しく引っ込んでやるよ。頬で良いから」

「……ええええええええつ！？やだー！恥ずかしいよーー！」

言葉の意味を理解したスバルは、顔を真っ赤にして、

「なら、もどんねえぞ？」

ヒカルがニヤニヤと笑いながら、あつ、と困ったような表情をしたスバルはしばらく悩んだ末に、顔を真っ赤にしたスバルは目を閉じると、僅かに背伸びをして、ヒカルの頬に、唇を当てた。

「これでいいでしょ！？早く変わつて！！」

むう、と無意識の上目遣いで、スバルはヒカルを睨みつけた。ヒカルは降参、とでも言う風に両手を上げた。

「……ほいほい。ほんとお前ぐらいだよなー、気づくのって。……なんでヒカル出てきたんだろ…」

じい、とヒカルなのかツカサなのか良くな分からぬ少年を、しばしひみつけていたスバルは、ふう、と息を吐き出す。

「ツカサくん、自己紹介。改めて、彼は双葉ツカサくん。僕の同級生です」

「はじめまして。双葉ツカサです。よろしく」

穏やかに微笑むツカサに、先ほどまでの賑やかさはない。

「あ…そだ、スバルくん。僕も良いかな？」

「何を？」

不意にスバルにそういったツカサを、スバルは見上げて首を傾げる。「頬つぺたのキス。ヒカルだけじゃずるいよ

かあ、とスバルは頬を真っ赤にする。

「……後でつ！…今はヒカルだけでも恥ずかしいのにつ…！」

「スバルくん、私もいい？」

そういうツカサくんこそ、スバルくんにくつつかないでよ

「ミソラちゃん……スバルくんにくつつかないでくれる？」
「そういうツカサくんこそ、スバルくんにくつつかないでよ

ばちつ、と再び二人の間で火花が散る。すぐさまスバルは熱斗の傍

に避難する。

「…ところでスバル、ツカサって、ヒカルってさつきは言つてたけど…」

「え？ あ、うん、えと… ちょっと色々あつてね。口が悪いのがヒカル、口調が柔らかいのがツカサくんって覚えておけば良いから」

熱斗の質問に、スバルは戸惑いつつ、適度なあたりで返答を返した。

『口が悪いと悪くないって…』

「気にしちゃだめだよ。ロックマン」

うつむ、と首を傾げるロックマンに、スバルはそういうて流し、いまだ火花を散らす二人をどうすべきか、迷いつつ、帰ってきてぐつたりしているウォーロックをP.E.Tに迎え入れた後に、結局一人の頬に口付けを送つて、やめさせたのであった。

軍人少年

とつあえず、帰ってきてぐつたりとしたウォーロックが、肩にホログラムとして浮いているスバルは、今回ばかりはなんとなく聞かないほうが良い、とあたりをつけて、無視する事に決めた。

「よし、じゃあ移動しようぜ……」

「まで、『ディング』」

くたびれたようにうつむいた『ディング』に、炎山から『待った』がかかった。

「まだライカが来てないんだ。もうちょい待とうぜ」

熱斗はそういうて手を頭の後ろで組む。

「ツカサくんが保護された、って今からメールしてももう着くだろうし」「

だつたら待つてやるうぜ、と熱斗がいつて、ふと気が付いたことがあつたスバルは、くる、とプライドを振り返る。

「…そういえば、王女さ…」「プライドよ。スバル」

につこり艶やかに微笑まれて、同性ながらにぞきまぎしつつ、頷きスバルは口を開く。

「…そ、それで、プライドさん。ツカサくん、いつ、保護したんですか？」

「この前の夕方だけれど…それがどうかしたの？」

スバルの質問に答えた後、不思議そうに首を傾げた。

「…誰かにそれ、連絡入れましたか？」

スバルはしばし考え込んで、次の質問をぶつける。

「光博士に、すぐに入れただれど……」

「えー？ パパ何も言つてない……」

プライドがぱちぱち、と瞬きをして答えると、熱斗が驚いたような声を上げる。

しばしスバル同様考え込むよつなじぐせをしていた、ロックマンが熱斗に声をかける。

『…熱斗くん』

「どうしたんだロック？』

熱斗は不思議そうにロックマンを見る。

『……時差から考えて、もしかしたらパパ、科学省の大まかでも大事なところの復旧で、徹夜した後に、そのメールが来て、ひとまずの問題』』とは片付いて気が緩んでそのまま寝ちゃつたんじゃないのかな？……単なる予想なんだけど』

「……ついでにその場で寝て倒れたかなにかしたりして、俺達に連絡入れるどこじゃなくて、職員の人たちに仮眠室に運ばれてつたんじゃないのか？ パパって、無茶するし』

本人達は知る由もなかつたが、予想、と言いつつも当たる辺り、流石息子達である。

「…ん？ 科学省？」

ふと、熱斗は何か思い出したように呟く。

『どうしたんですか、熱斗さん？』

それに気が付いたグライドが問い合わせてくる。ロックマンは何も言わず、熱斗を見上げる。こちらも何か思い出しそうな表情をして、黙っている。

「『あーつ……』」

急に揃つて、一人は声を上げ、慌てたように熱斗は急に鞄を開けると、スバルとツカサに、真っ白い箱を渡した。ミソラには、大きな目で白い箱を渡した。

「…何、これ？」

手のひらサイズで、あまり重くない。

「名人さんが作った、ハンターVGの充電器だつて」
いつの間に、とスバルが呟くより早く、ミソラが納得した表情で口を開く。

「あ、だから私の箱、大きかつたんだ」

『…ビーゆーことだ？ミソラ』

ジェミーが不思議そうに問いかけると、ミソラは箱の封を切つて。

「ほら」

ぱか、と開かれた箱の中には、充電器と。

『ミソラちゃんのハンターVG！』

スバルとツカサは口を揃えていった。

『この前、科学省からジャスミンの家に行く帰り…っていうか、科学省の入り口で名人と会ったのよ』

ハープがミソラの肩に、ホログラムで現れながら、そう言った。

熱斗&スバルは、メイル&ミソラ&ジャスミンより早く帰っていたので、無論、出会う事がなかつたわけである。

「それでね私達の時代の携帯端末の電源、入れてなかつたらもし未来と通じたとき、気づかないんじやないか、って言われて」

「確かに。充電器を作るため、ミソラちゃんのハンターVGを借りた、と」

ツカサが確かめるよう呟つと、ミソラはこくん、と頷いた。

「うん。ツカサくんの言つとおりだよ。主要なデータはP E Tに映してあるから、問題ないし」

ミソラはハンターV Gの電源を入れると、充電満タンな状態で起動した。

「うん、うまくいったみたいだよ！！」

「じゃあ、電源入れておこう」

スバルもツカサも、専用ホルダーに収まつたハンターV Gを起動させる。

「あ、そだ。ロック、勝手に出てきたら、僕、怒るからね？」

『はいはい。心配しなくても、P E Tのほうにいるっての』

起動させた後、スバルは肩に乗っかるウォーロックに念を押す。ウォーロックは気にした風なく、そう返した。

本当かなあ、と呟いたスバルに、ウォーロックが突つかかるより早く。

「あ、ライカ来た」

熱斗の声で、それは遮られた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

「熱斗、すまない！！」

緑色の軍服の上にマントを着込み、鞄を片手に持つたライカが、こちらに駆けてきた。

「出掛けに飛行機のトラブルがあつて、遅れてしまった」

「別に良いよ。俺らもさつきついたところだし、もう見つかったし

ぐつたりした表情で、ライカは熱斗にこれだけ返した。

「……連絡ぐらい入れてくれ……」

「もつつきそつだつたから良いかと思つてさ。プライドが保護してくれたんだ」

に、と笑う熱斗は、そういうて、事の次第を説明する。

「パパに連絡入れたは良いけど、パパから俺らに連絡が届かなかつたんだ」

「…光博士に何かあつたのか？」

緊張した面持ちのライカに、熱斗は違う違う、と返して。

「ちょっと日本の科学省に敵襲があつたんだ」

『…熱斗くん、それは十分あつた、って言つんじやないかな…敵襲だし』

そうかあ？、と熱斗は咳き、ぐつたりした表情で言つロックマン。ライカの肩に乗つてゐる右手がスコープガンになつてゐる、ライカのナビ…サーチマンが、ものすごく何か言いたげな目で、熱斗を見たのだった。

「んで、それの復旧に狩り出されたその疲労で、そこにツカサくん保護の連絡が来て、そのまま寝たんじやないか、つてのが俺とロックマンの予測」

「なるほどな…」

あながち、間違つていないだろう。

問題となつてゐる光祐一郎の息子、その予測だ。

「それで、こつちが保護したスバルと、ミンラちゃんと、ツカサくん、そのパートナーで、ウォーロックと、ハープと、ジエミーだ」

「初めてまして。僕は星河スバルです」

『俺はウォーロックだ』

そういうて手を差し出したのは、長い髪に流星マークのペンダント

を下がた、小柄な少年…スバル。一見しただけでも、熱斗よりも小柄に感じた。

そして、肩に浮かぶのは、見た事もない形のナビ。いうなれば、何か、獣のようだ。

祐一郎が『訳があるから、保護したい』と言つていた事について、移動中にでも聞けるだろう、とあたりをつけ、ライカも自己紹介する。

「シャーロ国軍所属、ライカだ。よろしく頼む」

『私はシャーロ国ネットワーク第十三部隊所属、サーチマンだ』

ぎゅ、と手を握り返すと思いのほか、スバルのその手のひらは小さかつた。

よく見れば、熱斗よりも小柄に感じたのは氣のせいではなく、本当に小柄なのだ。肩幅はあまりなく、服の裾から覗いている腕も足も本当に細い。

：なのに、『保護しなければ、狙われるわけを持つ』とは、どういった意味なんだ？

特殊な力でもない限り、狙われそうもないのに。

「あ、そだ。ライカ、スバル女の子だから、男と勘違いしないようにな」

「『……は？』」

熱斗がふと、思い出したように言つた言葉に、ライカとサーチマンは同時に固まつた。それを傍で聞いていたプライドも、硬直する。

「…え？スバルって…男の子じや、なかつたの？」

「いや女の子。俺達も気が付かなかつたから気にするな」

プライドが訊ねると、そういうつて親指を立てて笑う熱斗の笑顔に、

何か救われた気分になる、プライド&ナイトマン、ライカ&サーチマンであった。

とつあえず、氣を取り直して。

「はじめまして。響ミソラです！！」

『ポロロン。パートナーのハープよ』

メイルよりも濃い色の桃色の髪に、ギターを携えた少女…ミソラはそういうて伸びやかに笑う。

そして、その肩に映る半透明のホログラムには、豎琴の形をしたナビが浮かんでいる。

そして、最後に。

「初めてまして。僕は双葉ツカサです。よろしくお願ひしますね」

『パートナーのジョンニだ。まあ、よろしく頼むぜ』

薄い黄緑色の髪を後ろで結び、鳶色の瞳を細め、そういうて少年…ツカサは穏やかに微笑む。

その肩には、電気のようなボディに、一つのお面をつけたナビが浮かんでいる。

とつあえず、ライカ&サーチマンに対しての自己紹介はすんだので、やいどがとつたホテルに、一同は移動する事にした。

説明時間（前書き）

夏休みは、たぶん…投稿出来なこと思いますので、あしからず。

説明時間

「単刀直入に言います。僕とツカサくんとミソリちゃん。……か
ら一百年先の未来から来ました」

場所を車中に移し、スバルが真っ先に言つた一言が、これであつた。

「……」

『……』

ライカとサーチマン、デカオとガッシュマン、やいとどグライド、プ
ライドとナイトマンは啞然、とした表情でスバルを見た。

「…何を言い出すのかって思いますよね

ミソラが言つた後、スバルはただ淡々と、口を開く。

「けど、事実なんです。僕らの持つているものは、あなたたちの持
つているものとは違う。…そんな事、絶対しないんですけど…その
気になれば、完全犯罪だつて可能なんです」

『ならやればよかつたじやねえか。俺らの場合、情報集めるために
も』

ウォーロックは腕を組んでそう零し、スバルに睨み付けられた。

「だめ。必要最低限、問題の出ない程度だつたらやつたかもしけな
いけど、ロックはやりすぎ」

『かーつ、かてえな、お前は』

そういうて首を振るウォーロックに、スバルはさらり、と澄ました
表情で。

「ロックみたいな暴走ウイザード持つんだから、当然でしょ？」

『…スバル、お前誰にその『暴走ウイザード』って表現習つた』

流石のスバルでも、言つたことのない台詞であつたし、第一スバル

の場合言葉に『宇宙』関係が使われるのだ。
ウォーロックが謎に思い、問いかけてみると。

「アシッド」との前話した時に、会話に混じったから
との返答が帰ってきて、ウォーロックは何故そなつたのか、をす
つ飛ばして、切れる。

『あんのすかしやろおおおおおおおおおおつ！－いい加
「ウイザード・オフ』

ぱちん、とスバルはウイザードの機能を切った。

現在ウォーロックはP E Tと連動しているが、ウイザードでもある
ので、可能だつたようだ。

唚然とする熱斗達一同を総無視して、ツカサが口を開く。

「僕らの場合のパートナーは、ナビではなくウイザードと呼ばれる
電波体なんです」

「そんな馬鹿なこと……」

ライカも無視してゆく方向で決めたようである。

『…ライカ様、嘘ではありません。…全く、データ反応が見られま
せん』

ライカが声を荒げるより早く、ライカの肩に映るホログラムのサー
チマンから、ツカサの言葉を肯定する言葉が出る。

「…だからこそ、狙われてもおかしくないの。この力を手に入れれ
ば、さつき言つたように、完全犯罪が可能になるから」

ミンラはさすがに言つて、一回間を置き。

「でも、私達のパートナーを奪つたところでどうにもならないけど。

私達人間と、ハープたちが電波変換してなきゃ

『そー ゆーことだな！』

いつの間にやらウォーロックがスバルの肩に、ホログラムとして現れていた。

「とにかく、スバルたちが敵の手に落ちないよう、死守すれば良い、ってことかしら？」

プライドが問い合わせると、ツカサが頷いて口を開く。

「僕ら…僕とジエミー、ミソラちゃんとハープだけでも、相手にとつては十分かもしれない。けど、それ以上に死守しなければならないのは…スバルくんとウォーロックなんだ」

「…それって、もしかしてこの前の姿が関係あるのか？」

ディングが訊ねれば、スバルとウォーロック以外のツカサとジエミー、ミソラとハープが同時に頷く。

ミソラたちが口を開くので、一同は聞き手に回ることにした。

「まず一つ目。スターフォースって呼ばれる力が、スバルくんとロツクくんの体内にあるの」

び、とミソラは人差し指を立てる。

「これを手に入れれば、星を破壊するだけの力がある。熱斗君たちは見たと思うけど…『アイスペガサス』、『ファイアレオ』、『グリーンドラゴン』がスターフォースの力だよ」

ミソラはハンターVGを操作して、『アイスペガサス』、『ファイアレオ』、『グリーンドラゴン』を映し出してゆく。

ツカサが続いて、指を一本立てる。

「次に二つ目。オーパーツと呼ばれる力が、ウォーロックの中にある」

ハンターVGに、トライプのデータを映し出す。

「繁栄しつつも滅びた、ムーの遺産『トライプ』の力」

一枚目は、雷の大剣を携えた剣士。

二枚目は、巨大な手裏剣を携える忍。

三枚目は、恐竜の頭に似たものが左手にある、拳士。

「上から『サンダーベルセルク』、『グリーンシノビ』、『ファイアダイナソー』ってあって、もし力が暴走すれば…世界は簡単に滅びる。実際、ムーはこれで滅びたし。…でも、絆の力がスバルくんをこの世界に留めて、それを防いでる」

『絆がなければ、扱うのも難しいんだろう?』

『まあな。力が強大すぎる』

ジェミニの言葉に、ウォーロックが肯定を示し、スバルは本当に助かつたよ、と心底思う風情で呟いた。

「そして、三つ目。ノイズを操る力」
続いてツカサが、指を三本立てた。

「僕らの世界に溢れる、電波体にとつては有害な『ノイズ』。それを、スバルくんは自在に操る事ができる。僕やミソラちゃんの場合には、近づいただけでも行動不可能になってしまふんだ。専用の機械がなかつたらの話なんだけど…それさえ超えてしまふたらやつぱりダメなんだよね」

ぴび、とミソラがぶれる黒い体の剣士と、紅い体の戦士を映し出す。

「…あ、もしかして…この前…科学省で見たあれ?」

メイルが指差した先には、黒い体の剣士。

「うん、そうだよ。これは『ブラックエース』。もう一つの姿は『レッドジョーカー』っていうんだよ」

ミソラがそれを示しながらそういづ。

「これはノイズが最大にまで、高まつた最終の力。僕らはこれをファイナライズって呼んでる」

『…ファイナ、ライズ…』

ツカサの言葉に、ロックマンが繰り返し、押し黙る。

不意に、自分の説明なのに口をあまり開かずにいたスバルが、口を開いた。

「実際、これは流れ星がもたらしたものだから…最初に言った星の力といつても良いけど…それとは違うんだ」

記憶をたどるように、告げられた言葉を、スバルはそのまま繰り返した。

「『紅の破滅の力。けれどそれを扱うのは蒼の再生の戦士』ってあるくらいだし、滅びの力のようなものだね」

「蒼の、戦士…」

けれど、熱斗が気に留めたのは紅ではなく、蒼。

そして、その脳裏に浮かんだのは、ロックマンではなく、スバルの電波変換後の、姿。

「あ…もしかしてスバルの事か?」

熱斗の質問に、スバルは首を傾げた。

「再生の蒼の戦士って」

スバルはああ、と合点が行つた表情になつた後、頷いて、僅かに頬を紅くする。

「うん。ちょっと恥ずかしいけどね。…とにかく、僕らが泊まるホテルって、どこ?」

一旦スバルの力について、全て話し終えたので、スバルは話を思いつきり逸らした。

「クレーノホテルよ。クリームランドのホテル」
やいとがふふん、と笑つてそういう、スバルは目を瞬かせて。やい
とで連想できる事を考えて、口を開く。
「…もしかして、高級つて意味での？」
「当然でしょ？しかも貸切」

ぱかつ、と顎を落とすスバル、ミソラ、ツカサである。
熱斗達は慣れている模様で、けろりとしている。炎山に至つては当
然、と言つた表情である。

「…やばい、何か感覚が、感覚が」
「…うん、やばい、麻痺しそう」
「…そうだね、ホント…なんか、麻痺する…」

『人間てのは…』
『凄い人もいるものね…』
『そーかあ？』

思い思い咳くスバルたちと、ウォーロックたちであった。

ホテルについて（前書き）

五日前ほどに、『流星のロックマン3 BLACKACE』やつと
ゲットしてクリアしました！……けれどゲットしたその日に、U
SBが折れて使い物にならなくなりました……小説データ全部飛ん
だああああああつ！！（泣）

ホテルについて

「……」

「どーしたんだ、スバル？中入るうづぜーー！」

クレーノホテルにつくなり、啞然、と言つた風情で絶句する、スバルたち未来組。

熱斗たちは慣れた風情で、すたすたと中に入つてゆく。

熱斗の周りには、世界でも屈指の企業の令嬢、この国の王女様、そしてスバルたちは知らないが、有名企業の女性社長、世界でも屈指の企業の御曹司、という一同がそこにいて、慣れなければやつていられない部分があるのである。

「……わー」

「ひろいねー」

「下のカーペットもふわふわだ」

スバルはそれきり言葉をなくし、ミソラは辺りをきょろきょろ見回し、ツカサはカーペットのあまりの柔らかさに驚愕していた。

「スバルくんは一人部屋と相部屋、どっちがいい？」

メイルがフロントの前から問いかけてくるので、しばし考えて。

「一人部屋かなあ」

「では、これを」

そういうつて、ホテルのカウンターにいた男性は、一枚のカードキーを差し出してきた。

「部屋のキーだよ」

メイルがそつと言つたので、スバルはそれに書かれた番号を確認す

る。

「ええと『107 - 00』……？」

つまり、1Jの階は。

「スバルくんは百七階……最上階だよ」

メイルの言葉に、ええ、とスバルが驚いた表情をすると。

「遮る建物が少ないから、星が見やすいと思つわ。星河くんは、星が好きなんでしょう？」

傍にいたやいとがふふん、と笑つてそういった。

「……ありがとう、綾小路さん」

「やいとでいいわよ、星河くん。綾小路なんて、友達に、呼ばれないもの」

礼を言うスバルに、そういうやいとは、他の一同の元へ歩いてゆく。

入れ替わりに、ミソラがこちらへ歩いてくる。

「あ、やつぱりスバルくんは一人部屋かあ

くすくす、と笑いつみソラに首を傾げつつ、スバルはミソラに問かけた。

「ミソラちゃんは、一人部屋？」

「ううん、四人部屋だよー。メイルちゃんと、やいとちゃんと、ジヤスミンちゃんと一緒。最初は五人部屋にしてたんだけど、スバルくん一人部屋、ってなったから四人部屋」

「……あ、ごめん……」

しゅん、とスバルは落ち込んだ表情で、そういうとミソラは明るく笑つて、スバルをなだめる。

「謝る事ないよ。スバルくんが選んだんなら、怒る理由にならないもん」

ぽんぽん、とスバルの肩を軽く叩いて、ミソラは笑つた。

じゃあね、と手を振るニソラと入れ替わりに、ツカサが歩いてきた。

「ツカサくん」

「スバルくんは一人部屋なんだ?」

スバルが手に持つキーカードを眺めながら、ツカサは問いかける。

「うん、そうだよ。ツカサくんは部屋どうしたの?」

「僕も一人部屋。あ、それでねプライドは王城に帰るみたい。それでライカさんもそっちに行くって」

「へえ…」

やつぱり王女様が国にいるのに、城に不在なのは心配なのだろうか。ふと、スバルの視線は怪我の癒えたツカサの手のひらに、移る。

包帯の解かれた下は、無傷の肌。

あれほどに酷い傷だつたのに、『自分同様』癒えていた傷跡。

…後で、ウォーロックに話さなければならぬ事…は、ツカサくんの傷が完治してたこと…それに…

ツカサの傷が完治していたこと以外に、問題は山積みで。

未来に戻ること。

そのための手段。

自分を追つて来た、とも言える敵側。

その原因となつた『太陽の姫』とはなんなのか。

『太陽の姫』を必要としている『月の皇子』とは。

何故、敵は未来から自分を追つてこれるのか。

つらつらとスバルは自分の思考の海に沈んでいたので、呼びかける声に気づかなかった。

「……ル……ン……スバルくん、どうしたの？」

不意に思考を途切れさせる声が聞こえて、瞳の焦点を結びなおせば、真っ直ぐに視線を合わせて、覗き込んでくるツカサの瞳がそこにあつた。

虚を突かれたこともあって、とても綺麗に美しく光るツカサの瞳を、スバルは真っ直ぐにただ、見返していた。

穏やかで、それでいて鮮やかな黄緑色の髪とは正反対の、穏やかだけれど静かな色合いの瞳。

本当にただ、綺麗だと思えて。

「スバルくん、どうしたの？」

「へっ？」

ぱちぱち、と目を瞬かせるツカサに、スバルもようやく我に返る。

「……ほーっとしてるから、どうしたのかなって思つたんだけど…疲れたの？」

「え？ あ、なんともないよ、大丈夫だよ」

スバルが慌てて笑顔を作ると、あまり納得していない表情でツカサはそう、とだけ呟いた。

「… も、行こうスバルくん。皆行っちゃったしね」

ツカサの言葉に辺りを見回せば、確かにエレベーターの前に移動している。

「い、ごめんツカサくん……」

慌てた表情のスバルに、ツカサはくすくす笑つて。

「ふふ、じゃあ、いこつか」

自然なしぐさで、手を差し出してくるツカサの手を、スバルはぎゅ、と握り返した。

♪♪♪♪♪

ホテルに設けられたエレベーターは外側に位置した部分が、ガラスになつていてその為、すさまじい勢いで上るエレベーターからは、クリーミラングが一望できた。

ちなみに今回乗つたのは、スバル、ツカサ、ミソラ、熱斗、炎山、メイル。

残り一同、デインゴ、デカオ、やいと、チャーリー、テスラ、ジャスミン、燃次は、隣のエレベーターである。

「うわあ、凄い眺め……」

スバルは、ただうわあ、と楽しそうに、叫ぶ事を繰り返す。

「凄いよな！！たかーい！！」

スバルの横で下を見下ろす熱斗も、同じ反応である。

『ウエーブロードにいるときの田線だな』

ウォーロックのしつゝ、とした言葉にて、はあ、とジエミニがため息をついた。

『お前には風情と言つものがいるのか』

『フゼイ?なんだそりゃ』

『……もういいわよ、黙つてなさい、ロック』

ハープがムスッ、とした表情で睨みつける。

「あはは、でも、ホントにウェーブロードにいる気分だよね、ツカサくん」

楽しそうに見下ろしているスバルの邪魔をしたくないので、ミソラはツカサに話を振った。

「ホントだね。僕はコスモウェーブに行つたことないけど…更に高いんだつけ？」

「うん、地球が一望できるから…スバルくんのテンションが高い高い」

不意にツカサが持ち出したのは、スバルたちの世界の話。

「はは、スバルくんらしいね」

「だね」

くすくす、と笑いあう二人を見ながら、メイルと炎山も下を見下ろしていた。

「本当にたかーい。こんな高いとこ、クロスフュージョンしても来た事ないなあ…」

「当然だろう。大抵出るのは、地上なのだから」

炎山の、ある意味風情ぶち壊しの一言に、メイルは目を半眼にして。

「…わからず屋」

意味が違うような気がしないでもなかつたが、とりあえずメイルはそれだけ呟いた。

▽▽▽▽▽

チーン、と音がして、まずは熱斗、ミソラ、メイルが百五階で降りた。

隣を見れば、デインゴ、テカオ、やいと、ジャスミン、燃次が降りた。

ていた。

残るは、スバル、ツカサ、炎山。そしてチャーリー、テスラ。続いて百六階でチャーリーとテスラが降りた。

そして、スバル、ツカサ、炎山は百七階で降りた。

スバルは『107-00』、ツカサは『107-20』、炎山は『107-22』に、それぞれ向かう。

「じゃあ、昼食でね」

「うん」

「遅れるなよ」

そういうてツカサと炎山と別れて、スバルは『107-00』の扉を開く。

「……わあ」

『……うお』

スバルとウォーロックは、それだけ言って黙つた。

入るなり、目の前は広々とした部屋。前面は強化ガラス張りで、廣々とクリームランドの景色が広がっている。

そして照明はシャンデリア。

ふかふかの絨毯を踏んで鞄を物置場所に置き、ためしにソファーに座ると、とても心地よい座り具合。此処だけでもぐっすり眠れそうである。

壁についているテレビも、委員長の家にあるものと大差ないほど大きく、クローゼットも大きい。

ためしに開けてみた風呂場は、広々していて、ついでに大きなジャクジー。こちらも、外側に位置する場所はガラス張り。

ベッドがなく、代わりに扉があつたので、開けてみれば寝室とリビ

ングが別なようで、ベッドルームもベッドルームで、凄かつた。

やはり照明はシャンデリア。こちらにもソファーと巨大なテレビに、マッサージチェア。

ベッドも大きくて、天蓋つき。ぱたん、と倒れこんでみると、かなり寝心地が良かつた。

色々、常人感覚が拒絶を起こすが、どの部屋も一緒だ、と自分を宥めるスバルであった。

実際何人部屋だろつと、備え付けのタオルや、ベッドの数が違うくらいで、どこの中屋も一緒である。しかし、スバルの部屋だけは、ちょっとだけ家具が豪華なのであつた。

とりあえず、様々な状況に拒否反応を起こし、何とか落ち着いた後。

「…ロック、話があるんだ」

スバルは前触れなく、そう口を開いた。

『ん? どうした、スバ……!』

窓から出たり入ったりを繰り返していく、スバルの声に振り返ったウォーロックは、スバルのあまりに静かな瞳に、ただ、何も言えなかつた。

番外編04（前書き）

キャラ崩壊が苦手な人は、閲覧をお控えください。

E「どうもお久しぶりです。今回は僕、ロックマンエグゼと」

ウオ「この俺ウオーロックでお送りするぜ」

「例」よりセシトのセリフ、熱斗くんとスバルくんは見学中だ

ねーこんちわ!!

ス
久
し
ぶ
り

「…やでさで、今回はゲストがそれぞれの作品から来てます。まずはロックマンエグゼではお馴染みの最強ナビ、フォルテ！！」

E いきなり何？熱斗くん

ねーいやいやいや、おかしいだろ！？なんでフォルテ！？普通炎山とかブルースとかさ！？

E 「だつてありきたりでつまらないよ」

ス「それが本音！？」

「あー、うつせー。次行くぞー！」

ス「そ、それもそうだね。口チクよろしくー。」

「んじゃ、流星のロックマンから、ムー族唯一の生き残り、ソ

ソロ（以下：ゾ）「うるさいぞ、星河スバル」
ソロ、ゲスト席にカミカクシから登場し、着席。

ス「もう来ちゃつてるしー！」

「オルテ（以下：オ）」「呼んだのはお前らだろうが」

ス「二つとも来てるしー！」

ソ「なんだ、来てたらまずいのか」

ス「マズくはないよ。でも、何でだろ…命の危機を感じるんだけど。」
「メタルがらみで」

「なんだそれは」

「スバルの体内にある、特殊なムー族の遺産だ。手にすれば強い力が手に入れられる代物だぜ」
ウォーロック、フォルテに説明。

ちなみに光熱斗&ロックマンエグゼ、現在進行形にて口論中。

「フォ……それはそれで、手に入れてみたい力だな」

ス「でも、この前ムーの紋章が浮かび上がったから、ムリ」

ソ「……チツ」

ス「ゾロ、最近君をストーカーでサテラポリスに訴えたいってつくづく思う」

ウオ「諦める。サテラポリス連中が返り討ちに遭うだけだ」

ス「ですよね。やっぱり自力で撃退か」

ウオ「諦める。シリウスの呪い……ついか怨念はこええな」

ソ「厄介なものに関わったな」

ス「それを君が言つたか!?」

フオ「……言えなさそうだな」

ね「てかフォルテ、何ナチュラルに会話に参加してんだ!?」「光熱斗&ロックマンエグゼ口論いつの間にか終了。

ス「あ、口論終わつたんだ」

E「うん。でもフォルテ、君がそれを言つてある意味君も十分厄介だよ(黒)」

ウオ「エグゼがこええ!!!(怯)」

ス？「ロックが怯えた！？」

E「では、今回のお題、気を取り直していってみよーーー！」
ロックマンエグゼ、お題のはいったくじ引き箱を取り出す。

ね？「流れ総無視だーーー！」

E「今回のお題はーーーじゃん」「ロックマンエグゼ、一枚の紙を取り出し皿を通す。

E「『もしライバルとデートできたらどうに行へ？』」

ス&・ね？「なにその奇跡に近いほどやなお題はーーー？」

E「つるさこよ、熱斗くん、スバルくん。じゃ、フォルテから」

フオ？「なーーーそう、だな……」

フォルテ、五分ほど黙りっぱなし。

E「はい次ソロ」

ソロ、しばし考え込む仕草の後。

ソ「……ロックボンドーヒルズの、フジヤマクリームパフェでも食いたいに行きたい」

ウオ「……普通だな。今度つきあつてやれよスバル」

ス「えー。行くんだつたらツカサくんがいい。それに何度も言つた
ど命の危機感じるからヤだ

星河スバル、思いきりヤな顔をして断言。

ソロ、何故か落ち込んだ表情でカミカクシにて退場。

E「フォルテ、まだ決まんないの？」

「
フォ「……ああ

E「じゃ、帰つて。そろそろ閉めるから（黒）」

ロックマンエグゼ、フォルテを閉じかけたカミカクシに突き落とす。

ね「ぎやーーー！ フォルテーーー！」

光熱斗、慌ててカミカクシを覗き込む。

ロックマンエグゼ、人のよい笑みを浮かべ、手を振る。

E「じゃ、またねー」

ウオ「次も多分、予想できない奴らかもしんねーぜ」

兆し（前書き）

たぶん、別連載を始めるので更新は遅めになると想います。

兆し

振り返った先に佇むスバル。

その瞳は真剣そのもので、逸らすことすら、口火を切ることさえつらい。

「……ロックは、僕の怪我がたつたちょっとの時間で治つたの、覚えてるよね？」

『ああ。…それがどうかしたのか？』
どうがあるよ、とスバルはつぶやく。

「…ツカサくんの怪我も、僕みたいに治つてた

『な！？』

ウォーロックはスバル同様、怪我のひどかつたツカサの両手を思い浮かべる。

「ツカサくんは、『過去に来て気づいたら治つてた』って言つてたけど…」

『…なるほど、お前みたいに数日で治つたかもしれない、ってか？』
こくり、とスバルは頷く。

戦いに支障が出るので、スバルにしてみればいいことでもあると同時に、自分の身体なのに、急に違う人の身体に入れられたようで、気持ち悪い。

「……原因が分からぬから、下手に喜べないし」

『だよなあ…喜ぶにしても、もしかしたらこれが敵に狙われる理由かもしけねえしな…』

腕を組んで、それぞれの意見を口にし、スバルは再び口を開く。

「……もしかしたら……」

ピンポーン。

しかしスバルの言葉は、最後まで言い切ることなく、遮られた。

「はーい！！」

スバルは寝室から出て、扉の前に急いだ。覗き窓から覗いてから、扉を開ける。

「ツカサくん、炎山くん」

そこにいたのは穏やかに微笑むツカサと、クールな雰囲気をまとつて表情を変えない炎山。

「お昼食べに行こう、スバルくん。お腹すいたでしょ？」

「百階にレストランがある。他の奴らは向かった」

二人の言葉にスバルは頷く。

「うん、ちょっと待ってて」

そういうて一旦部屋に引っ込む。

「…ロック、この続きをあとで良いかな？」

『ああ、良いぜ。それよりメシだメシ！！』

両腕をブンブン振つてそういうウォーロックに、スバルは眉を潜めて。

「…ロックは食べれないよね？」

『キブンだよ！！キ・ブ・ン！！』

そう叫ぶように告げるウイザードにふう、とスバルは息をついて、

鍵を抜いて、待ってくれていたツカサと炎山と合流した。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

「うわー…」

昼食をとるレストランは絶景だった。
所々に置かれた飾り物の食材も丁寧に装飾がしてあり、美味しそう
に見える。

『うおおおーーすっげえーー!』

『かなり美味しそうだな…俺たちは食べられねーけど』

『……』

思い思いの反応をするウォーロック＆ジムニーを見ていたブルース
は、無言を貫き通した。

「スバルくん、ツカサくん、炎山くん、早く早くー」

「あ、うんーー!」

メイルが手を振っているので、スバルとツカサは窓際の、熱斗とメ
イル、ミソラとジャスミンが座つている席に腰を下ろした。
炎山はやいととデカオ、燃次とチャーリーとテスラが座つている席
に着いた。

それぞれが昼食を選び終えると、隣に座つていた熱斗の元に昼食が
置かれた。

それはいたつてシンプルな。

「…チキン…カレー…?」

「俺、カレーが大好きなんだよーー!」

スバルが咳くと、田をこれ以上ないほどにキラキラさせている熱斗
が、嬉しそうにいった。

『…熱斗くん、確かにととい一十皿食べたよね?』

ロックマンの言葉に、え、とスバルとミソラは驚愕する。ジャスミンは慣れたようで『相変わらずアル』と言った。

ちなみにツカサは、後ろから『カオに話しかけられて、こちらの話を聞いていない。

代わりに炎山が凄まじい勢いで熱斗を睨んでいるが、本人は気づいてない。

スバルが思わず怯えても睨みつけていたが、ツカサと一緒に三言交わし、睨むのをやめた。

「カレーはいくら食べても飽きないって！！人によつて違うカレー時間によつて味の変わるカレー…カレーには無限大の可能性がある！－ビバ、カレー－！」

銀色のスプーンをこれでもかと握り締め、見事に自分の世界に浸る熱斗。

「そ、そなんだ…」

スバルは若干引きながら、あはは、と僅かに笑みを浮かべた。

冷静なまでに、『熱斗くん冷めちゃうよー』と言うロックマン。メイルも『カレー冷えて後悔するわよー』と言つのみ。

…要するにこれは慣れだと、スバルとミソラは悟つた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙

一方、ツカサは後ろから声をかけられて、振り返つた。

「なにかな、デカオくん」

飛行機の中でも話していたのもあり、大分慣れた。

内心で『「 gon 太くんそつくりだなあ』と少し思つていたりする。

「ツカサたちって、特殊つて熱斗がメールで言つてたんだがよ…そ
ういうの抜いて、誰が一番強いんだ？」

熱斗め、と炎山が熱斗を睨みつけるが、本人が気づかない代わりに、
スバルが気づいて怯えた表情になつた。

しかしそれを気にせず睨んでいると、ツカサに何故かものすごく睨
まれた。

「デカオくん、ちょっと「ゴメンね」

デカオとの会話を中断して、ツカサは炎山の方を笑顔…しかも満面
の笑みでこちらを向いた。

だが、笑みを浮かべているが瞳が、全くと言つて良いほど笑つてい
ない。何か言いたいことがあるのか、と視線を向けると、につこり
と笑みを浮かべたままで。

「何か…」

「炎山くん、スバルくん怯えてるからやめてくれないかな？」

炎山の言葉を遮つて、かなり人当たりの良さそうな笑みを、あくま
で穏やかに浮かべたまま二コニコと笑うツカサが。

どういう意味だ、と反論しようにも、思い当たる節が満載なので、
とりあえずと思い、口を開ぐが。

「も…」

「やめろってんのが聞こえねえ？」

しかし、再び言葉を遮つた瞬間ふと笑みを消し、ツカサの表情に影
が落ちた。

それから、脅しをこめた口調で呴かれたので、炎山は睨みつけるの

をやめた。

「で、僕らの中で一番強い人だよね」「ぐる、と笑顔を浮かべて、ツカサは『カオの方を向く。『カオはおう、と頷く。

どうやら炎山以外の一回は、見なかつた事にしたよつだ。

やつぱりー、と呴いて。

「スバルくんだよ」

『スバルだな』

『スバルだ』

ツカサとジユミー、ついでにツカサの中にいたヒカルも、そろつて同じ返答を返した。

「じゃあ次は誰なのよ?」

やいとが運ばれてきたハンバーグを横田で見ながら、ツカサに訊ねる。

「次に強いつて言つたら、暁さんかジャックくんだよね」

『まあ……なあ……』一応、そこに俺らも含まれると思うぞ?』

ジユミーの言葉に、ぱちくり、と瞳を瞬かせたツカサは、きょとん、とした表情をする。

「そうかな? 暁さんやジャックくんに何度も勝つた事はあるけど……スバルくんには負けっぱなしだから『』の辺り、良く分からないや」

『あれが桁外れなだけだ。バトルセンスも、機転も凄まじい。ウオーロックはともかく』

実際のところは、相性も、その相性のシンクron率もあるのだが、なんだかんだで皆さん、内心ではウォーロックを認めているのである。

普段はからかつたりするが。

「へえ～…あの嬢ちゃん、そんなにつええのか」

「うん。なんていつたって、世界を救った英雄なんだからツカサの言葉に、『テカオとやいとは違和感を感じつつも、目の前に置かれた昼食にとりあえず、意識を向けた。

そんなツカサの前にも、昼食が置かれたので席に着いた。

ふと、メイルはぼんやりとしているスバルに、問いかけた。

「…あれ？スバルくんは食べないの？」

「え？あ、食べてるよ、ちゃんと」

そういうて笑うスバルだが、ドリアの入った器に、スプーンを突っ込んではいるものの、それを口に運ぶ気配はない。猫舌なのだろうか、ヒメイルは適当にあたりをつける。

「」馳走様。部屋戻つてるね

しかし、しばらくしてスバルは席を立つた。

誰も気が付かなかつたが、スバルの顔は血の氣が引き、真っ青だつた。

番外編05（前書き）

PVが、300000超えたので、それもかねた番外編。

ス「はい、本編よりすら書けるとこつことまたまた来ました、
番外編！！！」

ウオ「……なあ、スバル。……それ、言ひまつていいいのか？」

ス「だめだろうね。でも作者がバトル描写苦手すぎるゆえの、この
状況だし」

ウオ「……まあいいか。んで、今回はFM星育ちのAM星人、この
俺ウォーロックと！！」

ス「そのパートナーで、シユーテイングスター・ロックマンとして
結構無理矢理戦いに引っ張り出された僕、星河スバルでお送りしま
す」

星河スバル、ふと手に持っていたメモを読み上げる。

ス「なお、今回光熱斗くんと、ロックマンエグゼはなにやらこの前
のフォルテをカミカクシに突き落とし事件で一悶着が起きたようだ、
お休みだそうです」

ウオ「んじゃ、今回のゲストは…」

ス「『ロックマンエグゼ』より、幼馴染なので当然ヒロインの立ち
位置である桜井メイル＆ロールと、『流星のロックマン』よりやや
こしいのでいっぺんに呼ばれたらしい、響ミソラ＆白金ルナ！！ち
なみにハープは一時実家に帰つてくる、モードは調べることがある、
だそうで欠席です」

桜井メイル、ロール、響//ソラ、白金ルナ、普通にゲスト登場通路から現れ、ゲスト席に着席。

桜井メイル（以下・メ）「こんちわ。今日よろしくね

ロール（以下・ロ）「ロックはないのね…」

響//ソラ（以下・リ）「やつは～。よろしくね～」

白金ルナ（以下・ル）「つて、どうこう」とよーーー。

白金ルナ、急に怒り出す。

ウオ「何だよいきなり…！」

ル「どうしたもんじつしたもないわよ…。何で私と//ソラちゃんがセットなのよ…！」

ス「え？ だつて実際どっちがヒロインかわからない状況だつて作
者が。だからセットで呼ばれたんだよ」

ル「ほ～し～か～わ～くう～ん～？」

ス「何？ 違うといふでもある？」

星河スバル、しつと白金ルナをにらんで黙らせる。

ミ　　ス……スバルくんが黒い……

ロ「と、ところでスバルくん。ロックは？ 热斗くんも姿が見えないけど……」

ス「あ、そつか。ロールちゃんたむこは言つてなかつたね。」この前ロックマンが、フォルテをカミカクシに突き落としちやつて。それで一悶着起きたからお休み」

メ「? なにやつてゐるロックくん! ?」

ス「その後ちよつといつん、つて音が聞こえたからソロに当たつたのかもしないね。フォルテあの角かな?当たつたら痛そう」

ミ「それはソロも怒つて怒鳴り込みにいつたんじや」

ス「かもね。さて、今回のお題は.....『もし主人公に一日時間ももられたらどうする?』だつて」

星河スバル、話の途中で『お題BOXくじ』を引く。

ウオ「? 話の途中でくじを引くな! ! しかもなんだその一見まともなお題! !」

ス「.....ちょっとロックマンをまねてみたんだよ。なんだかんだですらすら進むから。ではまずメールちゃん」

メ「そ、そつねえ.....やつぱり、お買い物に引つ張り出すか.....一緒に遊園地に行きたいな。思い出の公園がある、あそこ」

ウオ「普通だな」

ス「それはそれで素敵だね。素朴だし、ポピュラーだし」

メ「うん。熱斗はネットセイバーで忙しいから、一緒に遊園地出か

けたら、ウイルス騒動起きのも当たり前になつちやつて……のんびり楽しめたことなんて、最近ないわね～……」

桜井メイル、かなり遠い目で天井を見上げる。

ウオ「それはそれで大変だな……」

ス「じゃあ次ロールちゃん」

ロ「私は……電腦ファッションショーリ行つてみたいかなあ……やいとちゃんがこの前チケットくれたし、しかもこのチケットで気になつた服を試着できるし」

ロール、ひらりと電腦ファッションショーリのチケットをそばがせる。

ミ「へえ～。そんなのあるんだね

ロ「でも、ロックのことだから……朴念仁な答えされるんだろうなあ……」

ロール、セットの隅でひざを抱えて落ち込む。

ス「じゃ、次ミソラちゃん」

ミ「そうだなあ……私は……やつぱりロッポンドーヒルズで、フジヤマクリームパフェをスバルくんと食べに行きたいな～……」
響ミソラ、星河スバルを見る。

ス「この前ソロも言つてたし、本当にシカサくんと食べに行きたいな～……」

星河スバル、今度ツカサくんを誘つてみよう、とつぶやく。
響ミソラ、いいもんいいもん。今度マモロウさんといつてくるもん。とすねる。

ウォ「で、お前は？」

ル「わ、私!? そ、そうね……ヤエバリゾートに行きたいわね。昔行つたときは散々だつたもの」

ス「今度はちやんとベッドで寝させてね。ソファーで寝るとあちこち痛いんだよ」

ル「あ、あなたじゃないわよ……私が言つてるのは、ロックマン様なの!! ほ、星河くんじゃないんだからね!!?」

ス「でもやうなると、遊べなくなるよ? 電波体つて人の目に見えないし。僕の持つてるビジラライザーも一緒に電波変換しちゃうし」

ウォ「そりやう」

ル「うるさいうるさいうるさい……」

白金ルナ肩を怒らせてふくれる。

ス「大体全員から意見が出たし、全員がなんらか落ち込んじゃつたりしてるので今日はここまで。バイバイ!!」

星河スバル、ひらひらと手を振る。

ウォ「いつも思つけど、だぐだだな……」

ル「星河くんっ!!」

憑依（前書き）

この前ハンターV-Gを起動したので、『電波変換』から『トランスポート』にしました。

ようよると壁伝いに歩いて、部屋に戻るなり、ぱたり、と一人がけのソファーに倒れこんで、スバルは目を閉じる。

別段飛行機に酔つたわけでも、車に酔つたわけでもなく、何か急に気持ち悪くなつたのだ。

スバルは髪を結んでいたゴムを解いて手首につけて、本格的にソファーに沈む。

ウォーロックが見かねたように出てくる。

『スバル、寝るならベッドで寝ろ。折角ふかふかなんだぞ?』

「そう……だね……おやすみ……ロック……」

のろのろと歩いて、P E Tとハンターヴ Gを傍に置き、天蓋を引っ張つて周りを遮断し、ベッドにもぐりこみ、目を閉じる。

そして、そのまま眠りに付こうとした所で、どくり、と不自然にスバルの鼓動が跳ね上がり、ウン…と音がした。

急にスバルの電波に混じった力に、慌ててウォーロックが天蓋を通り抜けたところで、ぱあ、とスバルの胸の少し上辺りに、見慣れた特殊な一族の紋章が……ムーの紋章が、鮮やかに浮かび上がる。

『スバル!!』

ウォーロックが叫び声を上げる。

スバルはゆっくりと身体を起こし、ウォーロックの方を向くが、にい、と普段のスバルからは全く想像のつかない笑みの形に、唇を吊り上げて代わりにウォーロックに手を伸ばす。

『電波……変、換……』

▽▽▽▽▽

「『おれの今までしたー！…　おいしかったー！…』」

ミソラは満足してニコニコ笑う。

「本当だね。凄く美味しかった」

ツカサもご馳走様でした、と両手を合わせる。

「でも、スバルくん全然手をつけてないね……」

「どうしたのかな……」

二人が顔を見合わせて唸ると、ドオオオン、と上から何かが爆発するような音が聞こえ、ぱらぱらと埃が降ってくる。

「何だ！？」

チャーリーがテスラを庇いながら上を見上げる。

瞬間、スウと天井を突き抜けて、ショーティングスター・ロックマン……スバルが現れる。

とん、と周波数を変えたスバルは軽やかに床に降り立つ。

「スバル、くん……？」

「……だめだ、ミソラちゃん、離れて……」

ミソラがとん、と一步スバルに向けて歩き出そうとする。

ツカサは走ると同時に叫びつつ、ミソラの腹部辺りに体当たりのようにぶつかる。

一人そろって転倒した後、ビキビキッ、といやな軋みが聞こえたかと思うと、先ほどまでミソラの立っていた位置から、真っ直ぐに床に亀裂が入っていた。

それはメイルとやいとの傍でようやく止まつた。

そしてその亀裂は、スバルの足元から続いていた。

否、スバルが突き立てたロングソードによつて、引き起こされた。

「…………」

「スバル、お前何やつてんだよ！？」

メイルとやいどが息を呑み、熱斗が抗議する声を上げれば、スバルはにい、と唇を笑みの形に吊り上げるだけだ。

『シユゾクノ……フツコウ……ヲ……ソノミテ……ミハ……セ……！』

スバルの喉から出た声は、少し低い感じの声とはまるで別物の、幾人もの声が重なつた『声』だった。

スバルはロングソードを消し、自然な仕草で肩の後ろに手をやり、ぶん、と一振りの剣を取り出した。

銀色の柄に雷の刀身の、巨大な剣、ベルセルクを。

それを高く掲げれば、スバルの身体が雷に覆われて、銀色の剣士へ姿を変えた。

「…………サンダー…………ベルセルク」

炎山が呟いたのは、ホテルに来る前に車の中で見せられた、姿の一つ。

たつ、と軽やかにスバルは、熱斗との間合いをつめる。熱斗とスバルの顔が、これ以上ないほど近づいていた。スバルの唇が、きゅう、と不気味に吊り上げられる。

しまつ…………！

熱斗がそつ思つより、早く、疾く、振りかぶられた剣の刀身が、鮮やかに煌く。

『熱斗くんーー!』

焦つたように大声を上げるロックマンの声が、やけに遠くに聞こえた。

『……………っ、熱斗……………っ…!』

ロックマンの声にかぶさるよつて、ガキィイインーーと何かがぶつかり合つ音がした。

ぶつかり合つた衝撃の余波が、熱斗の頬を叩くが、切られた痛みはないし、その衝撃自体も熱斗は受けていなかつた。

「ぐう……………ー!」

僅かにうめく声が聞こえて目を開ければ、オレンジ色の髪をした白いボディの、見た事もないナビ。スバルの持つ剣を手のひらから具現化させている剣で受け止めていた。

「ツカサくんーー!」

ミソラが焦つた声を上げ、駆け寄りうとしたミソラを、熱斗の目の前にいるナビの少年と、そつくりな少年が止めた。

「やめておけ、足手まといになりたくなかつたらせつやと電波変換しうーー!」

「ひ、うんーー!」

黒い少年のもつともな一言で、ミソラはPETを構える。

「行くよ、ハープーー!」

『ええーー!』

ミソラの肩に映っていたハープの姿が消えて、ミソラはPETを構

える。

「トランスクード ハープ・ノート…」

ミソラの姿が淡い桃色の光にとけて、それがほどけたときにはミソラとハープの電波変換した姿、ハープ・ノートがいた。

「えええいつ…！」

ツカサが力いっぱい剣を振り切れば、たたん、ヒスバルは一寸距離をとる。

「大丈夫、熱斗くん？」

そういうてスバルを真っ直ぐに見据えた白の少年の横に、黒い少年が並ぶ。

「ツカサくん……なのか？」

「うん、そうだよ。これが僕がジヒミーと電波変換した姿、ジュミニ・スパークだ」

そういうて熱斗を振り返つて、白い少年…ツカサは熱斗に手を差し伸べてくる。機械で作られたかのような大きい手ではなく、普通の手を。

左右反対の巨大な腕に、そつくりな顔立ち。まるで鏡写し、とでもいうように色はともかくも、そつくりであった。

「ジヒミー…双子、って言つだけあって、一人になっちゃうんだけどね。ね、ヒカル」

「無駄口叩けるんだつたら大丈夫そうだな、ツカサ。……とりあえず」

僅かに苦笑を滲ませてツカサは、スバルを真っ直ぐに見据えている黒い少年…ヒカルを振り返る。

ヒカルもツカサを見て、すぐにスバルのほうを見た。

スバルは今現在、だらり、と剣を持つ左手をけだるそつと下ろし、俯いている。

「…………どうするか」

「だよね……スバルくんに暴走されちゃうとはね……」「ぐべーん、ぐ、儀二三からソニーメルバン行運ハガシ

「スバルくん、僕たちからしてみれば裕運いだし……」

ヒカルは面倒そうに顔をしかめ、ギターを構えるミソラはため息混じりに同意を示し、ツカラは少し苦い表情で呟いた。

『というより、あのバカはどこに行つたのかしら?』

力方一級は力は食まれてゐるが、ないのが三回

「三番妥当であります。」答へを返した。

途端、スバルの膝がかくり、と折れた。

「うつ……うううううううう……！」

急に、ぼんやりと立っていただけのスバルが、何の前触れもなしに苦しみだして、叩きつけるように、ベルセルクを床に落とし、頭を押されて、その場に膝をつく。

そして、スバルの身体から黄色と緑と赤の、剣を持った人型と、手裏剣と、恐竜のオーラが現れる。

『テイコウ、スルナ……！』 オトナシク、ベルセルク、ノ、チカラヲウケイレ、口……！』

『シノ、ビノチカラヲ、ウケイレロ……！』 テイコウ、ナド、シユゾク、フッコウノタメ、ニ、ナンノ、イミモ、ナイ……』

『イイヤ……ダイナ、ソーノ、チカラ、ウケイレ、口……！』 ワガシユゾクノ、タメ……』

ビシリ、とスバルを中心として、床がへこむ。ぎり、と鋭い瞳でそのオーラを睨みつける。

「嫌だ！！ 抵抗、してやる！！ 間を、傷つけてみろ……お前達を、許さな……うあああああああつ……！」

スバルの背後に、ウォーロックも現れて、ニヒルな笑みを浮かべて、口を開く。

『ス、バル！！ その調子で、抵抗、してろ……ぐ、あ……グアアアアアアアアアアア……』

しかし、抵抗するように叫んだ瞬間、鋭い痛みが身体の中を駆け抜けて、スバルの意識を、同化したウォーロックの意識を纏げにしてゆく。がくん、と身体を折り曲げて、しばらくその場に蹲つて、顔を上げたスバルはにい、と先ほどの狂ったような笑みを浮かべて、

ベルセルクの剣を拾い上げて、ゅうらり、と立ち上がる。

『サア…シユゾクノフツコウ…ヤクダツテモラオウカ…?』
スバルの声が再び消え、幾人もの声が重なった禍々しい声が響く。
いつもなら優しげに微笑む瞳が、血塗れた色に紅く染まっている。

「スバルくん…！」

「くそつ、下手に手え出せねえ！！」

顔をしかめてツカサが叫び、ヒカルはぐつ、と歯噛みする。

「スバルくん…！」

ミソラは悲痛そうな表情で顔を歪め、フイーチャリングハープギターを握り締める。

熱斗達も状況が分からなりに、相当にやばい状況だとは理解している。

「名人、ディメンショナルエリアを…！」

『分かつている…』

早くも炎山がディメンショナルエリアを名人に要請し、エリアが形成される。

そしてやいとデカオ以外の一団がすぐに、ナビとシンクロし、姿を変える。

けれどただひとり、シンクロせず、ぼんやりと立ち廻くしている少年と、そのパートナー・ナビがいた。

かつて今のスバルたち同様暴走し、多くの人たちの命を奪いかけた、サイトスタイルがうまく操れなくて暴走している自分達みたいだと、熱斗は思う。

そして、今の状態がスバルにとって良くないことも分かる。ぎゅつ、とP.E.Tを握り締めて、熱斗はスバルを見つめる。

ツカサに切りかかり、ヒカルに止められて、スバルは剣を跳ね上げられる。しかし、なんでもないことのように、くるり、と軽いしぐさで飛ばされかけた剣を握り締め、返す刃でヒカルを切り上げた。

「ぐうつ……！」

「ヒカル……っと……！」

跳ね飛ばされたヒカルを気にせず、スバルはそのまま、今度はツカサに振り下ろす。バックステップでツカサは後ろに跳んで下がる。そこへミソラが降り立ち、攻撃を仕掛ける。

「パルスソング！！」

マヒと盲目の追加効果のある音波を放つが、スバルはそれを綺麗に一刀両断する。

「くつ……」

「ミソラ、さがるネ！！ メディカプセル！！」

「ロールアロー！！」

ジャスミンの声が響き、たたん、と軽やかに飛び上がったミソラの後ろにいたのは、ミソラのパルスソングのように特殊効果の付いた、メディカプセルをなげたジャスミン。そしてすぐに攻撃がはいるよう、とロールアローを放つたメイル。

けれどただ、にい、と笑うだけで。バチバチッ、と雷の剣に雷が纏わりつき、それを勢い良く振り下ろす。

雷の衝撃が地を走りぬけ、カプセルを粉碎し、矢を碎いた。

「そんな……！！」

『オトナシク……シユゾクフツ コウ……ソノイシズエ、ニ……』

一步スバルは前に踏み出しが、すぐに何かに気づいた表情をする。

「デルタレイエッジ！！」

「マグネットボム！！」

「ナパー・ムボム！！」

「トルネードアーム！！」

その叫びと共に、爆発が生じる。炎山の放った剣の攻撃と、テスラと燃次の放つた爆弾を乗せたチャーリーの風圧の攻撃。

炎山の攻撃を避けねば、テスラと燃次の爆弾を乗せたチャーリーの風の攻撃が。

テスラと燃次の爆弾を乗せたチャーリーの風の攻撃を避けねば、炎山の攻撃に当たるように、計算して放たれた技だ。

「流石にアレは避けられる……」

ひゅう、と口笛を吹いて腕を構えるチャーリーの言葉を遮ったのは、ヒュ、と背後から何かが空を切って放たれた音。

「きやあっ！！」

テスラの悲鳴が聞こえた後、横にいたはずのテスラが吹っ飛んで窓ガラスを突き破った。

「テスラ！！」

チャーリーも床を蹴つてテスラの落ちた窓から外に飛び出し、落ちてゆくテスラを抱きとめる。

「な……！？」

炎山が手裏剣が飛んできた方向を振り返るが、そこには何もない。一同の集うフロアにチャーリーがテスラを抱えて戻れば、からん、とテスラの背中から抜け落ちたのは、緑色の手裏剣。

「手裏剣……？」

『まさか……』

ミソラとハープが顔を見合わせて、ツカサとヒカルが頬を引き攣らせて、メイルとジャスミンの元にミソラ、やいととデカオの元にツカサが、チャーリーたちの傍にヒカルが駆け寄つた瞬間。

気配すら感じさせずに、ふつ、と炎山の真後ろに、人影が降り立つた。

ばつ、と一同がその人影を見れば、左手に雷の剣、もう一方の右手に大地の手裏剣。

そこに佇むのは、シノビとベルセルク、両方の力を併せ持つた忍者

劍士。

「しまつた！！ 逃げて、炎山くん！！」

ツカサが叫ぶが、それよりも早く、スバルが剣を構えた。

『レメンタルフレイエ』

雷の刃が横に薙ぎ、一回目は避けたが、二回目は避けきれずに喰らつてしまい、最後に振り下ろされた剣に纏われた木の葉の竜巻が、炎山を襲つた。

バシン、と強制的に炎山のシンクロが解除され、炎山は壁に叩きつけられ、傍らにブルースの映るP E Tが落ちた。

次山様！！

フルーリスの焦った声と、ヒケリとも動かない炎山を興味もなしにスバルは見て、次にと、熱斗をひた、と見据えた。

その表情は、本当に僅かだったが本来のスバルに近かつた。

こんな状況で笑うどころか怒る性格の事を考えれば、少しあはいと
ころにまで頑なに『復興』を訴える呪縛に、スバルの意思は押さえ
込まれているのだろう。

どこか痛みの伝わってくるスバルを見据えながら、熱斗はぎゅ、と腕のバンドにはまつたP.E.Tを握る。

「ロック、あのわ……」

冷静に、
熱斗は小さな情報端末の中にいるパートナーに、作戦を告げれば。

『そんな……無茶だよ!!』
だつて、スバルくんとウオード・ラッケは

- 2 -

即行で反対だという意見が帰ってきた。

「でも、あのままじや二人が……」

ロックマンの翠の瞳と、熱斗の茶色の瞳が真っ直ぐに互いの瞳を見る。

ロックマンはパートナーを心配する、どこか兄のような瞳。

熱斗はただただ、真っ直ぐに、自分の意思を搖るぎなく訴える瞳。

しばらく互いの瞳を見たまま動かないでいるかと思いまや、こういう状況だったので、やはりいつものようにロックマンが折れた。

『……分かった、でも、熱斗だけでやるんじゃない』

分かつてゐるよね、と、ロックマンではなく、ロックマンのもう一つの人格で、熱斗にとつては、たつた一人の兄の表情で、念を押されて熱斗の顔が綻ぶ。

「……そうだったな、俺達で、だよなー！ 行こう、彩斗兄さん！」

！ ……そして、「

次に見えた表情は兄の彩斗のものではなく、幼い頃から傍にいた、大事な親友の表情。

「ロック！！

『うん！…』

だつ、と熱斗は床を蹴つて、手に持つたシンクロチップを取り出す。

「シンクロチップ、スロットイン！…！」

『クロス、フェージョン！…』

熱斗の声とロックマンの声が重なり、熱斗の姿に、ロックマンの姿が重なった。

勝負は一瞬で決まる、と、予感のような、けれど現実に起こりそうだと思いながら、光の中から飛び出した熱斗は真っ直ぐに、スバルに向けてロックスターの照準を重ねる。

「ロックスター！！」

けれどそれを剣で防いで、スバルは一歩ずつ歩み寄ってくる。

目を逸らさずに、熱斗は声を張り上げる。

「……チャーリー！！ テスラを下に！！ メイルちゃんとジャス

ミンたちも、炎山とやいとちゃんとデカオを下に！！」

チャーリーは額きテスラを抱え上げて、窓から飛び降りる。

ジャスマシンもテスラの容態を確認しながら、飛び降りる。

燃次も、デカオを抱え、バトルチップを使い窓から飛び降りる。

メイルはやいとを抱えて飛び降り、ヒカルが炎山を抱えて飛び降りた。

「熱斗くん！！」

ツカサの声に、何、と大きい声で返して、熱斗はじり、と少しだけ足を前に出す。

「……スバルくんを、お願い。助けてあげて」

「……私達じゃ、連れ戻せないから……」

おそらく痛々しい表情で俯いているであつて、ツカサとミソラに向けて、熱斗は声を上げた。

「俺はそんな事ないと思うぜ！！ スバルたちがまだ自我を保つてられるのって、一人のお陰なんだろ？ だつたら、きっと二人が連れ戻せるよー！」

『僕もそう思う。だから、僕らがダメだつたら、ダメじゃなくても手段が見つかつたら……お願いするねー！』

熱斗とロックマンの言葉に、ツカサは少し驚愕した表情で、ミソラは少し泣き出しそうな表情になつた。

そしてその後、確かに頷き返して、足場の安定しないながらも、そこに存在するウェーブロードに飛び降りた。

しん、と静まり返るレストラン内部。

ホテルの外からの騒ぎ声が聞こえてこないのは、ここが随分と高い場所にあるからに違いない。

そして、従業員達の声が聞こえないのは、手際よく避難を終えたらしい、と当たりをつけた熱斗はぎゅ、と床を踏みしめた。

「バトルチップ、エアスプレッド！！」

ぱつ、とスバルのウォーロックブーストに似た方法で、一瞬にして熱斗は間合いを詰める。スバルはいさか驚愕した表情で、熱斗を見る。

「バトルチップ、エアスプレッド！！」

至近距離でを放つが、ボウンッ、と音と共に煙が立ち昇る。先ほど

の熱斗よりも早い、スバルの斬撃が繰り出される。

『熱斗くん！！』

「バトルチップ、イアイフォーム！！」

しかし、更にそれよりも早く、熱斗のバトルチップの攻撃が、繰り出された。

「ええい！！」

スバルの剣を握る左手を力任せに薙ぎ、その手からベルセルクの剣が跳ね上げられ、熱斗はベルセルクの剣を掴む。

瞬間。

「ぐつ……！」

するり、と意識の中に、別のものが、どす黒い嫌な何かが進入していく。

まるで意思を食いつぶされるかのような感覚に、熱斗は唇を噛み締めて耐える。

たった一つのオーパーツでこれなのだ、スバルたちはよくこれに反抗できたな、と頭の片隅で思うも、すぐにそれをかき消した。

幸いにも、ベルセルクを失った影響か、スバルの動きが止まっているので、熱斗は自分の中へ意識を集中させた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

あたりには幾百という、人々の影のイメージが浮かぶ。

そして、その中央に立つ自分と、ベルセルクの突き刺さった台座。熱斗はベルセルクに手を掛けて引つ張るも、まるで一つの岩で作られたかのように抜けない。

それに焦つて引っ張る熱斗を嘲るように、影達は血らの意思を押し付けてくる。

『ソノミラ、ココセー！ ベルセルク、フツコウノタメニ！』

『ソウダ！ ベルセルク、フツコウノタメニ！』

『サア、ソノミラアケワタセ！』

こちらの意見を全く聞かず、頑として『復興を』、とだけ唱え続け、熱斗の意識を塗りつぶす。

頭が割れそうなほど、それを繰り返す『影』達。

これだけも狂いそうなのに、スバルとウォーロックの中で暴れまわる、これらはオーパーツに宿った呪縛の一部に過ぎない。

スバルたちの中にあるのは、ベルセルクだけでなく、後一つ、同じような事を繰り返し、持ち主の『自我』を侵食するシノビ、ダイナソーの、力もなのだ。

「く……うつ……！」

熱斗は呻き、ベルセルクの柄を握り締めながら、寄りかかって頭を抑える。

『ハヤクオトナシクナレ！…』

『ティコウスルナ！… ソノミヲ、コロセ…』

『ワレラ、ベルセルクノタメ！…』

嫌といつまじに繰り返される言葉に、ぎゅう、と口を開じた瞬間。

『自我』、といつ意識が消えそつになり、熱斗は立ちくらみのような感覚を味わい、そのまま身を委ねそつになり。

「熱斗、聞いちゃだめだ！…」

寸前、ぐい、とその声に引きずり戻される。

瞬間で『自我』が戻り、自分を引き戻してくれた声を見上げる。

「全くもう、だから無茶だつて言ったのに……」

そういつて熱斗を飲まれる直前で引き戻した少年は、『だから熱斗くんは……』と、状況が状況なのに、いつものように説教をし始めたよつとした。

「う、うめん……」

そこにいたのは、熱斗が謝れば『全くもう』と、やついつて怒るくせ、顔に浮かぶのは笑顔といつ、らしい表情をした、ロックマンHグゼ……そして、光彩斗と言つ名前を持った少年だった。

ロックマンもベルセルクの柄に手を当てながら、口を開く。

「スバルくんとウォーロックを助けるんでしょ？」

「つん、と確認するかのように額を合わせて、ね、とロックマンが言えば、撲つたそつに熱斗は笑つて頷く。

今の風景に不釣合いだが、元々一つの魂が二つに別れた存在だ。だからこそ、落ち着いて、自我を確固たるものにし、心を言葉を、口にする。

「俺達なら」

「僕達なら」

互いの瞳を真っ直ぐに見て、同じタイミングで、言葉を続ける。

「必ずできる」

「絶対できる」

頷きあつて熱斗とロックマンは、ベルセルクの柄に置いた手に力をこめる。

「行くぞ！――」

「うん！――」

ぐ、ヒタヒミングを合わせて、思いつきり引つ張り、叫ぶ。

『はああああああああああつ――』

一人の魂の叫びが籠つた声に応じるかの」とく、それまで頑ななまでに台座に刺さっていたベルセルクが、二人に従うかのように抜け始めた。

ゴトッ、と鈍い音と共にベルセルクが抜け、それを掲げる、熱斗と彩斗を中心として、強い光が沸き起こった。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

バチイツ、と強い放電を辺りに散らして、ベルセルクの剣を掲げる
のはスバルではなく。

「ロックマンエグゼ、サンダーベルセルク！！」

どこかスバルとウォーロックのサンダーベルセルクに似た、熱斗と
ロックマンの絆が生み出した、新たなる雷の剣士が、真っ直ぐに剣
先を、すらり、と躊躇い無く、シノビとなつたスバルに向ける。

「さあ、俺達が…」

『さあ、僕達が…』

「『相手だ！』」

そして、ゴウジ、と凄まじい衝撃が巻き起こつた。

E「じゃんこひは、40000円、ニーク5000突破つてこと
で……番外編、『タイヒメ参加メンバーを呼んじやいまSHOW!
!』の時間だよ。今回はロックマンエグゼ組でお送りします」

ね「なんだよそれ！？」ていうか、何そのネーミングセンスの欠
片もない番外編題名はどうからー？」

E「分かりやすくて良いじゃない。良い案が浮かばなかつたのもあ
るらしいけど」

S「それは言つちやダメだよ！… 作者も色々分かつてるけど、あ
えて言わなかつたんだから！…」

星河スバル、セット傍の椅子から立ち上がる。

ウオ「お前も言つてるぞー！」

ウォーロック、今回はウィザード・オンとして登場。

E「例によつて、流星組はセット傍で見学中だよ。もはや見学して
てもしてなくとも、じゅうや混ぜだから意味ないけど」

ね「と、とりあえず、題名は良い案が浮かばないから、誰かに付け
て貰えたら付けて貰うまで、これで行くとして！… えっと、今回
のゲストは……」

E「『ロックマンエグゼ』クロスオーバーキャラとして登場の、太
陽少年ジャンゴー！」

「ウオ「ちゅうと待て!!」そいつ、登場してねえぞー?」

E「そしてそして」

ロックマンXGゼ、ウォーロックのシッ ハリ無視。

E「『流星のロックマン』クロスオーバーキャラとして登場の、見習い銃士ジャンゴ!! なお、オテンコは『オテンコ』がどうかの時間軸の要に共通するからと、お休みだそうです」

ウオ「いらっしゃあああああっ!! 無視すんじゃねえええええ

つ!! つて、何すんだスバル!!」

星河スバル、怒り狂っていたウォーロックの背中辺りの毛並みを何かを探すように触る。

ス「いや、メモ用紙が見えたように見えたんだけど……」

ね「メモ?」

ス「あ、あった」

ね「何でそんな場所に!?」

星河スバル、ウォーロックの電波の毛並みの中に見えたメモ用紙を引っ張り出す。

ス「じゃ、読むね」

ウオ「おう」

ス「えーっと……『DSのジャンゴ』と、こちらの番外編に出すかは分かりませんが、DSのサバタは海外バージョンの名前で行きます』

だって「

ね「あ、そういうえば海外でも出でるんだっけ」

ス「『DSジャング』はアーロン、DSサバタはルシアンで行きますのであしからず』、だって。凄いね、二つも名前があるなんて。ね、アーロンくん、あとこらっしゃい、ジャンゴさん」

アーロン（以下・ア）「そうかな？ スバルくんも姿に合わせいろいろな名前があるよね。僕はそつちが凄いと思つなか」

ジャンゴ（以下・ジヤ）「こんなにわせ、スバルくん。でも、僕よりはましだと思つよ。バンパイアだからって、黒ジャンゴってつけられた事があるし（苦笑）」

GBAジャンゴ & DSジャングもとい、アーロン、いつの間にかゲスト席に着席。

ね&ウオ「だからなんでしれつといるんだ
！？」

光熱斗 & ウォーロック、ジャンゴ & アーロンに驚愕しながら飛びずれる。

ジヤ「アーロンの時代のひまわり娘が送つてくれたんだよ。それよりも、久しぶりだね。熱斗くん、ロックマン」

ね「そ、それも久しだね。久しぶり、ジャンゴくん」

E「にしても、印象が違つんだね。ジャンゴくんとアーロンくんつて」

ス「あ、ロックマン。『タイヒメ』設定だとアーロンくん、女の子つてことになつてゐから、番外編もそれで行くつて」
星河スバル、メモの下に書かれた追記事項を読み上げる。

ね「…？」

ア「あはは、全く見えないでしょ？」

アーロン、いつの間にやら準備されていた、赤い太陽マークのマグカップに入つた蜂蜜ミルクを飲み、笑う。

ジャ「でも、アーロンの日本での名前はジャンゴ、なんだよね？お父さん、名前なんていつの？」

ア「何で名前？」

ジャ「もしかしたら、僕が知ってるかもしれないって思つちゃつたんだけど……」

ウオ「気になんのか？」

ジャンゴ、ウオーロックの言葉に苦笑。

ジャ「だつて、同じ名前で同じ戦士だったら、何かそんな気がしちやつて……きのせ」

ア「父さんはトニー・ティだよ」

アーロン、ジャンゴの言葉の途中で喋る。

ジャ「似てない！！ かなり似てないよ…？ 髪質はともかく、顔が…！」

ジャンゴ、急に驚愕した表情で叫ぶ。

「何いきなり！？ ていうか、トリニティって、あのちびっ子！？」

光熱斗、シンタイ登場キャラクターを思い出す。

E 「なんだか似てないね」

ジャ 「ちなみに、何か言つてなかつた？」

ア 「なんかバンパイアの策略で閉じ込められてるのを、助けたとか言つてたよ」

ジャ 「……その通りデス」

ジャンゴ、目の前に置かれていた赤に白い太陽の模様が入ったマグカップの、ココアに口をつけて、返答した。

ジャ 「にしても、トリニティの……」

ア 「ジャンゴさん？」

ジャ 「……」

ジャンゴ、辺りを見回す。

ス 「どうしたんですか？」

ジャ 「や……なんか、来そうだな、と……」

ウオ 「？ どうこう意味だ？」

ス「まあまあ、本番中だし来れなによ。さて、ロックマン
星河スバル、どこからともなくいつもの箱を取り出す。

E「じゃあ、お題くじ引きに行つてみよひーー。熱斗くん引いて

ね「俺!?

星河スバル、持つていた箱を、熱斗に向ける。

ね「えーと（ガサゴソ）。あ、これだ。なになに……『もし時間
移動が出来るなら、どの時代に行きたい?』」

E「じゃあ、まずはジャンゴくん」

ジャ「僕? 僕は……まだ、家族が幸せだった時に行きたい、かな。
まあ、そんなに長い期間じゃないんだけど、ね」

ジャンゴ、やびしそうな表情でつぶやく。

ジャ「結構散々だったんだけど、ね。幸せな時間の終わり方が。でも、写真は欲しいよ……。ところで、アーロンはどの時代に行きた
い?」

ジャンゴ、アーロンに話を振る。

ア「僕は……父さんやサルタナ、エレンさんがいた頃に行つてみた
い、かな。あんまり記憶に残つてないから

ね「サルタナ? エレン?」

ア「記憶に残つてるんだよね、その名前が。ちなみに、エレンさん、
つて人が僕の母さんなんだって」

「 ウオ 「……人って、覚えてねえのかよ」

ア「覚えてるわけないじゃない。小さかったし。いつの間にかいなくなっちゃったし。サルタナの方は……なんだか、イラツとくるんだけど……チョコレートとか、甘いもの取られた気がして。……まあ最近、サルタナがルシアンだつてのは分かつたけど、完全に別人だし」

ス「別人?」

ア「記憶がないんだって。サルタナはいつも笑つて接してくれてたけど、ルシアンが笑うことなんて、めったにないもん」

ジヤ「……サバタそっくりだー。サバタもめったに笑わないし」
以下、なにやら相棒の愚痴りあい大会。

「怒ると無言でこっちに銃口向けてくるんだよ!! 危ないの何の
以下、30分後……」

「そうそうっ!! 怒ると人の頭、力任せに掴んで、痛いよっ」
「……アーロン」

「ジャンゴさん」
「ジャンゴ & アーロン、がしり、と手を取り合つ。

EXE組 & 流星組、完全に蚊帳の外で、集まつて話し出す。

ス「ね、ねえ……。な、何が、話すれてない?」

ね「うん、すつぐべれたね……。ていうか、相当鬱憤がたまつて
るみたいだね、アーロンの方……」

ウオ「ああ……。背後に何か黒いものが見えてやがる……」

E「なんだか話が逸れちゃったので、ゲストさんたちには悪いけど、
勝手に終わらせて貰いまーす。では、『タイヒメ参加メンバーを呼
んじやいまSHOW!』 また次回!—!」

P・S

ウオ「あ、一応、タイトルのネーミング悪いんで、タイトル変える
かもしんねーぜ」

ね「ていうか、『タイトル変えたい』だつて

光熱斗、隅っこに置かれたスケッチブックに書かれた言葉を読む。

ス「思いつき次第&もししくはタイトル消すかもしれないけ
ど、しばらくなはこのままで」

EXE & 流星「では、今度こそまた次回!—!」

番外編07（前書き）

……今日は今までにないほどで、キャラを壊した気がします。なので、キャラ崩壊が苦手な方、キャラが会わないとやっているのが苦手な方は、見ないでください。

ス「新年」

ウォ「あけまして」

ね「おめでとう」

E「ハヤシマーサ」

星河スバル ウォーロック 光熱斗 ロックマンエグゼの順番に挨拶をする。

以下、司会者組の格好。

星河スバル、赤に流星マーク入りの振袖。

ウォーロック、いつも通り。

光熱斗、青地にナビマークの入った羽織と、水色の袴。

ロックマンエグゼ、水色にナビマークの入った羽織と、青地の袴。

ス「500000PV&60000PV突破記念、『タイヒメ参加メンバーを呼んじやいまSHOW!!』は、今回は新年明けて一作目なので、全員参加です」

ね「結局そのままかい」

E「一回またメモ、データ全部消えたって。ついでに違うタイトルをメモった紙、なくしたって」

ね「それで、今回にんなに長く投稿できなかつたのはなんだだ？」

ス「まず文化祭でじたばたでしょ」

ウオ「あ、それはいつてたな……」

E「次に持久走練習が始まつてへとへとになつて」

ね「引きこもりだから運動苦手だつて言つてたな」

ス「ついでにインターネット環境がほとんぢだめになつて」

ウオ「いつものことだな」

E「そこに風邪引いて高熱出しつゝ、ぐるぐるで年末寝て過ごして」

ね「……紅白見れなかつた、つてぼやいてたな」

ス「そして一週間前ぐらじにインフルエンザにかかつて」

ね「 身体鍛えてよ作者！！」

E「どうもとばかりに一週間前に学年末試験が、終わつたばかりなんだよね」

ウオ「……重なりすぎじやねえ？ 特に病気邊づ」

E「それはともかく、ではでは新年一発目のゲストはーー！」

ウオ「 無視かオイー？」

ス『『ロックマンエグゼ』より、熱斗くんの親友で、よきライバル
!! 大山デカオくんとそのパートナー、ガッツマン!!』

E『『流星のロックマン』より、一つの心を持った少年、双葉ツカ
サ&ヒカルとそのパートナーFM星人のジョニー!!』

大山デカオ、ガッツマン、双葉ツカサ、ジョニー、既にゲスト席に
着席済み。

以下、『EXE組』と『流星組』に別れて新年挨拶。

『EXE組

ね「デカオ、ガッツマンあけおめ~」

E「あけましておめでとう、デカオくん、ガッツマン」

デ「おう、あけおめ!!」

ガ「あけましておめでとうでガッツ!!」

デ「で、熱斗。さうそくだが……」(シャキーン)

ね「おう」(シャキーン)

光熱斗、大山デカオ、PETを構える。

ね『プラグイン!! ロックマンEXE、トランスマッシュショーン!!』

デ『プラグイン!! ガッツマン、トランスマッシュショーン!!』

光熱斗、大山、デカオ、ネットバトル開始。

『流星組』

ス「ツカサくん、ヒカル、ジヨミー、あけましておめでとう」

ウオ「今年もよろしくなーー！」

ツ「うん、あけましておめでとう」

ジヨ「今年も世話になる」

ス「……えっと、ヒカルに僕の声、聞こえてる？」

ツ「大丈夫、ちゃんと聞こえてるよー」

ヒ^く「……一応、あけましておめでとうは、言つておく」

ス「うん、あけましておめでとう」

ね「ロックマン、そこだあーー！」

デ「うわあああああーー！」

光熱斗＆ロックマンエグゼペアの勝利で終わる。

ス「あ、終わった？」

エ「うん、終わったよ」

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

ス「じゃ、今回のゲストへのお題は、個人個人違うお題で行くから、まずは『デカオくんたちから引いてね』

星河スバル、大山『デカオにくじ箱を差し出す。

『「（ごめん）えーと、なになに？』『好きなだけ時間がもられます。あなたは何をしますか？』』

『「そりゃあやつぱり、ネットバトル修行と、カレー修行だな！－！』

『「期待してるぜ、『デカオ！－！』

『「おう、任せたおけ！－！」

光熱斗、大山『デカオ、がしり、と手を組む。

E「……ネットバトルとカレーにかける一人の目の光が、尋常じゃないよ……」

ガ「いつもの事でガス……」

ス「何かもうキラキラ通り越して、ギラギラだよね……」

ウオ「地球人てのは凄えな、オイ……」

ツ「アレは尊敬に値するほどの熱中ぶりだね……」

ヒ「人間ここまで熱中できるもんなのか……」

ジユ「もはや凄い以外の言葉をなくしそうだ……」

ロックマンエグゼ、ガッツマン、星河スバル、ウォーロック、双葉ツカサ、ヒカル、ジユミー、後ろの方で固まつて心の内を語り合つ。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

エ「じゃあ、次はガッツマンだね。はい」

ロックマンエグゼ、気を取り直し、ガッツマンにくじ箱を差し出す。

ガ「えーと……、『もしパートナーを代えることができたら、誰がいいですか?』って、無理でガス!! デカオ様以外は考えられないガツツ!!」

デ「ガッツマン……」

大山、デカオ、ガッツマン、互いの手をガシッ、と取つて、感動のあまり泣き始める。

ス「僕はちょっとパートナー代えたいって思つときあるんだけど、あそこまで無理って言い切るの、凄いなあ」

ウオ「おま、それ酷くないか!?」

ス「……人の天体観測を邪魔したり、望遠鏡を破壊したりしたの、誰だつて? あ、そうだ、マテリアルウェーブのストックでたたけばわかる?」

星河スバル、一切目が笑っていない笑みをウォーロックに向けつつ、何気にマテリアルウェーブのスキーのストック（尖っている方）を向ける。

ス「……少し……反省しようつか……（某白い魔法少女の台詞のよう
な読み方で）」

ス「やだなあ。ウォーロックは電波だから実体で刺されたくらいじ
や、死ないでしょ？ じゃ、覚悟！！」

星河スバル、目だけものすごく光らせて、フエンシングでもするよ
うに、ストックを振る。

ウォーロック、必死で回避する。ただし、ストックの先が身体を掠めている。

「……スバルくんって怒らせるとものす」「へ怖いんだって、何で分からんんだろうね……」

双葉ツカサ、準備されていたジュースを飲みながら呟く。

ヒハ馬鹿だから学習しないだけだろう

ジョ「それより、光熱斗とエグゼが怯えてるぞ」

光熱斗、ロックマンエグゼ、セットの端で固まつて怯える。

ね「スバルが、スバルがマジで冗談抜きに怖いい……！」

E「フォルテとか、ダークロックマンより怖いよあれは！」

ツ&ヒ「あゝ」

双葉ツカサ、ヒカル、綺麗に声がシンクロする。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

ス「はい、ツカサくん。後でヒカルに交代してもらえるかな？」

ツ「うん、いいよ」

星河スバル、先ほどのことを忘れたような晴れやかな表情で、双葉ツカサにぐじ箱を差し出す。

ジェ「……オイ、無事かウォーロック、光熱斗、ロックマンエグゼ」

ジョニー、地面に倒れるウォーロックを揺さぶり、よつやく立ち直った光熱斗とロックマンエグゼに声をかける。

ウォ「あー……なんとかなー……」

ね「怒らせちゃいけない人リストにスバル追加しておこいつ、ロックマン」

E「そうだね、それが賢明だよ……」

ス「……？ 皆、何か言つた？」

「ウオ & ネ & エ』なんでもないです！！」

ウォーロック、光熱斗、ロックマンエグゼ、揃つて星河スバルに返答する。

ス「……変なの。それでツカサくん、お題は？」

ツ「えーと……『通信端末として使うのなら、P E TとハンターV Gのどちらがいいですか？』」

ね「俺はやつぱり、使い慣れたP E Tだな

デ「だよな

光熱斗はロックマンエグゼのナビマークが入ったP E Tを、大山デカオはガッツマンのナビマークが入ったP E Tをそれぞれ取り出す。
ス「P E Tも慣れてみれば使いやすいけど……僕はやつぱり、使い慣れたハンターV Gかな」

星河スバル、手に付けたハンターV Gを見つづ、光一家が用意立ててくれたP E Tを見る。

ヒヽ俺はハンターV Gだけしか使ってないな。P E Tの使い方はツカサが使ってたから分かるけどな。まあ、使つとしたらやっぱりハンターV Gかく

ツ「うーん、そうだね。やっぱり両方使ってみて、思つんだけどね。……使い慣れてるハンターV Gの方がいいかな。|画質も性能もいいし

ス「そつか、そうだよね。
画面とか大きいしね」

確かにハンターV Gの方が、表示される

星河スバル、P E TとハンターV Gの画面を表示させながら、双葉ツカサに同意。

ね「俺も使ってみたいなー。同じくらいの大きさで実体化できるんだろ? それだったら、色々一緒に景色見れるじゃん!! って、うおー!! 画面がお盆みたいに持てるー!!」

光熱斗、星河スバルのハンターVGが表示した画面を振り回す。

スーあ、熱斗くん、その画面……

ねーわあああああああ、ごめんなさーいー！」

光熱斗、ウォーロックの怒りに、必死で謝る。

ス「ウォーロックのカスタム画面だから、怒られるよつて……遅い
か」

星河スバル、言い損ねた言葉の続きを何となく呟いた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

E「じゃあ、ヒカル。はい」

星河スバル、ツカサからヒカルに交代した双葉ツカサに、くじ箱を差し出す。

ヒ「俺は……『女装するとしたら、どういう衣装がいいですか』って、なんだこのお題!…?」

ス「うつわあ、それ引くって、けっこう運最悪だね、ヒカル……」

ね「というか、誰が入れたんだ? いつもくじの準備してるのって、スバルとロックだろ? ロックが入れたのか?」

E「僕でも、スバルくんでもないよ。遊び半分で、作者がそれと後一個、『爆弾質問』を入れたんだよ」

ヒ「出て来い作者ああああああ!…!」

ウオ「ん? ……おい、ヒカルこれ」

ウオーロック、またもやなぜか毛並みに埋まっていた、折りたたまれたメモを取り出し、ヒカルに渡す。

ヒ「……なんだ? (パラ) 何が書いて……」

ヒカル、ウオーロックから受け取ったメモを開き、硬直する。

メモ『ここはキャラの座談会なので、出ません。ていうか、逃げま

す。 by・月峰 夕

ヒ「逃げるなあああああーー！」

ヒカル、手に持っていたメモを握りつぶす。

ス「で、どうこうう衣装がいい？」

ヒ「聞くな、俺に聞くな」

ス「じゃ……」

ジェ「俺に振るな

星河スバル、ジハミーのほうを見む。ジハミー、面つよつ早く拓
絶。

ス「……じゃ、ツカサくん

ツバキにも振らないで……。身体は、僕なんだから……△

ス「じゃ、△……」

E「……肌白いから、『口スロッ』でいいんじゃないかな？」「

ね「ていうか、もうやめてあげて……」

ウオ「ああ、もうこいだろ……」

ガ「でガス……」

デ「ヒカル……頼むから、頼むから」

ジユ「……もう『スロット』でもいいから、頷いておけ

ツヽじゃないと追究されるよ……へ
い……」

ヒ「…………これ以上話題にならないんだつたら、もつなんでもい

い……」

男性陣、結託してお題を強制終了。

↙ ↘ ↙ ↘ ↘ ↗

E「はい、ジユ!!!」

ロックマンEXE　○　流星のロックマンのビデオ
がに、存在を選べるとしたら、どちらを選びますか?『だな
差し出す。

ジユ「……『ロックマンEXE』　○　流星のロックマンのビデオ
がに、存在を選べるとしたら、どちらを選びますか?『だな

ね「やっぱり、流星の方に存在したい?」

ジユ「まあな。利用した形とはいえども、ツカサとヒカルと、一緒にいるのもなんだか当たり前になつてきたし、意外と人と触れ合つのも悪くないし……」

E「へえ~」

ジエ「それになにより、ハープと一緒に馬鹿と書いて、ウォーロックと読む奴をいじるのが楽しい」

ウォ「…………喧嘩売つてんのかよ、テメエ?」

ジエ「何を今更」

ウォ「……」

ジエ「……」

ウォ「スバル! ! !」

ジエ「ツカサ、ヒカル! ! !」

ウォーロック&ジエミー、ウェーブバトルにパートナーを促そようと振り返り。

ス「…………ふ、た、り、と、も…………?」

星河スバル、ウォーロック&ジエミーが振り返った先に佇み、二人を睨みで一瞬で沈黙させる。

E「スバルくん、間違いなくこの番外編の主導権握ってるね…………」

ね「普段がかなり真面目で優等生だから、これが反動なんじゃ…………?」

デ「とにかく、怒らせるな、だな…………」

ガ「ガツツ……」

ヒ「俺らはゲストだから、そういうのいつにあわないから……」
ヒ「俺らはゲストだから、そういうのいつにあわないから……」

ツ「二人とも、頑張ってね」

ウォーロック&ジエリーを除く男性陣、密かに頷きあつ。

↙ ↘ ↙ ↘ ↘ ↗

ヒ「なあ、熱斗く

ね「ん？ 何、ヒカル？」

ツ「スバルくんの説教が終わりそうにもないし……。終わらせたら
？」

双葉ツカサ、いまだ続く星河スバルの説教を示す。

デ「それがいいんじゃないのか？」

ガ「こっちに飛び火が来ないうちに、逃げるでガスよ……」

E「それもそうだね。じゃ、熱斗くん」

ね「ああ。せーの」

E&ね『じゃあ『タイヒメ参加メンバーを呼んじゃいまSHOW!-』、また次回!-』

大分遅いですが、あけましておめでとうございます、そしてかなりのお久しぶりです。

ちなみに投稿できなかつた理由についての、スバルたちの話ですが、……自分でも信じられない重なりようでした。

年末の熱の方は初日に夜中に39度を超えて意識朦朧として、そこから一日間は37度と38度台を行き来して、新年明けるまで下がらなかつたです。

そしてついこの間、朝起きてなんかしんどくてそれでも出席日数、と学校に出て、やつぱりしんどくて保健室に行つたら、38度台を出して、病院にいけばインフルエンザと風邪のどっちでしょうねと言われ……。

あ、鼻の粘膜調べる検査では（鼻の奥をぐりぐりとするあれ）、インフルエンザ反応は出なかつたんですけど、インフルエンザの薬を貰つて帰つて、飲んだ翌日にはけろつとしていて熱を測れば、36度台まで下がつていたので……。

妹が私の熱が下がつたその日に熱を出し、ついでに私のことをお医者さんに言つた母曰く。

「風邪だつたら、インフルエンザの薬じゃ下がらないから、確実にインフルエンザ」
だそうです。

時々いるらしいです。反応が出なくとも、インフルエンザに感染している人が。ちなみに妹は風邪だつたようです。

よかつた、うつしてなくて……。

ちなみに父も去年同じような出来事がありました。インフルエンザかと思って調べたら反応がなくて、風邪薬もらつたはいいけど、ずっと下がらなくて病院に行つたらやつぱりインフルエンザだったって言つ……。

……その、ただ、……これでクラスで人に移してたら……絶
やばいどじろじやないですよね……（泣）。うううう……。

そういうわけなので、進路は決まっていますがネット環境という問題のため、しばらく投稿できないと思いますが、それでも、これからも宜しくお願ひします。

過去VS未来（前書き）

……何ヶ月も本編投稿してない上に、体調崩して五月末までに投稿できなかつたつて……。

……どんだけ身体弱いんだ自分！？

炎山は安静にと細心の注意を払い横たえられ、テスラは傷に響かないようことづつ伏せにされて、メイルとジャスミンの治療を受けている。

デカオとやいとも、戦えないからこそ心配そうに怪我した一人を見ていた。

そして、熱斗に言われてホテルから逃げ出した一同。とん、とミソラが最後に地上に降り立った瞬間、上で凄まじい爆風が起ころ。

「な、なんだあ！？」

「……あそこだ！！」

チャーリーが声を上げた瞬間、ヒカルの指した先、ぱつ、と爆風で起きた砂塵を切って飛び出してきたのは、銀色のボディに雷の剣を持つ剣士と、緑色のボディに赤いマフラーの忍者。

たんつ、と籠げなウェーブロードに両者は着地を決めて、にらみ合う。

じいっ、と一同が見つめる先で、シノビから姿を晦ませ、続いてベルセルクもその姿を晦ませた。

「『消えた！？』」「『』

メイルとロールが叫べば、ミソラが違うわ、と告げる。

「周波数を変えて戦ってる。……電波には影響が出るかもしねないけれど、建物や人……周りに影響を出さないように周波数を変えたんだわ」

『多分、無理矢理スバルとウォーロックの一人がやつたんだが、ズウン、と音を立てて、ツカサの後にジョニーが出てくる。』

「それは、どういう意味なんだえ？」

燃次が問い合わせれば、今度はミソラの後にハープが出てきた。

『微量に、本当に一瞬だけだったけど、呪詛の言葉に埋もれる中から、一人の周波数が強く漏れたわ。それと』

ハープはまず、そう前置きをして、ツカサが言葉を受け継いだ。

「それと、熱斗くんたちも……周波数の調整を無意識にやつてる。
……相当なバトルセンスだね」

初めて周波数というものを使つた戦い方をするのにね、と、ジエミーに意見を求め、ジエミーも、そしてミソラも頷いた。そして落ち込んだ表情をしながら、ツカサは呟いた。

「……こんな時にだけど、流石スバルくん、って思うよ……」

「……私も思う。私、止めることさえできてないのに……」

ミソラもしゅん、と落ち込んでいたが。

がん、こん。

ヒカルがツカサを巨大な右手で、ミソラは女という事で手加減した
ようで、普通の左手で叩いた。

「ヒカル、急に何するの」

「痛いよヒカルくん」

ツカサに比べれば、ミソラは痛くない部類に入るだろうが、気持ち
というものだ。

「なーに、しけた面してんだお前ひ。さつき、熱斗も言ってただろ、

『スバルたちがまだ自我を保つてられるのって、一人のお陰なんだ
ろ』って」

『……ベルセルクのことは、ともかくも……実際、絆がなければ、
今よりも状況は悪化していたはずよ』

『スバルがまだあの内で、人のことを考えていられるのは、お前らがいるからだ。自信を持て。お前らが最後の命綱なんだぞ』真剣そのものといったハープと、ジョニーの言葉。

「……なら、二人にもちやんと役目はあるつてことよね」ふむ、と呟くやいとの声に、そちらを振り返る一回。

「……しつかり星河くんたちがこれ以上、オーパーツの力に、呑み込まれないようにするつていう、役目がね」

「電波に対して手立てを持つてねえし、クロスフュージョンをえてきない俺らこそ、悔しいが何もできねえ……。だからこそ、頼んだぜ！」

そう言って、といたずらっぽく笑うやいと、拳を突き出すよつこ鼓舞するテカオ。

「……そう、だね。そなんだよね、ミソラちゃん」

「……うん、そうだよ！ 私たちがしつかりしてないと、絆つて弱くなつて途切れちゃうもん！」

少しだけ表情が硬いが、しつかりとした瞳で、ミソラを振り返るツカサ。

そして、ぎゅつ、と拳を作つて、自分にも言い聞かせるように、言葉を綴るミソラ。

『やうやう。分かったのなら、信じてなさい？』

『お前たちが、本当に命綱を託されてんだからよ』

くすくすと元気を取り戻したパートナーを見てうれしく思つハープと、少しだけ緊張をほぐすようにつげるジョニー。

そして、電波の戦いを捕えることのできるツカサ、ヒカル、ミソラ、ジョニー、ハープは空を見上げ、瞳に映る戦いの行方を追つた。

不謹慎ではあるが、元気を取り戻し、信頼の笑みを浮かべる三人と

「一体のパートナーたちに、ほつと息をついたやい」とデカオ。

「なんか、光くんを励ますときみたいね」

「でも俺らが、実際何もできないのは本当だしなあ……」

「悔しい、わね」

「ああ……」

眉を寄せて呟いたやいとデカオの一人は、何も見えずとも、祈るような思いで空を見上げた。。

「ま、実際二人ともレベルが凄まじいから下手に手出しさできないし、本当にやばくなつたら手を出すか」

「めんどくせえが……それしかねえな……はあ」

そんな会話を後ろで聞き、メイルたちの治療を見ながら、そう言って頭の後ろで手を組むチャーリーと、珍しくため息をつく燃次。

「力があつても、力になれねえってのは、しんどいぜ……」

「ああ……」

そうして、一人も目に見えぬ戦いを追つよう、空を見上げた。

「……結局は、熱斗に託すしかないね……。でも、私たちにできることも、ちゃんとあるネ……」

「うん……今私たちにできる」とを……だから、熱斗、頑張つて……！」

二人の治療をつづけながら、祈るように、ジャスミンとメイルは空を見上げた。

▽▽▽▽▽

ぱちり、と派手に火花を散らせてベルセルクと、巨大な手裏剣で打ち合っていた二人は離れて、距離をとる。
とんつ、と熱斗がウエーブロードに降り立つも、降り立つた場所に、ビキイツ、と音を立ててひびが入る。

けれどそれ以上、ウェーブロードにひびは入らず、熱斗はその上に踏みとどまつた。

この時代の電波の道、ウェーブロードは酷く不安定だ。

……といつか、ウェーブロードが空にあることさえ知られていない時代である。

電波よりもネットワークが発達しているから、仕方ないのかもしれないが、同じように静止したシノビ姿のスバルを見ながら、ぽつり、とロックマンが呟く。

『……今思うのって実に不謹慎だけど……、ニアーシューズ、ナビカスで組み込んでおいてよかつたと思った……』

「……ロック、今俺もそれ思つたから、気にしなくて大丈夫だと思う……」

改めて熱斗はぎゅつ、とベルセルクの柄を握り締めて、ぱつ、と脆いウェーブロードを走り出した。

スバルはふわり、と木の葉のような軽さで、ウェーブロードをかけてくる。

「はあああっ！…」

ざんつ、とスバルに向けてベルセルクを振り下ろすが、とーん、と軽い仕草でスバルはそれを上に飛んで避ける。

そのまま体重がないもののように、刃の部分に片足で立つと、蹴りを熱斗の顔面にお見舞いしたのち、鋭い手裏剣の追撃を喰らわせる。

手裏剣が届く前に、なんとか体勢を立て直した熱斗は雷を落とし、その手裏剣を全て破壊した。

「はあ、はあ……」

「……」

熱斗は慣れない力のため、両肩で息を継ぐが、スバルは無表情のままで立っている。

スバルの意思を反映し、年齢よりは落ち着いているがくるくると意思が変わる瞳が、今はまるで苦しさだけが表面化したような瞳。けれど、あれと似た瞳を、どこかで見たような気がしてならない。

不意に、そつと、寄り添つよつて問い合わせてくるパートナーの声がした。

『大丈夫、熱斗くん?』

「……ああ、大丈夫だつての。……ロックも大丈夫か?」一つになつていても聞こえる、信頼できるパートナーの声に、熱斗は頷いた。

ロックマンも、熱斗の言葉にこくりと頷く。

そして、動かずに剣を構えながら、ロックマンは口を開いた。
『はやく、解放してあげなくちゃね。苦しいなんて、言つてる暇なんかないよ?』

「……でも、なんていうか、ダークチップ使って苦しんでたブルースとか、ダークロック見てる気分になる……」

少しだけ、苦しい表情をしてスバルを見つめる熱斗の瞳に、一瞬だけ違う影が映つた気がした。

『……そつ、だね』

そうだ。

あれは、孤独の、瞳だ。

誰か助けて、ともがいて、一人は嫌なのだと、苦しいから助けてほしいと叫ぶ、あの瞳だ。

「でも、俺たちはその苦しみも、痛みも知つてゐる。……早く、助けてやるの? ……やれるよな?」

息を整え終わった熱斗はそう言つて、じり、と足を少しだけ動かす。

『そうだね……。うん、……さ、行くよ!』

熱斗の問いかけの言葉に、頷いてロックマンは言葉を返す。

……苦しみを知つてゐる君にだから、熱斗くんとは別に思いを共有していいる君にだから、頼めるんだ。

……どうか、苦しんで声の届かない、孤独に墮ちているスバルくんとウォーロックを助けるために、力を貸して。

ロックマンは自らの身の中に眠る、ダークロックマンにそう、呼び掛け、熱斗の意識が向かっているバトルへと、意識を向けた。

「はあああああつ!!

勢いよく剣を横に薙ぐ熱斗。スバルはそれを手裏剣でガードすると、冷静に、今度は拳を叩き込んできた。

「…………!!

見た目よりも、ずっと重いそれに、ずたあつ、と後ろに後退する熱斗。

ショーンツ、と軽やかに熱斗の頭の前に迫る、スバル。

今度は蹴りでも拳でもなく、巨大な手裏剣自体が熱斗の身体を傷つけようと、薙ぎ払われる。

『今だ!』

ロックマンの鋭い声に合わせて、熱斗は一枚のチップの名を叫ぶ。

「バトルチップ、カワリミーー。」

瞬間、スバルの手裏剣の刃がとらえた熱斗は、ぼんっ、と音を立ててロックマンのぬいぐるみへと変じ、変わりのようにスバルの身体に深々と手裏剣の刃が、背中まで貫いて腹部に突き立つた。

『しまつ……！』

「スバル！！」

熱斗とロックマンの予定では、手裏剣を扱えないようにと肩に攻撃する予定だった。

けれど今、目の前でショリケンがスバルの身体に突き刺さった場所は腹部。

スバルは手裏剣の刺さった部分を抑えて、がくり、と膝をついた。

「スバル！！」

『スバルくん！！』

熱斗とロックマンが名前を呼び、慌てて駆け寄りしつとした瞬間、ぼんっ、と音を立ててスバルの姿が消える。

まるで熱斗とロックマンが、カワリミを使つことを知つていたかのように、スバルが消えたのは……。

「つ……！」

『まさか……』

その可能性に思い至り、辺りを見回す。

「フウマ、シップウジン……」

真上から聞こえてきた感情のない声。

ばつ、と真上を振り仰いで、太陽を背に技の構えをとるスバルを見て、熱斗とロックマンが揃って『相手に誘われるままに隙を作つてしまつた』のだと、理解した瞬間に降り注ぐ手裏剣の嵐を、受けることとなつた。

V & V & V &

」……」

卷之三

書をめで皿を見開く//ソト
荒てたよい熱汗セロジクマンの名
を呼ぶシカサ。

「どうしたんだよ！？」
「光くんに何かあつたの！？」

デカオとやいとが慌てて一人の

「熱斗くんたちが、シノビ状態での最強の必殺技……キズナビッグバン……フウマシップウジンをまともに受けた…………」

責めた表情のまま、まつ、と唇べかひにシラは、状況を告げた。

V < V < V <

それはまさに、絶え間なき嵐のよつた攻撃。

「ハサウエイの本を買つておきなさい」

『うわあああああああつ！…』

その勢いにその場に踏みどじまれず、熱斗とロックマンは悲鳴を上げながら、跳ね飛ばされる。

全身を手裏剣で切り刻まれるような攻撃を受けたため、熱斗はベルセルクの剣から、手を放す。

瞬間、ベルセルクの鎧へひびが入り、音を立てて砕け散った。

『熱斗くん、ベルセルクが！…』

ロックマンが叫んだ瞬間、スバルの傍らへすう、とベルセルクは移動し、自然にその身体へと溶け込み、スバルはにい、と唇をつり上げる。

よつやく止まれた熱斗は、顔を上げて、スバルを見る。

「くそつ……とにかく、なんとかして……とめ……つ……うああああああああ……つ！？」

立ち上がろうとした瞬間に駆け抜けたのは、凄まじいまでの激痛。

『身体が……熱斗くんとの、クロスフュージョンが……たもてな…』

痛みをこらえ、言葉を紡ごうとしたロックマンを遮るように、熱斗の胸にあるロックマンのナビマークがパーン、と碎け散った。

瞬間、現実世界で戦う術を失い、熱斗とロックマンの身体はそれぞれ、本来あるべき空間へ戻った。

けれどそれは、人である熱斗にとつても、脆いP.E.Tの中に存在するロックマンにとつても、非情な状況での力の喪失。

それが意味するのは、高さ数百メートルを優に超えた場所に立つ術を失つたということ。

「熱斗！！」

突如現実世界に、ロックマンとクロスフュージョンした姿ではない状態で現れた熱斗に、メイルが血相を変えて叫ぶ。

けれど幸いにも、立っていた場所の直ぐ下に、1階下にあったのは、ビルの屋上。

そこに熱斗は何とか着地し、空中から落ちてくるロックマンのデータが入っているP.E.Tをつかんだ。

ほつ、ヒメイルも一同も、息をついて頬を緩める。

しかし、突如凄まじい風が熱斗の身体を叩いて過ぎ去った。

「つ……な、なんだ……？」

顔を上げれば、現実世界に戻ってきたスバルの身体を、風が包みこみ、唐突にスバルの姿が本来のものに……シュー・ティングスター・ロックマン戻った。

全員が怪訝な顔をした瞬間。

ザザツ、とスバルの身体を木の葉の竜巻が包み込んだかと思えば、火炎が勢いよく足元から吹き上がり、最後に雷が真っ直ぐに、ただ一直線にスバルに落ちた。

ドーン、と強い衝撃が辺りの空気を震わせ、現実であろうと、電波世界であろうと、全てを巻き込み、破壊する。

「……まずい！！」

ツカサが熱斗が吹き飛ばされた事と、スバルの変化、その両方にあせる。

「うわああああああああああああ

衝撃に堪えきれずにビルの屋上から吹き飛ばされ、落下していく熱

「「熱斗！！」

熱斗くん！！

卷之三

「ガサとミソニが弓を響かせた声を上げ
ノイロとやいととテガス

真っ逆さまに地上へと落ちてくる熱斗を、それをするまチャーリーがなんとか受け止めて、地面に降ろした。

直ぐに熱斗の傍にテカオとやいとが駆け寄つてくる。メイルはまだ完全に炎山の傷をふさぎ切つていなかっため、離れられないでいる。

無事なの
光くん！」

「ジ 猛獸。ロジックは、ア、魔女マリ プーマーは

-

熱斗は何とかベルセルクを使つた反動だろうと思いつつ、凄まじい疲労を感じながら腕を上げ、同じようにロックマンも相當に反動を受けたようで、この状況にも関わらずスリープモードに移行していく。

何の因果かそれと同時に、ミソラの持つ『未来』の携帯端末に通信が入った。

「え？」

ミソラが驚愕した表情でホルダーを見ると同時、ザザツ、という砂嵐の後、この時代の通信端末ではない、未来の通信端末……ハンタ

—V.Gの映し出すエアディスプレイに、一同の視線が集まり、そこに映つたのは。

信頼できて、けど余計な事を言つてはいつも恋人からお盆か何かで叩かれているものの、何よりも仲間を大事にし、スバル&ウォーロック相手では黒星ばかりが付いているが、かなりの実力者である若きサテラポリス遊撃隊長と、しつかり者の人工バトルヴィザード。

そして。

きぱきぱした、とてもしつかり者で怒らせると怖いけれど、とても心優しい、コダマ中学校1年B組委員長の、少女が写つた。

過去▽S未来（後書き）

……本編をなかなか投稿できず、すみませんでした…！

自動車学校の本免実技が落ち着くまで、投稿できずにいたので……。
でも、あとは学科だけなので、ちょっと肩の荷が下りてます。……
でも、そこが難関だよ……（泣）

あと、それが落ち着いた瞬間に気が緩んだのか、微熱が続いてだる
かつた……。

37・2という微妙なところで、食欲はないけど身体は大丈夫とい
うしんどさ。

……身体、鍛えたほうがいいんでしょうかね……。

精神の内と外

ミソラのハンター→Gから映し出された画面に、ツカサとヒカルだけではなく、やいととグライド、テカオとガッシュマン、燃次とチャーリー、ジャスミンとメイル、そして熱斗も、視線を合わせた。

そこに映っていたのは、背の高い青年と、一人の少女。

『無事だつたか！？』

『無事なの星河くん！？』

青年と少女……シドウとルナが慌てて訊ねてくるが、すぐさま押しのけられた。

『無事ですかミソラちゃん！？』

『ミソラちゃん無事…うわ…！』

代わりに小柄な少年と、大柄な少年……キザマロとゴン太が姿を見せが、ゴン太に至っては言葉の途中で、押しのけられた。

『ツカサ大丈夫か！？』

『ヒカルは無事！？』

そして目つきの悪い少年と、綺麗な女性……ジャックとクインティアが焦った表情で、こちらを見ていた。そして再び、ひょい、とシドウが顔を覗かせた。

『ミソラにツカサとヒカル……あとは知らないな？……あれ？スバルはどうした？……とりあえず今はどうなんだ？……お昼ごはんか？』

丁度未来の方もお昼時だったようで、後ろの机の上にお弁当箱がちらほら見える。というか、シドウに至ってはデザートなのか、にぎりソーダ片手に、サクサク、とつまみ棒を食べているので。

「暢氣に飯くつてる場合じゃねえ つ……」

「そして暁さん、にがりソーダ片手にチキン味のうまい棒食べないで つ……」

「それどじるじやないんですこいつちは……」
全力で、ヒカルとミソラがとにかく突っ込むべきところへ突っ込み、ツカサが叫ぶ。

（未来にうまい棒つてあるんだ……。ていうか、にがりソーダつておいしいのか……？）

そして熱斗は疲労困憊ながら、かなりずれたことを思っていた。

そんな切羽詰まつたツカサとヒカルの叫びに、シドウの横から、頭突きをするような勢いで顔を覗かせた子供がいた。

『何かあつたの！？』

『うおつ！？』

顔を覗かせたのは、肩にひまわりのようなものを乗つけた、奇抜な格好という印象が強い、少年のような少女。

『邪魔だ』

『扱いひどいな！？』

そして、シドウの肩を引いて画面へと現れたのは、眼帯で左目を隠す、ほぼ黒一色といった服装をした、翼の生えた猫を肩に乗つける少年。

見る者によつては少年に見える少女……異界より未来へと来た銃士の少女、ジャンゴはヒカルとツカサの慌て具合に、急いで訊ねてくる。

そして実際に容赦なくシドウを画面から後ろへとフォードアウトさせて、代わりに現れた異界の黒衣の剣士……サバタも、画面を覗き込む。

「スバルくんが暴走して……ツカサくん！」

ミソラが説明しようとして口を開いたその瞬間、ツカサのめがけて飛んで来た、赤い炎の斬撃を横つ飛びにツカサは避ける。しかしその余波は避けきれずに、右の頬に真っ直ぐ、赤い線が走った。

振り返った先に浮かんでいたのは、黒ずんだ鎧をまとった、三種族の王。

「あれは一体何ネ！？」

「ジャスマシン、あれ何かに似てない……？」

ジャスマシンとメイルは首を傾げてその姿を見ていたが、意味の分から未来組は背筋に冷や汗が伝わる思いで、それを見上げていた。

『ジェミニ……。あの鎧の色は違うけれど、状況は……』

『……最悪、ってことか……！』

ハープとジェミニの眩き通り、それは三種族の力を一人に集めた最強の王、トライブ・キングへとなつたシュー・ティングスター・ロッキンマンだった。

そして、その姿は、ディスプレイを通じて未来にも映し出されていて、信じられないようにそれを見つめている一同を、硬直から解き放つたのは、ルナだった。

『……まさか……、スバルくんが暴走したの！？』

「うん……。ただ、今まで見た以上に……凄く禍々しくて……」

切羽詰まつたように問いかけてくるルナに、こくりと頷いて答えるながら、構えるミソラだが、その手を押しとどめたのはツカサ。

「ツカサくん？」

「僕とヒカルで止める。だから、ミソラちゃんはみんなを避難させてくれる？ みんなを逃がすためにスバルくんとやりあえる存在も、

必要だらうしね。それに……」

そう言つて、ツカサは真っ直ぐに、スバルを見上げる。

「もし敵を相手にして、誰かを逃がさなきゃいけなくなつたとき、いつもどおりのスバルくんなら、『こゝ』は僕が食い止めるから、みんなを逃がしてほしい』って言つだらうし、一応彼氏としてはほつとけないから」

「おい」

最後に軽口を挟んだツカサに、ヒカルが突つ込んだ。

「……分かつたわ」

最後はともかく、内容は納得すべきものなのでミソラが頷いて、それぞれ意識の戻らないテスラと炎山を支えて立たせている、ジャスマシンとメイルのほうへ手伝いへと走り、同じようにやいとどテカオもそちらへ向かう。

けれど、代わりに動かなかつたのは、チャーリーと燃次。

「チャーリさん、燃次さんも……」

ツカサがそう言おうとした瞬間、チャーリーが片手をあげてそれを止める。

「おつと、俺らも残るぜ？」

「今は電波状態じやねえしな」

それにぎょつとしたのはツカサとヒカルだった。

「でも、危険です！！」

「そうだ！！ あつちは怪我人や戦えない奴らがいるんだぞ！？ あつちの方を守りに……」

ぽんつ、とチャーリーがヒカルとツカサの肩を叩く。

「子供をほつとく大人ほど……。いや、仲間をほつとくことほど、最低なものはないだろ？」

「そー ゆー じつた。とゆー わけで、俺らも戦うぜ」
にかり、と笑うチャーリーと燃次に、ツカサとヒカルは顔を見合わせて頷く。

「無茶しないでくださいね」

「あいつ、俺らの中で最強だから」

ツカサとヒカル、チャーリーと燃次は、こちらへまっすぐに斬撃を飛ばしてきたスバルの攻撃に向け、攻撃を放った。

↖ ↖ ↖ ↖ ↖ ↖

ミソラがしんがりを務めながら、熱斗、メイル、ジャスミン、やいと、デカオの順番で、必死で走っていた。

「ジャスミン、早くシールドの淵に……」

「走つてでも急ぐネ……」

その声に重なるように、戦闘の音が響いた。

「……でも、このままじゃ、やいとちやんとデカオも危なくなっちまつ……」

小さく呟いた熱斗の声を聞きながら、戦闘の音を聞きながら、傷つき意識が戻らない二人を見ながら、ミソラはハープに叫ぶ。

「ハープ!!」

『あ、その手があつたわね!!』

ミソラが高らかにファイーチヤリングハープギターを奏でた瞬間、音は具現化された。

「皆、これに乗つて!!」

「これつて……」

やいとが唖然とそれを見つめながら問いかけるが、ハープが答えた。

『ウホーブロードの道順をすつ 飛ばして進むとき…… そうね、道を走つてる時間さえ惜しいときの、私たちの移動手段よ。どこであろうと、移動できる。さあ、早くのりなさい!!』

ハープに促され、ミソラと熱斗、メイルと炎山、ジャスミンとテス

「、やいとど『テカオ、とそれぞれ一人ずつ、それに乗った。

「飛ばすから、しつかり捕まつて！！」

それだけ告げたミソラを合図に、音符は動き始めた。

勿論エアディスプレイは具現化したままで。

画面に映るジャンゴとサバタを退けてから、シドウとルナが映り、ルナは肩を怒らせて叫ぶ。

『でもなんで暴走なんてしてるのよ！』

「そんなこと、私に言われても……」

『今はムーメタルの紋様が浮かび上がる周期だ。残留電波が身体の中で力が暴れまわってるんだろう』

首を傾げたミソラの声を、少年の声が遮った。

そういうつひょっこり、かなり壮絶な違和感を感じたが、ひょっこり、と言う表現がぴたり当てはまる、本当に壮絶に違和感を感じるソロが画面に出てきた。

シドウの横から、一ちらを覗きこんでいるのだ。

ミソラの表情が、不思議そうに歪められる。

ソロが出てきたことも不思議でしょうがないが、それ以上に気に入る単語が聞こえた。

「…ムーメタル、が？」

『微量ながら体内にはパートナーから漏れた、オーパーツの残留電波がある。電波変換すれば更に、大量の残留電波がパートナーの体内から流れ込む。……種族の復興を願う、呪詛のよつな残留電波がな』

ソロは憎々しげに、最後の言葉を告げる。

『その残留電波がムーのものだからこそ、ムーメタルに触発されて、残留電波が増幅されて暴れている。何せ、絆の力がそちらではない

に等しいのだから』

「…私とツカサくんだけじゃ、抑えきれないって事?」

ソロに告げられた、絆の力の不足を問い合わせるミソラの怪訝そうな声に、言葉もなく、こくりとソロは頷く。

『絆の力が圧倒的に足りていない。今までならここその後にいる奴らの絆の力が合わさり、日常生活にも、戦闘しても不便がない程度にまでよしやく押さえ込めていたのだろう』

『しかし、お前たちだけでは、残留電波を使うあいつらの身体の外に向かう、残留電波が合わさった力が100%……つまり完全には具現化しない程度だ』

ソロのその言葉に、思わずミソラはハンターVGを押さえ、戦闘の繰り広げられるその場を、振り返つた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

ツカサとヒカル、そしてチャーリーと燃次を相手にまるで人形のようながらも、容赦のない剣をふるい、雷を放ち、木の葉を舞わせ、焰を操り、三つの属性を伴った斬撃を繰り出す、トライブ・キングの姿。

チャーリーは空から、燃次は地上から、ツカサとヒカルは脆いウェーブロードから、スバルの攻撃を受け、躲し、あるいは軌道をそらせ、相殺させ、反撃するも、今のところ姿は目視できるが、かすり傷さえ負わせていない。

しかも運の悪いことに、スバルの斬撃の一つには、ツカサとヒカルと電波変換しているジェミニにとって、相性の悪い木属性の攻撃が混じっている。

しかし運よく燃次とクロスフュージョンしている、ナパーム満の攻

撃を当てられれば、その木属性の影響でダメージは倍増する。

だが、それも当たれば、であるし、当たらなければ、でもある。

一瞬にしてこすちらに飛びかかってくるスバルが、剣を横に薙ぎ払う。

「くつ！…」

「ちつ！…」

それぞれ上下に飛びのいて、攻撃を避け肉薄するも、一瞬にしてスバルは移動する。

けれど。

「後ろががら空きだ！…！」

「逃がすか！…！」

その後ろに、チャーリーと燃次が迫る。

けれどスバルは、背に攻撃を受けた瞬間、ぼうんっ、と煙に化ける。

それと同時。

『ジエミーサンダー！…』

ツカサとヒカルの声が重なり、雷がチャーリーと燃次の後ろに出現した手裏剣を壊す。

そしてふわり、と一同から距離を置いたウェーブロードに、スバルが降り立った。

「くそつ、当たりやあしねえ！…」

『当たれば大ダメージなのによ！…』

ぱんつ、と手のひらに拳を打ち付けて愚痴る燃次とナパームマン。

「全く、トロモウに見えてなんとも動き回るレディだ」

「スピードにおいていかれるとはな

ため息をつきながら呟いたチャーリーと、スペースのアーティストたちがつとめて折られたジャイロマン。

そんなことを呴く大人組とは対照的に、ツカサとヒカルは違和感を覚えていた。

… ヒガ川 何かおかしくない？

……せは、力も感じなかつ

かりに感心するが、結婚するには

「さつきから、攻撃がずれてる……ほんの僅かなんだけど、直撃コ

「スをわずかに逸れてる」

たからあの斬撃も避けられたんだよな……」

アーネスト・ヘミングウェイ

九思子
卷之三

『中』にいるスバルとウォーロックの仕業だ。あいつら、完全に支配
ヴァン、と音を立ててジェミニがツカサとヒカルの後ろに現れた。

されてはいなしがら、たぬけな『

それを聞いてシミーは支配されながらも抵抗している一人の意識に思いをはせた。

V < V < V <

たんつ、ヒスバルは軽やかに見えない床に着地する。

『スバル、その調子だ！』
「ロックもね！！」

すぐつ、と立ち上がったシユーテイングスター・ロックマン姿のスバルと、ウォーロックは、うすぼんやりとした光を纏っていた。

身体に絡みついて来ようとする黒い靄……靄は忍者の姿と、恐竜の姿をとつていて……を相手に、それぞれ背中を合わせて、先ほど急に表れたベルセルクと、ウォーロックの爪で、遠慮なく追い払っていた。

けれどもそんな中感じるのは、動きを封じるかのよつてのしかかる意識の重圧。

『オトナシクアケワタセバイイモノヲ！』

『ダガ、イツマデモテイコウデキルモノカ！』

『『サア、アケワタセ！』』

そして、意識が保たれているので実に煩いことない怨嗟の声。

『だーつ、うるせええええ！』

『ロックの方がうるさい！』

叫びながらウォーロックはビーストスイング、スバルはベルセルクを薙ぎ払いながら、靄を遠慮なくぶつ飛ばす。

「けど、なんでベルセルクだけ、こいつやって力貸してくれるのかな？」ええいっ！」

『あ、それはだな……その中から、なんつーか……うおりや！』会話の最中に飛びかかってきた靄を薙ぎ払う為に、ウォーロックは言葉をいつたん途切れさせた。

『優しい……。けど闇の力を感じるそんな力がある……。えいっ！』

『そういえば……。今まで熱斗くんたち持つてた、よね？』

せいっ！！

『絆で抑え込めてたみたいだがな。でりや！』

『露が襲いかかってくるので、どうしても会話が途切れ途切れになってしまうスバル＆ウォーロック。』

「その後どうなったかは知らないけど……。僕らが持つてることとは、何かあつたのかな？ はあっ！…」

『さあな……。おらあ！』

うすぼんやりとだが、覚えていること。

自分たちの手を離れ、熱斗たちの手にあつたそれ。

……しかし、拮抗していたベルセルクとシノビの負荷の、ベルセルクの負荷だけが消え、シノビの負荷が倍増したわけなのだけれど。ピクリ、とウォーロックは目を細め、爪をふるいながら、スバルに告げる。

『……』あいつに頼まれたから、闇を押さえる力を貸してやつてるだけだ』って言つてるぞ？』

「はああっ！……つて、誰が」

剣の腹で遠慮なく露を殴り飛ばして、スバルは主語の抜けたウォーロックに聞き返す。

もはや追い払えれば、方法を問わない状況である。

『なんかロックマンに似た、黒いやつの力の残留思念がそう言つてるんだよ』

「ロックマンに似た、黒いやつ？」

よく分からぬその一言に、スバルは首を傾げる。

……ただしすぐに露を難ぎ払うために、首を傾げていたのをやめた

が。

『……でもよお、一つだけ確かだよな?』

「いやって、意識を保つていられるのは、つてことじょ?』

そう言って、二人は少しだけ視線を合わせ、頷いて視線を外し、それぞれの武器をふるつた。

二人の胸の奥に感じる、暖かく、優しい確かな光。

剣の奥に感じる、闇の力でありながら優しく支えてくれる力。

「この光の先に、ミソラちゃんと、ヒカル、そしてツカサくんの絆を感じる。それだけじゃない、ハープとジョミーも」

『そして剣の中に、力を貸してくれてるやつの思いがある』

自分の意思を、こうやって繋ぎ止めてくれている、二つの絆。そして、剣の奥にある、その残留思念。

『 サア、オトナシクアキラメ、シノビニースベテラアケワタセ!...!』
『 イイカゲン、ダイナソー、スベテヲアケタワセ!...!』

靄の声に、スバルとウォーロックはそれぞれ叫ぶ。

「皆が信じてくれるから、絶対帰つてやるんだ!! 諦めてたまるか!!」

『こちどり宇宙から生きて帰つたんだ!! 帰れないはずねえよ!..!』

そして、黒い靄を難ぎ払つために、攻撃をつづけた。

↙ ↘ ↙ ↘ ↙ ↘

『他人を傷つけ、世界を滅ぼすと暴れる外に向かう力は、使用者の意思次第。だが、使用者の心を破壊し自らのものにしようとする、中に向かう力を抑え込む分だけの絆だけ最低限、ようやくある。だからこそ、あれだけの暴走しかしていない、といったところだろうな』

「あれで！？」

びっくりした声を上げる、やいと。それを肯定したのか無視したのか、全くの謎だったが、ソロは話を続ける。

『ムーの力はすさまじい。身体の中で暴れ狂う力を少しば押さえ込めても……。簡単にひとつの大陸を滅ぼし、その気になれば世界さえ滅ぼせる力。脆い人間の精神など、簡単にやられる』

「……それ、スバルくんだからこそもつてること？」

『そして絆によっておしげめられた力が幾分がある。それによって、もつてているところもある』

ミソラの言葉に、こくりと頷くソロ。

それを見て、さあああ、と田に見えて青ざめてゆく熱斗。

「……俺、そんな物騒なもの使つてたの？」

ひくり、とひきつったような声で、ミソラの隣に座る熱斗が問えば。「……みたい……だね……」

それを答えるミソラの声も、そこに行きついた瞬間、やはり同じように顔が青ざめ、頬もひきつっている。

熱斗も今更よく無事だったよなあ、と頬をひきつらせた。それは後ろにいた一同も、実は同じであった。

『お前、オーパーツを扱えたのか！？』

「え？ あ、うん。俺とパートナーのロックマンで何とか

ソロが驚愕した声を上げ、熱斗が頷く。

『……ならば、お前を軸に何とかなるかもしれないな……』

「へ？」

間の抜けた声を上げる熱斗を睨み付けるような瞳で見、ソロは口を開く。

『力を貸してやるといつたんだが』

『お、やつと遊撃隊に……』

今度はシドウをぎりり、と睨みつけたソロは、勘違にするな、と告げる。

『俺はただ単に、絆の力を肯定する星河スバルと、決着をつけたい。それだけだ』

一瞬だけその場に居合わせた過去の時代の一回の脳裏に、人とネットナビの絆を肯定する、人間とネットナビの姿が浮かび、人とネットナビの絆を否定するネットナビの姿がよぎった。

ちなみに姿を脳裏に浮かべられた本人たちは、画面を食い入るように見ていた。

「……あ、おい、まさか……」

不意にシドウがその剣をどうつか、といふことを想像し、ひとつ可能性に至る。

「大剣……？　あ……。まさか……」

そしてミンラも同じタイミングで、ひとつ可能性に思い至り。

『「ソロ、ちょっとま……」』

しかし、静止をかけるが遅かつた。

『はあっ！！』

その瞬間、派手な火花を散らし、WAXAのメインコンピュータのコントロールパネル部分に、大剣が突き刺さった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2917/>

太陽の姫

2011年7月19日17時40分発行